

特集／世界婦人会議

概要●国際婦人年世界会議とトリビューン

記録●「第三世界の手工業と女性」分科会

感想●メキシコ・キューバ・私たちの旅

資料●世界行動計画●メキシコ宣言●採択決議

●ILO行動計画●第75国会婦人問題集中審議



〈あごら〉は、女性解放——人間解放をめざすグループです。

雑誌〈あごら〉は、その方法のための情報、——中でも女に関する情報を集め、お届けすることを目的に、1972年誕生しました。

特定の、管理された情報はあふれていますが、私たちがほしい情報、とくに女が求めている情報の入手は困難です。

皆さまの生きた情報、あふれる知恵を、どしどしお寄せください。分断されている仲間たちと、考え、行動する、ヒントを送り合いたいと思います。

既 刊

1号〈女が働くこと〉 ￥200 丁70

- 意見 女が働くこと 松谷みよ子ほか
- 資料 働く女は過保護か
- 面接調査 共働きを調査して

2号〈女性と能力〉 ￥200 丁70

- 調査 働く女性の地位向上をめぐる
- ティーチイン 女性と能力
- 研究 女性なぜ管理職になれないか

3号〈主婦の解放〉 ￥200 丁85

- 調査 団地の主婦の解放意識
- ティーチイン 主婦の解放をめぐる
- 解説 二分二乗法 伊東すみ子

4/5号〈壁を破ろう〉 ￥300 丁85

- 記録 何かしたい主婦のためのセミナー
- インタビュー 壁を破った人々
- 資料 2つの差別裁判を考える

6/7号〈運動をすすめよう〉 ￥300 丁85

- 報告 解放への道—海外の婦人たち
- 資料 各国の母性保護
- ティーチイン 婦人運動をすすめるために

8号〈子殺しを考える〉 ￥300 丁85

- 論文 既婚の母の子殺し考 武田京子
- 資料 世界各国の妊娠中絶立法例
- ティーチイン 性の二重性をめぐって

9号〈働く女と主婦の接点〉 ￥430 丁85

- 意見 働く女から主婦へ 主婦から働く女へ
- 調査 相手の立場をどう思っているか
- ティーチイン 人口抑制と産む性

10号〈女と法〉 ￥700 丁115

- 記録 名古屋放送女子若年定年制
- 資料 法律の中の女性
- ティーチイン 産む性と法律

11号〈女と教育〉 ￥750 丁145

- 論文 主婦が学ぶということ
- 調査 教科書の中の女性差別
- ティーチイン 〈女と教育〉を考える

13号〈国際婦人年を考える〉 (予定)

- ティーチイン 私たち自身の国際婦人年を
- 記録 女のグループ連帯集会
- 報告 キューバの女性と新家族法



あごら 12号

特集 国際婦人会議

メキシコで開かれた国際婦人年世界会議とは何だったのか、世界行動計画とは、メキシコ宣言とは、そして国際婦人年とは……。

さまざまな疑問がいま日本のおんなたちの間でうず巻いています。それはこれからの十年間の行動計画をわが手でまさぐろうとする投影でもありません。

これらの意義を早急に結論するのは危険ですが、富の公正な分配を、おんなの平等の条件として宣言させた会議の意味を、評価しないわけにはいくまいと考えます。

七四年の世界人口会議に続く七五年の世界婦人会議は「産む性」としてのおんなを規制するものとして警戒されましたが、会議は、世界が第三世界といわれる国々の力を無視し得なくなっただと同様に、おんなの平等と発展を認めざるを得ない新しい世紀に入ったことを明らかにしました。

ここに、できるだけ多くの資料を掲載し、事実の中から真実を読取る作業を重ねたいと思います。

特集・国際婦人年世界婦人会議とトリビュン

インタビュ

日本婦人問題会議構想を語る

久保田真苗 6

メキシコ集会を振り返る

●歴史的な「宣言」と「行動計画」を採択

公式Ⅱ国際婦人年世界会議

藤田 たき 10

行動計画を熟読玩味してほしい

森山 真弓 13

世界行動計画とメキシコ宣言の審議に参加して

森山 真弓 16

会議の声から（公式）

森山 真弓 19

●解放を求めて積極的に発言

民間Ⅱトリビュン

20

△分科会の記録から▽

「婦人と文化」

24

「第三世界の手工業——経済発展の中の女性の役割」

26

会議の声から（民間）

31

資料集

●世界行動計画（全文）

153

●婦人の平等と開発と平和への婦人の寄与に関する

一九七五年のメキシコ宣言（全文）

184

●国際婦人年世界会議において採択された諸決議

189

●ILO活動計画

193

●第七五国会 衆議院社会労働委員会記録

204

（国際婦人年に際して婦人に関する諸問題について）

●トリビュンで展示されたパンフとリーフ

218

メキシコ・キューバ || 私たちの旅

32

はじめてのラテン・アメリカ

——国際婦人会議・メキシコ・キューバで考えた女の暮し—— 青木やよひ 46

日常の私、非日常の旅 宮下 喜代 59

メキシコ見聞記 岸川千代子 69

私が読んだ婦人年国際会議新聞報道 深尾 勝子 75

メキシコ会議「女のほざき」無名考 溝口 明代 82

私の旅 川上 正子 85

ハバナ湾の夜明け 神馬由貴子 90

キューバ——フライボイアンとハバナ—— 平岡ふき子 91

鳴り響いた鐘 斎藤 千代 98

旅日記 K・F 36

アブレ・メキシコ旅のあとの活動 105

ILO総会報告

——婦人労働委員会に出席して—— 赤松 良子 105

●グループ紹介／国際婦人年あいちの会 108

あごら読書室 110

新聞切抜帖 112

報道されたあごら 147

あごらのあごら 148

インタビュー

レベルアップのための

華々しいお祭りにしたい

日本婦人問題会議構想を語る 久保田真苗氏

十一月五、六日の、国際婦人年中央行事には、多くの関心が集まっています。詳細をお教え頂けませんか。

正式名称を「日本婦人問題会議」と申しまして、政府関係のメイン・イベントとなる行事です。

十一月五日の午前中は、内外のトップレベルの方々をお招きして開会式、午後はシンポジウムです。男性三名、女性二名のパネラーとゲストスピーカーとして国連国際婦人年事務局長ヘルビ・シビラ女史にも出席して頂いて、シンポジウムを行ないます。

また二日目は、OECD経済社会における婦人の役割部会議長のシルバ・ゲル

バーさんをお招きして、国際的なお話を伺うことと、フォーラム（ひろば）による討議を行ないます。これには、先ごろの「男女平等を考える」意見募集の応募者の中からも参加して頂く予定です。

会場はプリンスホテル、定員は一、〇〇〇人と聞きましたが、そのような特殊な会場を選ばれた理由は？ 武道館のような大きなところで大衆の声を集めるべきだったではありませんか？

武道館となると、一万人を集めなければなりません、一年前に一万人集める自信はありませんでした。また、教壇式、講堂式の、会場よりは平たい会場を選びたかったこと、長時間の日程のため、皆

さんの休憩の場所や、いくつかの小部屋の必要等からこの会場を選びました。

皇族をお招きするというわけもありますが。

できればご臨席いただきたいと思っています。私どもはこの行事を内容のあるものにしたいと思いますが、同時に記念的な要素もほしいと思っています。婦人年は、政府だけのものでも、労働者だけのものでもありません。今まで日の当たらぬ場所にあった婦人問題を、この際なるべく真中に押し出し、もっと高い位置につけたい、というのが私どもの希望です。婦人問題はとかく日かげにありましたが、国際婦人年を契機として、少しず

つ日なたに出てきました。また社会通念としても、男女平等を、まだまだ声高く語り合えないところもありますが、そういう状況の中でトップレベルの方々の参加は、一つの啓蒙的な役割を果たすのではないかと思っています。またその席で、「あの方が……」というような、一種のおすみつきになるおことばをいただくことも、今後の婦人問題のためにプラスになると考えています。

プリンスホテルⅡ皇族といった発想は婦人問題を考え続けている人々にとってはまだことに意外というか、残念な気がし

ます。天皇制と婦人問題の関係を想起する人もいるでしょうし、ここでまたせっかく民衆のものになってきた婦人問題が雲の上のことになる懸念はないでしょうか。

そういった問題も考えてみましたが、そのうえで、やはりトップレベルの方々のご参加も必要と判断したわけです。これは政府主催の行事ですから、政府のできる役割を果たしたいと考えます。民間にも各種の立場からの運動があって、それらすべてがあいまって婦人問題を幅広く前進させることが必要ではないでしょ

うか。

「一〇〇〇人の参加者は、どういう人々ですか。」

国内連絡会議に参加されている団体等を中心にお招きする予定です。招待者に限るのは、第一目の午前中の開会式だけで、一日目の午後と二日目は一般に開放されますから、どなたでも参加できます。

フォーラムに、意見募集の応募者が参加発言することですが、その人数は？ また選考委員は？

意見には、約二三〇〇余名の応募がありました。その中から三―五名をお招きする予定です。選考委員は、福武直、縫田睦子、小幡操氏らで、ただいま選考がすすめられています。

日本婦人問題会議では、何かの決議を出しますか？

決議はいたしません。これはどなたでもいらっしゃれるものですし、あくまでも一年をしめくくる「お祭り」ですから。

お祭りに、多額の予算が使われるのであればありませんか？ 国際婦人年のための二、二〇〇万円の特別予算の明細を教え



てください。

広報資料、記念出版物が三〇〇万、メキシコでの国際会議への首席代表他二人の費用が二七〇万、そのほか国内連絡会議、意見募集の経費、その他各種記録などの印刷物の費用です。日本婦人問題会議は二三〇万です。

総予算としては少ない額だと思いますが、単発的なものに使わず、もっと恒常的なものに使う方法も考えられるのでは？

このお祭りを機会に、できる限りの啓蒙活動を行ない、恒常的な予算をふやすのがねらいです。会議は、政府内の婦人問題の地位をあげるだけでなく、地域や職場のリーダーである参加者たちが、会議の成果を持帰るメリットも大きいと考えています。ディスカッションに、男女の役割などのテーマが入ると、一つの啓蒙活動になりましょう。とにかく、この機会に、政府が婦人問題に取り組む姿勢があることを表明し、それを基本に施策としてやれることを継続的に地道に実行したいと考えています。私も婦人課は、婦人の地位向上のための運動を担当していますが、運動そのものは広く民間で行

なわれることが望ましく、運動についていろいろなサービスをするのが婦人課の役割です。

具体的にはどんなサービスがありますか？

諸決議、活動計画案、国際婦人年参考資料(統計・条約等)、国際婦人年情報などの資料の発行などを行ない、無料で配布しています。

就職差別では、国家公務員行政職で、男子だけに限っている職種が七つ八つありますので、局としては人事院に申し入れるなどの実際的なことも実施しています。

運動をサポートするのが私たちの役割と申しましたが、皆さんのような活動的な方々は、もうずっと前から準備してやっていたらっしゃると思います。そうした運動にサジェストするのが私ども政府の役割だと思っています。

運動というのは非常に幅の広いもので政府、民間団体、地方自治体、地方出身機関、労働組合、婦人団体、教育団体、また国連協会のような専門機関もやっていらっしゃる。その中で私どもは政府の

できることをやりたいと思っています。政府のできることは、いつも片すみにあった婦人の問題をできるだけ真中に出してやること、もう一つは政府の中のリンクづけを上げることです。ふだんはなかなか首相に出てきてもらえない、そこで機運の盛り上っている今年、いろんな方に来て頂いて、婦人問題への注目を促すようにしたいと思っています。そしてもちろんそれは、今後の恒常的な活動のための布石であることは申すまでもありません。私たちは職場の中の差別を取り除くとともに、家庭婦人の評価も確立したいと思っています。

その家庭婦人の評価について、家庭省講想が、役割固定化の危険な動きをするのではないかと危惧されていますが、これについてはどうお考えですか？

家庭省構想は、まだ打ち出されているわけではありませんし、その後きいておりません。

(質問 女のグループ連絡会準備会)
(久保田さんは、この会見の直後、総理府審議室参事官に転勤、行動計画の推進面を担当されることになりました)

一九七五年を国際婦人年とすることは
国連の「婦人の地位委員会」で一九七二年
決議され、同年の第二七回国連総会で全
員一致可決、「男女平等の促進」「開発努力
への婦人の全面的な参加の確保」「国際
平和への婦人の貢献」に関する行動を加
盟各国と国際社会で、一九七五年を期し
て強化することが決議された。

「婦人の地位委員会」は、一九六七年に

国際婦人年を提唱、世界婦人会議を企画、
これが採択されたものである。一九七五
年が選ばれたのは、「婦人の地位委員会」
が設立されて四半世紀が経過したこと、
「第二次国連開発の十年」の期央に当た
ることなどが理由である。

開催地はコロンビアの予定だったが七
四年辞退、メキシコが引継いだ。これは
ラテン・アメリカの盟主、第三世界の一



メキシコ集会を振り返る

国連で採択された「婦人の差別撤廃宣言」
に基づき、毎年各国に差別撤廃の実施状
況の調査を要求し、宣言の効果を検討し
てきたが、法制上の男女平等はかなり達
成されたものの、実行上は多くの差別が
残存しているという共通認識に立ち、「宣
言」を、より国際的拘束力を持つ「条約」
に変える運動をすすめるとともに、世界
的規模の一大キャンペーンの手段として

方の旗手を自任するエチエベリア大統領
の、次期国連事務総長への野望に由来す
るとも噂されたが、性差別の解消を目指
す婦人会議が、南北問題（先進国と被搾
取国の問題）を世界に突きつけている、
いわゆる第三世界で行なわれたというこ
とは意義があったと思う。

国連の「国際婦人年世界会議」と並行
して、NGO（国連非政府機構）主催の

民間会議（トリビューン）も、同じメキシ
コ・シティで、会期を全く同じくして開
かれた。国連の会議が、各国政府代表に
よって構成されたのに対し、民間会議に
は、国籍資格を問わず参加が可能だった。

一九六〇年代から植民地の独立が相つ
ぎ、多年にわたる先進国の侵略、資本主
義の害悪に対する告発が活発となってい
る国際情勢を反映して、差別の根源への
追求は、当然、社会経済問題へと発展し
た。マスコミはこれを「女の内ゲバ」と
報じたが、男女を問わず国際会議が開か
れれば南北論争となるのは当然のことだ
であった。その論争の中で、国際社会の中
における日本の位置は一層鮮明になった
ともいえよう。公式会議で日本政府代表
は一つの提案も提出せず、あたらずさわ
らずの態度で終始した。民間会議で日本
女性性はほとんど傍聴にとどまった。それ
は日本の国際的位置と婦人の地位を象徴
するものだった。しかし、世界の潮流が
大きく変わろうとしており、性差別撤廃
をもちやどこの国も無視し得ないことは
明らかになった。会議を振り返り、国際婦
人年の意味をあらためて考えてみたい。



●歴史的な「メキシコ宣言」と「世界行動計画」を採択

国連＝国際婦人年世界会議

1 参加者

国連の会議は、一国の代表者に参加が限られるが、婦人問題は国連ないしは国連加盟国だけに限った問題ではないという観点から、今回の会議には、非加盟国もふくめ、すべての国に参加が要請された。このため永世中立をうたい国連に参加していないスイスや、未承認の南ベトナムも参加、一三三か国の参加を見た。

またFAO（農村問題）、WHO（母子保健機構）、ユニセフ（母子福祉）など七つの国連機関と八つの政府機関、またPLO、アフリカ統一機構等、八つの解放団体、NGO九八団体など、合計二六七団体、約三〇〇〇名が参加した（うち約七割が女性）。このうち投票権を行使できたのは、一三三の主権国政府だけであり、他はオブザーバーとして意見は述べ得たが、投票権は行使できなかった。なお日

本政府代表团および顧問団は次の通り。

〔日本政府代表团〕 首席代表＝藤田たき
（婦人少年問題審議会会長） 代表＝森山真弓（労働省婦人少年局長）・大鷹正（国連日本政府代表部公使） 代表代理＝東浦めい（婦人少年問題審議会委員）・矢口光子（農林省農蚕園芸局生活改善課長）・志熊敦子（文部省社会教育局婦人教育課長）・長尾立子（厚生省児童家庭局母子福祉課長）

〔顧問団〕 衆議院議員 金子みつ（社）・栗山ひで（自）・高橋千寿（自）・田中美智子（共・革新共同） 参議院議員 柏原ヤス（公）・佐々木静子（社）・山東昭子（自）・志村愛子（自）・中沢伊登子（民）・中村登美（自）

2 経過

会期は六月十九日―七月二日の十四日間だったが、このうち二回の土日は、国

際会議の慣例に従い会議が開かれないので実質十日間、さらに開会式、議長その他の選挙、形式的な報告の採択等を差引くと、正味一週間たらずの間に、世界的な大問題が討議された。いわゆるアスタマニャーナの国（何ごとも、まア明日にしましよヨ）のメキシコで、これはかなりきびしい条件であった。

国連の会議は、本会議と委員会が並行して行なわれるのが通例になっているが今回も、本会議と、第一第二の二つの委員会が並行して審議をすすめた。

本会議では議題七（国際婦人年の目標、現在の施策および経過、議題八（国際平和の強化および人種主義、アパルトヘイト、人種差別、植民地主義、各国による支配および武力による領土の獲得撤廃への婦人の参加）を討議、その間隙を縫って各国元首の会議あてのメッセージが紹介された。

第一委員会では議題十一（世界行動計画）を審議、その後メキシコ宣言の審議採択を行なった。また第二委員会では議題九（男女の地位および役割の変化、ならびに平等の達成についての障害）と、議題一〇（男性と対等な立場での婦人の発展への参加）を審議、各国から提出された教多くの決議案の審議、採択を行なった。

3 代表者の特徴

本会議では一二六か国、三六機関が入れ替り立ち替り演説を行なった。日本の藤田首席代表も、二十日午後、代表演説を行ない、国会の決議も紹介した。

各国の代表者は、大別して次の四グループに分かれた。

①女性で、一国の政策決定に参加している人（スリランカのバンダラナイケ総理、西独フォッケ少年・保健大臣、フランス、ジルー婦人の地位向上庁長官など）

②一国の代表者または代表的政治家の夫人（フィリピン・マルコス大統領夫人、エジプト・サダト大統領夫人など）

③女性官僚（日本など）

④名流女性（ソ連、テレシコフ宇宙飛行士など）

4 主張の概要

いわゆる先進国と発展途上国では、その主張に大きな差があった。途上国は、「われわれは婦人の地位だけを抽出して論じる状況にはない。わが子にミルクも与えられずして解放を語り得ようか。世界人口の七〇％を占める途上国は世界収入の三〇％を受けているだけだ。なぜこのように社会の状況そのものがよくないのか。過去数世紀にわたる白人を中心とした帝国主義、植民地主義のもとに搾取され続けた結果である。したがって婦人の地位向上のためには、まず帝国主義、植民地主義の残存と戦わなければならない。しかし現実には、先進国は途上国の資源を安く買って加工し、高く売りつけるというきわめて不公平な国際秩序がある。それを克服しない限り婦人の解放はあり得ない」と、新経済秩序に基づく「発展」を主張した。

先進国側は、「そのような主張には、もちろん十分な理由があると思うが、世界

人口会議、世界食料会議、国連総会などで論じられるべきであり、二週間たらずの会議でそれを論じていると、かんじんの婦人問題を論じられない。婦人に直接関係のある問題をもっと具体的に論じ合おう。われわれは、経済開発、社会開発の進展が婦人の地位向上に直結しないことを経験的に知っている。また単なる法制度の改革だけが、女性解放をもたらすものでもない。人間の考え方、人間の態度について、男女双方が考え合い、理解し合うことが必要ではないか」と「平等」を中心に論じた。さらに社会主義国は「平和」なくしては婦人の地位向上はあり得ないとし、はしなくも、平等・発展・平和の三つの主張が、三者三様に展開された。

5 粉砕した委員会の審議

世界行動計画を審議した第一委員会では、まず一国五分ずつ各国の基本的姿勢を発言したのち審議に入ったが、二百六項目の計画案に対して八百以上の修正案が提出された。八百の中には、「男と女」を「女と男」に入れ替えよといった小さ

なことまでふくまれていたが、ともかく教だけでも八百の修正となると容易なことではない。結局、十六項目の序章に九項の修正を加えた二五項と三五項目の第一章に十一修正を加えた四六項目を採択、第二章以降は事務局原案通りということで二一九項が決議された。

行動計画案は日・米・英・仏・ソ・豪・イラン・比・メキシコなど二三か国から成る諮問委員会で激しい論議を重ねて七五年三月に最終案をまとめ、国連事務局が二〇六項目にまとめたものだった。国連世界会議としては異例の二〇六項目も多数に達したのは、原案では第三世界の実情にそわないと、大幅な修正案が加えられた結果であったが、会議参加者としては、参加者自身が作り出した意志表明をしたという希望があった。特に七七か国の第三世界グループから、政治・経済・社会面で格差是正の主張を盛込んだ宣言を、という強い要望があり、別途、いわゆる「メキシコ宣言」が六つの決議案とともに第一委員会決議された。

第二委員会では、最初、一国五分ずつの発言を、五分超えると議長がたちど

ろにスイッチを切るという乱暴な方法でとにかく一巡したのも決議案の審議に入ったが、六十近い決議案が提出された。そのほとんどは、行動計画の中で自国が特に関心を持っていることを、少しふくらませたものだったので、カテゴリー別に整理し、本会議に七項を送付、第二委員会としては二八項を採択した。

第一・第二両委員会の後を受けた本会議では、一般発議終了後、委員会で採択された文書の審議に入ったが、まず発言者が一国の代表であることを証明する証明書が正しいかどうかでもめ、結局、会期も残り少ないし、全員代表と認めようということで落着いた。

行動計画案は、第一委員会の採択を経っていたので、本会議では投票等は行なわず、拍手かっさいのうちに通過した。

宣言案は、内容の一部にアメリカ・イスタエル等が強硬に反対、投票の結果、賛成八九、反対三、棄権一八で採択された。先進諸国の多くが棄権に回った中で日本が賛成の一票を投じたのは注目された。

第一・第二委員会から送付されてきた

三四の決議案については、中南米諸国が次から次へと修正案を提出、午後二時半終了予定が夜半十一時まで延長、ようやく審議を終えた。

最後にイランのアシエラフ王女が、「今回の決議の実施状況をチェックするため、五年後の一九八〇年に会議を持ちたい」と提案、次回の国連総会で審議されることになった。

このような経過で決議された行動計画は、別掲のようなばう大な内容を持つ。その評価はさまざまだが、ともかく世界の女性史の新しい一ページを開く端緒となり得るものであることは、否めまい。

これは国際的な拘束力をもつ「条約」ではなく、その実施は各国の実情にゆだねられているが、採択に賛成した各国は、それに沿って、努力する道義的責任を負っているわけであり、一定期間ごとにモニタリングも行なわれる。実施を監視するのは、納税者である国民の一つの責任ともいえよう。なお、世界行動計画、メキシコ宣言、採択された決議と日本の態度、国会での婦人問題集中審議内容は巻末にまとめた。

(政府代表の報告から) 行動計画を 熟読玩味してほしい

日本政府首席代表
● 藤田たき

● それぞれ印象的だった各国代表

メキシコに行つて大変だったろうと言われるが、私はほう大な会議のごく一部分にかかわつたにすぎず、群盲象をなでる感であつたというのが真実である。

その中で特に印象的だったのは、まずマスコミの活躍である。私たち婦人が国連の会議に出て、これまではマスコミはてんで相手にしなかったが、今回は、各国の新聞・テレビ関係者が一五〇〇名も参加・大々的に報道された。それだけでも国際婦人年の意義はあつたと思うが願わくは今年だけに終わらず、少なくとも今後十年は続いてほしいと思つてゐる。

この会議は、女がはじめて舞台の真中に立つことができた会議であつた。参加

者の中には、好奇心が半分という人もいないわけではなかったが、私は一応大成功だつたと思つてゐる。

開会式はオリンピックのときの体育館だったが、すり鉢型の会場の底に当たる部分に私ども代表が座り、上に傍聴席がつくられてゐた。その中央にきれいなグレイのスロープがあり、そこをエチエベリア大統領、シビラ夫人、ワルトハイムさん等が登つて行き、万国旗の前に立つて演説した。婦人の解放は社会的諸条件の変革と国際関係の再編成なしにはあり得ないと強く訴えた大統領、政策決定に婦人の参加がもっとも必要と説いたシビラ夫人のスピーチが特に印象に残つてゐる。会場はそれこそ万国衣裳がずらつと並び、大した華やかなものであつた。翌六月二十日からは、会場を外務省に移し、本会議が行なわれた。外務省は大理石を豊富に使つたりばな建物であつたが、会議場としては、うなぎの寝床のようにたてに長く、最適のものではないように思われた。

私の主な役目は、この本会議に出席することにあつた。そこでいろいろな国の

方々のお話を聞けばよいというやさしい役割であつたが、一三三か国の話を聞くのは、やはりなかなか大変なことだつた。植民地主義、新植民地主義、軍国主義、アバルトヘイトといったことが出ると拍手が強く響き、これは婦人問題の会議ではないという気がしたほどであつた。

またサダト・エジプト大統領夫人、マルコス・フィリピン大統領夫人はじめ、何々夫人というのが多いのも、とても氣になつた。仮に日本で何々大臣夫人が会議に出席したら、あれほど寛大に受け入れられるかという感じがした。

サダト大統領夫人は、アフリカの一人としてアフリカ婦人開発センターを置くようにと主張、同時に、パレスタインと南アフリカの現状が続く限り世界に平和はない、と、アラブの態度を非常に強く打出したのが印象に残つた。イスラエル代表は、この演説の途中で退席した。マルコス大統領夫人は、非常に古風な東洋婦人で、婦人の運動は男性を敵とするものではない。妻であり母であることの重要性：などということばが出て、ほかの人々とあまりにもちがうのが目立つた。

タイの女性は女性の意識の不足を非常に強調した。中国代表の李素文さんは、

中国では天の半分を支えるのは女性であり、革命も女性なくしては出来なかったと強調、同時に、ソ連とアメリカ合衆国の覇権主義、ヘゲモニーについて何度も繰返し、この覇権主義、植民地主義、人種主義が払拭されてしまわない限り、婦人の解放はあり得ないと、しきりに訴えていた。国の政策そのものを反映していたのは当然のことではあるが印象的だった。好ましいと思ったのは、三人の中国婦人代表が一人の男子の通訳を連れて、狭苦しい会場をあちこち歩き回り、大いに友好をあたためていたことである。

米國代表フタール女史は私が見た限りでは余り目立たなかったが、軍縮会議、軍縮交渉には女性代表が大いに当たるべきだといっていたのは印象的だった。私は昔、第二次世界大戦に米國が参戦するとき、たった一人の婦人議員が反対投票をして、「自分はこの戦争には反対だ」と、よよと泣きくずれたというのを読んだことがあるが、婦人の地位向上をはかって、軍備縮小会議などにも女の人がた

くさん出るようにならなくてはという米國代表の説に共感した。

西独のフォッケ少年・保健大臣は、社会開発は婦人の地位向上に必要だが、これは婦人の参加なしにはできないと述べたが、開発と平和・平等は三位一体だという私の持論と一致した。

カナダ代表は、一九六七年に王室婦人の地位委員会ができ、一九七〇年に一六〇の勧告をふくむ報告書を提出したと報告、人間の心の変革なしにはすべての変革はでき得ないとつけ加えた。

英國代表は、開発途上国の農村婦人の現状を改善するために、七六年から三年間、総額二〇万ポンドを国連に寄付したと述べたが、このようなことをどんどん提案できるととてもよいと思った。

● 国際的な流れの変化を痛感

全体を通じて驚いたのは、非常に政治的な流れが強いことだった。たとえばモリタニア代表は、婦人は、貧困・飢餓・無知・疫病との闘争のみを通じて解放されると述べ、シリア代表は、婦人の発展の最大の障害である植民地主義、外国に

よる援助を打破しなければならないと主張したが、こうした発言はザラであって、パナマ運河がUSAの軍事基地的存在であるのはけしからぬなどという話のときには、婦人の婦の字すら出なかったほどである。

このような国際情勢の反映は、中近東の代表の登場の際にも明確にみられた。イスラエルのラビン首相夫人が登壇すると、約二分の一の人がそろそろそろ席を立て出て行ったが、彼女はそれを平然と見て、「エクゾダス(出エジプト)が終わるまで待ちましようよ」と言ったのはちょっとユーモアがあった。彼女はまた「モノローグをダイアログにしよう、独りで言うのでなく、対話をしよう」と呼びかけたが、現在の国際情勢ではそれはなかなかむずかしいことに思われた。

十何年前、私が国連に出た時と同じく今回もジョルダンと隣合せてジャバンが座ったので、私は前回のふとしたエピソードを思い出した。その時のジョルダンの女の代表は、ひと言も発言できない、何もわからないほんの奥様——といった感じの人で、うしろに、非常に頭の切れ

る男の随員がついていた。第三委員会では次から次へと修正案が出て、議長さんが困惑しているのを見て、その男が、“Women should not be amending, women should be mending” 女は修正案なんか出さずに靴下でもつくろってろと、そんな失礼なことを言った。私は「ジョルダンでしよう！」と叫んだものだったが、その時と同じ女の代表が、今度の会議では獅子奮迅の活躍をしたのを見て、当時は未開発国といわれたアラブの方たちが、すばらしく成長したことを非常にうれしく思った。

やはりこの前の時、ガーナのかわいい代表が、「この会議は先進国の方々がたくさんいられるはずなのに、その方々の発想が低開発国の人の発想とよく似ているところがあるのは、どういうものでしょう」と言っていて、やんやの拍手を受けたが、今回の宣言案は、三か国対七七か国で七七か国の方が勝利を得た。私はつくづくと今までの国連のことを考えて、因果はめぐる小車と言っては変だが、国際的な変化が起こっていることを感じた。中国が国連の加盟を要求してから、

二〇年かかってようやく認められたが、最初のうちは中国の加盟を議題にするかどうかというようなことを何年も論じたものであった。また、安保理事会でのソビエトの拒否権のことなどを思い出した。

今回は、開発途上国が、よかれあしかれ非常な成長を遂げ、各国の代表がそれを無視できないということとは幾分予期していたが、それは予想を超える強い政治力になっていてことを感じた。世界の流れが確実に変わっており、日本はいろんなことを考えなくてはならない時に来ている、国連もいろんな点を考えなければならぬ時に達していると思った。

先日、NHKで、この会議に参加したある方が、世界行動計画は、日本の農村の人、日本のクラス・ルーツにとつて、何の役にも立たないような、遠くで、遠くで、鐘が鳴っているような気がするということをおっしゃったと聞か、ほんとうにそうだろうか。行政に関しても女の人々が力を得、軍縮会議にでも、他の重要な政策決定会議にでも、どんどん進出して力をつくすことができたなら、この行動計画はりっぱなことをなし得ると思う。

行動計画について、ある婦人記者は、宝の山だと言い、またある人は、聖書の中の福音書みたいなものだと言ったが、掘れども掘れども尽きない、女のためのいろんな計画、いろんな政策が書いてある。今日は詳細を語れないが、皆様ご熟読のうえ、このうちのいったい何を自分ですることができるか、何を国会に要求することができるか、何を政府に要望したらいいか考えて下さるとよいと思う。

三木総理も外務大臣も、私どもに、この行動計画に従って、具体的な案を述べて、日本のため、婦人のためによくしたいとおっしゃった。国会の婦人議員は超党派で宣言をした。また総理府では婦人問題懇談会を拡大強化するとおっしゃっているから、本当に拡大強化していただきたい、行動計画をモノにしたいだいたいと思う。それにはもちろん皆様方一人一人の力がなくてはだめである。私は、言っても、決議案も、大事だがこの行動計画が一番大事だと思ふ。行動計画を十分ご勉強下さって、要求すべきことは要求することをお願いしたい。

(政府代表報告会から)

世界行動計画と メキシコ宣言の 審議に参加して

労働省婦人少年局長

●森山直三

●はじめに

会議の経緯、主な内容については新聞などでご承知と思うので、私が直接体験したこと、感じたことを中心にお話したい。

まず、開会式前日に行なわれた事前協議からすでに予想外のハプニングがおこって、大きな国際会議の舞台裏のややしさを知り、前途の多難なことを予感したが、日本がはからずもアジアグループのまとめ役をおおせつかり、大小様々の調整や連絡を引きうけ、会議の円滑な運営に多少の貢献ができたことはよかったと思う。会議参加の意味は表裏両面あり、両面とも重要だということがよくわかった。

●ほとんど審議できなかった

行動計画

国連の会議のうち、私は第一委員会を担当した。第一委員会は二〇日に打合せがあり、実質的には二三日から始まったが、世界行動計画の審議に取りかかったのは二五日から、公式の実質審議は二日間だけであった。

最初の第一第二の二つのバラグラフの審議に第一日の午前中かけても結論が出なかった。午後になって、これだけみんなで時間をかけて討議しても一節も採択できない、もっと能率的に話をすすめようではないかと、ワーキング・パーティ（作業部会）に分けて審議することになったが、修正案がものすごく多くなかなか進行しない。そこで序章と第一章について修正案を出した国々がもう少し調整するため、作業部会を二つに分け、さらに二五、六日以後は、各修正案の似た部分と相違点を個々に相談して調整することになり、第一委員会・作業部会とも、公の会議は開かれなかった。

二七日夕刻になって、序章と第一章に

ついては合意が成立したので修正を加えて採択することとし、残る八〇〇余の修正案については、到底審議できないので基本的にはみんなが諒承しているのだからと、事務局原案どおり採択することが提案された。これに対し異論を出す国もあったが、結局、この意見が採択され、世界行動計画の審議は実質的にはほとんど行なわれぬまま原案どおり採択された次第であった。日本代表としては、婦人問題について発言したいことも質問したいことも多々あり、大いに準備をしていったつもりであったが、このような状況で実際にはほとんど討議や質問の機会が与えられず残念であった。行動計画が全会一致で採択されたあと、婦人の問題をもっと討議してほしかったと各国がこもごも述べた。私も許された時間、精一杯気持をぶちまけたつもりである。

●「シオニズム」でもめた宣言案

行動計画採択後、メキシコ宣言の審議に移った。メキシコ宣言が提出されるだろう、そして相当もめるだろうと予想されていたので、行動計画にいつまでもか

かわっているわけにもいかないということもあって、行動計画の審議は急がされたという事情もあった。

メキシコ宣言提案の動きは初めからあり、自分たちの考えを鮮明に宣言したいと、代表演説の中でも何人かが述べていた。第三世界を中心とするいわゆる七七か国グループのほか、米・英・西独の三か国が用意した宣言案もあり、ほかに東欧グループも出らしいという話もあった。最初の二、三日はどういうものが出てくるか、ちょっと見当がつかなかった。アメリカなど三か国グループはなかなか手回しがよく、「こういう内容のものを考えているが皆さんどうでしょう」と、いくつかの国の意見を聞いて回ったりしていた。日本も相談にのつたが、なかなかいい原案で、正直にいつて後に採択された七七か国の宣言案よりも婦人の問題に集中したすっきりした形のものであり、中味としては異議を申し立てるところはなかった。

その後何日かしてセブンティ・セブングループ（実際は七七か国以上の多数の開発途上国をふくむ）がスポンサーにな

った提案の内容が次第にわかってきた。両案とも、それぞれの立場を主張しているもので、それなりにりっぱであり、基本的にはどちらも婦人の地位を高めた、社会参加させたいということであるから、もう少し話し合いをすすめれば、みんなが全会一致で早く採択できる宣言ができるのではないかと、私どもはこの七七か国案にも大いに意見を言い、とにかく双方が話し合っとなつてくることができるにしたいと願った。

しかし七七か国案は提案者だけでも何十という国があり、それぞれ国情がちがうため、この案自体がなかなかまとまらず、最終案決定が遅れたため、三か国案との調整の時間はなかった。最終日になって両案が同時に第一委員会に提出された。

両案の審議順序は、早々とまとまった三か国案が二番、遅れた七七か国案が三八番の予定であったが、議事進行に関する提案が多数決で可決され、三八番の七七か国案が先行審議された。

七七か国案は非常にすぐれたもので、基本的には米・英・西独、日本にとつて

も反対すべきことはあまりなかったが、婦人の地位向上を阻げるものとしての「シオニズム」の字句の挿入については多くの国から異議が出、別途審議することになった。

開発途上国の多数を占めるアラブ諸国は当然ながらシオニズムに標榜されるイスラエルの武力侵略を非難したが、イスラエルは、何千年と苦しんできたユダヤ人が自由と団結を求めて努力しているのがシオニズムであると主張して対立した。地域的に遠く、政治的に直接接触をもたない日本としては判断に苦しむことばであった。結局、賛成・反対・判断不能の三派に分かれたので、各国別に可否を問うたのち、さらにシオニズムということばをふくむパラグラフについて賛成か反対かを一三三か国一人一人に問うた。結果としては多数を以て挿入が可決されたが、このようにシオニズムということば一つのために二度も三度も可否をたずねるため、非常に時間をとり、審議のほとんどはこうしただけに費やされた。

最後にこの宣言案全体についての可否

が問われた。日本はシオニズムについては棄権したが、全体案については賛成した。アメリカとイスラエルは、こういうことをふくむ宣言案は全体としても賛成できないという態度をとり、最終的にメキシコ宣言が全体の一致をみることでできなかったのは残念だった。日数の不足、準備の不十分、その他いろいろなことがわざわいしてこのような結果になったが、あと二、三日あれば全会一致の宣言が出せたのではないかと大変残念である。

●仕事はこれからだ

最終的に本会議でこの宣言を採択するときにも委員会のとき以上の興奮で、各国別の投票、あるいは投票に関する説明、その説明に対する反論など、非常にホットな議論がたたかわされた。とくに日本をはさんでヨルダンとイスラエルの代表が座り、両方が大声で熱弁をふるうため、私たちも興奮状態になったほどであった。

このような興奮状態があったうえ、二時半終了の予定が夜の十一時近くになり

一同へとへとにくたびれた。私は、世界の婦人たちが婦人の問題を論じようと集まってきたて、二週間一所懸命努力したのに、言いたいことも言えず、聞きたいことも聞けず、何とも残念だったと思っていたが、最後にシビラ女史が立ち、非常に印象的な閉会の辞を述べた。「これから皆さんは帰国して会議についていろいろな評価をされると思うが、自分は誰よりも先に評価したい」と前置きしたのち、「この会議には一三三か国のほか多数の関連機関やNGOが参加三、〇〇〇人にも及び、その三分の二が女性であったのはまさに画期的なことである。また一、五〇〇人のジャーナリストが世界中から集まって取材し、各国の新聞のトップを女性が飾ったが、このようなことは、今まで国連が行なったどんな会議にもなかったことである。これらは婦人年がまことに時宜を得ていて、みんなが非常に重大だと思っていることを表わしており、この会議は人類の歴史に残るであろう。この会議では政治的発言が多すぎたと落胆している人も多いと思う。また政治的発言が始まると、参加者中では少数の男性が

ぜん活発に発言した。女性はやはり政治的な力が弱いと失望した人もあると思う。しかし何千年の人間の歴史の中で政治を支配してきたのは男性であることを考えると当然であり、その中で、数は男より少なかったかもしれないが、自国のために大声で愛国的な政治的発言をした女性の発言内容と態度が決して男性にヒケをとらなかったことを思い出してほしい。これは女性の分野が家庭や育児に限られるという固定観念を破るものであり、国際政治の表舞台ではじめて女性が活躍したこの会議の意義は非常に大きいと思う」と力強く評価し、最後に「大きな仕事を短期間に、連日深夜にわたって頑張つて、皆さん疲労困ぱいしておられると思うが、実は仕事はこれからだ」と話を結ばれた。

「仕事はこれからだ」とは、正に私も同感である。この会議は日本の婦人にとつて、また私自身にとつていろいろな意味でよい勉強となり、刺激になった。この経験を新しいスタートとして、女性の地位向上のために全力をつくしたいと思う。

(政府代表報告会から)

わが子のためのパンも学校も薬も持たない状況ほど人間にとって過酷な差別と搾取はない。女性の革命は社会の改革のための決定的な圧力になることが望ましい。(エチエペリアメキシコ大統領)

* 女性という立場では世界中がまだ未開発国だ。団結して

■ 会議の声から (公式)

新しい女のネットワークをつくらう。この会議はそのための始まりである。

(国際婦人年事務局長

シピラ夫人)

* 女性解放が達成されたとき

貧困の現実が変わるにちがいない。世界行動計画への新国際経済秩序樹立の明記は尊重されるべきである。

(バルメ・スウェーデン首相)

* 回教文化の中では、本来、経済・社会的な男女平等が行なわれていた。女の地位が低下したのは、全く異質な外国文化の支配下に置かれて以来のこと。(サダト・エジプト大統領夫人)

フィリピンのは伝説では、男女は一本の竹から一緒に生まれた。(イメルダ・マルコス・フィリピン大統領夫人)

* 二分の一(男性)が自由で二分の一(女性)がドレイであつてはどんな国でも生残れない。四分の一(先進国)だけが富み、四分の三(第三世界)が貧しくては世界は前に進めない。(マンリー・ジャマイカ首席代表)

* 人類の半分を占める女性が団結して、苦しんでいる女性の解放に力を合わせるきつかけになったと思う。(北朝鮮代表ホー・ジョン・スク女史)

* 私たちは民族独立のために男女ともに闘ってきたので改めて女性の社会参加をうんぬんする必要はない。(南ベトナム政府代表ファン・ミン・

イエソ夫人)

* 国際問題について婦人をもっと強い発言力を持てば、戦争はもう二度と起こらないだろう。多分中東でも。女の兵隊ばかりが戦っている場面なんて像想できるかしら？(イスラエル・ラビン首相・レア夫人)

* 政治化を非難する側は、過去五〇〇年にわたる帝国主義と植民地主義ですべてを政治的にしてしまったのだ。政治を語るなどいうのも政治的であり、世界の富の再配分要求に反対するのは、それから利益を得ているからだ。

(ソマリ代表)

* 婦人代表たちは、各国政府のマリオネット(あやつり人形)だ。(西独フォッケ青少年家庭保健大臣)



● 解放を求めて積極的に発言

民間＝トリビュン

1 目的とテーマ

世界各国のトップレディ、外交官、はては首相まで参加した、はなばなしい舞台「国際婦人年世界会議」に対し、民間会議「トリビュン」はあくまでもわき役ではあったが、国連の会議とはちがった熱気に包まれた。

国連社会経済委員会とメキシコ政府のバックアップのもとに、NGOを母体として行なわれたとはいえ、リポーターも会場からの発言者も、「一国を代表する女性」ではなく、「一個の女性」であって、自国の政府の主張を反映する必要はなかった。といっても、女性解放は、政治・社会・経済と切離して考えるわけにはいかない。その住む社会の基盤によって、発想はおのずからわかれる。公式会議と同じ南北論争が展開され、「公式」という歯止めがないだけに、それは一層激しかったであらわれたといえよう。

公式会議と会期は全く同じだったが、

公式会議とは全く別個の独立した会議であって、公式会議が結論を出すこと——決議が最終目的であったのに対し、世界各地、さまざまな背景を負う男女が、女性の社会的経済的地位について、情報や意見を交換することを目的として開催された。その討論の結果は、国連の会議に、そして、平等・発展・平和を目指す国際婦人年の目標達成に示唆を与えるものとされた。

したがってテーマは、国連の本会議で論じられるものと軌を一にし、「文化と婦人」「法と婦人の地位」「農業と農村の発展」「栄養と健康」「就労婦人」「教育」「人口と家族計画」「婦人と政治参加」「家庭」「平和と軍縮」「第三世界の手工業に従事する女性と経済発展」「男らしさ・女らしさはどうしてつくられるか」婦人と

環境——特に都市化をめぐる——をメインテーマに分科会が持たれた。

各分科会では決議は出されなかった。個人またはグループでどのような意思表示を行なってもよいが、トリビュンの名では宣言をしないことが原則だった。

2 参加者

資格制限は全くなく、事前に、住所・氏名・国籍・所属団体・婦人問題について関心のあるテーマ等を記入した申込書により登録され、バッジを携行している者は、だれでも参加できた。国によって国内会議を重ね、一種の民間代表を送り込んだ国もあったようだが、日本のように全く無作為に、ごくあたりまえの女が参加した国もあった。

圧倒的多数を占めたのはアメリカ合衆国からの参加者だった。アメリカの一部は旧メキシコ領であり、地続きで、オハイオでも乗込める距離にある。ちょう

ど九州から東京に来たくらいの感じで特にリブ系の人が多く参加しているように見受けられた。中国とベトナムは、公式の国連の会議であらうと、民間のトリビューンであらうと見解は一つ、タテマエとホンネの差はないから、特にトリビューンに参加する必要はないという意だったようだが、結果的には南ベトナムは発言した。参加者は三、〇〇〇名を超えたが、男性の姿はほとんどみられなかった。

3 会場

メキシコ政府が無償貸与した国立医療センター(セントロ・メディコ)が会場であった。前述のメインテーマは約二、〇〇〇名収容の第一会議室と、約五〇〇名収容の第二会議室で討論された。

医療センター内には、ほかに四つの小会議室があり、あらかじめ予定されていたメイン討論のほかに、臨時の分科会が持たれた(あごらグループも臨時の分科会を持つことができた)。また、廊下の片すみで、医療センター前の階段で、隣接するレストランで、私的な話し合いが随時開かれた。各国からの参加者が宿泊

するホテルや、市内の集会室でも、連日のように集会が開かれた(その一つ、新宿リブセンターの優生保護法をめぐる集会も人気をよんだ)。会場の入口近くに掲示板があり、だれでも自由にメッセージを貼ることができ、何かのアピールをすることも、集会をよびかけることも可能だった。

地下室は展示場に開放されていた。キューバのように、国が主催して一国の女性の情況を展示したところもあったが、健康、受胎調節など、テーマ別のパネルが多かった。ここにはコーヒー飲み放題の無料サービスがあり、比較的廉価な弁当も用意されていた。

4 経過

第一日目は、第三世界の主張を色濃く打出したエチオピア大統領夫人による開会式、二日目から分科会別の討論が行なわれた。

前述したような個々のテーマを軸として、三―五人のリポーターが壇上に立ち問題提起したのち、会場の参加者が自由に発言するというパネルディスカッション方式で討論がすすめられた。パネリス

トの意見発表をめぐって、参加者たちとの間で討論をすすめるねらいであったが、一つの発言を受けて他の人が挙手し反論を出すというのではなく、一般発言に入ると、発言希望者が壇の下に並び、並んだ順に発言した。したがって発言内容は前後して入り乱れ、系統的な討論をすすめることはできなかった。発言者の中には、討論内容とはほとんど無関係なアジをぶつ人、アピールをする人も少なかった。中には「トリビューンで発言した」ことを帰朝報告に盛込みたいのではないかと思われるような、首をかしげる発言もあったが、パネリストの口からは決して聞くことができないような切々たる訴えも少なくなかった。順番がや々と回ってくると、自国の女性の差別状況を訴え、その由来する貧困の原因を告発した。結果として何の分科会かわからないような分科会も少なくなかったが、女性解放の基本的路線を提案しあったということはいえると思う。

主張はそれぞれ微妙にちがっていたが大別すると、次のようなことになる。

①国際政治による解決を 子どもたちに

ミルクも与えられないところで、どうして女性解放を語り得よう。しかし、後進国は生まれながらの後進国ではない。大

国の帝国主義、小国搾取によって生まれたものである。国際政治上の問題を解決し、国際的な富の配分の公正をはからなければ女性の権利は回復しない。

②構造改革が必要 女性差別の情況は、国により、地域によって異なる。雇用の不平等・賃金格差はそれぞれの国の体制に由来する。多くの国で女性の法的権利が確立しながら実態はともなっていない。社会的・政治的な全面的変化が起きない限り、実質的平等は確立されない。資本主義体制下では、真の平等はあり得ない。

③共闘こそ解放の道 社会変革だけで平等になるだろうか。男性の意識改革は容易なことではない。侵略からの解放、貧困からの解放などを男女で共闘することによって真の平等は生まれるのではないか。

④人間解放が基本 男の解放のないところには女の解放もない。戦争になれば男女共に死に、貧困によって男女共に苦しむ。どんな問題も女だけに起こることはあり得ない。男とともに平和、平等を勝ちとらなければならない。

⑤女性自身の要革が先決 女の敵は女性自身である。他人を変える前に、まず自分自身を変えなければならない。自分を甘やかすことをやめ、自立して力を持つ。

以上のような主張に対する反応はきわめて率直だった。共感、割れるような拍手になって返ってきたが、否定はしづらい無視となった。ナマの体験をもとにしたアジェンダ型の演説は受け、官僚の統計や数字の羅列には反応が少なかった。参加者の反応で見る限り、資料を読めばわかるような報告ではなく、皮膚から皮膚へ伝わることばが求められていたように思う。

公式会議とちがって、公式な記録はとられなかった。特に会場内の一般発言者のことばは、人々の心にしか記録をとどめなかった。まして廊下会議、階段会議、ホテル会議の記録はない。しかし、このような記録に残されなかった討論にこそ民間会議の価値はあったように思う。

5 アピールをめぐる

前述のように、トリビュンは全体としての決議を出すことを最初から視制されていたが、女たちの熱気はクレッシェンドで盛上ってきた。特にNOW（アメリカ最大のリブ組織）は、ベティ・フリーダンを中心に、米政府代表はわれわれの意見を反映していないと、米国大使館に押しかけるとともに、国連の世界行動計画に対する独自の修正案を提出しようとする。会の最初から活発に動いていたが、二七日午後一時から三時までの昼休みを利用して集会を開き、シビラ事務局長と各国政府代表を招き、行動計画の修正案に対する見解を聞いた。さうとした。しかし開会直後から中南米の女性が激しく抗議、「トリビュンなら自分たちの声を世界に伝えられると思って集まったのに、分科会などという小グループでしか発言できない。われわれはあざむかれた。自己満足だけで終わるのは承服できない」と、まずトリビュンのあり方そのものを問題にした。

帝国主義の国、米国が主導権をとろうとすることに對する反発は強かった。プ

エルトリコの女性は、「ラテンアメリカ諸国に共通する悲惨の原因は米帝国主義にある。ベティ・フリーダが主導権を持つことはゆるせない。アメリカとは共闘できない」「行動計画の中の、国連内に女性副事務総長のポストを設ける要求などはナンセンス」と批判した。遅れてあらわれたシビラ夫人は、「トリビュン参加者はオブザーバーにすぎない。自国の代表を通じて意見を反映してほしい」と説教したが、中南米グループの反発は強まるばかり。午後の分科会を始めようとパネリストたちが壇上に上ったとき、一人が壇に駆け上り、ラテンアメリカ女性宣言を読みあげようとした。が、電源が切られ、同時通訳の声も聞こえなくなった。予定されていた分科会は会場を変え、中南米勢は、いなされた。以上のような経過に、中南米側は米国資本が会議を支配したと告発している。

プログラムに記載されている関係者は次の通りである。〔組織委員会〕世界YWCA（議長）、NGO、世界友好協議会、宗教的自由国際協会、国際問題教会委員会、国際婦人連盟、国際有職婦人ク

ラブ、国際婦人会議、社会民主婦人会議、国際国連協会、人口危機委員会、〔賛助者〕オランダ政府、ノルウェー政府、メキシコ政府、ウクライナ婦人世界連盟、アメリカ、バプティスト・ホームミッション、メソジスト協会、国際婦人有職婦人クラブ、ロックフェラー三世、ガルフ石油、フォード財団ほか。また、報告者・企画者（総数四八名）の国籍は、二一名（U.S.A.）、五名（英国）、三名（メキシコ）、二名（オーストリア、ブラジル、コロンビア、エチオピア、フランス、インドネシア、ナイジェリア、フィリピン、タンザニア、ユーゴスラビア）一名（デンマーク、エジプト、フィジー、エクアドル、フィンランド、ドイツ、ガーナ、グアテマラ、ホンジュラス、イラン、日本、ケニア、レバノン、オランダ、セネガル、シエラレオネ、スイス、スウェーデン、タイ、ベネズエラ）。

（同数はABC順）

6 その他

同時通訳は、英・仏・西三か国で行なわれたが、リポーターの報告はともかく、一般発言者の発言の同時通訳は、完全な

ものとは思われなかった。もっとも、発言者のことばは、自国語による発言以外は、不正確・不明瞭なものが多かったから、同時通訳も非常に苦勞をしたと思われる。このような状況でコミュニケーションは完全に行なわれたわけではなかったが、世界の女たちが、はたとほだであつたのであつた収獲は、何といつても大きかつたのではないかと思う。それぞれの国内で、自国の特色に応じた運動をしなければならぬと感じ、まず国内で手ぬかりにされている問題から着手すべきこと、しかもそれはグローバルな視点を必要とすることを痛感したことは否めまい。

日本女性性は、ことばの壁もさることながら、国際的な情報不足、国際的連帯の欠除を痛感した。それにもまして、国内の情報過疎、国内の連帯不足を痛烈に感じた。帰国後、メキシコ集会参加者が中心になって、「女のグループ連絡会」をよびかけたのはそのためである。

なお分科会の概況は、私たちが直接参加した分科会を中心に紹介する。また末尾に、トリビュンで配布されたリーフ・パンフ類の一覧表を付した。（S記）

「文化と婦人」分科会

6月20日午後3時—5時

女性よ力を持とうノ

ベティ・フリーダン（アメリカ）

女性問題は、歴史的、社会的問題の一つである。社会は常に変化するが、それにともなつて女性の地位も変化する。第二次世界大戦、中国の革命などは、その見本である。

いまや女性は、主婦とか母というカテゴリーを超え、人間として社会の進展に取組まなくてはならない。最近起こっているさまざまな問題は、いろいろな立場の女性が最大限の力を發揮しない限り前進はなく、かつて女性の特色であったものを変えなければ解決はないことを示している。

女性は職場で働いて帰宅したのちも、家事や育児をしなければならぬ。そういう状況の中で給料も男性の下位に置か

れている。私たちはもはやこのような状況に耐えられない。サークルや団体を通じて、またさまざまな公式・非公式の政治を通じ、問題の解決をはからなければならぬ。それは都市だけでなく農村でも行なわれなくてはならない。

アメリカ合衆国には、このほかに黒人女性の問題がある。有色人種への圧迫が同じ女性の間でも不平等を生んでいる。人種問題と女性問題は深く結びついており、人種問題の解決がない限り、解決はない。

女性の大学進学率は二〇—三〇%で、かなり改善されているが、その能力を生かすべき職場には性差別がある。また産児制限には宗教面からの圧迫がある。恥ずかしい話だが、合衆国の議会には女性は一人生きにくいし、黒人もたった一人だ。

女性は男性と同じ権利を持つべきであり、憲法によってもっと確実に保護されるべきである。われわれは、より多くの権利を確保するために努力中である。

子どもに与えられるべき栄養と食料のパーセンテージが落ちている。また教育

における男女平等が、システム上だけの権利でないようにしなければならない。

結婚に対する新しい考え方があらわれはじめている。結婚後も自由に職業を持ち、ホーム・マネジメントのプロフェッショナルになるだけでなく、社会でも男性と協同作業を持とうとしている。アメリカ社会では男性は敵ではない。

女性は政治的にしいたげられ、抑圧されている。こういう状況をくつがえすため、あるラジカルな人々は合意をしている。男女の性関係というなら、レスビアンの肯定である。

だが、性の問題では、女性だけが犠牲者になつていてではなく、男女が犠牲になつてゐるのだ。セックスにおける男性への敵意を克服しなければならぬ。また、政治的な、あるいは宗教的な、デマゴグとも戦わなくてはならない。

女性の敵は外部にあるのではなく、自分たちひとりひとりの中にある。力を持ち、権利をかちとろう。団結して共通の敵と戦おう。そうすれば敵は逃げるであらう。

困難な状況はあるが、
運動は活発化

井上繁子（日本、淑徳大学講師）

戦後、日本の女性の地位は改善された。工場や会社で働く人々が不平等を解消しつつある。が一方、共働きの婦人には大きな問題がある。

戦前は少数のエリート女性が戦つてきたにもかかわらず、婦人運動が組織され、解放運動が行なわれてきた。また、戦後女性の地位は法律上は改善されたが、まだ教育・雇用面などで問題がある。しかし女性たちは法的地位を得たことをバックに、より多くの男女平等と雇用の平等を求め、運動への参加がふえつつある。公害問題への取組み、女性の考え方や生き方などへの思想的な問いかけが行なわれ、こうした状況の中で、いろいろな結社やアカデミーが生まれている。（以下、日本の状況のデーターを披露）

労働者の権利回復と

女性の権利回復は同一

ラブレ・モングラザール（ベネズエラ

の議員、女性解放運動の代表者）

ラテンアメリカに於ても、他の国と同様に女性解放運動が戦われている。

女性は、政治・経済すべての分野に進出し、参加している。また最近、黒人国で起こったように、女性は政治参加し、大きな勝利をおさめている。先進国とちがい、私たちの国では女性は政治・経済・社会で重要な役割を果たしてきたし、男女の協力は尊重されている。女性の大臣が一人二人いるなどということは、女性解放とはあまり関係がないと思う。

法的には、女性に障害はない。しかし現実には問題がある。女性の問題は、女だけの問題ではなく、人間全体のいろいろな問題に関連している。労働者階級は女性の権利の回復は、労働者の権利の回復と軌を一にすると考えている。男女の協力で権利の回復をはかり、変化をもたらしなくてはならない。

男女の共闘により

権利を確保

ソラ・トニク

（ユーゴスラビア厚生大臣）

ユーゴスラビアは、ヨーロッパの南西、二五万平方メートルの地域と、二、二〇〇万人の人口を持つ社会主義共和国である。歴史的にはたくさんの記念碑を持ち、歴史的建造物も多い。しかし、さまざまな侵略を受けてきた。

私たちの権利が完全に回復したのは、わずかに三〇年前にすぎない。ユーゴスラビアの生産手段は、戦争中に完全に破壊されたが、現在、女性は男性と共に社会に進出している。

かつて女性は、ファシズム政権下で解放のために戦った。一億人の女性が戦争に参加し、二、五〇〇万人が生命を失った。ユーゴスラビアでは、一〇〇万人の青年を失ない、労働者の一〇％を失なった。いま、われわれは、子どもたちのために戦いつつある。そして、男性と同じ人権を確立した女性の戦列への参加は、いままも活発に続いている。

男女の等しい参加は、国家の再建、経済社会の発展など、新社会の建設に絶対必要である。社会・政治面でのこうした変化は、女性の地位の向上、文化の変革となつてあらわれている。（以下統計的数字）

第三世界の手工業

—— 経済発展の中の女性の役割 ——

六月二〇日午前部の録音から要約

約五〇〇人収容の会場は、あざやかな民族衣装の人々で満員。とくにアフリカ・インドなどの服装が目立つ。壇上には、それぞれの民族衣装が美しい四人のパネリスト。中央司会者は金髪が輝やく若いアメリカ女性。

(パネリスト)

イラン (国連発展計画勤務)

インド (経済学者)

(注) パネリストは、問題提起のリーダーであって、各国の代表者ではないが、一般発言者と区別するため、仮に代表とした。

メキシコ (手工業者)

ナイジェリア (不明)

司会 午前中は四人のパネリストが報告します。スピーチのあとディスカッションを一つずつ進めていきましょう。

働いている女性が成功と失敗の経験を話し合うことによって問題の解決が容易になるとよいと思います。なお、トリビュン最終日に問題解決のための統一見解を発表できるとよいと私は考えていま

す。参加各国により、問題点はそれぞれちがうでしょうが、できるだけ話し合いをすすめて、統一見解を出したいものです。

●クラフトにより女性も経済発展に参加を

イラン 経済の中に手工業女性労働者が占める役割は大きく貢献度も高いのに反対給付が少ないのが現状です。この理由

の第一は、自営手工業女性が組織されていないからで、これは今後ぜひとも考えるべきでしょう。第二は社会的な自立の欠除です。女性が「満たされた人生」(フル・ライフ)を送るためには、経済的な面だけでなく、社会的自立も重要です。

フル・ライフのためには、家族内の伝統的な役割Ⅱホーム・メーキングと、一国の経済への参加の両立が必要です。私は自国のアイデンティティは大切だと考えます。自国の伝統を捨てないように伝統的なクラフトを守っていく——そこに女性は大きな役割を果たせると思います。

女が働くということは、とくに第三世界では労働力不足、人的資源不足の中で意味を持ちます。女性をもっと利用すべきです。また自然資源がたりないところにも女性の力を役立てるべきでしょう。この両面でクラフトは非常に重要だと考えます。

経済発展のためには、企業よりもサークルがもっと発展すべきでしょう。技術のない人にはクラフトが適しています。企業に入るよりはクラフトにつくべきだと考えます。経済発展には資本が必要で

あり、ハイテクノロジに至るには時間を必要としますから、段階的には重工業のような投資を必要としないクラフトにまず就き、これを出発点として高い発展に至るべきだと思います。教育機関にはお金がかかりますが、クラフトの教育はお金がかからないのでよいと思います。お金がかからないのでよいと思います。

手工業にはマーケットが必要ですが、国内・国外ともに市場を必要としますが、マーケットは、企業よりもクラフトのほうがつくりやすいと思います。クラフトはそれぞれの国の伝統に基づき独自性を持っていますが、企業は全世界的な激しい競争の中に立たされます。一国の伝統は大切です。伝統に基づいて国は発展します。伝統を捨てず、伝統的なクラフトを守りながら国を発展させるべきでしょう。

女性の経済発展への参加度を見ますと非常に高いのにもかかわらずその貢献は認められていません。アフリカのある国では男は若い人から老人まで都会の企業で働き、地方に残留する女性に重圧がかかっています。地方ではきわめて設備が悪く、水を三時間かかって川から運ばな

ければならないといったことで苦しんでいる状況です。国際婦人年では経済発展への女性の参加を標榜していますが、はたしてそれができるのか、アフリカでは生活は今が限界です。生活の向上をはからなければ女性の要求も出せません。

私の調査結果では、インドでは女性の社会参加はクラフト部門が最多数を占めています。賃金はクラフトが最低です。これは、他の国も同様です。

私のこの刺しゅうをごらんください。一針一針刺しゅうをするのは女、男性は裁断するだけです。裁断するだけの男性の工賃のほうが高いのです（笑いと拍手）。

私たちは国の政策を批判しますが、女性が組織化されない限り前進はありませんし、国の設備を利用しなければどうにもならないというのが実状です。

クラフトを考える場合、あまりセンチメンタルにならないほうがよいと私は考えます。人間よりもむしろ機械にまかせたほうがよいのかもしれない。女性は自分たちが抑圧されていると考えていますが、抑圧された女たちが組織され、統

一されなければ決して強い力にはなりません。とくに地方在住の女性の組織をつくり、要求を出し方法を改善して製作していけるように提案したいと思っています。

インド 経済面でも、家庭面でも、栄養でも意見でも、女性はこの国でも男性にコントロールされています。男がかせぎ、女は育児と農業で手いっぱいという状況です。女が経済収入を得るようにならなければいけないと思います。クラフトは女性の伝統的な貴重な職業です。多くの女は収入をあげるためには物売りなどをやるほかなく、全く未組織状態ではほとんど収入をあげることができません。物売りをしても中間搾取がはなだしく、お金にはなりません。

貧困を解消し経済発展をはかるのには国の政策が重要です。政策により所得分布が平均化し、多くの人が経済発展に参加できるようになります。経済発展による生活上の恩恵を女性も受けてはきましたが、従来は直接参加はしませんでした。今後は女性も参加したい、してほしい。そのためにはクラフトがもっと発展しなければなりません。市場性の点でク

ラフトは有望です。今後は市場の拡大にも、もっと目を向けるべきでしょう。

●会場からの発言

司会 以上についてご意見ありませんか
タイの女性(男性通訳が代弁) いまのお話を聞くと変化がないように聞こえますが、この三年間でも大きな変化がありました。クラフトだけを調べると古い状態が続いているような感じがしますが、組織化も進んでいます。タイは観光産業に依存していましたが、これからは観光産業に頼るわけにはいきません。

アフリカの女性 これからの産業社会は資源その他の壁にぶつかります。クラフトはその意味ではもっと貴重になるでしょう。クラフトの意義も変わってくると思います。もっと大事にしたいものです。

イランの女性 観光客が減ってくるから問題になるという発言がありました、国によって事情がちがうと思います。イランでは影響はありません。第三世界は変化していないと私は思います。それは私たち自身の責任です(拍手)。

東南アジアの女性 発展途上国は貿易面

で悪条件に立たされており、先進国から一方的な抑圧を受けています(拍手)。

今までは、せつかく生産してもお金にならず、いつも安く買いたたかれてきました(拍手)。最近になって少しずつ適正価格になってきましたが、過去の搾取、とくにアメリカの搾取を忘れることはできません。私はアメリカから来たばかりですが、アメリカはあまりにも無駄が多い。憤慨に耐えない(拍手)。

司会 アメリカでも資源のリサイクルその他研究がすすめられています。

インドの女性 司会者はリサイクル云々と言いますが、リサイクルしても意味がありません。問題はリサイクルではなく過度の消費そのものにある(大拍手)。おたがいにもっと省資源しなければいけません(大拍手)。

司会 それは大事な発言ですが、クラフトの話に戻りましょう。

アメリカの女性 アメリカについての批判は同感です。アメリカにもよくない習慣があります。アメリカの片いなか、悪路を九時間も車で走らなければならぬようなところにいるの工場があります

が、男性が型をつくり、女性が縫製しています。男性も同じ作業をすべきです。

別のアメリカ女性 ワシントン州のスポートレーン市でクラフトの展示会があったときのこと、男ばかりで女はホステスだけだった。もっと男女が協力すべきです。司会、婦人問題といっても工業化の問題が主となることは理解できます。

インドの女性 クラフトは自国の資源を使いますから、他の産業に比べて抵抗がありません。帝国主義は資源を収奪しますが、クラフトの場合は国内資源を利用します。またクラフトではアジアの国々のほうが西欧諸国よりも進んでいます。

クラフトを発展させる際、そのクラフトに市場性があるかどうか考えることが大事です。インドで全く売れなくて失敗した例がありますが、それは石けんと油の生産でした。都会にある、企業で作るもののはうがソフィステイケートされていて成功するようです。インドネシアでは非常に盛んで輸出もすすんでいます。国際的・国内的な需要を考えないと成功はできません。具体的な必要品でなければ成功しません。置物・飾り物・ロマン

チックな物だけではだめです。

司会 時間がありませんので、実際にクラフトをしている人が発言して下さい。
ガーナの女性 個々の女性だけでは力がなく、政府に対して抵抗できません。政府の諸設備ももっと利用しないといけないと思います。ガーナではマーケティングを考えず伝統的なものをつくりたいと思っていますが、観光客はできるだけ安く買おうとします。クラフトをつくる女たちの時間や創意をもっと評価してほしいと痛切に思います(拍手)。

●クラフトの社会経済的背景が問題

司会 では、クラフトの経済的・家庭的背景について話して頂きましょう。

ナイジェリア代表 手工業によってコミュニティと個人の地位が共に向上しますが、だんだん教育が進むと手工業のような仕事でなく公務員のような仕事を希望するようになります。よりよい手工業品をつくるためにはトレーニングが必要ですがトレーニングは男だけが受け、女は受けられないのが通常です。プロフェッショナルなトレーナーが不足しており、

とくに地方にはいません。いわゆるオン・ザ・ジョブ・トレーニングですが、これは時間がかかります。もっと効果的に早くできる教育が必要であり、それは先進国の専門家でなく、地域住民によって行なわれるべきです。

個々の女性が古い機械を一〇年間ぐらい使いながら作業するので非常に非能率的です。経済面の改善も必要です。

手工業は普通伝統的基盤に立つため、女性の地位が低いのが通常です。これは宗教に由来する社会通念とも関係があります。女は自由がなく、家を出ること、町に出ることも禁じられています。このため家の中でつくり、売ることしかできず非常に不利です。この状況を打破するために、たとえば古い伝統・宗教を改めるなど、それぞれの国の政府がもっと協力すべきです(拍手)。

司会 では次に近年経済的余裕を持つようになったメキシコの女性から報告を聞きましょう。経済的余裕はコミュニティの中でその地位をどう変えたか――。

メキシコ代表 教育、経済、市場等についての今までの発表に同感します。しか

しそれはどういうクラフト・ウイメンの話でしょうか。都会なのか、根強い慣習の中にある地方なのか、分けて考える必要があります。都会では大衆が主体ですから、その産地にマーケティングがあります。

また地方のクラフトはトレーニングによる教育がたいへんきびしいのが特徴で、とくに家庭内の母親による教育が効果をあげています。地方では販売先をあまり考える必要もありませんし、設備の利用を考える必要もありません。地方のコミュニティはクラフト・ウイメンに理解も尊敬もあります。長い伝統に立ち、基盤もしっかりしています。

●会場からの発言

司会 家庭を出てクラフトの組織に入ると、家庭やコミュニティはどんな反応を示すか会場の方の意見を聞きましょう。

アメリカの女性(司会者と顔見知りらしく、司会者が「ま、なぜあなたがこんな場で発言するの?」と反問するのを押切って発言)観光産業が衰退すると武器の生産にお金が使われるようになる……。

司会 それはたしかにそうですが、ここ

では無関係だから、平和と軍縮の話は遠慮してほしい。

ナイジェリアの女性 大学で経済を専攻、現在カーネギー・ライブラリーに勤務中です。大学卒業後アメリカで就職しようとしたところ、資格は全くないと相手にされなかった。織物ができるといったら就職できたのです（拍手）。大学卒の教育があっても小学校の先生にもなれなかったが、母親から習った織物は生活の資となった（笑いと拍手）。教育は無意味だったのです。私のような人間のことには耳を傾けようとはしてくれなかった。私が手先でやることは認めてくれた（拍手）。ナイジェリアのクラフトをなぜアメリカ人に教えるのか（拍手）。大学の教育よりもクラフトの実技のほうが認められる。母親がクラフトを教えるともっと自立ができるでしょう（拍手）。アメリカの女性 ニューヨーク市に住む学生です。夏休に手工芸品を売っていましたが、インフレで大変です。学費のために手工芸品をつくるのは創造的な意味があると思いますが、ニューヨークの警察は親切ではない……。

司会（発言制止）

スペインの女性 私は新聞を出しています……。

司会（発言制止）

ジュネーブの女性 手工芸品をつくること

によって自己満足ができます。私は若い人に手工芸を教えています。

司会（発言制止）

バングラデシュの女性 一口にクラフト・ウイメンといっても、地方と都会では違います。都会ではミドルクラスのエリートが主で、経済的な意味よりも、何か仕事をしたという意味でしている人が多いようです。一方、地方では文盲の人ばかり。専ら収入をあげるために働いています。男女共働きをしても収入は足りず、生活は苦しいのです。七一年から手工業は少しずつブームになっており、いい傾向ですが、販売の中間に、必ずミドル・マンが入り、中間搾取するのが問題です。女がつくったものを間に立つ男性ブローカーが搾取するのです。

地方では女が働くことには抵抗がありません。しかし流通まで女の手で行なわなければ働いたことが無意味になりま

す。女が組織をつくり、自主販売することが必要だと思います。

地方では働くことは地位向上にはつながりませんが、都会では地位向上と関係します。

司会 皆さんまだたくさん発言したいことがありでしょうが、時間をだいたい超過しましたのでこのへんで。それぞれのお国に帰ってまたこの問題を考えてください。

（後記 クラフトということばは、日本で考えられるような手工芸品という意味よりも、問屋制家内工業の意味で使っている発言者が多数を占めたようであった。非常に重要なテーマだったと思うが、いわゆる第三世界からメキシコまで訪れる人々は、クラフト・ウイメンといってもむしろ問屋側の人のほうが多い印象であった。事情として共通面をもつ日本の内職主婦の参加もなかった。またこのテーマをアメリカ人が司会したのは解せないことであった。なおそれぞれの発言は強いなまりのものが多く、細かい点を聞きとれなかった部分が少なくないことをお断わりする）

トリビューンは、男と女、
富める国と貧しい国、異なる
社会階層と地域——これらす
べてを超越して人間の目標に
ついて根本的に考え直す場を
提供した。(マリア・スタター・
ズノ・デ・エチエベリア夫人)

*
この会議は、今まで口を開
けなかった、人類の半数を占

■会議の声から(民間)

める女性が行動的になるため
の第一歩だ。(シ・ピラ夫人)

*
もし女性がいま声を張り上
げなかったら、地球上の全生
物はまもなく滅びるだろう。

(アメリカの女性)

*
後進国、後進国というが、
生まれながら後進国だったわ
けではない。大国の帝国主義

による小国搾取から生まれた
のだ。これからは、先進国Ⅱ
ウルトラ搾取国、後進国Ⅱ非
搾取国というよび方を提唱し
たい。(グアテマラの女性)

*
ラテンアメリカの問題、そ
こに住む女性の問題は、未開
発だけが原因ではない。米帝
国主義とその仲間の国々によ

る搾取の産物である。

(ラテンアメリカ一〇か国の
女性によるマニフェスト)

*
女性解放を口にする女性が
自分自身についてはエゴイス
ティックになっていないだろ
うか。例えば女性の化粧品は
年々ぜいたくになっている。
一方には食糧供給問題があ
り、飢えている子どもたちが

いるのだ。(アメリカの女性)

*
メキシコでは女中を持つこ
とは車を持つことと同じステ
イタス・シンボルだ。毎日、

あるいは週のうち数日間、女
中とちがう生活を送る女性が
どうして平等について語れる
だろう。(メキシコの女性)

*
侵略戦争は特に女性と子ども
にとって残酷な戦争だった。
私たち女性は侵略戦争が
また起こらないよう、十分監
視しなければならない。

(南ベトナム解放女性同盟
チュンティ・ユエ夫人)

*
三千人の政治犯の一割以上
は女性だ。

(アルゼンチンの女性)

*
七か月間の拘留と拷問で私
はごらんのように足が立たな
くなった。(ボリビアの女性)

*

両手両足を切られ、棒を体
に突き刺された女性政治犯が
いる。(グアテマラの女性)

*

大勢の女性が獄中で暴行さ
れ妊娠中だ。(チリの女性)

*

キリスト教会は女性を差別
している。女性はけがれたも
のとされ、牧師にもならない。

(アメリカの女性)

*

レスビアンを法的に認知せ
よ。(カナダの女性)

*

ホモは禁止すべきだ。

(国籍不明)

*

子どもは次の時代をになう
貴重な人材だ。子どものこと
を最もよく理解できるのは母
である女性だ。女性が子ども
の側に立たなければ誰が立つ
のか。(メキシコの女性)

メキシコ・キューバ私たちの旅

お金もない、時間もない、雑誌「あごら」を作り出すだけで精一杯の「あごら」が、メキシコ集会上ツアーを送り出すについては、運営委員会でも、かなり異論があった。ベトナム戦争、中近東紛争で

国連が何をなし得たか、国連本会議には期待できないというのが大方の予想であったし、並行して行なわれる民間集会上については、ほとんど情報がなく、取組みの計画がたてにくかった。

しかし、どのような集会であるにせよ、世界百三十国余の女性が一堂に会して十年にわたる行動計画を討議するのは、歴史始まって以来の出来事にちがいない。その瞬間に立会うことは、「あごら」の

運動にとって貴重な意味を持つただでなく、雑誌「あごら」を通じて情報を伝えることもできるのではないだろうか。ともかく「あごら」の読者によびかけてみよう。

「あごら旅の会」は、こうして発足した。参加者全員が主体的にかかわりあい、旅することそのものを一つの運動にすることが、発足の条件とされた。

多角的な目的を掲げて

旅の目的の第一は、いうまでもなくメキシコ集会の傍聴であった。私たちの十分な語学力では、実質的な討議に加わることが不可能だが、会議を通じて世界

の活動家たちと直接情報をかわしあうことは得がたいチャンスに思われた。とりわけ私たちが連帯したいと強く願っているいわゆる第三世界の人々と、この機会に語りあいたいと思った。

第二は、キューバ訪問である。女性解放が解放運動の一環である以上、劇的な解放を果たしたキューバには、つきぬ関心があったし、その解放が女性運動に果たした役割も知りたかった。画期的な新家族法が討議されようとしていると聞くその内容も興味をそそった。

第三は、マヤ遺跡の探訪である。これは婦人問題とは直接の関係はないが、それそれが乏しい経済をやりくりしてメキ

シコまで行く以上、シティだけではなくユカタン半島まで足を伸ばしたいと考えた。

以上を通じて、私たちは何よりも、おのれ自身を揺り動かしたいと願った。

「あごろ」は、「人間解放としての女性解放」を旨とするグループであるが、活動の主体は、分断された女性の情報の収集と伝達に置いており、世にいうリブ・グループのような世間の耳目をゆるがす活動は行なっていない。会員の多くは、他人を動かそうとする以上に、まず自身の生きざまを問おうとしている人々であり、旅を通じて、それぞれの内包する問題に一つの転機が与えられることを願った。

一見多目的すぎるテーマを掲げたのはそのためであり、目的に沿ってA B二コースを設けた。Aは終始メキシコ・シティに滞在して会議に専念するコース、Bは会議に三日参加した後、マヤ遺跡とキューバを訪れるコースであったが、参加予定の高齢者から、二度と旅に出ることもあるまいからとの強い要望があり、Bコースにさらにインカ遺跡探訪・タヒチ見学を加えたCコースも設定した。

キーセン観光業者を排除す

旅の準備は、しかし順調にはすすまなかった。旅の安全と快適を期して依頼しようとした旅行業者が、キーセン観光に年間五千人以上の日本人を送りこんだことにより朴政権から表彰されていることがわかった。筋を重んじる「あごろ」の趣旨としてはこの業者を利用するわけにはいかない。しかし参加希望者はどちらを選択するか。私たちは一人一人に電話で確認を求めたが、全員が、不便をしのいでも、また旅費がふえても、キーセン業者は利用したくないという回答であった。

清潔な業者を求める作業が始まったが遅々として進まなかった。旅行業者のほとんどが、大なり小なりキーセン観光に関係していた。たまに清潔な業者があると、企画力その他で疑問を感じた。甚だしく割高で、私たちの資金では応じきれない場合もあった。旅行準備の専門的部分は業者にまかせる予定であったが、このためやむなく私たちが自力で在日外国公館との折衝その他に走り回ることとなり、メキシコ集会に向けるべきエネルギー

ギーの多くが消費される結果となった。メキシコ大学留学の経験を持つYさんを通じてT社に決定したのは五月も末、これ以上一日も待てないというぎりぎりの日だった。

行けなかった人々

この間に、旅の希望者は続々と脱落していった。女が現実には家をあけようとする何とむずかしいことか。ここにも婦人問題をまざまざと感じた。

最終的にはAコースゼロ、B十四名、C四名、北海道から沖縄に及ぶ合計十八名（うち会員十名）となったが、そのうち最初からの希望者はわずか二名にすぎず、Cコース提唱者のAさんも姿を消していた。

ともかく五月二十七日、全員がそろっての第一回の会合を持ち、コースの若干の変更を確認、記録、食料、親善等、それぞれの分担を決定、各人が主体的にかかわることを再確認した。

第二回は六月五日、当初設ける予定ではなかった団長が必要ではないかという話合いになり、「あごろ」事務局の斉藤

が代表となり、隊員は一貫して「あごら」として行動することなどが決められた。

第三回は六月十日。トリビュンでレポートを発表できるかもしれないという情報が入ったため、急拠原案をつくり討論した結果、日本の女の状況をややさかのぼった時期から考察した“Japanese Women—Past and Present”をまとめた。この中で特に強調したのは、日本はアジアの一国であること、アジアの一国としては特殊な高度成長の中で、現在多くのひずみを生じていること、その中で女性解放運動も従来の先進国型の運動を反省し、その批判としての草の根運動がひろがりつつあることなどであって、草の根運動の幾つかを紹介し、終わりに六つの提案を掲げた。同時にトリビュンの会場で配布する情報交換を求めるリーフを急ぎ用意した。

こうした私たちの動きは、一部の新聞に「政府代表にまかせちゃおけぬ、女性差別訴えますわヨ」と写真入りで大きく報道された。あとになって考えれば、民間は民間なりの役割があったことがわかるが、当時の私たちは政府代表を上回る

活躍ができるなどとは夢想していなかった。各国の活動家と経験交流し、私たちの提案をするともに今後の運動を考える資料を得たいというのが主旨であった。

難航した準備

この間、旅の準備は遅々として進まなかった。十分な準備期間を持たず、費用は極力安くという旅に、商業ベースの旅行社は、最初から無愛想だった。第二回会合で、飛行機の関係上、旅程を大幅に変更しなければならぬと申し渡されたまま事後報告がない。不安に耐えぬ私たちに、六月も七日を過ぎてやっと返ってきたのは、飛行機便の関係でキューバには入国できないという返事だった。

入国がむずかしいというキューバ入りを目指して、何度かキューバ大使館に足を運び、フィデル・カストロ首相と、ピルマ・エスピノス夫人連盟会長に手紙を書き、雑誌「あごら」によって「あごらグループ」の日常活動とまじめな性格を証明してビザを手に入れた私たちにとって、それはショッキングな回答だった。

理由が釈然としない。なぜ切符が手に入らないのか、せめて理由を明らかにしたい。国際電話で状況をただしてほしいと要求する一方、自分たちでも直接現地電話をかけ、ようやく入国の切符を確保できた。

と思ったのは、またしてもぬか喜びに終わった。出発前日、旅行社から突然通告を受けた。「帰便がとれない、旅行を中止したい」という。深夜、現地に再度電話をかける。「確保はできないが、見通しとしては大丈夫」——現地日航野崎氏の力強い声にはげまされ、私たちはともかく旅立つことにした。キューバ入りは困難な可能性もあるという条件を全員に再度確認した上で……。

今回の旅に費やしたエネルギーを十とすれば、その九までが事前準備、それも会議参加以外の雑事に費やされた感であった。しかしキーセン業者を排した以上それは覚悟しなければならないことであつた。女が旅することの過酷さを身をもって知ることにより、婦人問題への思いをいっそう深めた一か月半でもあった。

ハプニング

続出ではあったが

以上のような不備な条件のもとに出発した私たちの旅は、決して快適とはいいがたかった。ハプニングが相次ぎ、スケジュールの変更が少なくなかった。現地関係者の談話や、隊員相互の経験交流を志していたミーティングも、所期とは異なった結果になった。会議への参加も、全く中途半端であった。しかし三日半と

はいえ会議に参加できたこと、情報交換のリーフを配布して諸国の活動家と交流したこと、貴重な機会を活用できなかったものの一応分科会を持てたことなど、予想外の収穫もあったと思う。またユカタン半島（マヤ遺跡）、キューバなど、メキシコ・シティとは異なった土地の風物に接した感銘は、それぞれ深かったように見受けられた。旅中の詳細と感想は、旅日記と感想文にゆずるが、ともかく夢想に近かった旅を実現でき、全員無事故

で全旅程を終えることができたのは、メキシコ・キューバ・ベルーの各大使館、日本航空など、直接関係者はもとより、十一年にわたりBOC、あごらを支えて下さった会員の方々のお蔭と、心から感謝をささげたい。行届かぬ旅を耐えて下さった隊員の方々におわびとお礼を申し上げるとともに、旅への参加を中途で断念しながらも、準備のために奔走して下さった会員諸姉に、特に厚いお礼を申し上げたいと思う。（事務局 斉藤記）

《日本の婦人―過去と現在》

による世界各国への提案

一、国連の世界婦人会議の方針に疑問を投げる。世界行動計画案では、開発途上国の女性の教育の必要性を訴えているが、そこに隠されているおとし穴に注意したい。低開発国の女性教育の目標の最たるものは、バス・コントロールだが、これは地球的な食糧危機に対する人口抑制のねらいがある。産む、

産まないの選択権はそれぞれの女性が持つべきもので、国家による管理も国連による管理も無用である。女性に教育が必要なのは、女が生きる方法を自分で選択できるためである。

一、純粹の民間機関による「世界女性センター」をつくり、情報交換、性差別対策に積極的に取組もう。

一、結婚により夫の姓に帰属することをやめよう。

一、ミスター・ミセス・ミズ等の区別

は不要。

一、先進国型解放運動に疑問を提示する。高官が何人出たといった数字で示される少数のエリートの進出ではなく多数の平凡な女の幸福を願おう。

一、一九八五年に向けて前進の第一歩をふみ出したい。一〇年後に、日本の女が果した成果を告げたい。私たちの望む前進とは、サッチャー夫人を数多く生むことではなく、母子心中、子殺し、雇用差別などを解消することである。



さあ出発！

旅

日

記

K・F

■六月十七日（火）

午後二時の東京国際空港は、照り返して、まるで焼けたトタン屋根。「これじゃあ、熱いトタン屋根の上のネコ」とシッポならぬスーツケースをひきずって、日航団体出発カウンタ―にたどりつく。荷物という荷物にシールを張ったり、フダをぶら下げたり一騒動のあと、大荷物からは解放され、I待合室へ。

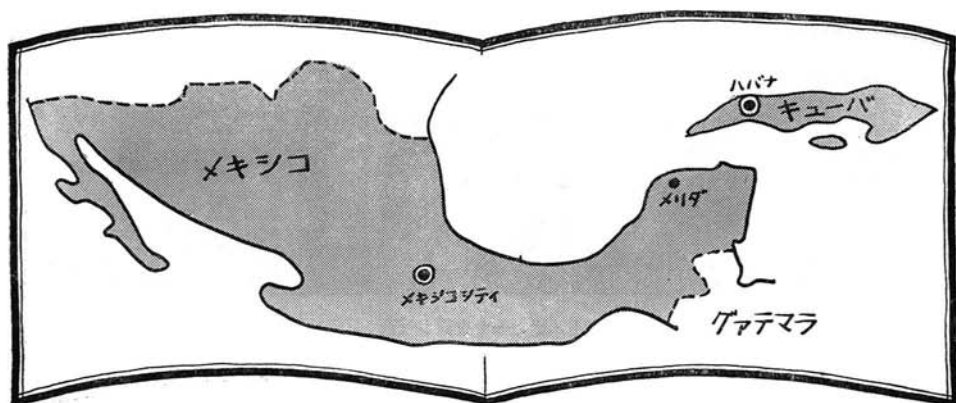
真っ赤なジュウタンにベージュの壁紙、日本人形や盆栽まで飾ってあるI待合室は、シャンペンでも抜いて出発を祝いたいふんい気。だが、あれこれの出国手続きが終らない。サヨナラは言ったけど出発はまだ、の妙な心境。午後三時半、斎藤団長があいさつ——「いっしょに出発できなかった人の痛みを……」。小さなふるえ声で聞き取れない。「聞えませんか」と声をはりあげた人がいたが効果なし。まあ、なにはともあれ出発である。

午後五時二十二分離陸。さっそく夕食が出る。牛肉のステーキ、フライドポテト、サラダ、パン、日本風味「そば」それにデザート。「人の作った料理って、なんておいしいんでしょう」の声。

午後九時、機内の灯りが消えた。オヤスミナサイ、でも眠くない方は映画をどうぞ、と映画も始まる。「お酒のほうがいいワ」という人がいて、ブランドーのいい香りが流れてくる。私はバスされてきたブランドーを一口いただいて、オヤスミナサイ組に。ふと目がさめると、時計は午後十一時四十五分。みんなよく眠っているが、スチュワデスが動き出している。どうやら、そろそろ起床時間らしい、洗面、着がえなどしているうちに、窓が開けられ機内に朝日がさし込んでくる。夜が半分も過ぎないうちに朝が来てしまった。十七日、二度目の朝食だ。

サンフランシスコ着は午前十時三十分（サンフランシスコ時間）。思ったより簡単な手続きで入国。空港近くのホテル「ザ・ヒルトン・イン」に入る。空港のそばで高い建物が建てられないのか、なんだか、昔の木造の学校を思わせる建物だ。

「荷物を置いたらすぐに出てきて下さい」と添乗員に再三、再四言われて、あたふたと市内観光のバスに乗る。その後のすさまじいことと言ったら。フリー・ウエイを突っ走りながら、カリフォルニア州ならびにサンフランシスコ市の概要を聞き、ツイ



ン・ピークスの頂上で強風に吹かれてよろめき、ゴールデンゲイト・パークでたったの二十分間「散策」し、「あざらし岩」に打ち寄せる波に「ああ、これが太平洋のあちら側であったか」と嘆息、ようようゴールデン・ゲイト着。

ここで「見るべきものは山ほどある。が、どこに？」とガイドから質問が出る。まずは「漁夫の波止場」でおいしいものを食べ、それからダウン・タウンで解散と決まる。とにかく、買い物をしたい人、チャイナタウンに行きたい人、ケープルカーにはなにがなんでも乗らなきゃあ、という人。解散しなければとても希望は消化できない。

どうやら、一人の迷子も出ずに、全員、無事ホテルに帰り着き、正味二日分のこの日は暮れた。

■六月十八日(水)

午前五時起床、六時ロビー集合である。外へ出ると吐く息が白い。遅れる人がいて、そのカウンターでコーヒーを飲む人あり、絵葉書を物色する人あり。「明治時代の自動切手販売機」と何かの本で見た機械とそっくりの自動切手販売機がホテルの前

にあった。ちゃんと動いたので驚く。

午前七時、ウェスタン航空でメキシコシティへ向かう。この航空会社は、ちょうどことが五十周年らしい。朝食のジュースについでいたステイックが記念品になっている。いただく。ロッキーマウンテンのおシッポとカリフォルニア湾をたのしんでいるうちに、メキシコシティは眼下に。午後二時(メキシコ時間)、ランディング。

空港では、メキシコ滞在中お世話になる阿波氏をつかまえてはならなかった。ダレも顔を知っている人はいないので、川上さんがご自慢の美声を張りあげた「あわさあーん、あわさあーん」。

ミディーのスカートを蹴ちらし蹴ちらし、早足に歩きながら「あわさあーん、あわさあーん」と呼ぶ川上さんの勇姿は、だいぶ、出迎えるメキシコ人をたのしませたよう。もちろん効果は抜群で、阿波氏も長髪をなびかせ駆け寄ってきた。

私たちが落着いたホテルはメキシコシティの繁華街にある高級ホテル「デル・ブラド」。日本政府をはじめ各国の政府代表やジャーナリストが泊っていた。時差疲れが出る頃、海拔二、二四〇メートルの高度にも慣



トルティーヤを買う行列

れなくては、とこの日は旅装を解いて休養、明日以降の婦人会議に備えることになる。

「身分不相応ではあるが、第一目だから……」と高い高いホテルのレストランで夕食。十八人が四つのテーブルに陣取り、思い思いの料理を注文、ワインで乾杯の組も出た。メキシコの伝統的な食べ物、トルティーヤに肉を包んで揚げたタコス注文した勇気ある人は三、四人。私も、そのひとりだったが、なかなかスムーズにノドを通ってくれないタコスはいつまでもテーブルにあつて、時間いっぱい夕食時をたのませてくれた。

■六月十九日(木)

予定表では「終日婦人会議傍聴」となっていたが、開会式は午後五時から。時間まで、と市内見学をする。午前九時にバスでホテルを出、ソカロ広場、カテドラル、国立宮殿はバスの窓からちりちり、三文化広場ではちょっとバスから降りて、カメラのシャッターを二、三度押し、あつさり「おみやげ店」へ。

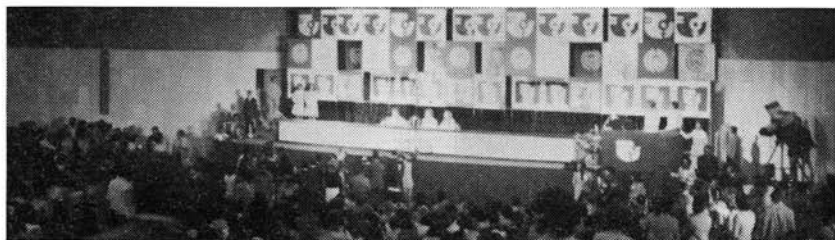
この頃から、買物派と見学派の二手に希望が分れる。阿波氏の提案で、アステカ

帝国の征服者コルテスが愛人のインディオ娘、マリンチエのために建てたというサンファン・パウテスタ寺院を見に行き、残り時間は自由時間に、と決まる。寺院へ向かう道々、阿波氏からマリンチスモという言葉の由来、意味、マチズモに関する解説、メキシコの宗教などについて聞く。専門的な知識と若々しい感受性にと裏打ちされたガイドはとても魅力的だ。

くずれかけている石積みの外壁。風化してすっかり木の目が浮いていた正面の扉、天床を飾っている大壁画、いくつものマリア像、たくさんの花、祈りの声。寺院の周辺を取り巻いていた緑に映える白い壁、公園を走る幼児、舗道に座り込んで本を読んでいる子、ビニール編みに余念のない子、昼食用のトルティーヤを買うために行列をしている老若男女——私の見たもの。

いろいろな期待をして行ったのに、開会式はエチエベリア大統領夫人の演説であつさりと終ってしまった。莊重な言葉もなければ、アトラクションもない。あまりのあつけなさに、しばらく席でガヤガヤ。

外に出て見ると、帰りがねていたのはわれわればかりでなかったらしく、広場いっ



トリビュン会場：壇上はパネリスト

ばいの人はいくつものグループに分かれ交歓している。では、われわれも、と「あごろピラ」をまき始める。やってみますネ、と握手に来る人、インタビュールに来る人、住所や持ち物の交換を申し出る人など……。夕やみが迫り、気温が下ってきて、ようやく、人影もまばらになる。帰り道に、国立宝くじセンターのビルに取付けられていた国際婦人年のイルミネーションが、なんときれいに見えたことか。

■六月二十日（金）

いよいよ分科会が始まった。午前の部は「人間社会の形成について——平等、発展、平和——」と「第三世界の手工業婦人と発展」の二分科会。午後の部は「婦人と文明」と「第三世界……」の二分科会であった。何人かずつに分かれ分散参加するはずだったが、結局「人間社会……」と「婦人と文明」に集中してしまった。

「婦人と文明」分科会では、斎藤千代さんがスピーチをした。並んでいるうちにだんだん顔が白くなって、スピーチが始まる時には体までがコチコチになっていた。斎藤さんもあんなに硬くなったことはないだ

ろう。私も初めて見た。

思いがけなく、駆け寄ってきて、涙を流しながら抱きついて来る人がつぎつぎと現われる。どうやら、さばいて、斎藤さんと阿波氏はレポートを事務局へ出しに行つた。と、「キューパつかまる」の報。神馬さんが地下の展示場でキューバ大使館の人と連絡をつけたのだ。

この夜は阿波氏の分科会レポートを聞き、キューバ大使館の人と懇談して、夜がふけた。

■六月二十一日（土）

さっそくの二日続きの休日である。午前八時、メキシコ国内航空でユカタン半島・メリダへ向かう。「マヤ文明を訪ねる旅」への出発だ。

メリダは「白い都」という意味とか。静かで、それでいて暖かく、飾り気のないメリダはたちまちみんなの気に入る。私たちが泊る「ホテル・メリダ」もすばらしかった。つるつるに磨かれた石造りの玄関に入ると、ロビーの左手はうっそうと木が繁る、暗く湿った中庭。まぶしい太陽で疲れた目を休ませてくれる。さらに廊下を三メ



急傾斜を60歳が先頭で



いまは失われた文化のシンボル

ートルほど進むと、ハイビスカスが咲く愛らしい庭が広いテラスの向こうに広がっている。たつぷりと広くて涼しい部屋、石造りの風呂、古いイスが黒光りしている手入れの行き届いた食堂。

どこにも出かけないで、ベッドにひっくり返って街のさわめきを聞いたり、ホテルの窓から街角の風景をボンヤリ眺めていた。そんな思いがしきりにする。だが、部屋にいたのはたったの三十分。またも、バスに飛び乗ってウシュマルへと走り出す。

低い灌木が茂る道を一時間ほど走って、乾き切った黄土を、なお、太陽が焼いている荒地の中の遺跡群に着く。バスを降りたとたん、太陽の輝きと熱気とに打ちのめされる。体と心をはげましはげまし、総督の宮殿、尼僧院、魔法使いの神殿を回る。

魔法使いの神殿は、六十度はあるだろう急角度の階段の上に雨の神チャックが祭られている。尼僧院で出会ったメキシコの婦人グループのひとりに聞いてみた「登ったことがありますか」「ええ、ずっと若い頃に一度ネ、でも、コワイわヨ」。いつの日か、こんなセリフを吐いてみたくて挑戦する。後から駆けつけた人もいて、総勢八人

が手と足を使って登った。

八人の最年長は宮下さんだった。この時に限らない。彼女は挑戦すべきものがある時は、いつも、なんのためらいも気負いもなくやりおとした。脱帽――。

帰りがけ、メリダの考古学博物館に寄る。お土産を買うのに忙しかった夜。

■六月二十二日（日）

午前八時、チチェンイツァに向け出発。きのうと違いバスの中はメキシコの民族衣装でにぎやか。沿道の風景も違って、サイザル麻（エネケン）の農地がえんえんと続く。農地改革はまだで、みんな大地主の所有とか。途中、神馬さんの提案で、サイザル麻の製糸工場に寄る。日曜で休業していたが、ひとり留守番をしていたおじいさんが門を開けてくれた。見学を終え、帰ろうとする

われわれに、おじいさんは、黙って、高く積みあげたサイザル麻の束から、何度も何度も小さな麻糸の束を引き出しては手渡してくれる。お土産ということなのだろう。こんな、つつましいやさしさに触れたのは、ずいぶん久しぶりのような気がする。

チチェンイツァはウシュマルよりずっと



国有化が進むサイザル麻工場



グアダルーベを祭る人々

観光地らしく整備されていた。アメリカ人の観光客も多い。ここは幾代もの遺跡が重積されているとかで、カステイヨ(城)と呼ばれるピラミッドも、少なくとも三代のピラミッドが重なって建てられているという。カステイヨから十分ほど北へ歩くといけにえの泉であった。木かげで汗をぬぐい、直径六六メートルという穴のフチから、モスグリーンにとろりとよんだ水面をのぞき込んで、ため息。

休むヒマなく、カステイヨの内部に、赤いジャガーの王座とチャック・モールの像を見に入る。太陽の光からはまぬがれたが、暑さはそのまま、湿気がプラスされる。ひと一人やつと通れる狭い階段をのぼる。両側の壁も階段も湿気でヌルヌル、つかまりようがない。Tシャツもジバンもベトベトである。

すっかり汗になってしまった体中の水分を補うため、道路沿いの茶屋に入った。店の中ほどの低いタナに美しく彩色された人形が飾ってあった。グアダルーベの聖像だという。インディオの土着信仰のグアダルーベの聖像は、まるで、この店の家族の一員のように、ヨシズ張りの茶屋にしっかりと

おさまっていた。

帰り道、インディオの中流家庭を訪問する。家庭を見たいという希望の観光客が多いらしく、この家庭はそうした目的に奉仕するためのものだった。人も家も、あまりに美しく、整えられていて、向かう心をくじけさせる。ホテルに帰り着くと、野口英世の助手をつとめたという元医者のおじいさんが待ちかまえて、とうとう家に連れてゆかれる。日本政府が、名誉親善大使とかで、叙勲したとか。振り切るようにして帰ろうとしたら、通訳の人に言ったそうだ。

「オミヤゲが少ない」。オドロイタ!!

買い物に、食事に、マリアッチに、と、みなそれぞれにメリダの最後の夜を楽しんだよう。私は、夕方、スコールのあとに、同時に見て聞いた「メリダの虹」と「教会の鐘の音」の美しさを少しでも長持ちさせようと、早寝。

■六月二十三日(月)

離れがたいメリダ。何人もが「また必ず来たい」とつぶやいた。そのメリダを発つてメキシコシティに向かい、メディカルセンタリーに着いたのは午後三時。部屋が変わって



「婦人と文化」分科会での斉藤発言



「日本の婦人—過去と現在」分科会

いないかしら、となにげなく掲示板を見ると、白い紙がピンで止めてある。——「日本婦人の過去と現在」分科会、午後三時より、委員会ルーム。私たちがトリビュンで分科会を持つのか。夢みたいだ。でも夢ならさめてほしい、という気持……。

ともかくにも大任を終え、夜は夕方振りのミーティング。まず、なにより、キューバからの帰国便のメドがいまだについていないことが議題になった。ここまできたら、最悪の事態を前提に、メキシコ残留か、それともキューバ入りするか、どちらかを各人の判断で選ぶことになる。旅の計画や運営、ひいてはメンバーの個人的な行動などについてまで意見や感想が出、ミーティングは深夜に及んだ。

重い心で、ベッドに入った夜であった。

■六月二十四日（火）

キューバ大使館へいちらの望みをかけて交渉に行く人、婦人会議へ出る人、市内見学に行く人など、日程も押しつまって、あわただしく動き出した一日だった。

全員集合の午後六時までに、はつきりしたことは、予定通りに帰れるのは二人だ

け。残りの人は三日後あるいは五日後になる、ということ。

どうしても予定通りに帰りたい人が二人、残留組となる。十六人は遅れるのを覚悟でキューバに発つことに決め、それぞれ日本へ電話を入れる。日本時間では午後二時から三時という時間だった。なかなか通じない国際電話をかけていると、あらためて太平洋を越えてはるばる来ている、という思いがする。明日はもっと遠くへ行くこととしているのだ。

お世話になった阿波氏、お土産のあつせんをしてくれた木村氏と、有志が、遅い遅い夕食をとにする。

■六月二十五日（水）

午前中は、それぞれメキシコシティでしのこしたことを片づけ、十二時、いよいよホテル前を出発。さすが居残り組は心細そうに見え、バスの窓から「ガンバッテネ」「薬、持ってる」「困ったことがあったら」「〇さんに連絡するのよ」などと声が飛ぶ。年に似合わず、落ち着きはらっているヤングの面々だから、心配はないだろう、と心に言い置き、一路ハバナへ。



ハバナ、タバコ工場前の「キューバの昔と今」の展示

機内では、キューバへ親善試合に行くという若いスポーツマンやウーマンたちと一緒に、ふざけたり笑ったりの楽しい旅だった。が、ハバナ空港に着いてからホテルまでの道のりのなんて長かったこと。まず、書類が不備だとなつて、クラーがないむし暑い待ち合い室で書き直し。通関手続きに、予想通りにきびしく時間がかった。やっとバスに乗ったが、あたりは真っ暗。たまに見える明るい看板やネオンはスペイン語で書かれた革命達成の標語ばかりだ。目がようやく暗さになれて、夜空の美しい星が見えてきたと思ったら、ホテルに着いた。

われわれのホテルは「ナショナル・ホテル」だった。外人客が泊まることになっているホテルでは最も古いものだそう。窓の明りが少なく、玄関もうす暗い。コワゴワと内部に足を踏み入れたとたん、「今夜はこのホテルのナイト・クラブで夕食」と言われ、あっ気に取られる。三十分後、またも、真っ暗やみの中で、夕食。味はまあまあなのだが、何の肉やら、野菜やら、ちつとも見えない。

この人たちも国家公務員よ、という歌手

たちが舞台に出て、ショーが始まり、冷たい飲み物のダイキリが出た。なんとなく、テレビで外国のショーを見ているような感じが、ダイキリの酔いが回って、少々、緊張感もはぐれ、たのしくなってきた。

部屋に引きあげ、洗面の水もフロも海水なのに驚く。ルームメイトと「キューバでは夜遊びもできないから、ゆっくり洗濯をしましょうね」などと、洗濯物を抱えてきたというのに、ああ!!。海水のおフロに入り、海水浴へ行つて、シャワーを浴びずに寝る心持ちでベッドに入る。

■六月二十六日（木）

ゆうべ、どうしてもうまく閉めることができなかったカーテンから朝日がさし込んで、目がさめる。ハバナ港の夜明けだ。まだ、うっすらと雲のベールをかぶった太陽が海の上に顔を出したところだ。海も雲も黄色がかかったベージュ色。それが、一瞬オレンジ色に染ったと思ったら、海は青く、雲は白く、太陽はギラギラと輝き出した。夜の暗さを取り返そうとするかのようなとつともない明るさだ。

食事の前に、海に向かって大きく広い中



FMCで歓談する一行

庭に出る。樹齢をつんだヤシの木、つゆをふくんだ芝生の中の小さい黄色い花、ホテルの壁ぎわにはハイビスカスが真っ赤な花を一面につけている。花の中ほどで赤さびた砲身を見つけた。小高い丘にあって、ハバナ港を一目で見たすこの美しいホテルが砲口を海に向けていたのは、いつのことだったのだろう。

私たちはたくさんの人に会い、多くの場所を訪ねたかった。だが、ホテルを午前九時に出て、私たちが足を踏み入れ、じかにキューバの人たちと話し合うことができたのはキューバ女性連盟(FMC)とタバコ工場の二か所だけだった。タバコ工場では長沢さんが大活躍をして交流を深めたけれど、内部はなぜか撮影禁止。

私たちが見学を望んでいた保育所、小・中学校、専門学校、大学はもとより、革命広場もバスで通過するだけ。あれが放送局、新聞社、映画館、カフェテリアと指さされても、降りることはできない。理由は「あなたたちは許可を得ていないから」という。いろいろ見たが、結局、なんにも見えないのではないか、という落着かない心境なのに、きょうもまたナイト・クラブで夕

食である。ナイト・クラブ「トロピカーナ」は広大な森の中に設けられた野外ナイト・クラブで、たくさん照明が、木々の影を美しく映し出していた。ショーも、きのうのものよりずっと上等。だが、なんとなくのしみ切れない。旅が終りに近づき、心の中に整理し切れないものがたまりすぎたからだろうか、それとも、アルコールが入ると、ちょっぴりニヒルになる私のくせが出たのかな。

■六月二十七日(金)

またも、バスでぐるぐる“観光をし、午後から免税店へ。なんと物価の高かったこと。安かったのは本ぐらいのものだった。そして、なんて店員のきびしかったこと。いちいち、ドルとペソとの交換証明書に金額を書き入れ、一セントボでも足りないのと売ってくれない。思ったより、ずっと品物が高かったのだ、ほとんどの人が交換の窓口は何度も足を運んだ。

怒鳴りつけられるようにして、やっと買物をあきらめホテルへ帰る。遅い昼食後、空港へ向かう。ロビーへ集合したところへ、全員搭乗できる、との知らせが入る。「な



トリビュン会場でも民芸品を即売



急に「母親」の顔になって……

んだか強制送還される感じね」と嬉しいような、がっかりしたようなヘンな気持。ともかくにも当初の予定通り帰国となった。ハバナからベルーのリマへ向かうCコーズの四人に見送られて乗り込んだキューバ航空機は、小さなプロペラ機。これでは、二人しか乗せないとなっていたのもムリはない。ホテルで「あれ、ヘンだなあ。飛行機あったの。ボクたちもう二日も空港へ通っているのに」と言った商社マンの言葉を出す。クーラーなしの機内はムシ風呂だ。すっかり暮れたメヒコ空港に着陸。混み合うタクシー乗り場で、タクシーをやっとひろって、居残り組と荷物が待っているホテルへ。みんなヘトヘト。でも、木村さんと呼び出してお土産の追加をする人も数人。私には二十三日以来の宿題、阿波氏から話を聞いて、レポートにまとめる仕事が残っていた。助けて……。

■六月二十八日（土）

早朝七時にホテルを出る。落着いてメキシコシティにさよならを言うヒマもない。待ち合い室では、二人、三人と寄っては買物の戦果を見せ合っている。相当高価

なアクセサリーを買った人も少なくないよう。「どうしてそんな高価なものを？」と聞いたら、「子どもを見てくれた人へのおみやげよ。これぐらいしなきゃあ」「そうよ、ねえ」と合いづちつきで答えが返ってきた。そういえば、なんだか顔付や声までお母さんらしくなっている。どうやらお母さん族の「旅」はこのあたりで終わったらしい。かく言う私も、以後、歩いている時と食べている時以外は眠りっぱなしだった。眠りのうちにバンクーバー寄港、日付が変わって二十九日に、そして東京国際空港到着。みんなが荷物を手にした時は、もう午後九時に近かった。雑踏の中の流れ解散、思うように言葉が出てこない。「またね、またね」ばかりを繰り返し繰り返し言う。アディオス、国際婦人年を旅する会のメンバーたち。アディオス、旅で出会ったやさしい人たちよ。たとえば、めまぐるしい日常が、たくさんさんの時が、あなたたちの記憶を遠く頼りないものにしてしまっても、あなたたちと分け合った感動は、いつまでも新たな感動の中でよみがえり、生き続けることだろう。

アディオス、アディオス……。



はじめてのラテン・アメリカ

—— 国際婦人会議・メキシコ・

キューバで考えた女の暮し——

青木やよひ

1 国際婦人会議をどうとらえるか

開催地がメキシコでなかったら、また「あごろ」旅の会のスケジュールにキューバ行きが入っていなかったら、多分私は、国際婦人会議なるものに参加することはしなかっただろうと思う。

しかしそれは、私が女性問題に関心がうすいからでも、女たちの集りを過小評価するからでもない。世界のさまざまな地域の女たちがいまどういふ情況にいるのか、それに対してどういふ具体的な運動がなされているのかということは、たとえどんな手段によっても知りたいことだった。だが、国連主催の政府代表による本会議はもとより、民間レベルの「トリビューン」にしても、私のように外国語が不得手で事前に情報も入手していない人間がいきなり参加したとしてどれだけの成果が得られるのか、およそ知れているように私には思われた。

だいたい公的な会議というものには、事前にとりきめ

られた計画を、手続き上、正当化するという儀式的側面がどうしてもつきまとう。だから平穩無事に終わるよりもむしろ紛糾した場合の方が、この本質が明らかにあって興味深いことが多い。だが、どちらにしても、言葉がわからなければ面白いどころの話ではない。

それに私は、そもそも国連という存在自体に、ある種の重要さは認めながらも、それほど信頼を置いていない。過去においてそれが、大同士の覇権争いの場になったこともあるし、ベトナム戦争や中東紛争などの際にその無力をさらけ出したのを見てきたからでもある。人口問題や女性問題にとり組む姿勢にもおのずから限界があるのは当然だし、それ以上に私には、ある底意のようなものが感じられてならなかった。

去年ルーマニアのブカレストで世界人口会議が開かれ、今年はメキシコで国際婦人会議が持たれる。それはけっして偶然の結果ではないのではないか。日本も含めて先進国とよばれる国々はいま、アジア・アフリカなどのいわゆる発展途上国の人口増加を好ましく思っていない。かつては低賃金（あるいは無償）労働力の宝庫であったものが、ナショナリズムの上げ潮と世界的な資源枯渇の危機感から、いまや重荷になりはじめたのだ。へ世界の食糧倉庫」といわれているアメリカなどにしてみれば、切実な問題でもあらう。

だが、これまで先進国に一方的に労働力や資源を供給してきた発展途上国とよばれる第三世界の人々にとって



は、これこそ先進国の身勝手としか映らない。「先進国が自分たちの子どもに食糧や高い生活水準を確保するために、われわれに人口制限を強制し、現在の経済的不均衡を固定化しようともくろんでいる」という声があがるのも当然のことなのである。

たとえば、インド人の血と汗でまかなわれた棉花やゴムなしに大英帝国の繁栄はありえなかったのだし、アメリカ黒人の大量の略奪なしにアメリカの今日は考えられないのだ。そのために植民地化された第三世界は、固有の経済機構と文化を破壊され、人的資源を奪われ、数百年にわたって塗炭の苦しみをなめたばかりか、独立後のいまもその傷から立ち直ることができないでいる。

日本の場合は、一九四五年の敗戦によって、かつての植民地である朝鮮半島と台湾を放棄したけれども、その後は東南アジア全般を相手に、安い資源を輸入し、それをもとに作った工業製品を一方的に売りつけるという仕方です。これはまぎれもなく植民地型経済の押しつけであり、日本の経済侵略であると受けとめている。私たちがいま、食べあきるほどの食糧に恵まれ、使い捨ててほどの日用品にかこまれているのは、単なる自分たちの勤勉の結果ではなく、東南アジアの人々の犠牲に支えられているといっても過言ではないのだ。

いわゆる先進国（北）と発展途上国（南）とのこうしたかわり、いわゆる南北問題をぬきには、いまはなにこ

とも語ることはできない。去年の夏、ブカレストの世界人口会議が第三世界の攻勢で大荒れに荒れたのも、それが原因である。アメリカ人一人当たりが生活するための食糧と資源で、第三世界の人々なら何十人も生きられるというのに、世界の富を独占している側が、食糧や資源が不足しそうだからお前たちの人口を増やすな、とよびかけてもそれは通らない、ということなのである。そしてあの時も今回と同様に、「会議に政治的対立が持ちこまれた」と新聞は非難めいて報道したけれども、それだけでは、この本質を伝えてはいない。私たちにとしては、どんな場合にも、その裏にある歴史的事実と今日の状況をしっかりとつかんでいなくてはならないのだ。

ところで女性解放という問題は、その線上でどう位置づけられるのだろうか。先進国では、その近代化の歩みと並行して、女にも男なみの権利と社会的地位を、という権利拡張型の婦人運動がずっと続いてきた。だがここ数年來、たとえばアメリカやフランスや日本でおこっている女性運動の新しい波は、それとは別の動因を持っている。それは、文明社会が行きついた末生まれたあらゆる矛盾、公害や環境破壊や人間疎外を自分の問題としてひきうけるがゆえに、それらを結果した男の価値観を否定して、よりラディカルな論理を求めるところから出発した。だから、男なみになることをむしろ拒否するのだ。この動きは、第三世界のナショナリズムとある点で見合いながら、世界をゆさぶる一つのエネルギーになる



うとしている。

その一方では、第三世界において女性はその多くがまだ文盲であり、女性解放どころか、飢えと病氣と多産に苦しんでいる。貧困と多産とは相互につながっていて、けっしてどちらかを先に解決することはできないのだが、多産がなくれば貧困もなくなると考える人が、先進国の中には多い。いずれにしても、人口抑制は世界の大勢にとって焦眉の急務と考えられており、そのためには女性を教育して、せめて避妊知識の普及が可能な程度に意識をひきあげなければならぬ。そして、多産から解放されたあまつた女性のエネルギーを「社会の発展」のために利用できるなら、これは一石二鳥ではないか。むしろ人口抑制を摩擦なく行なうには、女性の解放を表にかかげるしか目下のところ方法がないのである。

私は、去年の人口会議を（もちろん報道を通して）注目してつくづくそう思ったのだが、しかしこの情況は女性自身にとってもけっしてマイナスではない。大切なことは、この情況を体制側に有利にからめとられることなく、女性側が自らの手で有利な方向につかみとることである。私が去年、毎日新聞の懸賞論文などに応募した動機もそこにあるのだが、今年の国際婦人年に対する私の立場もほぼ同様である。

国際婦人年もメキシコの婦人会議も、多分一般のマスコミは一場のお祭りとして報道し、客よせに利用するだけだろう。しかし、世論喚起という点ではそれだけでも

大変な利点がある。メキシコで提案されるはずの「世界行動計画」も、しよせん国連という枠の中で決められたのだし、基本的には先進国型婦人解放で私の立場とはちがうけれども、具体的な行動目標の中には、女性差別にもとづく社会通念の変革を迫るような有益なものがたくさんある。たとえば、家庭内の男女の役割の再検討とか、未婚の母の身分保障とかマスコミの体質改善などが提唱されている。それをいかに有利に役立てるかは、むしろ会議後の私たちの行動に、私たちの力量いかんにかかっているのだと私は考えていた。

それなら、メキシコへの魅力やキューバへの好奇心にひかれて、国際会議なるものを見ておくのも悪くないと、ついでに北米のアリゾナに回ってインディアン少女との旧交をあたためようと、大変欲ばったけしからぬ了見で、私は旅への出発を決めたのだった。

2 メキシコの二つの顔

私ははじめて具体的なメキシコに触れたのは、リベラやシケイロスやタマヨなどの絵画作品によってだった。もう十五年ほど昔のことだが、日本でメキシコ展が催されたとき、西洋絵画にはないそれらの一種泥くさい迫力とスケールの大きさに私は強烈な印象を受けていた。

そしてそこに描かれていた白いソンブレロの男や大きな肩かけをまとった女たちが、いずれも革命をになった民衆であるということが、月日を経るにつれて大きな



意味を持ちはじめていた。

だが一方には、一九六八年のオリンピック大会のとき、大会に反対してデモをおこした学生たちの群れに軍隊が発砲して(彼らには反対する十分な理由があったのだ)、広場を流血にそめた恐るべきメキシコがある。この二つがどこでどう結びついているのか、私には理解ができなかった。辞書をひいてみると、メキシコは共和国で議会制民主主義をとっており、大統領は直接選挙制だが強大な権限を持っている。外交的には西側諸国と共同歩調をとっているが、独自性も保存しており、キューバやソヴィエトとも国交を持つラテン・アメリカでは珍しい国だという。なるほど、それで私たちはメキシコからキューバへ直行便で入れるのだな、と私は妙なところで感心した。

まあひとつ、行ってみて見ようではないか。

私たちが空港からチャーター・バスで案内されたのは、デル・プラドという市内にあるかなり大きなホテルだった。国際会議の関係者は、このホテルとマリア・イザベルというホテルの二つにはほとんど分宿の形になったらしく、おかげで私は、東京にいるよりも頻繁に、顔見知りの新聞社関係の人たちに会った。この正面入口から、トリビューンの会場であるセントロ・メディコ(医療会館)まで無料の送迎バスが出ている。

バスの窓から見る街は雑多な活気にみちていてニューヨークや東京に似ている。東京とちがうのは、表通りが

整然として広く、あちこちに記念像などが建っており、また数ブロックごとに必ずといってよいほど公園が多いことだった、それに裏通りの民家はまさにスペイン風で、土の壁が一軒ごとにちがう色で塗られていたりする。大人も子どもも話はすべてスペイン語だが、これは単に言葉だけのことでないようだ。風俗や文化や氣質が英語圏とはかなりちがう。第一このあたりの人は、ホテルのフロント係でもバスの運転手でも、白人とも有色人種ともつかぬ微妙な肌の色と顔立ちをしている。もともとこのアメリカ大陸に住んでいたのは私たちと同種のモンゴロイド系の有色人種で、中南米ではインディオとよばれ、北米ではインディアンと(いずれも間違つて)よばれている人々だ。これが中南米では、十六世紀以来侵略者としてやってきたスペイン人と混血して独特の人種が生まれた。この事情はメキシコだけでなく、キューバでもその他のラテン・アメリカでも同じだから、行ってみると、あらためてスペイン文化圏の大きさを実感する。

それに人種的に、たとえばキューバなどには黒人もかなり多いから、ここで完全な人種混交が実現されると、遠い将来に世界中の人間が混血したとき人類がどうなるかというモデルが、いちちはやく出現するかもしれない。その意味でも中南米は新しい未来の大陸であり、現在でも先進国と第三世界の接点として興味深い地域といえるだろう。

またこれもメキシコだけのことではないらしいが、ス



ペイン語でよく使われる言葉に「アスタマニャーナ」というのがあると聞いた。厄介なことを持ちこまれば「また明日」ということになるし、きちんとした計画を要求されれば「明日のことなんかわからない」といった具合だ。こうした一種楽天的なルーズさが社会の上から下までを支配しているから、このあたりの人々を相手に厳密な予定を立てたり、時間ぎめの交渉をしようとしてもそれは無理というものらしい。こういう気風は、刻苦精勵型のプロテスタント圏では想像できないから、もととあった南国的な陽気さに、カトリック気質が結びついたものかもしれない。そうだとすれば、これもまたスペイン文化の遺産というべきなのだろうか。

しかし、メキシコ市に住んでいる日本人の中には、この街をよく言わない人もいる。南国風のロマンチズムなどとは見かけだけで、一皮むけば人々は計算高くてぎすぎすしており、物を置き忘れたらけっして出てこないという。物価は高く、排気ガスは世界有数であり、交通事故には、気をつけるようにと、私たちはなんども忠告された。なるほど、車の数は多いのに交通信号は少なく、道路は人よりも車優先である。つまり、こうした点では東京に大変よく似ている。考えてみれば両方とも、国をあげて近代化に邁進する国の首都であり、その象徴なのである。だがメキシコの場合、地方に行けば様子はまだかなりちがうようだ。

メキシコ市で私たち女がもっとも心をゆさぶられたの

は、街のあちこちで見かけた物乞いする女たちの姿ではなかったかと思う。その人たちは、昔私たちが日本で見たようなひどい身なりはしていない。たとえばある古い有名なカトリック寺院を訪ねたとき、入口の石段にうずくまっていた老婆たちを、私ははじめそれと気づかなかった。通りかかる私たちの前に、そのひからびた手がひしゃくのようにさし出されたとき、私ははっと胸をつかれた。気をつけていると、大通りを少し入った辻々にヴェールをまとったこうした女たちの姿をたびたび見かけるようになった。赤ん坊をそばに寝かせて道路に座っている若い女もあった。

東南アジアやインドに行けばそんな光景は珍しくないのかもしれない。「ほら見ろ、おまえたち日本の女は恵まれてるのだ」という声も聞こえてくるような気がする。しかし、一方ではニューヨークなみの高層ビルが立ち並び、エリート女性の中には月一万ペソ(約二五万円)も収入のある人があり、最高裁に女性判事が二人もいるというこの国で、しかもいま国際婦人会議が開かれているというときに、両者の対照を考えると、ことはそれほど単純ではないし、私たちの思いもまた複雑である。メキシコの持つ二つの顔が、ここでもまた私たちに、解きたい大きな疑問を投げかけてくるのだ。

私たちはまた、マヤ文明の遺跡をたずねて、ユカタン半島の小さな古い町メリダに滞在した。いずれもそこから車で一時間半ばかりのところにあるウシュマルとチチ



エン・イツァという、石造りの巨大な神殿群を見るためである。マヤ文明は紀元前から十世紀前後まで栄え、それ以後なぜか急速におとろえたらしいが、その子孫たちが、いまインディオとよばれている土着の人々である。

遺跡に向かってフルスピードで走るバスの窓から、延々とつづく雑木林と荒野のあいまに、私は度々それらしい部落を見かけた。草ぶきの屋根と土の壁、時には壁も草ぶきのことがある。日本の田舎で見かける農家の納屋のような感じといえはいだらうか。時々その戸口で、それこそ生まれたまま、布切れ一つ身につけていないはだしの子どもたちが、私たちのバスを見送っていたりする。遺跡の近くでみやげものやコーラなど売っている家も、やはり同じ作りである。そしてどの家でも、壁面や卓上の一面に仏壇のようなスペースがあつて、そこに極彩色のマリア像がかざつてあるのが目につく。これは十六世紀のスペイン征服以降のことにはちがいないが、しかしこの人たちのカトリック信仰というのは土着宗教とまじりあつていて、独特のマリア崇拜になつていているという。

メキシコ市から飛行機で三時間、メリダの街からさらに車で一時間以上入ったこのあたりは、交通機関もなく電気も入っていない。だが、メキシコ北部の砂漠地帯とちがつて雨量が多く、日本の初夏のように緑が豊かである。都市文明とはとんど隔絶されたところで、人々は自然と調和しながら昔ながらの生活を営んでいる。

この人たちの生活を、牧歌的だと賛美するのは旅行者

の軽率だらうし、電気も水道もなくはだしだからと憐れむのも、同様に都会人の傲慢というものだらう。まず私たちに必要なことは、人間にはさまざまな暮しぶりがあるのだという、素直な実感なのではないかと思う。

私はこの旅行で、合衆国東部、メキシコ市、ユカタン半島、キューバ、合衆国西部、アリゾナのホビ・リザベインションと、体制や風土や文化のさまざまに異なる地方を転々として、いまその思いをいっそう深くしている。

3、国際会議で私たちに何が言えるのか

週末の休みを利用して、私たちがユカタン半島の旅行から帰つてくると、トリビューンは騒然たる様相を見せていた。本会議に民間レベルの意見が反映されていないのはけしからぬと、アメリカ最大の女性解放運動団体である「ナウ」のリーダー、ベティ・フリーダマンがメンバーを集めて、「世界行動計画案」の練り直しをやつて事務局につきつけるのだというし、各国の参加者たちは外国記者団にそれぞれアピールなどを出して、自国の事情をPRしたりしている。「日本の女は二〇〇人も参加しているというのに、何もしないで帰るつもりか」と、私など海外在住の活動的な日本女性やラディカルな女性記者の友人たちからつき上げられる。

じつはナウの集りにも出てみたのだが、言葉ができてなくてなんの役にも立たなかつたという陰的一幕などもあつて、私たちとしてはできるだけのことは試みたのだが、



自分たちの非力と準備不足を身にしみてさとらされたというのが今度の旅の実状である。いったん国際交流の渦の中に入ると、「私はただ見学に來ただけ」などという態度ではすまされなくなる。たとえ自分のお金と自分の時間をやっとなりくりして、出て来るのが精一杯だったとしても、そこでは「日本女性の代表」として見られてしまう。さらにそれ以上に、いやおうなしに経済大国である「日本人の代表」として。

だが、先進国の経済搾取を告発する第三世界と、国際舞台をリードしなれている先進諸国のあいだで自分たちの場を設定するなどということは、そう器用にやれるものではない。これは、国際社会での日本の立場の微妙さをそのまま反映しているのだから、そのことに気づかず、またそのことを無視して、大国意識をふりまわして他国に教訓を与えようなどとすれば、その方がずっと問題ではないのか。私としては、自らの加害性に対する具体的な解決の方法を打ち出さないかぎり、女性の解放も第三世界との連帯も説得力がなくなるということを肝に銘じたことを、この会議での大きな収穫の一つと思っている。

もちろん私たちとて、これまで自分たちをひたすら被害者だと考えていたわけではない。女性差別に敏感な女たちは、ほとんど同様に日本の経済的加害性に気づいていた女たちでもあったと思う。現にキーセン観光に反対したり、公害企業の海外進出を阻止する運動、あるいは

沖繩の問題にとり組んでいる人々もある。

しかし逆説的なようだが、こういう運動に多くの女たちが参加できるような情況であれば、女性解放運動をやる必要もないのだ。三食昼寝つきなどと羨望をこめてヤユされる専業主婦にしても、継続的な外出はおろか一日家を空ける自由すらない。内職に忙殺される主婦にいたっては、まさに彼女ら自身が、いまだに一日三〇〇円という驚くべき例もあるほど、低賃金で労働力を搾取されている。一方、職場で目ざめた女性たちも、結婚すれば仕事と家事のやりくりで全エネルギーをすりへらしているのが現状である。

しかも、夫や自分の勤め先が海外進出企業や公害企業であったり、内職でまわってくるのが輸出用のトランジスター・ラジオの部品であったりすれば、そのこと自体日本の経済侵略機構の一端に組みこまれ、それを担う役割を果たすことになる。被害者でありながら同時に加害者であることをまぬがれない。また、輸出にも公害にも関係ない仕事で男性なみの収入をえる有能な女性であったとしても、家事をはぶくために外で食事をとり、男性なみに煙草や酒をたしなみ、あらゆる電化製品をそろえて、着るものは使い捨てという生活をしたがら、一方で第三世界の女たちとの連帯を説いたとすれば、これまた大いなる矛盾といわなければならない。

私たちは誰でも、ここにあげたような矛盾のいずれかを、多かれ少なかれひきずっている。私自身けっして例



外ではない。ふだんはそれが、日常的な情性の中に姿をかくしているだけなのだ。だが、旅に出ると、まして開発途上国の人々の生きざまをつきつけられると、己れの矛盾がのど元までつきあげてくる。

こうした場合、男たちなら言うだろう——「食うために、そんなこと気にしちゃいけないよ。なにしろおれたちの両腕には、妻子がぶら下っているんだからな」と。それが、競争社会で働き蜂として生きぬくための男の存在理由であり、男性優位社会の基本原理でもある。だから、かなりもののわかった男性でも、女の職業や仕事を男のそれより軽く見るのが普通である。

しかしだからと言って、女性が前述のような矛盾を無視して、男の三倍も五倍も頑張って、行政府の高官になったり、大企業の管理職になったとしてどうなるのだろうか。もちろんそこで、行政や企業の体質を変えるような実績をあげれば別だが、そうでなければ、頑張れば頑張るほど、現にあるこの社会の仕組みを補強することになってしまう。男に負けまいとするあまり、有能な女はど体制の価値観を先どりし、その職場の利益に奉仕するからだ。これは私の、二〇年の職業生活からの実感でもある。

では、以上のような状況をふまえて、このメキシコで私たちは世界の人々に向かって何が言えるのだろうか。朝な夕な考えているうちに、日本というのは比較的短期間に西欧型近代化をなしたと珍らしい社会であり、私たちがいま当面している問題は、政府代表たちの考えとは

逆の意味で、つまりマイナスのモデルとして、近代化をすすめている第三世界の人々に役立つのではないか、当面これしか私たちに訴えるべきことがないと思うようになった。

それを結論的にいえば、第一に、経済的独立と社会的進出を目標とするこれまでの西欧型婦人運動が、果して人間の解放まで含む真の女性の解放になりうるかどうかということである。「平等」といっても、現在の社会の在り方をそのまま認めた上での平等は疑問である。

二番目には、社会が進歩発展すれば女性の地位は向上する、という定説への疑いである。いま世界の大大勢になっている工業化・都市化による社会の近代化は、公害や資源の枯渇をもたらすと共に、能力や資力や体力による人間の格差を増大するという作用を必然的に内包している。この型の社会は、健康で人なみの知力を有する成人男子を標準にすべてが組織されているから、この規格に合わない者は当然おちこぼれて行くのである。女もその生む性を切り捨てるか、あるいは個人の責任においてそれを解決する者だけが社会に登用される。だから「発展」という言葉の中味が問題である。

三番目に、近代化に成功したはずの日本に、最近になって、なぜ女性問題が顕在化したかといえば、それは建前と実態とのギャップが一つの頂点に達したからである。敗戦を契機に実現した新憲法では、多分先進国にも例を見ないほどの完全な人権の自由と男女の平等がうた



われている。しかし女性であるがゆえの人権の制限と、賃金その他もろもろの男性との格差は先進国の中でもっともひどい部類に入るだろう。女子社員の若年定年制や、平均賃金が男子の五〇%などという例は、白人社会では理解されないものである。しかもこれが、必ずしも日本社会のおくれを意味するのではなく、むしろ日本経済の発展の要因の一つになっているところが、私たちの情況の特殊性でもあらうか。

なぜかといえば、若い労働力を低賃金で二、三年で使い捨て、母性こそ女性の生き甲斐として一定期間子生み子育てに自己負担で従事させ、それが終ると企業が必要に応じて、内職やパートのような安い賃金で再び狩り出すという女性のライフ・サイクル・パターンの利用が、日本経済の安全弁としてどれだけ役立ってきたかわからないからである。これなしにはGNPの飛躍的な伸びも、長期安定政策もありえなかったにちがいない。そして不況になった現在では、「家庭に帰れ」のムードを再び打ち出して、まっ先に女性を職場から締め出している。

以上のようなことを、私はメキシコで急に持つことになった分科会——「日本女性——過去と現在」で、「あごろ」の斎藤さんをサポートしながらとりとめもなくしゃべった。しかしその分科会の会場には、私たちがほんとうに話しあいたかったアジア・アフリカの女性たちの姿は見えなかった。六月二三日、キューバに出かける前のことであった。

4 キューバの社会主義

キューバという国は、私たちにとって一種表現しがたい魅力を持っていた。「あごろ」旅行団のよびかけに応じた人々の中には、そのような思いを抱いていた人が少なからずあったようだ。私自身もその一人だった。その魅力とはなんだったのだろう。

ヒューバーマンやスウィージーが描いた社会主義の神話が、私たちの世代に与えた影響は大きい。しかしそれだけであつたなら、ソヴィエト型社会主義への幻滅と共にキューバの魅力も色あせたかもしれない。キューバの魅力は、むしろソヴィエトを批判しながら、いなソヴィエトに批判的であつたからこそキューバ革命を高く評価したライト・ミルズの先駆的な視点を、あらためて私たちに思いおこさせる。それは単純化して言ってしまうと、形式ばらない、官僚主義的でない新しい社会主義の実現と、リゴリズムに陥らない、官能の解放までも含んだ人間の解放をめざす若々しい社会の誕生への期待であつたろうか。いずれにせよ、どこかにユートピアを求めずにはいられない人間の弱さや、日本人特有の海外信仰も多分にまじっていたかもしれない。

だが一方、キューバ入りに前後して私たちが聞いた情報は、それに水をかけるようなものばかりだった。メキシコ在住の日本人の中には、なぜかキューバをよく言わない人が多いようだ。



「どういうつもりで皆さんキューバにいらっしゃるのかしりませんが、あそこに行ったら十分注意された方がいいですよ。うっかりするとスパイ容疑で投獄ですからね。帰国できなくなりますよ」——さてはソルジェニツ

インの「収容所列島」の中南米版かと、私たちは思わず緊張した。ホテルに入って部屋のカーテンをめぐってごらんさない、必ずこちらを見ている人間がいますからとか、メイドが客の荷物を検査するのは日常茶飯事だとか、写真は許可された以外は絶対にとるなとか、勝手にあちこち歩きまわってはいけなとか、そのたぐいのことはたくさん聞いた。その上、キューバはちょうど日本の昭和二〇年代、つまり敗戦直後の状態と同じだという。電気は暗く、紙不足だからトイレット・ペーパーは仙花紙と思えばまちがいない。娯楽設備は乏しく、レストランなどはまず見当らないだろうという。

しかし、それより何より私たちを戸惑わせたのは、たった三日間の滞在予定であるのに、ハバナに着いてもまだ帰りの飛行機の手配がとれないことであった。帰りがいつになるかは飛行機の便まかせなのだ。そのためキューバ入りをあきらめてメキシコに止まった人もあったが、残りの私たちはそれこそ「アスタマニャーナ」の心境でメキシコ空港をとり立った。

キューバで、といってもハバナ市内だけだが、私たちが見せてもらったのは、キューバ婦人連合の代表者との会見とタバコ工場の見学をのぞけば、ハトバスで東京見

物をしたのとそれほどが違ってはいないかもしれない。しかしそれでも、直接目にし、肌に触れてきたものの意味は大変大きかったと私は思っている。

キューバに着いてまっさきに私たちが驚かされたのは、「夕食をどうぞこちらで」と案内されたところが、なんとナイトクラブだったことである。淡谷のり子や三橋美智也そっくりの歌手たち（どういうわけか中年の人が多い）がきらびやかな衣裳で入れ代わり立ち代わり登場するのを観賞していると、ビール、コンソメ、肉料理、サラダなどが次々に運ばれる。それも、映画で見えるような年とった上品な給仕人がうやうやしく持ってきてくれるのである。あたりはほの暗く、テーブルの上にともしられた照明がロマンチックなムードをただよわせる。

はじめて訪れた外国人に、キューバにはこういうゆとりがあるのですよ、と見せるつもりだな、カストロさんもなかなかやるではないか、と私は、デザートのカクテルをなめなめ思っていた。ところが、翌日はもっと豪華なナイトクラブで食事することになった。ホテルの大庭園にイルミネーションにかざられたステージがしつらえられ、何百人分ものテーブルがそれを囲んでいる。現われた美女が相手の男と寸劇をやりながら、ぱつとスカートをめくってパンティの裾からメモをとり出すといったきわどい場面まであって、ナイトクラブなど生まれてはじめてというわがルームメイトを面くらわせた。宮本顯治さんやコスイギンさんが見たら目をむくのではない



かと、私は声をあげて笑いたくなった。だが、これこそがまさしくキューバの社会主義というもののなのである。

ここは、植民地時代からある一流のナイトクラブだが、昔はアメリカ人の金持ちだけしか入れなかったし、マフィアの巢窟でもあったという。いまは私たちのような外国人ばかりでなく、誰でも自由に楽しむことができる。とくに地方の人が新婚旅行などに利用する例が多いとガイドさんが説明してくれた。料金は、食事やショウも含めて、日本金で二五〇〇円ぐらいらしい。

夜は暗いが、昼間見るとハバナの町はまことに美しい。スペイン時代の古い町なみとアメリカ人の保養地として発展した別荘地区に別れているが、後者はいまほとんどそのまま学校や保育園や病院などに使われている。面白いことに、古い町にある十六世紀以来の教会などがメキシコ以上によく手入れされていることだった。ここでは宗教の自由が認められていて、カトリック、プロテスタントと、それぞれの神学校もあり、回教徒も拝火教徒もいるとか。なるほど、人種が多様だから従ってそういうことになるのだろう。ここには、メキシコにくらべて黒人が多いように思う。人種差別がなく、医療費と教育費が無料で、居住費は収入の一〇%でよいというのだから、特権を持たない人にとっては一つの理想社会であるにちがいない。

私たちのガイドを勤めてくれたのも、テレサさんという黒人女性だった。きびきびとした魅力のある人で、誰

かが、セニョリータ（ミス）かセニョーラ（ミセス）かと聞いたときは、カンパニョーラ（同志）とよんで下さいとニコリと答えた。だがあとで親しくなつてから、既婚で三四歳だと聞いてみんなびっくりしたものだ。彼女はかつて舞踏学校に学んだことがあり、さまざまな可能性をためしたあぐく、いま外国語学校の学生であるという。英語ができるため、アルバイトとして私たちのガイド兼通訳についた。もっと外国語を勉強して、将来はいろいろな国に旅行してみたいというのが彼女の夢である。

キューバにおける女性の就業率は二五%だというから、アメリカや日本（いずれも三五%以上）にくらべるとまだ低い。だが、たった十六年まえまでは、ラテン・アメリカに共通のマチズモ（伊達男主義）に毒されて、日本の明治時代にも似た男性上位社会だったのだから、そう急に理想に近づくわけにはいかないだろう。女性問題はまだまださまざまな面に残っているようで、新しい家族法なども、先進国とは逆に、家族という枠を強固にすることで女性の人権を男性なみにひきあげることを主眼にしている。

男と女の関係は、人間の心の奥深くに根を張った意識に左右されるから、革命をやったからといって急に変わるものではないのだろう。だが、テレサさんの例のように、三十半ばの既婚女性がいまだに勉強をつづけ、将来に目標を持つことができるというのは、この国の女性の未来



に明るさを感じさせられる。日本で問題になりはじめている生涯教育ということが、キューバではすでに実現しているのだ。

一般にキューバでは、女性と子供の教育に力を入れているように見える。立派な建物はそのほとんどが教育施設で、芸術学校の建物のように、それ自体が一つの芸術のような例もあった。町に張ってあるポスターなどもそれを裏づけるかのように、見事な色彩感にあふれていた。けっきょくのところ私たちは、尾行されることも、恐ろしい目にも不便な目にも会わず、スケジュール通りのお客として帰ってきたわけだが、気になったことがまったくなかったわけではない。その第一は小売店というものをほとんど見かけなかったことである。街で見る人々の服装はさまざまで、けっして衣料や履物が欠乏しているという感じではなかったが、買物はどうなっているのだろう。スペイン時代の古い街を見学しているとき、子どもたちが寄ってきてくれるのはうれしかったのだが、胸にさしていたボールペンがほしいといわれて、ここでも心痛む思いをした。

それでも、子どもたちの表情は大変面白い。しかし、これは私だけの印象かもしれないが、空港の職員やホテルの従業員の表情はそれほど開放的であったようには思えない。どこか用心深い人たちといった趣きがあるのだ。周囲を反革命勢力にとりまかれた国の人々として外国人に接するのだから、多分それも無理からぬことだろう。

し、革命と反革命をくり返し味わってきた人々としては、そうなるのも当然かもしれない。

偶然に帰りの飛行機で、キューバから亡命するところだというカリフォルニア出身の白人の老人と隣り同士になった。その人とブロークンな英語で話しあいながら、人は立場のちがいでこんなにもものがちがって見えるものかと私は改めて感じさせられた。現状の評価にはさまざまあるだろう。だから多分その社会の目安となるのは、未来にどれほどの可能性があるかということにかかってくるのかもしれない。

5 豊かさとは何か

メキシコ市で、東京に帰る「あごら」旅行団のみなさんと別れ、途中亭主とおちあつたのち、合衆国西部とホビ・インディアン部落で三週間ほどすごして、私は東京に帰り着いた。羽田空港から自宅にもどるあいだに、早くも頭痛がしてのどが痛くなりはじめた。アリゾナの高地の空気で「清浄栽培」されてきたために、排気ガスに敏感になってしまったらしい。

それでも三日ほどすると旧に復して、せいぜい目がチカチカする程度になる。「慣れ」といおうか「耐性」といおうか。しかしこれは、考えようによっては恐ろしいことである。おまけに外に出れば食物は添加物だらけで、私はメキシコやキューバにいたときよりも食事に気をつかう。向こうの料理は日本人の口に合わないとか、下痢が



止まらないとか聞いていたのだけれど、一日一回梅干しをなめ、生水をのまないことにしていたせいか、私も同室の宮下さんも一度も胃腸をこわさずにすんだ。アメリカの都市に入りパーティで夕食をごちそうになった途端、大きなジンマシンが両腕にできた。どうも私は「文明的な」食物が性に合わないらしい。

しかし、だいたい食品添加物などというものは、食べる側の人間の必要からではなく、大量生産・大量消費をめざす経済システムを成り立たせるために生じたものなのだ。お豆腐やさんがその日に作ったものを近所の人が買っているだけでは、資本主義社会は「発展」しない。まして、ランプの下で自家製の豆を石臼でひいていたリすれば、それは恐るべき「後進性」の烙印を押される。

しかし、貧困のまじめさというものは、亡くなったアメリカの社会学者オスカー・ルイスもいったように、つねに相対的なものである。みんなが電気製品を持っていなければ、あるいは持っても持たなくても自由であるのならば、それがなくても別にまじめではない。逆に電気製品がすべて揃っていようと、車がないためにひどくまじめな思いをする場合もある。都市に住むアメリカ黒人たちのまじめさはその種類だろう。事実、アメリカ南部アトランタの黒人低所得層の人々は、東京郊外の私たちよりもずっとよい環境に住んでいる。だから、生活水準という一つの物差しではかっただけでは、じっさいにそこで暮している人の幸・不幸はわからないのだ。

私たちは、なにかキラキラしていればそれが社会の繁栄であり豊かさであると思いきまされていたのではない。つぎつぎと新しいものが出てくればそれが発展であり、進歩であると信じて、見さかぬとびついで行つたのではないか。そのような現代社会の「豊かさ」や「便利さ」は、しかしその代償としてかけがえのないものを私たちから奪って行つたのだ。それは環境としての自然であり、私たちの内なる自然らしさである。

いまのように、知らず知らず際限もない欲望の刺激に私たちが追い立てられて行くとしたら、自分が生きていくというしみじみした充足感すら失なうて行くのではないだろうか。その悪循環をどこかで断ち切って、人間が生きて行くのに何がほんとうに必要かを、立ち止まって考えてみたい。そうでなかったら、なん度革命をやっても人は幸せにはなれないし、社会の「発展」は差別感を増大させるだけだろう。

第三世界とほんとうに連帯するためには、「貧しい」あの人々に「同情」して、体制に対して政治的パワーになるだけでは足りないのではないか。もちろんそれは必要だし、多くの人々がそのための行動に立ち上る努力をすべきだが、それと同時に、第三世界の人々が本来持っていたはずの別の生き方に対等の尊敬を払い、それを奪いかつさまたげているものの罪を私たち自身が反省しなくてはならないだろう。

私たちがたべている食肉のもとである家畜の飼料は、



そのほとんどをアメリカからの輸入穀類でまかなっている。日本が輸入しなければ、飢えた第三世界の人々の口に入るものなのだ。一方で高蛋白の食事は日本人の体質に必ずしも必要でないという医学的データが出ているとき、なおさらその矛盾を感じないではいられない。

だが逆にいえば、生活の場を持つ女は、デモに行かれなくても、マンネリ化した日常生活の中の何か一つでも変えてみることで、たとえば有害食品は買わない、合成洗剤は使わない、という身近かな実践にふみ切ること、つぎつぎと新しい展望がひらけてくる可能性がある。そしてそれによってこの社会の仕組みがその本質的な構造まで見えてきたとき、女を差別している構造がなんであるか、そしてそれが第三世界への経済搾取とどこでつながっているかもおのずと明らかになるだろう。

そんな低次元のことでなに変革か、と笑う向きもあるかもしれない。しかし、この社会の「便利さ」の中にどっぷりひたつて御高説を垂れている観念的な男たちの生き方よりも、たとえどんなにささやかであっても、日常性の変革をめざす女たちの生き方の方が未来につながっているとは私は思う。だからこそ、女たちの中に仲間をつくることで、新しい明日をさぐり出したいと、私はいま切実に願っている。

(一九七五・八・二三)

(評論家)

日常の私、

非日常の旅

宮下喜代

旅の誘惑、カリブ海

「十三日間の旅程でメキシコとキューバへゆく」私の状況から言えば一大決心が要ることでした。留守にする間をどうしたらよいのか？

亭主と従業員のK君と私と三人で小さな自転車屋を営んでいます。夏。ポーナスの季節。つまり自転車売れる時期です。三人がフルに動いて毎日の仕事をさばいてゆく。私が抜ける十三日間を二人でどうするか？

費用はまあなんとかありました。私は専従者給料をとって、その上ケチに徹しています。つまりへそくりが役に立ちます。

なんとかして都合をつけたい十三日間の時の向こうにひげのカストロさんがみえ、ヘミングウェイの「老人と海」の青いカリブ海がみえる。

「あのねえ、メキシコへゆかないか、ってさそれたんだけど……」

「メキシコ？ なにしに？」



「国際婦人年の会議、それからキューバへゆく。アメリカの鼻の先のキューバ、社会主義でしょう、どんなだろう、いつてみたいなあ、つておもってるの」

「ふうん」

可とも不可とも亭主はいません。

とにかく申込みました。説明会がある。

「メキシコの話、聞いてくるわ」

「聞いてくるだけじゃなくさ、いってよ、いきたくないだろ。店のことはなんとかするさ、三〇年も一緒にいてもあんたになんにもしてあげられなかったからね」

しめた、作戦らしからぬ作戦は成功。

メキシコからハバナへのフライトの予約がとれないそうだから、入国しても帰りの便があてがえないらしいとか、いう情報をうける度に申込の取消しを考えながら、おそらくは私の生涯にただ一度の機会になるにちがいないこの旅を失いたくない、とかなり情熱的になっている自分を見出していました。

のりこんだヒョーキが羽田を離陸したとき、「ゆくんだな」という実感がひろがり、「これで後悔しないですむな」と思ったものです。

メンバーの中で一番若い藤井さんがすてきな「らん」の花束をもっていました。旅立ちに「もらっちゃったの」うれしそうです。彼女にそして私たちみんなに祝福あれ。

ヒョーキ、空をとぶ

——高度一万メートル。時速約千キロ。羽田—サンフランシスコ間、約九時間。窓の外の美しい時間でした。深い群青の空の高さ、清浄な白さの雲の海の果てしなさ。いつか少しづつ少しづつ夜の陰影をこめて来る大気の中の夕陽、やがて闇の海に沈む一瞬の光りのきらめき、光芒をひく水平線、そして深い闇の夜。

サンフランシスコ

地球儀をみると太平洋のまんなかあたりに日付変更線というのがひいてあります。どんなことかな、とおもっていました。

六月十七日の十七時に羽田を出発したのにサンフランシスコへつくのが同じ十七日の午前十時、つまり夜は三時間もあつたのかどうか？

海辺の冷たく強い風で皮膚が目ざめました。空港の中のホテルに荷をおいてバスで出かけます。

ふり仰ぐほどに長い高い坂、おとぎ話めいた電車が走る。ケープルカーがある。ケープルカーにはちよつとぶらさがつてののがカッコいいのだとか……。清潔で上品な家族ばかりが住んでいそうな高級住宅街。広い街路。土地がたっぷりあるんだなあ、という感じ。

公園、ゴールデンゲートブリッジ、数年前インディアナがたてこもったアラカトラス島が見える。ひとごみを感じたのはもとイタリア系の漁師の町だったというフィッシャーマンの市場の界限でお店と屋台がぎっしり並ん



だアーケードの下を観光客、町のひとと大勢ぶらぶらしています。私たちがも屋台でゆでたカニを買って歩きながら食べました。

バスは街のなかに私たちをおろしてゆきました。"チャイナタウンにゆきましょう"

縦横正確に整った街、十字路に立つと遠くに海が見えます。中国風の装飾のウインド、聯を入口の両側につけた銀行、長老教会とか中華学校とかが町なみの商店とおなじような屋根棟で並んでいる。古びた中国料理の看板。何かかげのある六月のチャイナタウンは詩になりそうです。雑貨屋か食料品店か、箱に果物を盛りあげて通りに並べてある店でグレップフルーツを買いました。五個で一ドル、一個六十円、"本場ものね"とにつっこりしましたが安いのも嬉しかったのです。ある飯店で実だくさんの野菜わんたんとをたべました。店先で子どもが三、四人、ドアをあけたりしめたりして遊んでいます。赤ちゃんをだいたおばあさんが戸口に立って子どもたちをみています。東京でも町はずれならよく見かける光景です。この店のウエイトレスはおそらくここのおかみさんらしい人で、会計にチップを添えたら、しわの深い茶色の顔をくしゃくしゃという感じにして笑ってサンキューといいました。そんなことを覚えてるのはキューバ以外の所ではサービスに必ずチップを添える、それがその職業で生活している人たちの当然の収入として期待されているのだから、と聞いていました。そのせいかごく普通の表情

でうけとられます。使いたれない外国の小銭を気にして持つて歩き、この場合チップを出すべきか、出さざるべきか、ここが思案のしどころなどと考えるのは少ししんどいことでした。

シスコ到着。うちへ早速ハガキを書きました。切手は十八セント、自動販売機は二十五セントのコインを入れるようになっています。しかし切手は出てきてもおつりは出てきません。おつりの分は自動販売機のリース料だ、との話です。ホテルのフロントなら十八セントは十八セントです。人手を省くための機械は手数料をとり、人手が扱うのはただ、というのはおかしいな、人手にこそ手数料を払うべきでしょうに……。

メキシコシティ

ウエスタン航空はサンフランシスコからロスアンゼルスを通してメキシコシティにつきます。上空から見るアメリカの大地はよく耕された肥沃な土地のように見えました。

入国のチェック。税関の検査、ホールは人でごった返し、外に出ると広場はどこもおなじの駅前風景で自動車出入りとコーラの大看板です。バスにのる、と窓の傍に束ねた段ボールがみえました。それはゆっくりと動いて人波の中をゆきます。後から見てもはつきりと老婆が背負っているとわかりました。東京の街のごみ置場にすてられているのと同じ段ボールを束ねて背負ってゆく老



婆がいる。

この現実のメヒコで国際婦人年の集會が開かれる。女が人間として生きること、貧しい人が人間らしく生きられること、それはおなじ基礎の上で考えられなければならない問題だ。世界中の女のひとたちがそのことについてどう考えているのか？ それをわかることができるだろうか？

空港から街へ整った道路を快適に走るバス。

メヒコは活動力にみちたざわめきのなかに高層建築の立ちならぶ近代都市の姿です。

私はメキシコの歴史をほとんど知らないままでここにやってきました。だからせめて目に見えるものだけでもよく見たいとおもう。そして目に見えるものがここには実にたくさんあるようだ。「観光じゃない、国際婦人年のトリビューンにゆくんのだ」と固まっていた気持ちがどこかでくずれてゆく。それは初めての外国の街の異国情緒というようなものだけでない別のなかが私を刺激してくるからだ。

人間がその創世から幾世代もの間を生きついできたその生命と、風土に培われてきた豊かさやたしかなさ。そのありようを私はほどなく、ウシュマルやチチェン・イツアの遺跡に立つて感じとる。原住民インディオの創造力が近代都市メヒコの文化の形のなかにもヴァイタルに息づいている。アステカ文明の遺跡をもつ三文化広場。国立人類学歴史博物館を初めとする数多い博物館、美術館、

絵画館、そして教会、宮殿、街の家、レフォルマ通りの角々に立つ記念碑の数々、その街路の両側に向い合って立ち並ぶ独立のために戦った人たちのたくさんの胸像、チャプルテペック公園の造型。この国がその過去の歴史に積み重ねてきた土壌は厚い層をなしていることが感じられるのだ、この街はその歴史を守ろうとしているようだ。

このような文化に根づいてメキシコの未来が開かれるとしたらその豊饒燦爛はどのようなものだろう。

メヒコ、街のひと

人間が生活している街にはいつも裏側で黙って生きている人たちがいる。繁華街のきらびやかな照明の下で石だたみに座ってのひらをうえにむけてさし出している母親と、そのひざの上の子どもはなんとやせさらばえてはそい手をしていることか？ どのようにしてこの人たちの前を通りすぎることができるか、一枚のコインをおいて私のところがおちつくのだったらどんなにかやさしいことか、一枚のコインは私のためのひらのなかで、はじいり、かなしみ、くるしみ、よわさ、言い表わせないたくさんのもののかたまりのようになってにぎりしめられる。とうとう私はそれをさし出せなかった。

トリビューンの会場。セントロ・メディコの前庭に参加者たちが集會を終えて出てくる。陽の傾く夕ぐれ、新聞の束をわきにかかえている少年はきのうの夕方もそう



だったように、きょうも黙って立っている。ただ黙って立っているだけだ。一ペソを渡して夕刊をうけとったときあの小学生にしか見えない少年はなぜあんなにとまどった表情をして私をみたのだろう。

チャプルテペック公園まで歩いたときはのどがかわいていた。公園の広場の隅でその少女は小さな板切れの上にキャンディ、ガム、ナッツなどを並べていた。傍のバケツの水にコーラがひたしてある。そのコーラを買った少女は栓ぬきをもっていなかった。彼女は一心に板の角に口金のはしをあててとうとうそれをあけてくれた。コーラの代金の他にもう一枚のコインをおいたとき、彼女は台の上からとりあげて私の手のひらに返してよこした。キラキラとかがやいた少女の瞳、その浅黒い顔を私はいまもおぼえている。

バスは止まっていた。信号まちのようだった。少しはなれて街のバスも止まっている。そのバスの窓にきっちり髪をつかねたつましい感じの老婦人の顔がみえた。私と同じくらいの年齢かなとおもえた。何かやさしい瞳をしてこっちを見ている。私はうれしくあいさつを送りたい気持ちになった。頭をかしげておじぎをした。柔和な微笑が返ってきた。バスが動き出す。手をあげて私はさよならを送った。向うの窓にもそっと手が動いた。

メヒコの街、ひそかな喜びを私は胸にしまう。

ある地平線

メリダには夢幻の空気が漂っている。アラビアンナイトを読んだあのような感じがする。それはユカタン半島をおおっている古代文明の影なのかもしれない。果てしない草原を走って遺跡にゆくとき、この草原こそ、マヤからアステカにつづく長い文明の原動力であって、その力がウシュマルやチチェン・イツァの遺跡に形として残っているのではないかという感じがした。広大な土地、その生物、その気象、それを支配しそれを活用する知恵をもたなければおそろくここで人間はその生存をつづけることができなかったのではないか。

壮大なピラミッド、神殿を築いた叡智と能力が長い歴史にインディオの持続する生命力としてはたつきつづけてきた。やがてそれは民族の独立への意志と力となる。遺跡に立つ。目のかぎりのほらかな地平線。ここはいま切りはなされたひとつの場所。築かれた石に歴史はふりつまった。それはなお巨大になる。そしていま動いている現実はこの場所の外側を通して流れてゆく。

人間がこの地上にいとまできたことのすべてはなんのためなのだろう。まばゆくきらめく蒼穹の高さ、このピラミッド、この神殿、この積みあげられた石、石の下に咲く小さな花々、むれとぶ蝶、情念でもあり虚無でもあるようなものの間に立ちつくすはかない思いが私を包む。

カトリック、その伝統



メリダの街の日曜の朝。きれいなひだのある服をきた少女が二人歩いてくる。「日曜日のミサに教会に行ってきたよね」青木さんが言う。メリダでもメヒコでもカトリック教会のドアはいつも開いていた。ミサは毎日行なわれる、と案内のひとは説明した。カトリックの信仰は人々の間にかく保たれているようだ。街の中心部、村の広場、どこにも壮麗な、大きな会堂がある。会堂のとなりの広場に回転木馬のあそび場があったりする。日常生活に浸みとおっているカトリックの教義は私などの思い及ばぬ深さがあるのだろう。ちょうど日本の在来仏教がいまなおぬきがたい習俗として残っているように……。

メリダの虹

メリダの街の夕べ、はげしい雨があった。雨のあとの街、冷たくさわやかな風のなか、アラビアの物語りの絵にありそうな石づくりの家のなみのつづく道を歩いた。

「ミヤンタサン、ミヤンタサン」川上さんの澄んだ声が私を呼んだ。

「虹よ、虹が出てる、ほうら、みえるでしょ、あそこ」、川上さんの指の先。青い夕空にまぼろしのような七色が石の屋根の上に弧をえがいていた。ああ、なんと久しくあのように美しいものをみなかったことだろう。短いひとときをすごしたメリダの街のそれはシンボリックな光彩だった。

トリビュン

メリダからメヒコの空港に戻り、バスはそのままトリビュンの会場に私たちを運んだ。

ロビイの掲示板でどの分科会に出ようか、と見ていたら「あらア大変」ということになった。二十日に斎藤さんが事務局に提出した、「ジャバニーズ・ウイミン」のレポートによる分科会が設置されてルームナンバーもきまっている。「あごろ」の主だったメンバーの人たちは急に忙しそうになる。私にはできることがなんにもない。とにかくその会場にいて席に坐っている。出入りする人たちを横目でみたりなんかしながら、何か「おもしろいんだな」と感じるものもある。国際会議というような集会にはもちろん運営のルールがあるだろう。それによって会議はすめられているにちがいない。

——提出されたレポートは分科会の討議に値する。場所も用意した。あとはそちらでやるべきだ——ということらしい。——そうなりましたよ——という連絡をレポートの提出者に対して送るということはいらない。そういう運営の方法なのだ、ということもこちら側の誰もが知らないでいる。もっとも日本からいくつものグループがこの会議に参加してきているグループ間のごく事務的な連絡、情報すら何もないようすでもあった。よその国ではどうなっているのかなあ、もしかするとどこも似たりよったりということかもしれない。そうい



う婦人運動の状況だからこそ国際婦人年が企画された理由もあるかもしれない。私はちょっと皮肉な目をしてそんなことを考えていた。

しかし、もひとつ別の経験が私にあった。

私はもっぱら人をみていた。言葉をしゃべれないのだからほかに方法がない。議場のなか、発言者のみぶり、きいている人の表情。そこにはほんとにあざやかな応答があった。ロビー、会場の前庭、そこでゆきあった人たちの誰もがちゃんとその人でいてしかもその精神はしなやかにはずんでいる。そんな感じだった。かがやくほどの黒い肌の人もすきとおるような白皙の人も、珍しい髪かたち、アクセサリー、衣裳、ゆきかう姿にそれぞれの民族の個性があり容貌がありスタイルがある。みんなちがっている。ちがっているからこそおなじようにたしかに存在している。

この人たちが自分にかかわるものとしてそれぞれの場所から問題をもってここへ集まってきた。それはやがてお互いの共通の問題点を見出すことになるだろう。

国際婦人年を政府レベルの会議はもろんのこと、トリビュンにも私はあまり期待はもたずにいた。しかしそれは私の不遜だったようだ。「あごら」のピラをまきながら私はそのことを考えた。こうして手渡す一枚の小さなピラがどこかの誰かと私たちを結ぶかもしれない。世界中からきている人たちがここでさまざまな形でふれあいつながりをもつだろう。

つながりは交差して知らない同士、知っている同士をさらに網の目のようにつなげるだろう。ひとりひとりの女たちがめいめいの手に誰かの手とのつながりをもつ。それはお互いの手のはたらき、その息づかいを知りあうことだろう。そのときお互いのまなざしは励ましを送りあうだろう。

高い所でえらばれた人たちが問題提起をし状況の分析をすることはもちろん必要なのだ。しかし女たちが日常の中でその意識をより新しいひらかれた明日にむけて変えてゆくことができるのは手をふれあっている友だち同士のお互いのはたらきかけなのだ。その当然のことを私は気づいた。そのたしかさがこの旅に加わって、トリビュンにきたことで私のものになった。

ハバナ、ナショナルホテル

「まあ、行ってみればおわかりだとおもいますがね、戦後の日本とおなじようだ、とおもえばよいでしょう」
キューバへ入国する前にメキシコのガイドはそう言った。何かあざけりの口調にきこえた。メヒコの空港から再びメリダを通して、メキシカーナはハバナを目指してとど。

あこがれのカリブ海もメキシコ湾の海も機上からはみわけられない。海の底までが見えるのではないかとおもわれるほど蒼く深い海はきれいに果しなくひろがっていた。



ハバナの空港はすでに日が暮れていた。乗り心地のよいバスがまっていた。灯のついている家々がみえたり、夜の散歩をたのしんでいるらしい人たちがこのバスを見送ったりしていた。ホテルの部屋はひろいスペースがあつてさっぱりしている。

すぐに夕食になるという。それが華やかなナイトクラブでの食事だった。ステージがある。バンドの演奏、うた、おどり、テーブルには次々と料理がはこばれて来る。生まれて初めて社会主義の国にきて、初めての食事がナイトクラブとは……。大体がマジメ人間でコチコチしている私はこころの幅がせまい。ナイトクラブなどという所へは近寄ったこともない。ここだつてもし誰かが「今夜はナイトクラブで食事をしないか？」などと誘つたのだとしたら多分、いやよ、と言つただろう。そんなこととは知らずにいたのだ。でもここには私が何か毛ぎらいしていたような頹廢のふんいきはなかった。歌い手も踊り手も媚びている感じがなかった。まじめな日常のなかで時にこんなたのしさがある、それもいいな、そんな気がした。

「見ると聞くとはおおいにちがっていましたねえ」。青木さんの言葉は私にも実感だった。部屋に帰つて顔を洗つたら舌の先にしょっぱい味がした。海の水らしいな。朝、さかんな鳥の声に目をさました。窓から海がみえる。朝の食堂も海にむかつて開いている。海から来るおおい軽い風。庭の赤い花のそばで写真をうつしてあげる、と

藤井さんが言う、ステキな写真ができそうだ。

キューバの新しさ

ハバナの街は明るい。緑に埋もれている。火炎樹の真赤な花のさかりでも少しも暑苦しさを感じないのは端正に整つた街路のせいだけだろうか。メヒコのようにここにもスペインやフランス文化の反映が城塞や教会や劇場や街の家々にまで見出せる。そしてかつてはアメリカの富裕な人々にとつての歓楽郷だったころの海沿いのホテルやたくさんの近代的な施設がある。それはいまはキューバ、その国の人々のものになっている。

七月にはこの海辺でカーニバルがあるそう。海辺に沿つた道にはえんえんとそのための設備がつくられていた。ハバナの港、ハバナの海、そこにキューバの大勢の人々のたのしい宴が開かれる。想像するだけでもそれはたのしいことにちがいないとおもわせた。

バスは街を走る。「北ベトナム大使館です」。ガイドのテレサさんが指す。北ベトナムにこの国の人たちがよせる心情には力がこめられているようだ。キューバ婦人連盟にはホー・チ・ミンの大きな肖像があつた。

住宅街に学校がたくさんある。ということは住宅の一軒一軒が数多くの部屋と広い庭をもっていることだ。そういう住宅を保育園や小学校、中学校にしている。いかめしく学校という形の建物の中でひとまとめにしないと教育ができない、などという固定した考えをこの国のひ



とはしないらしい。

子どもたちはにぎやかにあそんでいる。バスをみて手をふったり、道へ出てきたりする。学年の中で一番大事なテストの時期だというので学校の中へ入れなかったのは残念だった。国立芸術学校、国立医学校、など構内が広くて学生が勉強している場所はどこにあるのか、と思わせるほど……。入学すると家族と一緒に住める家もこの構内にあるそうなので、すべての教育と医療についての費用は無料ということも徹底している。

ガイドのテレサさんを私は女子大学生とおもっていた。浅黒い肌がひきしまっていて美しい。三十四歳ときいてびっくりした。私たちの質問を彼女は率直にうけて答える。カストロが革命の行動をおこしたときハイスクールの生徒だった。田園中学でも学んだ。ファクトリーで六年間、労働しながら学んだ。ダンススクールでバレエを習いテアトルで踊っていたこともある。カルチャーセンターで秘書もした。ピース島でロシア語を教えていた彼と結婚した。姉はハバナで美容師をしている。彼女は英語をよく話し、日本にもゆきたい、と言った。

キューバでは五歳で小学校に入学、六年で卒業、中学は三年、技術、農業、士官、看護婦など各種の学校がある。士官学校を出てもシビリアンの道に進める。予備大学三年、さらに四―六年の大学。都市学校は通学制で田園学校は働きながら学ぶ。国立芸術学校の生徒は卒業後三年間学校にのこって後進の指導に当たる。国立医学校

にはアフリカ諸国からの留学生が多い。労働者の家賃は収入の一〇%、光熱費は自分が持ち、年間に一か月の休暇がとれる、旅行をゆつくりたのしむ人が多い。――私たちが知りたい、とおもうようなことの要点をつかんでテキパキと話すテレサさんは歌もうたつてきかせてくれる。キューバが社会主義の国としてどんな未来を築くのか、私にとって未知であるけれども彼女のように革命後の新しい教育のなかで育った人たちがこの国の中堅となつてゆくのだ、と想像すればおおよその見当はつく。キューバは新しい、と感じさせるものがこのひとにあふれている。コンパニエーラ・テレサ。――キューバはあたたちの国だ。

煙草工場、カルメン幻想

煙草工場の見学です。工場街らしい労働者のいろや匂いが通りを流れています。壁新聞というよりはやっぱりポスター、働く人のつよさのみなざるタッチがあざやかです。

ハバナの煙草は有名です。国営の大工場とっていますでしたが案外でした。東京にも同じ程度の規模の工場はたくさんありそうです。ただハバナには二十七か所とかの煙草工場があるとのこと。煙草をつくる作業そのものに若い人がついてこないのは、このような労働は年配の女の人、男の人の熟練や体力にふさわしいからではないかとおもいました。



しなやかなタバコの葉をひろげて芯をとりその葉を重ねてくると指先でまく。ここは葉巻煙草をつくるのでした。木型にはさんでおさえる。タバコの葉にはきつと味や香りのちがう種類があるのでしよう。まきかたもかたいのやゆるめのや、太さ細さのちがいもありそうにおもえます。木型をはずして長さをそろえて切る。まないたのような厚い木の台。短かく幅広く角が大きなまるみをもっている包丁、それはうすい刃先のするどいみごとな切れ味です。作業場の中央あたり壁にそって小さいステージがあります。いい体格の男性がよくひびく声でうたっていました。歌の節にあわせて作業をしている人たちがいっせいにその包丁をねかせて木の台をたたきます。硬質の木の乾いたひびきはみごとにそろったリズムをうちました。そのひとときカルメンのハバネラのリズムがひそかに私の胸でうちならされたようでした。

歌をあわせるよろこびに乗って作業をすすめる……。

ああして生産をあげさせるのかも知れない、とは誰しも考えるところでしょう。でも働いているひとたちの表情がいきいきしているのですから、よそのものがゆがんだ観察をする必要はない、と思いました。自分でまいた葉巻に火をつけてゆっくりとふかしている人がいます。製品を箱につめる仕事をしていた女の人はきれいなシールをたくさんくれました。ロメオとジュリエットというこのシールを貼った葉巻の箱はホテルのロビーでも売っていました。

この工場ではたらいっている人たちをみて、社会主義の国——生産——ノルマ——管理というようにゆるみのない支配機構にとりかこまれている図式はだいいぶちがつていようだなと感じました。この工場は隅から隅まで整理、整頓というようにみえませんが。製品や包装資材らしいものがそちこちにつみあげられている間をくねって歩きました。作業を「こうやってやるんだ」というようにやっているところを見せようとするひとがいたり、私たちをみて笑いかけたりするひとが大勢いました。ラテンアメリカの人たちは親しみぶかく快活です。

何かが加えられた旅

旅の終りは羽田からのったタクシーでした。どうやら雲助タクシー、人をおびやかすような話し方なので気味がわるく口実をつくって途中でおりました。

メヒコではしゃべれない私がひとりで街に出て帰りはホテルの名だけ告げてタクシーにのりました。「街に出たらくるまに気をつけて下さい。東京とちがって轢かれ損、死に損をかくごしてもらわないと……」とガイドに聞いていたのですが……。年配の運転手が何か話しかけてきますがよくわかりません。二度三度くりかえしているのをきくとどうやら国際婦人年で来たのか？と言っているようです。うなずいて、シー（そうだ）といいましたらニコニコして何かつぶやいていました。

よその国の街ではタクシーにのって安心してゐるのに、



自分の国（こういう言い方もなんとなく変ですが……）ではビクビクしている。腹の立つことだし、奇妙なことです。

帰ってすぐに「やっぱり日本がいちばんいいでしょう」と言った人がいて、あっ！とおもいました。そんなことを全然考えなかったからです。「外国にいる」としよっちゅう意識しないでいられたのは親しい人たちといつも一緒だったこと、旅程が短かったことなどの条件があったと同時に、それ以上に、旅をしているうちに日本や東京というようにいちいち比較することなしに、メヒコはメヒコ、ハバナはハバナ、そこを見ていたからだろうとおもいます。

「どう？われわれがそこへ行って、その国でくらせると思った？」とわが亭主はききました。「そうねえ、自転車屋みたいなこと簡単な技術だけど、人の日常に役に立てる働きとしてもってゆけるんだから、くらせるとおもわ」。

そういうことはあり得ないことだからという前提があるわけですが、「とてもだめよ」という返事が私の口から出なかったことでいささか自信をもちました。可能性の範囲を広げて考えることができる。つまり今までは日本とか東京とか、はめこまれた場所だけ見たり考えたりしていた。もちろん地上のただ一点に動かずにいる情報はあるゆる形でうけとれる。だから大切なことはな

それが旅のように自分のからだを全然別の場所に移してみると、皮膚に感じてくるもの、ふれてくるものが、活字や他人の声や他の映像の目とは少しちがうものがある。それは外に向かって異を立てるとか、別の見方を否定するとかいうことではなくて、私の視点として自分のなかにしずめて貯えられるものになる。これからの私の時間のなかでそれはどんな形で動き、働くか、あるいは深くしずめられるままになるか、はかりがたいことですけれども……。新しく加えられたなにか、を私は自分のなかに住まわせておこう、とおもいます。（商業）

メキシコ見聞記

犀川千代子

この旅に参加した動機は、世界婦人会議の見聞というより、メキシコ・キューバを旅してみたい、というごく単純なものだった。にもかかわらずトリビュンに参加して、さまざまな意味で感動し、自分なりにその成果は大きかったと思っている。しかし会議の情況や感想については多くの方々が書いて下さっているのここでは触れない。以下は、会議の外で見聞したことについて、思いつくままにまとめてみたものである。



一、メキシコの印象

サンフランシスコからメキシコシティに着いたとき、白人、黒人、その中間色人さまさまな人々が行きかち、目が合うと笑いかけたり言葉をかけ合ったりした。整然としてはいるけど、あまり人をみかけなかったサンフランシスコと比べて、ここには人間が生活している実感がある、と、古めかしうす汚れた建物の並びまでうれしく感じられた。第一人々の顔や姿が中米なのにアジア的で日本人にとってもよく似ている。

ところがホテルに向かうバスが信号で停まったとき、窓辺に手をさし出して寄って来たみずばらしい老女をみてはっとした。みると後からはだしの子どももついてくる。シティ中央にある国営の立派なホテルを一步外に出ると、路上には肩かけにくんだ赤ん坊をしつかり抱いて物乞いしているインディオの母親、幼児と一緒に小さな銀細工を並べて座っている物売りの女、食堂に入れば、昼夜をとわず幼い子どもたちが物ほしそうに周囲をうろつく。はじめて見る「貧困」という言葉の実体にわたしたちはただ驚き、たじろいだ。

この旅の目的が個人的にはキューバにあったことと、急にきまったので予備知識を得る時間もなく、メキシコについてのイメージといえど大きな帽子のソンブレロ、カラーフィルムの広告のようなくっきりと青い空、といったくらいのことだった。

まずびつくりしたのは、市内に車が多いことで、排気ガスで空も空気もきかない。交通規制もあってなきが如く、クラクションはやかましく歩行者は逃げるように駆け足で横断してゆく。その上、昼食に自宅に帰る習慣があつて朝昼夕と一日三回ラッシュが起きる。会議の合間をみて町の中をあちこちでできるだけまわってみたが、何よりも交通事故に合わないようにならなければならなかった。

市内の建物は、十六、十七、十八世紀につくられたそれぞれの年代の特徴をもつスペイン風のものがほとんどで、壊して新しい建物を建てることはいろいろ制限されているというわけで、近代的なホテルのビルなどがかつて不調和に目立っている。

トラテロコという場所にある、現代建築の団地内の広場に、アステカ帝国時代の神殿跡とスペイン植民地時代の教会があつて、三つの時代の特徴を反映してみごとな調和をかもしていることで有名な三文化広場にも行った。この広場で、一九六八年、メキシコ・オリンピックの開催に反対して集会を開いた学生、労働者、知識人が、突然襲った軍隊に無差別に何万人もの人が虐殺されたという話をきいて身の毛がよだつ。当時、厳重な報道管制がしかれたため、どこにも知らされなかったけれど、最近国内の目撃証人やジャーナリストたちによってこの事件の記録が書きはじめられているという。また、あるとき乗ったバスと偶然に平行して走っていた護送車をみた。



コンテナのような四角い箱の中に相当数の人間がつめこまれ、ひしめき合っているようすが、小さい格子つきの窓からでもうかがわれた。ひき逃げや、殺人が、仮に発覚しても警官にいくら握らねばすむ、という相場があるそうだ。人権感覚の低さというか、この国の短絡的な一面をみた思いがする。これは中南米という気候風土によるばかりではなく、義務教育が中学から専門化している、一般教養をつける期間が短いためである、と現地の若い日本人学生は指摘していたが。

ちょうど、メキシコ大学がスト中のため、小中学校もスト休みというわけで（メキシコでは学校の先生はほとんどメキシコ大学の統治下にある）、街にはいたるところで子どもたちの姿が目についた。どの子も人なつこくとてもかわい。幼い頃を想い出すリリアン編みなどをして遊んでいる。このストは、賃上げのほかに、個人を自由に解雇できないようにするために数人単位で雇傭する、という集団契約制度を要求しているもので、もう一か月くらい続いているが、いつ解決するものかわからないという。恐れ入った話であるが、メキシコではストは年中あって、一、二か月続くのはさらに、その間、労働者は他に働きに出たりしてのんびり続けているらしい。住宅は、チャペルテペック公園周辺のブルーつき超高級住宅から近代的ビルの団地までは上の部類で、下はレンガを積みあげただけの簡単なものからインディオのわら小屋までさまざまである。その上と下の差は著しく大

きく、平均子ども十人という国を考えれば、下層階級の住いの狭さは想像も及ばない。

物価騰貴も相当のものらしく、ホテル代やちょっとしたレストランの食事の高いのには驚いた。日本円にして四万円から七万円ぐらいが勤労者の給料ときいて、いったいどうして生活ができるのか不思議に思った。しかしマリマッテ広場のごみごみした飲食街や、市内の市場を歩いてみて、ここでは安い食物がいろいろ豊富にあることを知った。また、ガス、水道、電気、義務教育費、医療費等は安く、年金制度も充実しているので貯金をする必要もない、という。タクシーは東京より高いのに（といっても交渉によりきまる幅も広いのではつきりはしないけれど）、バスや地下鉄はべらぼうに安い。

今、メキシコは他のラテン・アメリカ諸国の先頭に立って、アメリカの経済支配から脱却するために、産業の工業化、国有化を実現して経済的発展をとげようと国民にかけ声をかけて努力している。チチェン・イツァに向かうバスの両側には、果しなく広い平原が広がっていた。ほとんど大地主の所有地である。政府はこの地主たちに融資して、たとえばこの平原に栽培されている竜舌蘭の葉からエネケンという麻のように強い繊維を作る産業を機械化させ、いずれ国有化する予定だという。そのひとつである真新しい製糸工場を見学した。機械自体は素人が見ても簡単な感じのものであるが、とにかく広大な土地と資源を内蔵する国のことである、いずれりっぱな近代



的工場に發展することであろう。しかし、發展と開發の道が、先進国と同じ方向を目指しているとしたら不安に思わずにはいられない。経済優先主義と工業万能主義というものが、いかに人の精神と肉体をむしばみ、人間の根源的な生活を破壊するものであるか、わたしたちは毎日の生活の中で体験しているからである。

二、メキシコの女たち

メキシコの女性について語るとき、「マツチズモ」という言葉をよく耳にした。伊達男主義というか、とにかく男らしさを誇示する意味である。「マツチズモ」の伝統習慣が強く根づいていて、男は、結婚するまでは物すごくやさしいけれど、一度結婚すると妻の全人格を独占し、生活費を毎日少しずつ渡すだけで家の中に閉じこめておく。女は強い男への憧れが強く、無知でかわいい女に育てられる。ほんのわずかの率（男性の二割弱）で大学に行かれる恵まれた女性でも、学者や専門職につく人はごく稀れで、しあわせな結婚を夢みている、ときいた。メキシコ女性ぐらゐ貞操觀念の強い女はいない、とメキシコ女性と婚約中の日本人の若い学者が言っていたが、これもやはり「マツチズモ」によるものであろう。日本の亭主関白とよく似ているが、「マツチズモ」はスペイン統治三百年の間につちかわれた歴史的に根強い社会通念のようである。

こんな社会だからウーマンリブなど根づくはずはな

い。しかし、最近この国でも目覚めた女性の中から「マツチズモノ」つまりマツチズモ追放運動が盛んで、政府もこれが社会の發展にいろいろと大きな弊害となっているので「マツチヨであることをやめましょう」とマスコミを通じて呼びかけているそうである。

しかし、マツチズモの反面、メキシコの女は、「ガドルーベ」という独特のマリア信仰によるものか、実にたくましい面をもっている。男が別の女をつくって家を出ても、女は必ず自力で一家を支え子を育てる。カトリックの国だから離婚はできないけれど、別居、蒸発は日常茶飯のできごとらしい。また、いわゆる未婚の母が非常に多い。残された妻や女は、経済的にたちゆかなくなると街に出て、物売りか、女中、売春婦になるしか道はない。そんなことをしても子どもは手離さない。自殺は最大の罪悪という信仰心からか、この国では、母子心中、なんて考えられない、という。インディオの小屋をのぞいたとき、どの家にも、薄暗い一角にマリアとおくるみにつつまれた赤ん坊の人形を祀ってある祭壇がおかれてあったのが印象的だった。いなかのどんな小さな部落にも教会は必ずあるし、入ってみて二、三の教会の中では、特に婦人たちがベールをかむって熱心に祈禱している姿をみてこの国の信仰心の厚さ思った。

メキシコ市では、売春は法律上禁じられている。にもかかわらず市内にいるその数は万単位といわれる。観光収入が六〇%といわれるこの国にとって、売春禁止は全



く建前だけのようである。夕方、街中を歩くと街角に立つそれらしい女性、わたしにもわかる。

また、メキシコの中産階級にとって家に女中をおくことは、車を持つことと並んでひとつのステータスシンボルといわれる。たいていの家は、少々無理をしても女中を雇う。女中は時間制で通勤する例もあるが、多くは地方から出て来た十二歳ぐらいからの貧しい少女で、主人は、学校に通わせてまる抱えで使う。その給料は、一万二千円から二万円ぐらいという。トリビューン分科会において、メキシコ女性がこの問題をとりあげて、「女中を使う女に女の解放を主張する資格はない」と発言していたが、会場のかんりの女性にとって痛烈だったはずである。

カトリックの国なので、避妊も中絶も許されない。特に農村では、女は十五歳ぐらいから平均十人の子を産み（育つのはせいぜい三人ぐらい）、平均寿命は四〇歳以下という。都会でも聞いた範囲の人だけでも、五、六人の子持ちが多い。政府は人口制限政策をとっていて、子どもを三人以上持つと税金が高くなることになっている。

しかし避妊衛生サックが一ドル半もするのでは、貧しい女にとって避妊はやはり縁遠い。政府のこの人口対策に對して、メキシコ女性解放運動の組織は鋭い批判をしているときいた。わたしも、トリビューン会場の廊下で、この組織の人らしいメキシコ女性に英語で話しかけられたことがある。この世界会議と人口問題について熱心に

説明し、こちらの意見を求められた。その趣旨は、いったい誰の利益のための人口制限なのか、なぜ女だけが協力しなければならぬのか、後進国にとって人は労働力として財産であるのに、先進国の食糧が減らないように自分たちに産むな、とは、といったものである。わたしは、あなたのいわんとすることはよくわかる、しかし人口問題はむずかしい、と言ってその場は逃れたけれど、いまだに考えさせられている問題である。

三、メキシコ最高裁判所を訪問して

世界会議出席のほかに中南米の司法制度視察という役割ももって来られている先輩弁護士で参議院議員の佐々木静子氏から誘われて、二十三日の午前、メキシコ連邦最高裁判所を訪問する機会を得た。狭い通りに商店が並んでいるメキシコシティの中心にある最高裁判所は、これが、思うくらい古めかしい四角い建物で、周囲の建物と比して特に権威的な感じは全くしない。さすが玄関ロビーに張りめぐらされた壁画はみごとである。

ここでわたしたちは、二人の女性裁判官に面会してお互いの国の司法制度や婦人の地位について約一時間懇談した。メキシコの司法制度はアメリカのそれによく似ていて、大学の法学部出身者は弁護士資格があり、その中から各州選挙によって州裁判所の判事が選ばれる。任期は州によって異なるが一年から四年ぐらいである。最高裁判事は各州の弁護士または判事の中から大統領が任命



し上院が承認する。任期は終身で、七五歳以上になれば任意に辞めることもできる。長官は一年の任期で最高裁判事の互選でできる。再選は可能であるが長官をやめても最高裁判事の資格はある。大法院は長官を含めて二一名の判事で構成され、労働、行政、民事、刑事の四部門に五名ずつ分れて小法院を構成している。ほかに五名の予備判事がある。最高裁の主な仕事は、州（メキシコは三十一州から成る連邦国家である）の法律の合憲審査（もちろん具体的事件についてである）で、違憲判断は過半数の賛成でよく出されるという。

二人の女性判事のうち、先輩のマリア・クリステイ・サルモラン女史は、一九三八年から弁護士、その後労働調整部機関の長官を経て、一九六一年、つまり十四年前に大統領に任命されて最高裁判事になった女性第一号である。メキシコでも女性が最高裁に入るのは大変困難なことで、十四年後の今年になっても一人のリビエル・アヤラ女史が任命されてようやく女性判事が二人になった。彼女は、連邦裁判所判事から最高裁判所調査官を経て最高裁に入った人で、法律の合憲審査部門を専門に担当しているという。司法界で女性が仕事をやりにくいということは全くなく、婦人弁護士は数えきれないくらい大勢いるし、裁判官も二割以上を女性がしめているという。お二人ともきりッとした感じで、話好きらしく、複雑なメキシコの司法制度の体系をわれわれに理解させようとして手ぶりよろしく懸命に説明して下さった。特に

古参のマリア女史の小柄な身体に地味なセンスの服飾がよく似合っとても若々しく感じられた。

法院を見て下さい、と案内された。はじめに入った小法院は、わが国のそれよりずっと狭い室で、傍聴席から一段高い位置に左右に二人ずつ中央に一人黒い法服をつけた人物が座り、真中の机の前で一人の平服の男が書類を読上げていた。当然中央が裁判官、左右が検事と弁護士、真中の男は証人か鑑定人と想像した。それにしてもコーヒーを飲みながら中には廷吏にコーヒールのお代わりを注文するなどしながら時々鋭い質問も発しているようであるけど、わが国の法院のような厳肅さがちょっと足りない。そう思いつつ廊下に出て案内してくれた現地弁護士のハビエル氏に質問したところ、左右中央の五人は判事で、真中の男は書記官だという。つまりここでは、法院とは合議のことで、合議が公開されているわけである。最高裁はすべて書面審理で、弁護士はこの合議を傍聴して書面を作成する。どんな判決が出されるか事前にはわかるわけである。次に案内された大法院は荘厳な広い部屋で、そこも傍聴席から一段高い所にぐりと二一のいが並べられていて、つまり全裁判官で合議する場所なのである。メキシコの司法制度について深く研究しているわけではないが、とにかくこの合議の公開ということとはわれわれの常識から考えると全く意外な話である。その大法院の中央右壁に「他人の権利を守ることが平和である」、左には「国家は何よりもまさる」という言葉



が金文字で書かれていた。

一言断っておくが、メキシコにおいて、司法界に女性の進出度が高い、ということは、必ずしも女性全般の社会的地位が高いということにはつながらない。インドをはじめ後進国諸国において、国家の要職についている女性が多いけれど、この現象は、貧富の差の大きい社会において、少数の富者名門の子女で優秀な人が、性差別が根強いからこそ男以上の才能と実力をもってはじめてその地位につける、ということにすぎない。それにしても最高裁判官に女性が二人もいる、ということはうらやましい限りである。

(弁護士)

私が読んだ

婦人年国際会議新聞報道

深尾 勝子

——「婦人年会議の新聞報道をどう読まれましたか。新聞は各紙、ずいぶんいいねいに読んだつもりですが、どうもまとまらないのです。それに、女性の特派員もたくさんいらしたようですが、これが女性の筆かと首をかしげたくなるような記事もありましたし……」

旅から帰って二週間後、待っていた年間連載企画第三部の予備取材に東京へ出、お話をうかがったある女教師

の方からこんな質問を受けた。

私は、質問の持つ重みに少々たじろぎながら——「私は会議には特派員としてでなく、個人として参加した。だから、婦人年会議の取材や報道について論評する十分な材料を持っていない。ただ、一般的に言えることは新聞社では婦人欄、家庭欄以外の読者は男性を想定しているし、有能な記者・特派員のモデルも男性である」と早くに答えた。

いま、私は、この旅の報告記を「新聞報道をどう読まれましたか……」というあの問いかけに、もう一度、ゆっくりと考える形で書いてみたいと思っている。この報告記が、新聞が伝えたものと、会議参加者から直接に聞いた報告とのギャップを幾分でも埋めることができたら、さらに、これを読んだ人が、スクラップブックをもう一度繰り直して、新聞報道からより多くの国際婦人年会議を読み取ってもらえれば……と願っている。

国際婦人年 行事幕あけ メキシコ

まず開発問題セミナー

男女はライバルでなく 互いに協力を

大統領夫人演説

(6月17日付)

男性出席者はブ然 国際婦人年記者討論会
婦人出席者「まだひどい不平等



夫の理解も大切よ」

(6月18日付)

国際婦人年会議ひらく メキシコ市

平等への「行動」討議

百か国を超す代表

色とりどりの衣裳 国際婦人年会議

「権利主張せたく視は間違い」

国連総長が演説

子供連れ目立つ傍聴席 婦人年会議

なごやか 満員の会場

リブ派も活発な「宣伝戦」

(以上6月20日付)

影落す国際政治

婦人年の国際会議 十三か国が演説

職場の不平等も訴え

婦人年の世界会議 藤田日本代表が演説

(以上6月21日付)

婦人年会議 「宣言案」三つともえ

第三世界・欧米・ソ連 経済問題で対立

(6月25日付)

どの会場も超満員

ハプニング続きの婦人年民間集会

解放を求めて熱気ムンムン

(6月26日付)

両宣言案を提出 婦人年会議

第三世界と欧米案

調整つかねば投票

(6月30日付)

世界行動計画を採択 婦人年会議第一委

女性解放へ体制変革

第三世界の主張を反映

「男性にも家事・育児を」

(7月1日付)

とげとげしく「女の対立」

政治色をまる出し

宣言文は第三世界案

国際会議委員会 数で押し切る

(7月2日付)

婦人年会議閉幕へ

宣言「対決」のなかで



メキシコ宣言採決

婦人年会議閉幕 全体の合意ならず

(以上7月3日付)

婦人年会議関連の記事量では群を抜いて多かった朝日新聞から会議の流れを見出しをビックアップして追ってみた。朝日を読む限り——「なごやか」に始まった会議に「国際政治が影を落とす」とし、「経済問題で対立」、「とげとげしく女の対立」も起きて、会議は「対決」の中で閉幕したことになる。

「対決・対立」を強調した朝日と対照的だったのは読売だ。読売は開会式前夜を報じた6月19日付で——「第三世界の声」基調に、婦人年会議、今夜半に開幕——と婦人年会議がどういった国際政治環境の中で開かれるかを明確にしているし、宣言案をめぐる動きについての報道も、6月29日付で——婦人年会議の宣言、一本化へ——30日付で——婦人年会議二宣言案一本化へ暗雲、票決も——と、先進国と第三世界の攻防を書き立てるより、それがどのようにに調整されるかに焦点をしばって書いている。

記事量が多く、見出しも「対決・対立」とハデに人目を引いた朝日の記事が婦人年会議といえども決して国際政治のうち外にあるものでない、という現実を無視し、「女同士、仲よく話し合えるのではないか」という予断に立って終始書かれたことは、たいへんに残念なことである。婦人年会議のほんとうの姿や意味をまったく読者に

伝えることができなかった。「女同士……」という甘い期待はなかったにしろ、「対立・対決」のオモシロさに焦点をしばって書いた他社の記事も、読者に同様のわかりにくさを印象づけたのではないか。

残念だったのは、一貫して冷静な目で婦人年会議を報道した読売の記事が、あまりに言葉少なく、扱いも地味であったこと。国際政治に継続した関心を持っていた人には十分であっても、婦人年会議だから読んで見ようという読者には不親切ではなかったらうか。

「婦人年会議は国際政治を越えて——」という期待が、どんなふうにも婦人年会議をわかりにくくしたのか、記事を検討しながら、具体的に解きはぐしてみよう。

朝日は「婦人年会議を終えて」(7月4日付)で、こう書いている。

——(メキシコの貧しさを書いて、日本女性も他国の苦しみを目を向けるべきだと説き、さらにアメリカ女性の行動力を引き合いに日本の女性解放運動の力量不足を指摘した後)ただ、「トリビューン」などでマイクを奪いあいながら、アメリカのリブ派と中南米の政治派が英語とスペイン語でのしり合う場面を何度も目撃して首をかしげた。女同士がなぜこうも敵対しあわなければならないのか。

アメリカのリブ派は彼女たちが自分たちの解放運動を叫びながら、開発途上国の女性が米国の外交、経済政策



のために苦しんでいることに目をつぶっているのだとしたら、非難されてもしかたがないのではないか。しかし、同時に、新経済秩序だ、体制変革だと呼ばふ第三世界の女性たちはたとえ貧困から解放されてもそれは女性解放に直ちにつながらないことを十分知らないのではないか。……第三世界の女性たちももっと女性の具体的な問題を討議することはできなかったのか」

この記事は三つの仮説に立って書かれている。ひとつは、女同士は女であることだけで連帯できるのではない。ふたつめは、アメリカのリブ派は米国の外交や経済政策に目をつぶっているのではないか。最後に第三世界の女性たちは貧困からの解放が直ちに女性解放につながらないことを知らないのではないか。

まず、会議は女の（男とも）連帯の可能性とその立法を探るために設けられたはずだ。女の連帯は所与のものではない。また、アメリカのリブの人たちの主張は「政治にフェミニズムを……」である。米国のみならず、世界中の政府「権力機構のあり方を批判している。もちろん第三世界の女性たちが米国の外交や経済政策に向けている非難の目とは視点が違う。さらに、第三世界の女性たちは決して貧困からの解放が「直ちに」女性解放につながるとは考えていない。考えているのは「まず」貧困から解放されなければならない、ということである。

トリビュンで、アメリカのリブたちは、彼女たちの「哲学」を説いた。第三世界の女たちは「状況の変革」

を求め、それだけでは空腹を満たせない、性急な「哲学」の押しつけに反発をした。「対立・対決」ではない、あまりに大きな「食い違い」であった。

個人とグループによって構成される単なる情報・意見の交換の場として設定されたトリビュンであるから、そこにおいての発言にどんな意味内容が、どこまで要求されるかどうかは別にして、アメリカのリブたちの「哲学」が簡単に第三世界の女たちによって一蹴されたのは「哲学」を政治に反映させる、政治を変える具体性がありにとぼしかったからである。

この記事ではトリビュンにおける「対立・対決」と政府間会議におけるそれを同次元で扱っているが、その意味、内容はまったく違うはずだ。政府間会議における「成果」については読売が「前進の踏み台、婦人会議」（7月3日付）で、鈴木特派員が、たいへん簡潔に、まとめている。

——「富の公正な分配を、平等の前提として宣言させた（国際婦人年世界）会議は、単に「おきまりの政治対立」と片づけきれない意味を持つ」と」

会議が終った後の各社のまとめは、どちらかと言えば、世界行動計画の各論の部分——婦人解放の具体的な方策やプログラムを評価するほうに力が入っていたように読める。政治から目をそらすことなく、会議全体が持ち得た意味を忘れてはならないと思う。



新聞が伝えたトリビューン、なかでも、トリビューンにおける日本の女たちの行動、評価については、私たち、少なくとも、私が受けた印象とは、かなりのへだたりがある。トリビューンに四日間参加し、残る三日の会期に心を残しながらキューバ出発を決めた二十四日の夜、私のルームメイトがこう言った。
「トリビューンのようなうすを見ていると、第一回の母親大会のことが思い出されるの。そっくりよ。熱気、混沌、涙……」

日本女性「内ゲバ」騒ぎ
「きれいごとやうな」

婦人年会議 リブ代表が演説

(6月21日付「読売」)

どの会場も超満員

ハプニング続きの婦人年民間集会

解放求めて熱気ムンムン

(6月26日付「朝日」)

大荒れトリビューン

演壇占拠し「宣言」

中南米の婦人グループ

(6月28日付「毎日」)

もうい日本のウーマン・リブ
国際舞台に不慣れ
テーマ、連係で欠ける

(7月2日付「サンケイ」)

こうした記事からうかがえないこと。それは、なにより、トリビューンには実にさまざまな女たちが参加し、発言をしたこと。わが「旅する会」の団長、斎藤千代さんがそう白になりブルブルふるえながら発言をした二十日午後の分科会を例に取っても――。

「私は夫や子供に愛されてシアワセな主婦です。女性解放などと叫ぶ人の気持がわからない」という「現状肯定派」、「コマーシャルイズムに踊らされ、高価な化粧品で身を飾っているのに女性解放などを人に説くのはおかしい。まず、おのれを振り返って精神を正せ」という「精神派」、「女中を雇っている女が女性解放を叫んでいる。解放は足もとから」の「足もと派」、「女の性が男に従属している限り、本当の女の解放はない。レスビアンこそ女性を解放するもの」というアメリカのリブ・グループ「ナウ」のメンバーでもある「性哲学派」など。

そして、勇気を振り起こして行列に加わり、マイクを握ったものの「美しい日本語で語りかけられないのは残念……。この会議に参加することを熱望しながら来られなかった皆さんの女が日本にいる。私たちは半年分の給料を貯めてやってきた」と前置きをしているうちに制



限時間をオーバーしてしまふ日本の女。そのスピーチが聞き取れたとはとても思えないのに、駆け寄ってきて「とても感動的でした。私は泣けて泣けて……」と涙を流しながら抱きついてきた、たぶん、日本の多くの女と似た状況にある十数人の女たち。

二十日の分科会が、平等、発展、平和の三つの目標を明らかにする総論分科会とすれば、二日の休みをはさんだ二十三日以降の分科会は各論分科会とも言うべきものだった。「健康と栄養」分科会が開かれた二十三日、ロビーで人を待っていた私のヒザにはたくさんパンフレットがたまつた。女性の健康について啓蒙宣言事業を行なっている各国のグループ、団体のパンフレットだった。各論リブもたくさん来ていたのである。

トリビュンにおける日本女性の行動に対して行なわれた評価は、物見遊山か、は、別にして、語学力不足、行動力不足、テーマ・連係の欠陥、女性解放運動の力量不足、といったところだ。

まず語学力は不足だったか。意志の疎通をさまたげたのは語学力不足のせいだったか。語学力より、日本の女性が語ろうとしたことと相手が求めたものの間にあまりに大きなギャップがあり、それが、日本の女を口ごもらせてしまったのではないか。私たちに語ることを求められたのは、「私」を含めた日本の女は何を感じ、何を考えているか、それをふまえて「私」は何をしているか、何をしようとしているか、だった。ところが、日本の女

は「私抜き」の「一般」ばかりを語り、ある人は「私」を語ろうとして「他」を非難・攻撃し、あるいは解説や解釈をして、聞き手に「指示」とも受け取られる発言をした。

こんな状態であつたから、日本の女が共通のテーマを持ち、連係を持つなどはムリと言ふものだった。斎藤千代さんが事務局にレポート「日本女性の過去と現在」を提出したために開かれることになった二十三日午後の分科会も、語学力より語るべき「私」の稀薄さが、「お流れ」と報道される結末を招いた。

斎藤さんは、よりわかりやすい英語を話す人の手助けを得ようと、他グループの構成員に登壇を願った。だが、壇上の人となつた人は全員、各人各様の日本女性への現状認識、歴史的評価を持っていたのである。問題点に対する分析の角度も違いすぎていた。会場からの質問にも、五つも六つも違った答えが、なんの脈絡もなく出てきたのである。言葉はつたなくとも、日本女性の草の根運動を伝える——という当初の斎藤さんの意図をつらぬくべきであつた。

二十三日の夜、われわれのグループに「日本女性としての宣言を出すなり、記者会見をしては……」という声がかかった。グループ討議の結論は「われわれ内部でさえまともなと思われるのに、他のグループも含めた宣言などムリ。時間もない。とにかくにも宣言を出さうと、出すことを目的にまともにも、宣言の形をなさな



いものになるだろう。今後の課題にしようではないか。記者会見も、したがって無意味……」となった。

私たちの判断をあまりに消極的と受取る人もいるかもしれない。だが、私は、グループの構成員の「誠実さ」を評価したい。もう少し言うなら、われわれの「力量」にふさわしく振る舞い、そのほうがずっと困難な、あしたを期す道を選択したことを誇らしく思っている。

私はこの報告記を書くために、何度かスクラップブックを読み返した。そのたびに楽しく読んだ二つの記事がある。どちらも、軽い読み物風には書かれているが、一九七五年に開かれた初の世界婦人会議というふんいきをよく伝えているし、なにより、報道すべき対象を見つめている書き手の人間性がうかがわれ、たのしい。

ひとつは読売の「おんな'75」（6月28日付）——ミズ・コンピューターと「あだ名」がついたオーストラリア代表、ミズ・エリザベス・グールドに、ある女性記者が「最も簡単に効果的な女性解放運動の方法は——」と質問をした。ミズ・コンピューターはこう答えたそう。「相手の目をじっと見つめて尋ねましょう。『あなたはこういうわけで私をそんなふうに取り扱いますか』納得のゆくまで、トコトンまで質問を繰り返しましょう」。見出しは「じっと見つめて」、記事の結びは、コンピューターなど「あだ名」は冷たいが、女の痛みを内に秘めている、だ。もうひとつも読売（6月20日付）で、「ジャーナリス

ト討論会」での話。「ミズ」の編集長、ミズ・グロリア・スタイネムが演説をして、会場から盛大な拍手を浴びた。男性ジャーナリストたちも盛んに拍手を送っていたので聞いてみた、という。「本当にそう思いますか」。答えは「よくわからないが、だんだんそんな気がしてきた」（ドイツの記者）、「少し甘いんじゃないかな」（メキシコのテレビプロデューサー）、「狂気のさたとも思えるが、ひょっとすると女性革命の前夜なのかもしれない」（イギリスの記者）——。

世界行動計画は第IV章「マス・メディア」で、八項をさいて、マスコミの役割ならびに期待、現状の批判、改善への方策などを論じている。どれも政府機関や非政府機関などへのメッセージだが、最終項で「婦人は……、また作り出された婦人のイメージを批判的に検討するよう奨励されるべきである」と婦人一般にふれている。

婦人はいったいどんな方法で、マスコミ、特に新聞報道が作り出した婦人のイメージを批判的に検討できるか、その最も簡単に効果的な方法は——。私も、ミズ・コンピューターにならって「じっと見つめる」ことを提案したい。報道されたものを読むだけでなく、書き手が「なぜ」こうした記事内容を報道しようと思ったのか、「なぜ」こんな言葉を使い、表現法を取るのかを、ギリギリまで読み込んで、記事を書き手ごと読み取ること。疑問を率直に書き手にぶつけること。私は、女性読者が行なう、そうした批判的な検討が、なにより大きな新聞



報道を変える力になると確信している。(新聞記者)

メキシコ会議

“女のほごき”無名考

溝口明代

トリビューンに集まった世界の女たちは、美しかった。特別に流行のファッションを着ているわけではなかった。厚化粧をしているわけでもなかった。だが、どの女も、一人一人が、個性をにじませて、ギラギラと輝く美しさがあった。「強い女は美しい」という言葉通り、堂堂と、風を切り、明日をみつめて、ロビーを歩いていた。アメリカの女には世界の先端を歩いて来た自信があった。アフリカや南米など、第三世界の女たちには、彼女たちが言う「石油や、資源を先に使った国々」に対する「闘争」の中で得たフイトと、互角にせまる力と、明日の主人公は自分たちだ、という意気込みがみなぎっていた、それでいて、女たちは柔軟な肢体と、やさしさをにじませて、男たちのまじる会議とは違った、一種の女類の匂いと「つや」をあふれさせていた。

“ジャパン?” “英語話せますか? スペイン語は?”

“オー アイムソー!”

片言の英語をしゃべりながら、それでも、なんとなく、

お互いの女の六感でビタリとわかる。

“あなた、学校の先生でしょ? — 米国の女 —

“イエース” — 私 —

“ローティーン スクール?”

“ノー、ハンディキャップスクール”

“オー、がんばってね、 — 握手 —

“サンキュー” — 感激 —

という具合であった。

そうした中で、私の「六感アンテナ」に去来したものは?

一つは、世界革命はすでに始まっている。世界史の流れは確実に「変わった」という認識であった。今はまだ過去の力、男たちの作った世界企業とか、その上に乗った、アメリカ等、帝国の力、権力構造が強いけれども、すでに、それを阻止する力、芽は、確実に育っているという事実であろう。

なるほど、メキシコのいなかのいなか、インディオの部落まで、コカコーラとトヨタは入っていたし、キューバのハバナには日本の企業の男たちが、

“多いときには三百人もいるよ”

「ハバナ女は、いい味だよ」

と言いつつ、うるちよろしてはいたけれども、メキシコの歴史博物館でも、ハバナの町角でも、ベトナムに学べ! 中国に学べ! われら民族のために! という民族革命高揚の写真やはり紙がいっぱいであったし、国家建設の中で



働く、女の写真はかりであった。

そして会議中、たとえば「第三世界の女熟練工と発展」などという題の会議にいますと、「石油の恩恵に今まだ浴していないわれわれは」とか、「資源を持っても使用していないわれわれは」という合い言葉を枕に、世界の女が状況を訴えている。

「われわれは食うや食わずだ。しかし、今は、われわれ女がほそぼそと作る手工芸品が輸出の花形であり、それが国家経済をささえている。だが、自分たち独自のマーケットを持たないから非常に安く買いたたかれる。特に日本などはすぐ模倣して、企業ベースに乗せて売り、世界の商品価値を下げてしまう」

「われわれ部落間で団結し、値切られないようにしようと思っても、分断される方が早い」

「自分たちのための情報が得られない。これこそどれい状態なんだ」

「メディアを自分たちで作り、技術を開発せねば」

「アメリカだってイスの腕みがきのような仕事に女に残されたものなんだ、今は、賃金の格差は広がるばかりだ。成長とは何なのか」

「いや、アフリカではその手工業でも大切なんだ。機構に乗ることが大事だという意見が出たが、金はすべて企業の方に流れてしまっているんだ」

「女が、働いて、経済力を得たということは、われわれを少しは豊かにした。しかし、依然として家内工業では、

終局において、独立不可能なんだ」

「女の教育が必要だと言われるが、女の側に立つ機構が今までにあったか、一人一人のテクニクの習得も大切だが、それだけでなく、可能にする組織を自分たちで握らねばだめだ」

これは日本の婦人労働会議と同じだ。中には明治時代の日本を思わせるものもあって、成長には時間がやや必要であろうけれども、眠れる世界の四分の三が起きた、ということとは、どえらいことであろう。

男たちの考えた、機械による物質の生産、月にまで至る科学による「力」によっては、どこまでも発展し続け得ないという限界が見えてしまったようだ。もはや先進国の男たちが作った「競争の原理」はゴールに来てしまったようだ。

世界は変わる、近代、いや、「二十世紀」の「神」であつたものもろの価値観は、今後百年先には、いな五十年で大変な変貌をとげるであろう。

そしてそのときは、「性差別の原因は、人種差別、植民地主義、不平等な社会組織および後進性と同一の支配構造によるものです」と、エチエベリア大統領夫人ですら挨拶せざるを得なかったように、女の意識は高まり、女の尊重、すなわち、「人類の生命」が、「神」の地位に座っているであろう。

会議中、女たちは、くどくどと、また、あるときは髪ふりみだし、自分の置かれた状況を、それぞれ勝手に訴



え続けた。問題のありようを、あれもこれもと羅列した。提起された問題は、朝夕の化粧のことに始まり、世界の政治にいたる幅があった。しかし、よくもよくも、六千人も女が集まったにもかかわらず、女は世界中同じことしかしやべらないのかとアキレルほど、日本の女の発言と同じであった。

女にとっては、日本の社会の仕組も、世界の仕組も同じだったのだ、特に結論がでたわけではないけれど、遠い所にあるように思っていた女たちが、一線に並んだということ、置かれた立場によって、力点は少々違っている、地球人口の半分为国家を超えて「女は同じだ」という実感、認識を持ったということは、これまた、どれくらいことであろう。

やっぱり革命は始まったのだ。男の社会の象徴「力」が、一方的に主張できる方向性はすでにぐらぐらと音を立ててゆらめき始めている。

女のための明日を創造する方向性は一層はつきり見え始めたのだ。「行動は計画」されたのだ。国家ではなく、人類の半分について、タテマエに対立して、ホンネのあり方、「質」をどのように充実するかが会議中常に最も重視されたということ、すなわち「女の論理」による革命が始まったのだ。アメリカに起こった性差別主義は、世界の女の認識として定着し、発言の内容も、いろいろな運動形態にも、その影響は現われていた。「ウーマンリブが」なんて、悪女の代名詞に使われるような日本と違

って、他の国じゃ、リブはいろいろな差別撤廃運動の一つとして、自己の女から出発しているのであって、特別にリブ派があるのではなく、婦人運動の一つの流れなんだ。

それにしても差別の構図は同じなのに、どうしてこうも行動となると違うのだろう。日本という国は、なんという奇妙な「特殊社会」なんであろう。あらためて、今なお、われわれは鎖国時代を生きており、独特な社会構造「集団」の組み方をしていることを知った。ほんと、せまい、せまい。息苦しいほどせまいんだな。いや、均質なのかな。

せまい島国に生活すると、人間の意識まで偏狭になってしまうというのはコワイことだ。この鎖国状態にしている「力」は、誰が握っているのか。敵は誰だ。国民が世界を知らぬとどういうことになるか、半世紀前にやったばかりなのに、またアンコールしようとしている。その結果はどうなるか目に見えているではないか。それなのに日本の女たちは、まだまだ、男の社会構造に取り込まれて、自分で立っていないねえ。くやしけれど、だめですね。つまり、誰も、なんらかの型で「性」を売っているんだねえ。二百人も日本の女たちは、被抑圧者の常として、上昇志向たくましく（人間の「本性」だからしかたがないかもしれないけれど）、メキシコまで行って、いかに自分の帰属する集団へ、「おみやげ」を持って帰るかにがんばった、日本国内向けに活躍したとい



うことです。これエコノミックアニマルの理論とどう違う！

ベティ・フリーダンを先頭に、「女の敵は女だ」と何人もの人が発言したが。女の連帯というのは少々のことではできないねえ。世界の女もそうかもしれないがね。

ホントに女の生き方というのは、吐く息から性器の毛先まで、分断されているんだね。金もなく、力もなく、（しゃべるといふことは、強力な「力」であった。改めて痛感しました）、あたふたと、みんなのお荷物になって歩いた私にとっては、痛烈な社会構造再確認の旅でした。

これで、どうやって世界革命に乗れるのかなあ、ホントに、ホントに、日本の女は急がなければ！（教員）

私の旅

川上正子

女たちは男たちに語らねばならない「いのちをかけた言葉」を吐きたあーい」と。と、語っていたのは野本三吉であったか。

その言葉だけを取り出して借りれば、男たちに語るよりも前に、ありとあらゆる現実を日常のレベルで背負

い、むしろ自分にむけてのことばとして「いのちをかけたことばをはきたあーい」との思いを胸の中にたぎらせているのが今の女たちではないだろうか。

少なくとも、主婦としての日常を営なむ私にとって、生活の実感としてとらえられる日常があればあるほどその思いは切実であった。

婦人会議が持たれること自体には世界の多くの女たちにとって、大きな意味を持つには違いのないのだが、おおかたの所ではタテマエが先行するであろうし、たかさんの「いのちをかけたことばをはきたあーい」と願う女たちに出会うこと、あるいは、どこかで日常をつきぬけ、私をゆり動かす何者かに出会えるのではないか、というささやかな願いが、私をこの旅へ参加させたのであった。

メキシコ第一歩。空港からバスでホテルへ向かう途中、ピンク、ブルー、グリーンなどに塗られた低い家なみや人々が新鮮でめずらしく、外を眺めていた私に窓の外から、いきなり黒い手がぬっとつき出された。

背広を着た背の高い、そして色の黒い老人であった。それが何を意味するのか、瞬時に理解はできたが、その現実と直面しているのが私自身であるということは、私にひどく衝撃を与えた。

その夜、旅のメンバーの数人とマリアッチ（歌とギターとトランペットからなるマリアッチは、まさにメキシコの人たちの暮しに欠かせない音楽と思われるが）を聞きに出かけたある店で、スペイン系のひとりの女性に出



会った。彼女は似顔絵画きに肖像画を画いてもらったのだが、まず目をひいたのは彼女の美しさだった。肖像画は彼女のキレの長い大きな目、そして彼女を包む気品のようなもので写していた。思わず「きれいいね」と言うと、「ありがとう」と答える。

隣席の男性が、ハズバンドかと聞くと、彼女と彼は笑いだした。「いいえ、彼は私の三番目の息子です」と。驚く私たちに彼女は笑いながら、今六〇歳であること、十五歳から産み続けて二人子どもを産んだこと、何度か聞き直したけれども間違いないと言ふ私に「とんでもない決してそんなことはない」とうち消す。メキシコシティに近い町から遊びに来たと聞いたが、その町ではその年代の多くの女性が十人以上子どもを産んでいる、とあたり前の顔で語ってくれたのだった。

トリビューンの会場、セントロ・メディコには二千人を超える女性が集まった。女たちはみな生き生きとしていたし、各国のそれぞれの状況をかえながら、ともかくも女の問題で一堂に集まったようすは、ほんとうに心強い思いがしたし、感動的であった。が私たちがもしかしらら会って話せるかもしれないと願っていたアジアの女性たちは、インドを除いては、ほとんど一人もみかけなかった。日本人の参加数二百名。この二百名といわれた女性たちの多くも会場ではみられなかったが。

考えてみれば、東南アジアの女性たちが、どうしては

るばるメキシコまで来られようが。特別に富裕でもない私たち日本の女性が当り前のように二百名もメキシコまで来られるという事実、それ程までに経済的に豊かになっているという事実を私はここで認識した。豊かさとはより悪いものではないし、一見豊かに見える日本の現実は苛酷なものであり、そのひずみはすべて弱いものへとしわよせられているのを私たちは知っている。がその豊かさが、韓国や東南アジアの国々、そしてその他の国を踏みつけにした上に立っているのも事実である。しかも私はすでにその豊かさの中にどっぷり浸っているのだった。

だからトリビューンにあっても、第三世界の女性たちが、先進国をウルトラ搾取国、開発途上国を非搾取国と呼び、社会的、政治的な変革がなくてはほんとうの女性の解放はあり得ない、と主張するのは当然のことと考えられた。

「第三世界の女性と手工業」というテーマの分科会で（そこにはあらゆる皮膚の色を持ち色とりどりの民族衣装をまとった意志的で美しい女たちがいた）インド、メキシコ、中南米、アフリカ各国、アメリカインディアン等の女性たちがつぎつぎに立ち上って英語やスペイン語で自国の自分たちの作る手工芸について話し、それがいかに女性にふさわしい仕事であるか、それもまたいかに搾取されているかを語るのを、半ば想像をまじえて聞きながら私は日本の各地で機織りなどの手仕事に就いてい



CUBA



MEXICO



CUBA



MEXICO



CUBA



MEXICO



CUBA



る女たちを思った。この場で真に交流できるのは彼女たちではないだろうか、と。

また旅のグループで「日本の女性―過去と現在」というテーマで分科会が持たれたときも、言葉のハンディも加わって、日本の状況や日本の女性の立場を十分伝えられたとは思えなかった。私自身について言えばそうした日本の女たちの状況を正確にとらえ、自分のものとして肉化できずにいた自分のおそまつさを知らされ、ましてや個人的な状況での差別や軋轢について語り他の国の女性と分ちあうには語学力は無にひとしかった。

言葉の壁は常につきまとった。分科会が終って会場を出ると、一人のアメリカ女性が寄って来た。彼女は全く好ましい率直さで日本人かと聞く。そうだと答えると、日本のことを知りたい、日本の雑誌を送ってほしいと言う。早速雑誌「あごら」その他を約束する。彼女はピンクヘルメットについて知りたいのだと言った。「彼女たちはオートバイに乗っているの?」どうやら中び連が特に政治的に激しい運動をやっていると思っているらしい。「彼女たちは特にラディカルな運動をしているわけではない」と答えたけれども、目下の中び連の動きについては、私の貧しい英語では到底説明できなかった。ニューヨークでピアノ弾きの男と暮していると言語の彼女エレンは、そのうちに言った「悲しいね。気持はあるのに伝えられないなんて。」「ヴェリイ・ヴェリイ・サッド」と彼女は強調するけれども、私にはむしろ、何も伝えられない

い自分がうらめしかった。

「女性と文化」の会場での日本女性たちの発言が引金となって、私たちのグループももっと積極的に交流しようということになり、宿舎のホテルで開かれていたNOWの集会に合流しようということになった。会場ではすでにNOWのメンバーたちが議論をたたかわせていたのだが、私たちの集団が会場へ行き、ヒソヒソ話をはじめていたところ、一人の女性がふり返って「ウルサイ・ウルサイ、一体何をしているの」と聞く。「実は私たちは日本人で云々……」と答えると、彼女は「私たち今、日本のことなど考えられないよ」とまた前を向いて討論に加わった。彼女たちにしてみれば組織をどうするかという議論をやっていたらしいので無理もないことなのだろうが、切り返す言葉もなく、もしかしたらこれもまた白人女性の意識なのかも知れない、と思った私は会場を出てきてしまった。

その後も合流できる機会があったかも知れないし、ピンクヘルのエレンもパーティに誘ってくれた。こうしななかに会議にとどまって参加していれば、また別の成果があったのかも知れないが、私たちのグループは会議の休みを利用してのメリダからウシュマル、チチェン・イツァ行きと、キューバ行きのスケジュールがつまっていた。

白く塗られた家なみのせい、あるいはその土地のインディオの女性たちの胸もとに刺繍のある白く簡素で美



しい民族衣装のせいか、白い街といわれるメリダの市場で、私はたくさんのインディオの女性たちに出会った。

朝の市に出かけるところらしい頭にいっぱいいのバナナを乗せた人、木箱の上に新聞紙をのせマンゴーを売る人、あるいは地面に新聞紙を広げトマトやライム、ピーマンを売る人、そして、りんご、ぶどう。市場の入口や中にも、そうした白い衣装の女たちはたくさんいて、彼女たちは生き生きとしていたし、それは日本の市場でみかける情景と変わりはしなかったが、野菜、果物などの種類が限られていること、並べている量がごくわずかなものであるのが印象に残る。可愛い声をはり上げ、香料を手にかけているだけ売っている女の子もいた。私は彼女から肉桂と粒こしを買うた。トルテリヤ（とうもろこしの粉を練って、せんべい状に平らにしたもの）を売る店、それに豚肉や七面鳥の肉を包んで食べさせてくれる店。人々は白いカルピスのような液体が茶色の水を飲んでた。私も茶色の水を注文してみる。タマリンドと聞いたその液体は、水飴のような素朴な味と独特の香りがして、ふだんあまり飲みもしないが炭酸飲料に慣れた私の舌には多少なじめず、だから懐しくホンモノの味がした。

このホンモノの味と多少の異和感は、夏になると出かける日本海ぞいの海辺の部落のおばさんたちを思い出させた。彼女たちは自分で潜ってはてんぐさを採り、大きな鍋で煮て作ったトコロ天をいくらでも食べさせてくれる

のである。かすかにてんぐさのにおいの残るこのトコロ天もまたホンモノの味であるがために都会での味に慣れた私には多少なじめない。もとは現金収入を得るため、どこの家でも嫁は季節が来れば潜ってテングサ採りをしたという、その海の冷たさ「姑が風呂をわかし待っていてくれることを思えば、どんなにつらくても潜らなくてはならなかった」と夕顔をむきかぶりょうを作りながら、そのおばさんたちは話してくれた。メキシコの市場でもまたわずかの現金収入を得るためにおばさんたちはささやかな商いをしていたのであろう。市場には日用品なども売られていたが、いずれも品数は少なく日本のあふれんばかりの商品とは対照的であった、時おり通りに並べられたあざやかな色彩が目に入ったがそれはかつて日本でもみかけたナイロンの下着類である。

彼女たちの着ている白い刺繍のブラウスをお土産に買いためる人もいて、精巧な刺繍は機械で作ったものと思われたが、チチェン・イツァからの帰途立ち寄らせてもらったインディオの人たちの住まいで、おばさんの見せてくれた白い布には見事に刺しかけの刺繍があつて、ああ彼女たちの手仕事なのだな、と理解できた。

帰国後読んだ新聞で目についたのは、メキシコの貧しさについての記事だった。たしかにメキシコ・シティでは路上で物売る女性も目についたし物乞いをするインディオの女性もいた。老いた女の人が孫を連れてうずくまっているのかと思うと「あなたがたと同じくらの年



齡ですよ。インディオの年はみかけよりも十から二十歳ひいたくらいです」などと話してくれる人もいて驚かされたのだが。

しかしよく見ると、彼女たちはやはり私たちと同じ年代であることがわかるし、浅黒い肌と中高のある種の厳しさをそなえた美しさを持っていて、それは私たちを寄せつけない。街で出会えばすぐそれとわかるインディオの女性は常に私をはっとさせ、たじろがせた。がそれは彼女たちの貧しさの故ではない。余分なものを一切身につけていない女の厳しさと美しさのせいだった。あやつり人形や肩かけを買ってくれという彼女たちは、決して私にはほえみかけては来なかった。

彼女たちの貧しさに胸をつかれる前に、私は自分の東京での暮しを思つて絶句した。街にあふれるおびただしい消費物資、流行の洋服、不必要に色やにおいのついた子どもたちの学用品、次々に品種改良され出て来る果物や野菜、しかもすでにほんものの味を忘れてしまっている私の舌。直接暮しと結びついている私たちが決して望んだわけでもないのにあり余る商品。そしてずたずたに引き裂かれた私たちの国土。とりわけいたく暮しているとは思えない私であるが、あり余る商品には不感症になつてはいなかったか。そしてみせかけの豊かさは私の暮しのすみずみ、体のすみずみにまで浸透しているのではないか。

キューバでは（キューバについては別の機会にふれた

と思うが）行き交う女性はみな私の足もとを見た。やがて彼女たちの視線は私のサンダルに注がれているのに気づいた。私にしてみれば前の皮をリボン状にねじった、少しかかとの高いとりたてて良いデザインのものとも思えなかったが、気をつけてみると彼女たちのそれはほとんどがビニールであった（と思われた）。

彼女たちの視線を感じるとだんだん恥かしくなるのと同様に、キューバですべての人が同じレベルで豊かになるために、今、もっとおしやれをしたいであらうに耐えている女たちを思つて胸があつくなつた。そして子どもたちは皆ブルーやピンクの揃いの制服を着て、明るいのである。キューバの母親たちは子どもたちに未来を語ることができずに違いない。けれども今私たちは私たちが子どもにどんな言葉で未来を語ればいいのだろうか。

帰途。メキシコの上空から東に大きな潮を見たとき、かつては湖の真中にあったインディオの豊かな国テノチティトランが今のメキシコ・シティから浮び上つて来るように思えた。被征服者であるインディオの女性に話しかけたい衝動にかられながらもそれができなかった。私たちが今解放されたいと願ひ、私たち主婦が日常をつきぬけて何かをしたいと願うことは間違ひであるとは決して思わない。けれども決してほえみかけてくれなかったインディオの女たちに私自身がゆさぶられることはあつても「いのちをかけたことはをかけたかと思つている」などと語りかけることができるだろうか。



「中南米の女性に家族計画を強制するのはあやまりだ、彼女たちは貧しさのためいつ子どもが死ぬかも知れないから次々と産み続ける」という話を帰国後に聞いたとき、あの二人産んだと言った女性の美しい笑顔を思い出した。子ども二人。みせかけの繁栄の中でぬくぬくと暮らしていたひ弱な私に彼女たちと語り合い連帯することができののだろうかと思う。今私はあらためて自分の生活を思いほんとうの意味での豊かさとは何であるかを問い直す必要にせまられている。そして身についてしまった不必要な虚偽の豊かさだけは、日々のくらしの中で拒否していかねばと思うのである。

(主婦)

ハバナ湾の夜明け

神馬 由貴子

カリブ海に浮ぶ『未来の国』キューバ。フィデル・カストロ、チェ・ゲバラという魅力満点の人物を育み、それをささえた民衆の気迫。そして新生キューバに住む人の表情をうかがい知ること。それだけで私の長年の想いは満たされることを期待した旅だった。

そのキューバの首都ハバナ空港についたのは夕方の七時。もう南国の太陽は沈みINNT(観光産業局)さし

まわしの観光バスに私たち一行が乗ったときは街は夕闇の中。どこまでも、どこまでも植民地風の家屋敷のつらなる真すぐな道路を走って、ホテル・ナショナルにたときは強力なバスの冷房で体は冷えのどはカラカラにわいていた。

さしずめ東京の帝国ホテル級のこのホテルは、革命直後、洋裁や衛生学を勉強するために、キューバの島のすみずみから婦人たちが集まり、宿舍と学校を兼用したという建物である。同じように近くのホテル、ハバナ・リブレも看護婦学校に使われた。富豪のいなくなったホテルのすべてはすぐ人民のための人民のものとして生まれ変わったという。当時、このロビーやエレベーターを解放された人々がどんな熱気を発散させながら往来したであらうか。それから十六年後、今はINNTの管轄のもとに、主に外国からの旅行者のホテルとして経営されている。

私たちに割りあてられた部屋に入って、月に照らしだされたハバナ湾に見とれていると、今晩はノとメイドさんがお盆に魔法ビンとコップをのせて現われた。注文もしないのにサービスがあるなんてアメリカやメキシコのホテルで経験もしないことなのでびっくり。なんとというタイムイングの良さ、暖かい思いやりかと感謝感激。

さて顔でも洗うつもりで洗面所に入ると、あっ、蛇口からは薄い海水が出てきた。塩からくてのめない。ここでは一杯の水も貴重品、日常生活の厳しい面を思い知



らされる。

夕食はホテルのクラブ・パリジェンスで舞台のショーをみながらドーぞということになる。広いホールにはローソクをともしたテーブルがいくつも並んで人影がゆれる。ほぼ満席。料理は次々と運ばれてくる。こんな豪華な晩さん会など予想もしなかっただけに、これははたしてキューバかと一瞬たじろぐ。しかし一泊二六ドルという宿泊費に含まれた国家的観光産業であり外貨獲得の手段なのだと自分自身を納得させ、舞台の歌に酔いラム酒に気をほぐす。

朝、六時十五分、ハバナ湾の夜明けを見ようととびおきる。真正面の太陽は水平線をわずかに離れ高く昇ろうとしていた。アメリカの軍艦がこの沖にずらりと砲を岸に向けて並んだというニュースが思い出される。沿岸の道路を二台のトラックが兵士を満載して通った。「ウラノウラノ」という歓声を残して。

今日一日のスケジュールはINNTのガイドであるテレサさんと観光バスでまわる仕組みにできていた。さしずめ、おきまりの観光コースをまわっておしまいになりそう。個人の行動は認められず、日程の変更は本部の許可なくしてありえないという厳しい建前がある。日本で予想していたものは、かなり甘い観測だったと気づく。バスから降りて親しく交流できたのは、タバコ工場の見学とFMC（キューバ婦人連合）だけだった。私の目的だった保育所の見学もダメ、小学、中学もハバナ市内の

猛実験にあたりみられないのがなんといっても残念。でも、またキューバをたずねる口実をあたえられたと
思い感謝すべきなのかもしれない。
(育児コンサルタント)

キューバ

——フライボイアンとハバナ——

平岡ふき子

関心の国キューバ

四月にメキシコの旅の話が出たとき、国際婦人会議とはどういう人が行くのだろうか、大変なことだろうかと他人ごととしてしか考えていなかった。この大変なことに参加してしまった動機は、キューバ入国がそのスケジュールに入っていたからにはかならない。

キューバとの出会いは十二・三年前であつたろうか。友人から一枚のソノシートをもらった。「革命はリズムにのって」という曲の一つ、「めざめ」は、帆足まり子という日本人歌手が歌っているのだが、まさしくスペイン語のキューバの歌であつた。ちょうどそのころ、フランスの女性ジャーナリスト、アニア・フランコが書いた「キューバの祭り」という熱っぽい革命のルポルタージ



ユを読んでいたせいもあり、この南国の果物を思わせるねばつこい調子の中に漂う哀愁めいたものに私はすっかり魅せられてしまった。一九五九年革命後ただちに着手された文盲絶滅運動に際して作られたというこの歌は、革命の歌というにしてはあまりにも甘く、切ない。当時の日本語は少し硬いがかえって味わいがあると思うのでそのまま紹介しよう。

数々の言葉 君に伝えむ。

いま われは 物書くこと覚えぬ。

いま 君を愛すると、まこと愛すると

高らかに言えるわれ。

静かなる川辺の砂に

かのフライボイアンの幹に

君が名と、わが名きざみぬ。

その幹に二人の名 とわに残らむ。

かつて君が瞳の中に 愛を読み取りし

君が魂の愛の輝き

いまは 君が便りの中にそれを読み

心の限り愛をも 綴れる

わが祖国の、われに与えし宝物

いまは読み 書くことの出来る喜び。

この歌が当時キューバでどれくらい歌われたか知るよしもないが、心をこめて歌い上げる帆足さんのスペイン語からこの歌詞通りの熱い血が感じられた。

モンカダ襲撃の失敗から一時はメキシコに逃れ、セネ

ストをやり損ねた十二人の生残りがシユラマエストラにたてこもって農民と手を結び、労働者を駆起させてなしたげた革命。共産党からも無謀とせしられ、誰しも本気にしなかったこの世直しをなし遂げたキューバ人カストロとその盟友チェ・ゲバラ。彼らのファンであった私は、この「めざめ」からも、こういう革命もあるものか、バチャンガのリズムにのって進められた革命、火焰樹の幹に恋人の名を刻むことに喜びを感じる革命もあるのかと強い感動を受けた。そんなわけで、キューバ革命にいささかいかれていた私はフライボイアンとはどんな花の咲く木だろうか、こういう歌を革命運動推進のために歌えるキューバ人とはどんな人間たちだろうかという気持で常にキューバに目を向けていた。その後の推移を見ても、政治的・経済的に苦しい立場にあるにしろ、目と鼻の先にマイアミを控えながら、社会主義大国のカサにすっぽり入ることもなく、いまだに亡命を認め、アメリカ人の豪壮な別荘をそのまま施設に使って、ボンゴを叩きながら暮しているこの型破りな中南米の社会主義の国は誰にでも限らない興味を湧かせるのだろう。しかしキューバは私に遠い国であり、想ってみるだけの世界であった。そんなところにキューバコースが現われてふと心が動いた。それにしてもメキシコについてはサポテンとソンプレロしか知らず、まして今のところ国際会議に出かけて述べるだけの自己主張も情報も持たない私であつてみれば、年寄りや子どもたちを置いて八方破れの状態で日本



を離れる決心をするまでにはかなりの時間とエネルギーが必要であった。しかし個人入国はむずかしい国ときかされてはこのチャンスのをがしたくない。教科書通りではない、アメリカの中の革命をこの目で見たいという気持ちに揺さぶられた。旅費はかつて仕事をしていたときとっておいたもので足りそうだし、雑費は日ごろただばたらき（目下二世帯の主婦を兼ねているから）をしている分で埋め合わせ、年寄り子どもには因果をふくめてといった調子でこの旅に参加したのだった。

キューバ人のたのしさ

ハバナ空港、Jose Marti de Habana だったのは西の空が茜に燃え、遠い山々や建物のシルエットが黒々と浮び上る午後六時だった。メキシコを立つ前に「よほど覚悟しなければいけませんよ。常にどこからともなく監視されてますからね」「ホテルのそとを一人で歩かないこと。事と次第によっては強制収容もあり得ます」などという言葉を鼻の先であしらってはいいたものの、帰りの飛行機はキャンセル待ちで、いつ出国できるかわからない国への入国手続きにはそれなりの緊張もあったはずだが、その通路を通るとき、日に焼けた日本人のような肌をしたガッシリと目鼻立ちの大きい係官が私の顔をしげしげと見て、自分の眉間を指さして何とものたのしそうちに笑ったとき、その緊張感は消しとんでしまった。「お前さんのほくら、ずい分大きいね。面白い顔だよ」といっ

ているくったくないやさしいひとみにつられ、私も意味もなく「恩」——これしか言葉は知らないのだから——と言って笑い出してしまった。それにしてもキューバ人とは何とつまらないことに笑いを見つけるのだろう。こともあろうにここは入国管理事務所である。まるで友人の国に来たようだ。荷物検査で仲間の一人がいくら民間客だからといってもわからず梅干をとり上げられたが、これもきつと数人のキューバ人が首をかしげたあげく、たのしい笑いの種になったに違いない。

飛行機を降りてから一度も階段を登り下りせずボーチまで出られるこじんまりと整った空港の前には、超大型観光バスが待っていた。荷物は車体の脇に収納でき、席に座ると外が一望できるような幅広い窓ガラス。後部にはトイレと、ベダルを踏めばいつも冷めたい水の出てくる流し台。そしてまさに涼しすぎる冷房車。私は錯覚を起こした。ニューヨークのファーストクラス・ツールストになったみたい（ニューヨークのことなんか何も知らないが）。メキシコでさえバスツアーは車内から写真をとるのは不可能なほどガラス窓は汚れていた。そこから吹き込むなま温い風に四時間もさらされていたのだから。しかしこの感激的な冷房車のおかげで、もともと冷房に弱い私はすっかり体調が狂い、本命のハバナをもうろう状態で通過するはめになったのだが。

空港を出るとそこにはハバナがあった。一九五九年一月カストロがハバナに入城するとき行進した独立通り。



暗闇の中に間隔を置いて二、三階建ての家屋の灯が淡く浮ぶ。この闇の中には、農家、学校、工場が眠っているそうである。工場の広場で残業の労働者が球技をしているのかと思うと、そこは精神病患者の施設で明るい照明の下でスポーツによる一種の治療が行なわれているのだそう。それにしてもこのまっすぐな独立大通りは灯の気が少ない。たまに電灯のともるポーチに人の群が見え、熱帯樹が大きな影を落としていたり、あとは青い字や赤い字で、一人民の手で革命を前進させよう―とが、一回党大会の成功を人民の手で―などと言っているのではないかと思われる立看板や、時折折りはイルミネーションの字が鮮やかに線を描いているくらい。黒人女性ガイド、テレサさんの説明は夜の中に姿をかくすハバナと、キューバの地形、人口、そして栄光の革命の歴史から始まって、バスはやがて、「ソ連カラー映画上映中」などと看板の出ている映画館や、有名なホテル、リブレが立ちならぶ繁華街に入った。私は今、黒人女性ガイドと書いたが正しくはキューバ女性ガイドというべきなのだ。しかしハバナには黒人・白人・日本人くらいの黄色人もいてすべてキューバ人であるのだから、日本で言えば「小麦色の美人ガイド」というほどの意味だ。そして文盲絶滅運動から数年しかたないキューバでは英語も話すバスガイドというのはどちらかといえば知的職業ではあるまいか。そういう意味での黒人女性ガイドなのである。

いささかなつかしい気のするほどクラシックな八階建てのホテル・ナシオナルに着いて先ず案内されたのはレストラン・パリジエヌヌ。正面に広いステージがライトで明るく浮かび上がっている以外は、五、六十置かれてある小テーブルの上にもされたローソクの火だけが、客の顔に影をおとしている。ワイシャツに背広姿のドラーマーやギタリスト。「あれはきつと国家公務員よ」。到着以来革命の国キューバに肩すかしを食ったような気持になっている私は少し意地悪な観察になる。レポルシオネールとかフメールとかユオベラシオンなどという言葉がところどころきざとれるが意味はさっぱりわからぬ。ワインカラーのローブに豊満な体をつつみ、ステイジいっぱい歌いまくる女性歌手の声量の豊かさ、表現の濃密さ。私はふと、イタリヤの有名歌手が即興の歌を所望され、仕方なく目の前にあったメニューを見事に歌い上げて言葉の通じぬフランスの聴衆を感涙にむせさせたというエピソードを思い出す。これもその類かもしれない。しかし音楽は耳で感じればいい。おそらく一流歌手であるうその深みのある声と悠揚迫らざる熱演に私はうっとりききはれていた。親子兄弟でのオペラ風な出し物もあった。しゃれたベストを着た歌手もいるが、メーキアップを落とせばそのまま客と変わらない服装である。アベック。三、四人の男女のグループ。家族連れ、あたりを見回すと、お客はさほど着飾るでもなく、こざっぱりとした普段着で酒を飲み何かつまんでいる。クライマ



ックスにくるとステージに合わせて拍子を取り、合唱する。フィナーレが流れるころ、私たちの食事も終わるようになっていいる。旅に出て初めてのフルコースの晩さんに安心して、もうおなかいっぱい——メキシコの食事の苦勞はきつと誰かの話しに出てこようというものだ——とお互いに顔を見合せて笑っていると、蝶ネクタイのウェイターが丁重な物腰でこんもりとしたアイスクリームをサービスする。これはぜひ上がっていただきたいというような調子である。ねっとりした本物の味にありがたく全部頂戴する。コーヒーがきりげなく運ばれ、一口で止めようと思ったが、トロリとこくのある味はとても残すにしのびない。最後に致命的だった飲物。テレサさんが「これがダイキリ」とささやいてくれる。昔どこかで聞いた名前だ。私はもうのどもとまで詰まった感じであったが、この涼し気な飲物はなんと素直に私の体に染み通ったことか。ラム酒とライムジュースに氷を浮かせたこのカクテルは、かたくななイデオロギー、ちっぽけな社会観、小意地の悪い観察を直ちにとろかしてしまいうる物であった。

ここまで書けば大方の人は「観光ルートに乗せられたのね」というだろう。たしかにそうかもしれない。私たちのこの国での行動はキューバ国営観光産業局にゆだねられているのだから。しかしこのレストランへの招待は（私はのびてしまつて行かなかつたが、翌日の夜食もハバナ最高というナイトクラブであつた）遠来の客の度肝

を抜くためのものであろうか。このもてなしは、こののどもとをとるかすダイキリは、外国の客の目を何からそらせるためのものであろうか。だいたい私たち日本の女はこのナイトクラブと言えるようなデラックスなレストランは金持の男がひまをもて余して遊ぶところであり、へそくりをためて女が出かけるようなところではないと考えているが、長いことスペイン・アメリカの植民地として、その飲樂の巷としてヨーロッパ文明を継承してきたキューバではごく当たり前のもてなしなのかもしれない。たとえ革命を経たにせよ、そなたやすく民衆の習慣を、特に遊びの習慣をすっぱりと変えることの方が不自然なのかもしれない。あの酒好きな、のんきなことの好きなカストロさんが、こういうたのしい場所をなくすなんてかえつておかしいことかもしれない。とすれば、たとえ観光ルートにせよ、今はごく一部の人の憩いの場所であるにせよ、これも一つのキューバの現実と見てもいいのではないか、とすでに集中力のなくなった頭で考えながら、お姫様でも出てきそうな大きな鏡とキャビネットのある部屋にもどつたのだが、ここで私はもう一つの現実と鉢合せしてしまつた。シャワーを浴びようとすると塩水しか出てこない。どの蛇口も冷たい塩水。この分ではトイレも海水で、そのまま海に通じるのかもしれない。私は広々と涼しい部屋で顔を逆なでされたような気持でベッドにもぐつてしまつた（キューバの名譽のために、このときは、ちょうど水道が故障で、いつ



もはちゃんと真水とお湯が出てくるのだということを知り、その後キューバ大使館の人から伝え聞いたことを書き添えて置こう。

メキシコ湾に面した私たちのホテルは、前庭に広々と芝生がひろがりプールの二つ三つある閑静でせいたくなくところだが、U字型の建物の屋根には一對の鐘楼が見られるように一九二〇年代のかなり古い建築様式であった。エレベーターも檻式の扉でゆっくりと上り下りしている。廊下は広いが人氣がなく、カッと照らす電灯がかえってひやりとする感じで夜など鍵を何度かたしかめたものだ。ホテルに泊るほどキューバ人はひきでもなく、また仕事でホテルに泊らねばならぬほど忙しくもないのである。ほとんどが外国の観光客であるらしく、仕事で来ている日本人も数人見かけた。

私たちの部屋は年代物の調度品が必要最低限をなわっていたが、どことなく身の置きどころのないようながらんとした感じで、窓から見える海にやっと色彩を見いだす始末。キューバの熱気からは見離された一隅であった。

見残し聞き残しのキューバ

こんな調子でハバナを書いていたらきりがない。翌日も翌々日出国するまで、私たちは、テレサさんの言葉で言え「シーサイ」つまり Sitting Hバナ観光をしたわけだが、その際下車できたのは、婦人連盟、タバコ工

場、ハバナ旧市街、免税品の店であった。それらの詳しいことは他の方々の稿にゆずろう。それに私の貧弱な胃はキューバのもてなしに耐えかねたらしく翌朝は冷汗をかきごちそうをすっきり清算してしまおうほど調子が狂ってしまい、加えて冷房車から出られないとあって見聞きすることをメモすることもできないほど参ってしまったのだから、ハバナの労働者のようす、市民生活の水準、女性問題などを報告する資格もない。あとから人に聞くと、バスの中で必死になってガイドの通訳をしていたそうであるが、「労働者の平均賃金は？」と質問した途端、バスは白々とした廟の立ち並ぶ墓地に入ってしまった。婦人連盟では突然怪しげな英語をしゃべらせられ、ずいぶんとキューバと日本の女性問題に誤解を招いたのではないかと責任を感じるほどである。

保育園、小中学校、都市学校、できればキューバの映画を見られたらと欲張っていたのだが二日の滞在では無理であった。受け入れる方としてもいつ出国するかわからない客のスケジュールをたてるのは困難であったろう。

面積の問題ではなく、ハバナは大きい、ハバナの空は広いというのが私の印象である。独立広場の西側は高層ビルの立ち並ぶ官庁街であるが、ほとんどは植民地時代そのままの広い敷地に木立ちにかこまれて、二階建て、せいぜい三階建ての家屋が大通りをはさんで並び、保育



園、学校などに使われている。上流階級の住居、外人の別荘であったのか樹木の奥にかくれた豪邸は大使、領事館など政府関係者が住んでいるらしい。ともかく学校・教育機関の多い都市である。

タバコ工場の印象は大切なものがきつとこれも誰かがいいルボを書いて下さると思う。平均年齢の高いあまり豊かそうではない労働者にまじって、衣装をつけ髪に花でもさしたら今すぐカルメンか何か踊りだしてもおかしくないようなスペイン風の顔立ちの女性が、タバコの葉を巻きながらチラッと私たちを見ていた。

辛うじて話しができたのは、ガイドのテレサさんと婦人連盟の渉外係の女性。双方あまりたしかでない英語であるが、彼女たちの会話には必ずと言ってよいほど「革命前は」という言葉が出てくる。革命前はこうであったが現在はどうなっているというパターンに私はキューバでの一つの価値判断を見たような気がする。抽象的でも観念的でもなく、自分が関わり合った、たしかな現実、革命というものを一つの規準にして彼女たちは物を考える。そして彼女たちにとっては常に革命前より現在の方がずっと良い状態であるにきまつている。キューバに現在住んでいる人にとっては革命によって失われたものは何もないのだから。慎重でしかも楽天的な彼女らは口に出してこそ言わないが、おそらくその言葉の奥には、現在はどうだが将来は……という想いがしまわれているのではないだろうか。「あれがベトナムの大使館で

す」と前を通る度に二度も三度も説明したテレサさん。カストロの写真と並んでホー・チ・ミンの大きな写真をかかげている婦人連盟。ベトナムの闘士の名をついだ学校のあるハバナ。革命によって失われる何物も持たない人民の連帯感であらうか。

ハバナの広さが産業の、経済の立ちおくれによるものであるのか、それとも人間の生きるための広さなのであるか、私にはわからないが、しかしキューバの人々が毎日のその生を思い切り享受し、人間らしい生活を送るための広さであることを、為政者は自分のこととして感じているのではあるまいか。為政者であり革命であると同時に、民衆と共にたのしみ働き苦しむことのできる人間だからこそ、近代社会を築こうとするとき、あわてて先進国のまねごとをするに慎重なのではあるまいか。「コンパニエラ・カストロ、あなたの国をちらりと見せてもらいましたよ。明るい清潔な都市ですね。もう少し長くいられたらどんなにたのしい国であるか、またどれほどの苦しみもあるかということがわかったかもしれない。最低生活を保証され、肩ひじ張らず生活している人々を大切にして下さい」。ビルの壁面に大きく掲げているチェ・ゲバラの写真を見、撮影禁止の独立記念塔をフロントガラスの向うに眺めながら私は挨拶をした。

これは経済的には資本主義先進国の国民であることにうしろめたさと不甲斐なさと、ある種の不満を背に負い



ながら、言葉もわからず、ただバスの中からハバナを眺めた旅行者の大変無責任な視覚的感想にすぎない。

濃緑の太木に真赤なりボンを結んでちりばめたようなフライボイアンの花が咲き乱れる大通りを通ったが、その幹に名をきざんだ恋人たちにも会えなかったし、文字を習うことがあるいは苦痛であったかもしれない人々とも話しはできなかったかわりに、私は空港に向かうデラックスバスの中から、田舎のバスを思わせる市内バスの乗客に、ほこりだらけのボンゴツ自家用車の人々にはほえみかけた。その人々は私の視線をすっかり受けとめてはほえみ返し、ときには手を振ってくれた。いろいろな心残り、疑問を抱きながらまだ亡命者が列をなす空港から、突然搭乗できることになったキューバ航空の飛行機で、私たちは帰国の途についた。

(主婦)

鳴り響いた鐘

——メキシコ・キューバの旅を終えて——

斎藤千代

メキシコ集会を終えて二か月が過ぎた。

予想をはるかに超えた強烈な衝撃の興奮は次第に静かなものになっては来たが、衝撃の強さは決して小さなものにはなっていない。それどころか、日々にたしかに、

心の中に根を張ろうとしている。その衝撃とは何だったのか、旅の心象を振り返りながら考えてみたい。

旅の果ての旅

旅に向かう心はいつもあからむものであるのに、旅立つ朝、心はすでに砂色に疲れていた。月余にわたる準備、キューバ入国をめぐる逆転また逆転は、一つの「旅」でさえあった。その「旅」のさなかに、早くも多くの仲間が落伍していた。妻の外出をゆるさない夫、妻の旅には多くを割けない家計……。 「あごろ」につどう人々は、家庭緊縛状態の日本の主婦一般に比べれば、多少の自由度を持つ人々ではあったが、時間的・経済的・心理的束縛は、まだ十重二十重に女を取りかこんでいる。行くことが最終的に可能になった人々にとっても、情況は容易なものではなかった。老人と子どもを置いて二週間家をあける状況整備に、みるみるやつれていく仲間たち。

そのつらさを耐え得たのは、世界会議への情熱というよりも、これほどまでに私たちをさえぎる壁、不可能という限界に挑んでみなければ、新しい世界は開けまいという想いであつたように思う。

会議都市メヒコ

メヒコ市街は、その奇怪な壁模様、高低むそうさに立ち並ぶ建物群のアンバランスなど、デモ・ニッシュな魅力で私たちを迎えた。



町かどのあちこちから、ふいに音もなくさし出される黒い乾いた手。その片方の手には、ふろしき包みのようにショールに包まれた赤児。例外もなく物乞いは女であるという現実にもまして、深夜のマリアッチ広場は、心に深い釘を打込んだ。男のボンチョに包まれて闇に消えるか細い足の娘。チョコレート売りの五歳ほどの女の子の、頭に手をあて、「こんばんは」と片言のスペイン語でよびかけてもまばたき一つしない。その幼児のチョコレートを買う男がおり、女を買う男がいる。

このメキシコで、いまだ女の差別が語られようとしている。——語ってはいけないのかと思ひ、だからこそ語らなければいけないと強く思い直す。貧困・無知・貧富の格差、それらこそ女性差別と根を一にするもの。紙の上の知識はいま激しい現実の迫力となつて心を揺り動かす。

はじめての世界会議

金色の母子像がメキシカン・ピンクの国際婦人年マークに映えるトリビューンの会場セントロ・メディコ。

とりどりの民族衣裳の人々が、喜々として急ぐ。うす青色の「あごら」のリーフをその一人一人に手渡しながら、心がようやくあからむのを感じていた。「サンキュー」「グラーションアス」と受取る手の表情のあたたかさ。女から女へ伝えようとするメッセージが、ここでは待たれているのだ。世界ではじめての、世界の女たちの民間集会。新しい歴史のとびらが開かれようとしていること

を、輝やく目の一つ一つが語りかけている。

エチベリア大統領夫人の開会の辞が終わる。ふたたび会場前のテラスに吐き出された人々は、短い時間を惜しむように質問を投げかけあう。「あなたの国の女性の状況は？」

*

二日目。アメリカ人司会者が牛耳る中で、明治中期の日本の状況を想起させた「第三世界の手工業分科会」。

そして、先進国型解放論を色濃く打ち出した「平等・発展・平和分科会」。白髪をふり乱し、ピンクのドレスに包まれた身を乗り出して「女性の敵は女性自身の中にある。目覚めよ。力を持ち、権利を得よう」と絶叫したパワフル・フリーダン。それは内容の是非はともかく、彼女が、確固たる自身の哲学に立つて行動してきた運動家であることを物語っていた。比較して日本の井上繁子さんやユーゴ代表の数字の羅列は国際会議ではクールに過ぎたのではあるまいか。もしここで市川房枝さんが壇上に立ったとする。その髪の白さ、そのシワの深さは、語らずして日本の婦人運動の歴史を訴えるであろう。それはフリーダンをしのぐ迫力であったかもしれない。井上さんが初日にパネラーとして登場することさえ知らなかった私たちの情報不足。そしてそのパネラーを支えることができなかった日本の婦人運動の力量不足。

その弱さ甘さを鋭くついたNOW所属米邦人、米岡美さんの爆弾質問「井上発表は日本の真実を伝えている



のか。日本から訪れた二百人の女性よ、黙して帰るのか」

*

すさまじい迫力であったという米岡質問の瞬間、残念ながら私はキューバ入国折衝のため別室にいた。会場に戻ったときは自由討論に入り、発言を待つ人々の長い列が壇の下に長く伸びていた。残り時間はわずか……と、時計を見ながら席につこうとした私を、興奮した声がさへぎった。「なぜ二百人も日本人が来たのかと問われて、誰一人答える人がいないのです」

長い列を見渡した。日本人は一人もいない。瞬間、はじかれたようにからだに向かって歩き出していった。

なぜ二百人も来たのか。地球の裏側から押し寄せた二百人は、韓国人でもベトナム人でもない、日本人だ。それをGNP二位の象徴と片づけることは簡単だが、単にそれだけだろうか。旅を志しながら次々と落伍した仲間たち。二百人も来たと同時に、二百人しか来られなかったのも事実である。女が家をあけるむずかしさ、その中をあえて来た人々の胸にあふれる思い。——男子の五〇%にすぎない女子労働の報酬、就職差別、昇進、昇給差別、働く人々の前を次々にさへぎる女の道標。そして一方に閉ざされた主婦たち。女を縛る目に見えぬ慣習の鎖。——自由を得、経済力を得、法の前に平等になり、なおかつ多くの問題をかかえている日本の女たち。

「なぜ『あごら』をつくるのか」と問われるのとそれは同じ質問であった。「なぜ旅に出たのか」という問でも

あった。列に並びながら、私はペンを走らせた。思いがふれる。それを伝えることのできない貧しい語学力。

井上さんの隣りに坐る顔見知りの高木佐和子さんにメモを渡し通訳を依頼する。そのときマイクの前に踊り出た田中美津さん。「井上発言は真実を伝えていない。私たちは優生保護改悪阻止の運動を……」きたえられた、よくとおる声が場内にひびく。その声の大きさを押しつぶすように、司会者の顔がみるみる怒りに赤らむ。「日本語はダメッ!」

二百人の日本人は国際会議でしよせん孤児であった。それを知らなかった私たちの甘さ。無意識の大国意識。

「日本語はダメッ! 英語で、二分だけ!」

私に加えられた先手攻撃。日本語で話し、高木さんに訳してもらう計画は、一瞬のうちに崩れた。どんなにたどたどしくとも、ここは英語で話さなければなるまい。続いて二度のルール破りは日本人を誤解させるだろう。「なぜ二百人も来たのか。第一の理由は、新憲法で法的に地位が平等になり、力を持つようになったからです。第二は、それにもかかわらず実生活では不平等だからです……」

声がふるえ、からだがふるえた。「斎藤さん、がんばってエノ!」長沢さんの声が聞こえる。「田中さんの次にすぐしゃべらなきダメッ!」と私を列から引きずり出し、マイクの前に立たせようとした川上さん。会場の「あごら」の人々の熱援とともに、日本で働く、生きる



仲間たち、そして志しながら旅することのできなかった人々の姿が、目の前いっぱいにひろがっていた。

壇上の高木さんが私の不完全な英語を補ない、拍手が遠くから近くに寄せてきた。

*

いきなり抱きつかれ、頬から頬へ伝わった熱い涙。

「あなたの運動にカンパしたい」いつのまにか手の中に押し込められていた八千円近いお金。それは、無謀にも、たどたどしい英語で何かを訴えずにはいられなかった日本人へのあわれみであつたろう。同じく訴えたい思いを秘めたメキシコの、カナダの、アメリカの女たちのシンパシーであつたろう。どんなにみつともなく、どんなに非難されようとも、だまって帰るわけにはいかなかったという思いとともに、おのれ自身の甘さがこたえた。日本語で話すことがゆるされるかもしれないと思つた認識の甘さ。英語の原稿を書き、それを訂正してもらおうとせずに、通訳に頼ろうとした自立心のなさ。瞬間、英語で二分だけと迫られて、選ぶべきことばを持たなかつた判断力のなさ。

二分間しか話せなくて残念、と添え書きして、*"Japanese Women-Past and Present"*を事務局に提出したのは、そのおのれの甘さを恥じたためでもあつた。

マヤの遺跡で

ジリジリと肌を灼く熱帯の太陽の下を登りつめたウシ

ユマルのピラミッド。青くかすむ地平はグアテマラ。地平に至る濃緑の樹海の中に、遺跡の頭が小さく幾つも見える。広大なマヤ文化圏。それを築いた人々は、どこに没したのか。昨日見たメリダ博物館のマヤ神聖文字が頭をよぎる。これほど精緻をきわめた絵文字があつたのかと息をのんだその文字は、解読のすべがないこと。ぼう大なマヤ文書を収めたマニ文書館のすべての文書は、スペインの宣教師の手で焼きつくされたのだ。

異なる価値感への不寛容。神という権力の名のもとに行なわれた暴行。民族の誇り高い文化が、かくも完全な形で抹殺されたということ。

メヒコの市街で初めて出会つたメキシコ人の風貌にハッとしたこと。よくも日本人に似ている。そしてわずかにちがう。そのわずかな悲しいちがいはモンゴロイドに加えられたスペインの血なのだ。侵略とは、こういうことであつたのか。百人といい、三百人、五百人ともいう、わずかなスペイン人の侵略が、民族の相貌をこれほど変えてしまつた事実。恐らくは夫の、父の、面前で犯されたこともあつたであろう無数の女たち……。

侵略とはこういうことであつたのか。歴史上の数々の事件を、自分は今まで何とうかつに読み流していたのだらう。しかもそれは過去の歴史の問題だけではあるまい。ベトナムで行なわれたこと、いまメキシコで行なわれていること。それはまた日本が、第三世界で現に行なっていることでもあるのだ。侵すことを知り、侵されること



を知らなかった単一民族、日本人の、おごりと甘えの構造。

ふたたび会場へ

メリダからメヒコ空港へ。セントロ・メディコに直行。分科会の会場をたしかめようと掲示を見て、アッと驚く。"Japanese Women-Past and Present: Conference Room 6"

——私たちのための分科会が設けられたのだ。時計は五分前。二階にかけあがる。五人、六人、英語圏の人々が集まってくる。そして早耳のマスコミの人たち。「あごら」の仲間も他の会場から駆けあがってくる。提出したリポートを取り戻しに事務局に急ぐ人、会場に通訳を探しに走る人。

語学の壁の中にむなしく三十分がすぎる。これ以上待たせてはおけない。壇に立ち、おぼつかない英語で語り始めたとき、高木佐和子さん、田中さん（ハワイ大学生）らが駆けつけて下さる。質疑応答に切りかえ、会場のなるべく多くの方々に発言して頂くことにする。青木さんの華麗な日本語が響く。しかしその華麗さのゆえに、英語の訳は少しづつちがっている。私はふと、江戸時代の「通辞」ということを思い浮かべていた。そして学ぶこと、知ることをゆるめられなかったころの女たちが冒された多くの権利のことを。

国際会議を「傍聴しよう」と思い、参加することを考

えなかった私たちの甘さ、準備不足。それを情報不足と言ってしまうは簡単だが、もっと本質的なものが潜在していたことに、やっと気がついた。たとえばリポートを提出する。それがきつかけで分科会が開かれるとは夢想もしない。なぜか。せいぜい事務局の人が読み、あわよくば会議の資料として残されることしか期待しないからだ。なぜ期待しないのか。常に無視されること、却下されることに慣れ続けてきたからだ。

民主主義という。しかし私たちはほんとうに自分の頭で考え、自分の足で立ち、あらゆる疑問に果敢に立ち向かったことがあるだろうか。抑圧に対する自由、神という名で行なわれたイントレランスに対するトレランス、それらの一つ一つを、血を噴き流し噴き流し、我と我が手で勝ち得た経験があるだろうか。もしもほんとうの自由の概念、権利の観念があったなら、税金を支払う者として、出発前の国内連絡会でも官僚をもっと突き上げていたはずだ。世界行動計画案は、なぜ事前に明示されなかったのか、国連本会議で日本代表は何を発言するのか、基本的に南北問題にどういう姿勢をとるのか、その中で女性解放をどのように位置づけるのか、等々。あのととき私たちに知らされたのは首席代表が藤田たき氏、ほかは未決定という一事だけではなかったか。

二百人の日本人が会議を傍聴しながら、同時通訳の交渉ができなかった。地下一階、各国の活動を示す展示場にも日本のパネルは一枚もなかった。それは他を責めて



よいことだろうか。日本の婦人運動の力量を示したのであるまいか。その運動の力の弱さは、侵さず侵されぬ、人間関係の欠落に由来しているのではあるまいか。

ハバナで

閉幕のベルとともにカーテンが降りるように、銀ねず色の闇は天の上から一挙に押し寄せ、くれないに染まった空をみるみる太い筋に狭め、余光も残さず太陽は消えた。ハバナ空港、一瞬の日没。——ついに来たこの遠い国。

*

トランベットが、ドラムが、キューバン・リズムを空に噴きあげる。黒から白へ、グラデーシヨンの見本帳のように多彩な階調の肌色の人々。その肌は、ここでも侵略をまざまざと物語る。いまここでキューバ人と呼ばれる人々、そこには本来キューバ人を称すべき人々インディオは一人もいない。ジェノサイドのあとに、スペイン人が、アメリカ人が、移り住み、アフリカから奴隷を輸入した。その暗い歴史を負って、なおかつこの明るさ。町を歩く。空気のように町にとけこむ自分を感じる。

肌の色、背丈、性別、すべてを忘れる。ここには同じ立場の人間がいる。そのだれもが等しく光っている。肌色の差は、メキシコのような「階級」を意味しはしない。タバコ工場の前、解放前と解放後のパネルは、十五年の実績をえがく。むかし——売春婦、物乞い、スリ……。そしていま——学ばず、働く人々。社会が変化し得ること

をパネルは事実として突きつける。メキシコからのキューバ入りがあのように難航した理由にハタと思い至る。社会が変わり得ること、そしてそのための手段を知られてはならなかったのだ。

予断にとらわれまいと思ひ、事実だけを見つめたいと思ひ、きびしい目つきで歩いてみた私も、この町の人々の目の輝きだけは信じないわけにはいかなかった。

その町で日本人が果たしているのは企業進出と売春、とまたしても知ったショック。

高度成長十五年という。しかし高度成長志向百年ではなかったのか。日本が近代国家になろうとして百年、学ぼうとした西欧の近代。それは自由と解放の歴史ではなく、侵略と帝国主義であった。敗戦はその痛烈な報酬であったはずなのに、なおも経済侵略を行なう、その根底の他人を侵す精神構造。

被侵略者は神経を鈍麻させられ、やがては痛覚を失う。その無自覚は、侵略者の神経を鈍麻する。侵す痛み、侵される痛み、日常的な侵略の中に失っていく痛覚。それを男と語り合わずして、女の解放があり得るだろうか。第三世界との連帯を免罪符のように唱え得るだろうか。

旅を通じて、侵略という意味を、肌に突き刺す思いではじめて知った。それは侵すかなしみ、侵すおそれであり、女という被害者の立場もまた人を侵すかもしれないという恐怖でもあった。侵されることに慣れる。そこから侵すことが始まる。



月刊 婦人展望

市川房枝編集

婦人問題、婦人界の動向など、最新のニュースを満載、充実した16ページ。市川先生を中心に、婦人問題関係のベテランによる執筆と編集。お申し込みは下記へ。

1部 180円
半年前金 1000円(送料共)
1か年前金 2000円(ク)

発行所

財団法人婦人会館出版部

東京都渋谷区代々木2-21-11

郵便番号 151

電話 東京 (03) 370-02389

振替 東京 170790

何かちがっていたのだ。根本的にちがっていたのだ。「知る権利」という。その裏返し「知る義務」に気がつかなかった私。求めて知り、知ることによって追求し、一つ一つ門を叩いてこそ、とびらは開かれるのではあるまいか。それに気づくのに、何と遅すぎたこと。たとえば耐えること、無条件に耐えること、それはやさしさではあるまい。知り、求め、おのれを切り開き、人に切り込み、なお残るやさしさこそ、ほんとうのやさしさではないだろうか。

「あごら」は、静かにおだやかに、やさしい運動でありたいと願ってきた。それはほんとうの静けさ、おだやかさであったのだろうか。

亭々と空を支える大王椰子の葉かげは大きく伸びて空を覆う。葉に区切られたわずかな夜空に隙間なく星が輝やく。星を仰いで私は声を放って泣いた。それは、おのれの中のあいまいな部分が、音立てて崩れる瞬間であり、

二十余年、影法師のようにひきずってきた婦人問題が、わが身の問題として、からだの中に踊り込んだ瞬間であった。

旅は終わった。

婦人問題が、今や地球レベルで語られる時代に入ったことを知った旅であった。女性一年ともいうべき新しい世紀の到来を感じた旅でもあった。鐘は遠い地の果てから鳴り、次第に響きを増して耳底に消えぬ音色を刻んだ。十八人十八様に受けとめた鐘の音色は、あるいは低く、あるいは弱かったかもしれないが、少なくとも私には、終生消えぬ音色となろう。

旅は心を風化した。ぼろぼろのわらしべほどに切れ切れの心を抱いて、それでも今ほどわがいのちをいとしみたいと願っている季節はない。それはなぜなのか、生きて何をなし得るのか、心をこめて考えてみたい。

アプレ・メキシコ——メキシコの旅が生んだ行動

『女のグループ連絡会』を呼びかけ

メキシコで女の連帯の不備を痛感した「あごら旅の会」のメンバーは、メキシコ集会参加者は、帰国後、女のグループ連絡会を全国の女性グループと職能団体によびかけた。

七〇年代に入って女性グループは急増しているのに、相互連絡は少なく、どこにどんなグループがあるのかさえ、さだかでない。連絡をとり、情報を交換し、連帯を深めて底上げの力にしたいというのが願い。それだけのグループの目的や特徴を相互に把握し、効率的に運動を行なう。

まず十一月五日、誰でも発言できる自主集会とデモを行なおうと計画。

今後、各グループ共催のティーチンや勉強会を行なったり、技術交換をするほか、国や地方自治体による世界行動計画の具体化その他、女に関する行政も見守っていききたいな

ど、夢は数々。多様な価値観に立つ

各グループだけに、女だからということだけで連帯することはむしろいいが、それぞれの目的や戦術を尊重しながら、女の前進のために力を寄せあいたい、話合いを重ねている。

現在はまだ準備会の段階だが、①性格は連絡会、上部団体ではない。

②参加各グループの自主性を一〇〇%尊重する。③会費は月額五〇〇円。が方針。略称は「グル連」。

「あごら」「第一木曜会」「国際婦人年をきっかけとして行動を起こす私たちの会」「サバト」「鬼の児」「バラ」「酒」「新宿リブセンター」などのほか、各大学の婦人研や「これから名前を考えます」というグループ、無認可保育所グループなども参加。

「グル連」では、二、三名程度の読書グループなどの参加も待っている。仮連絡先は東京都新宿区新宿1の9

の6「あごら」

日弁連人権大会で婦人問題の
宣言文を

日本弁護士連合会では、毎年、人権大会を開き、その年いちばん問題になっていることを政府に提言しているが、発足一〇〇年目の今年は、日弁連始まって以来はじめて婦人問題を取上げ、底辺の働く婦人の労働条件の改善を中心に、ILO一〇三号、一一一号、九五号勧告を早急に批准し、それにともなう立法措置を講ぜよという宣言を出した。

これは、婦人弁護士四一五人がグループをつくり原案をまとめたが、「あごら旅の会」に参加した犀川千代子さんと井田恵子さんが、中心になって活躍したとのこと。「メキシコに行つて、行動しなければ、と痛感した」と、犀川さんたち。

ILO総会報告

婦人労働委員会に 出席して

前労働省婦人少年局婦人労働課長

● 赤松良子

ILOの総会は毎年ジュネーブで行なわれる。議題は年によってまちまちだが、今年には国際婦人年ということもあって、議題の一つに「婦人労働者の機会および待遇の均等の促進」が取り上げられた。

ILOは労働問題を取り扱う国連の機関であるから、婦人の問題を労働の面から取り上げたわけで、国連の目標「平等・発展・平和」の中の平等をまず問題にした。婦人労働者の機会と待遇が男子の労働者と平等になることを目指して、行動計画を考えたり、宣言を採択したりした。

結論から先にいうと、この会議では、一つの宣言と二つの決議を採択した。決

議の一つは、宣言自体は非常に抽象的なので、その原則に適應するために作られた行動計画である。これは性格としては国連の行動計画の労働に関するところをILOが特にくわしく考えて作ったというような、全体と部分の関係にあるのではないかと思う。内容も労働の部分に集約されているが、国連のそれと同じく、男女の平等を目指すことが根底を貫いている。

ILO総会の会議の方法にはきまったパターンがある。三者構成といって、政府、使用者、労働者代表の三者がそれぞれ投票の権利を持つ。それぞれのグループ内で予め討議をしておき、採決に際してはそれに基づいて、挙手や投票を行なう。日本政府代表二〇人のうち、婦人労働委員会に参加したのは私一人である。労働組合からは総評と同盟から合計三人の女性が出席した。使用者側はこの委員会専属の出席者はなかった。委員会で議論し採択されたものは、もう一度本会議で考えるシステムになっていた。

行動計画と宣言は会議に先立ち、各国の意見を盛り込んだレポートを見てお

き、それに対して修正案を出すという形で、意見表明のチャンスがあった。もう一つの決議は、会議の直前、スウェーデン、ノルウェー、フィンランド、デンマークの北欧四か国が共同で提出した「職業および雇用における男女の地位ならびに機会の平等に関する決議」である。これら二つの決議、一つの宣言は結局ほとんど原案通り採択された。

メキシコの会議がかなり政治的議論に時間を費したのに比較して、ILOの方は、本会議が並行して三週間ずつと開かれていたし、政治的議論のなされる委員会も沢山あったので、婦人労働の委員会は政治的対立が持ち込まれることはあまりなかった。ただ一度「新世界経済秩序」という言葉をめぐって、アメリカと開発途上国が対立したことはあった。

この委員会に参加したのは政府側六〇名、使用者側二七名、労働側四二名の委員で、議長はボイランド代表のナスコフスキーという男性だった。全会一致あっての議長就任だったが、各国政府の冒頭演説の際に、慣例の「議長になられておめでとう」のかわりに「この委員会で男性

が議長をつとめるのははなはだ遺憾なことである」という言葉から始める代表が大変多かった。あまり何人もの人が延々と同じことを言うので、私などは議長にちょっと気の毒な気がしてそういう感想を述べたが、日本人はこういう点、少し淡泊すぎて、だから婦人の地位も向上するのが遅いのか、もう少ししつこく言わなければいけないのかとも思った。

実際の討議では三二〇数個の修正案が出て、一つずつ討議することは無理なので、委員会では行動計画のポイント3までやり、あとはワーキングパーティ（作業部会）にゆだねられた。ワーキングパーティにはそれぞれ政労使から五か国ずつが参加し、文言をどうするか、どの修正案を採択するかなどの論議を行なった。残念ながら日本はそのメンバーにはならなかった。

最初の総括の討議のときの日本の発言内容は、国際婦人年に当ってILOがこの議題を取り上げたことに賛意を表し、日本では法制上は戦後男女の平等はかなり確立されたが、実際上は男女の格差がかなりある、国際婦人年を契機になくし

ていきたい、というようなものであった。各国政府の発言の中で、印象に残ったのを以下に述べてみたい。まずアメリカは「職場における男女の平等」について自分たちが法律を作り委員会を作ってやっている具体的方法について発言した。イギリスもそれを参考にして、最近議会に提出している法案について説明した。

オーストラリアはILOの一一一号条約「雇用における差別の禁止」を批准するため、雇用差別をなくす国内委員会を作った。具体的に進めているという。アメリカはまた、ILOの中の男女の平等に言及して鋭く詰め寄った。ILOの職員の男女の数をグレイド別に挙げて、タイプ打ちや書類整理などの下の方のグレイドのところには女性が多いが、政策決定を出来るような地位にある女性は極めて僅かではないかと、婦人労働の問題を特別に担当する部局すらないなどと指摘した。女性の比率を増やすためにアメリカ政府が行なっている具体的方法を挙げても、もっと政策決定の場に女性を参加させるよう努力すべきだと述べた。これと同様の趣旨のことが、後に修正案の形で

アフリカ諸国から提案され、この点に關しては、期せずしてアメリカとアフリカ諸国の意見が一致した。

わが国で一番関心を持たれている「保護法規」については、これまで保護のための特別条約を作ってきたILOも、最近はむしろ「機会均等」の方に力点を置くようになってきている。特に今年の委員会では、国際婦人年の「平等」ということを大目標に掲げていることもあって、母性保護は「母性保護のための権利」という章を設けたぐらい強いものがあつたが、その他の保護については、女性を保護しなければならぬとすれば、男性も同じ基準で保護すべきではないかと、再検討を望む声が支配的であつた。

その他男女平等についてかなり指導的立場にある北欧諸国は、男女の役割分担について基本的に考え直すことを強く主張して、家庭責任は女だけでなく男女にあるものだから、その前提に立って「家庭責任を持つ婦人の雇用に関する条約」は、近い将来再検討すべきだと決議の中で触れている点も、理解しておいていただきたい。（政府報告会より）

国際婦人年あいちの会

つながりとひろがり求めて——

横につながる 平等な組織を求めて

国際婦人年を迎え、「名古屋でもなにかやろう」と声があがったのは、去年の十二月だった。多くの婦人に参加してもらおうと、発起人十二名は何回も討論し、知恵を出し合った。知事選、地方選を控えていたため、政党の対立の影響を受けないように、また、今年くらいは「一個の女」として自由な立場でつながろうという点を確認し、案内状を発送した。

第一回の会合は三月二〇日に開かれた。その日、会の行く手を示すかのように春雷が鳴りわたり、台風を思わせる夜だったが、参加者は続々とつめかけ、八〇名を越えた。考え方や生活は異なるが、女であることを共通項に、国際婦人年になにをやりたいのかを話合った。収拾がつかないほど、多様な意見が飛びだし、波乱万丈な会であったが、婦人が連帯し行動す

る視点を大切にしようということになった。

その後、参加者の有志でアンケート調査をしたり、会の性格について話合いが持たれ、すべての婦人が平等に責任を負い合い、横につながる平等なつき合いの組織として会は発足した。

会の名称は「国際婦人年あいちの会——つながりとひろがり求めて——」と決定し趣意書が作成された。「この会は女性である限り誰もが自由に参加できる開かれた会であり、いろいろな組織のご協力をお願いしますが、あくまでも個人として参加して頂くということでもあります。これからのつき合いが、私たちの間に新しいなをを生み出すか、一緒にやってみようではありませんか」と呼びかけ、今後の活動計画と会費(千円)が発表された。

活動のねらいは、あいちの女性の意識の変革と連帯を求めて行動すること、それぞれの婦人の抱

えている問題を提案して、それに参加者をつのり、分科会が構成された。分科会の学習、企画、運営等はグループの自主性にまかされているが、各分科会から責任者を選出し事務局員となり、国際婦人年あいちの会として連絡をとりながら活動をすすめることになった。

分科会の活動

『女にとって家庭とは』

あなたにとって家庭とはなんですか。家庭婦人、働く婦人の接点を求めて、それぞれの立場からホッペを話合いましょう。

七月六日(日) 十時—十六時
会場 千種区役所ホール
参加者 二〇〇名

『教育

——新しい女性像をさぐる——』

いま女性の能力は多方面に伸ばされているでしょうか。生まれたときから「女」として育てられてはいないでしょうか。

女性が男性と共に人間として

名古屋市中区丸の内3-5-35

連絡先 弁護士ビル1102号室

大脇雅子 TEL 052 (951)-2733 (佐藤)



“新しい女性像を求めて”
の会場風景

生きていくために、家庭、学校、
【そして社会教育はどうあるべき
でしょうか。

新しい女性像をさぐりながら
具体的になにを考え、どんな行
動をしていったらよいか話し合
いましょう。

七月十九日(土)十四時~十八時

会場 千種区役所ホール

参加者 二〇〇名

『女の船を出航させる会』

女たちのしたたかさ、女たち
の勇気、女たちの知恵、女たち
の喜び、女たちの語らい、女た
ちの笑い、女たちの輝き……を
女たちのつながりから感じとり
確めあっていく、そんな集まり
にしたいのです。

八月二日、二三日、二四日

会場 長野県木曽郡王滝村御岳

高原名古屋市民休暇村

参加者 一二〇名

『婦人の経済的地位と老後』

——明るく生きるために——

あなたの家庭がもし明日崩壊
したら、あなたは一人で生きて
いけますか。婦人の経済的地位
はどうなっているのでしょうか。

あなたは自分の老後を考えた
ことがありますか。人間関係、
社会保障、医療のことなど……。

九月七日

会場 愛知県婦人文化会館

参加者 一三〇名

『就労上の差別をあらう』

十月五日(月)/十時~十六時

会場 教育会館

今後の集会予定

『大集会』

十二月十四日(日)十時~十六時

会場 産業貿易会館

× ×

現在までの分科会で共通してい
えることは、いろいろの立場の女
性が、さまざまな思いや現実を熱
っぽく語り続けたことである。女
たちが女心や生活をぶちまけるこ
とは、日常生活を引きずり出すこ
とになるし、こういった形の集会
は、いままで名古屋でみられなか
っただけに大きな意義はある。
しかし今後の課題として、女の
怒りを下敷にし、具体的事実を洗
いだし、解決の方途をみきわめる
ことが残っているのではないだろ
うか。

(N)

「婦人問題」

法令ハンドブック

山口真・柴山幹子編集
(株ぎょうせい)

婦人問題に関するあらゆる法令を網羅し、それぞれに簡単な解説をつけることにより、現在における法制上の婦人の地位を再検討するとともに、諸条文を指標に婦人の現状を把握し、将来の方向を明らかにしようとして試みたこの本は国内法・国際法ともにたいへんわかりやすく、簡潔に述べられている。

国際婦人年である今年こそ、婦人の問題を一步でも前進させるために、まず現在の法律がどのようになっているのかを知って、タテマエと実態とのズレとどうとりくむか、今の規定では不十分なもの、実情にあわないもの、不当なものはいか

など、身近な問題と照らしあわせて、しっかりと見きわめることが何より必要なことではないだろうか。そうした要求にこたえるものとして、この本はまことに適切な内容を持つているものと思われる。

終りに、婦人問題に携わる人々のみならず「女性の良きパートナーである男性にも広く読まれることを」編者は希望しておられるが、男女一緒に、表題どおりよきハンドブックとして大いに活用されることを期待したい。(A5三四七ページ一、三〇〇頁) (す)

「ことばが劈かれるとき」

竹内敏晴 著
思想の科学社

ことばを失った子がいる。乳児時代、その泣き声を姑に聞かせまいと母が口を

覆ったのが原因だった。「壁を貫いて隣の部屋の先生のおでこにぶつけるように」アーと発声させる練習から、ことばは回復した。その指導のヒントを与えた著者は、自らも失語の経験を持つ。生きたことばを発しようとする苦闘の歴史の中に演出家としての道を開き、自閉症や対人恐怖症の治療にも経験を生かした。

ことばが劈かれるとき心が劈かれ、行動するからだができる。実践をふまえて築きあげた論理は、切々として心に迫る。私たちの目ざす女性解放とは地球の半分の女も、自らの声を発する自由と自信を得ることである。運動にかかわるすべての人々に必読をすすめたい。

なお筆者はBOCに「演劇指導」を登録した人。その貴重さに長い間気づかなかった自分の不明を深く恥じる。(A5二七八ページ、一、二〇〇頁) (千)

★ おんなの 情報誌 から

* 「婦人展望」 九月号

通算二四四号、二〇年の歴史を誇る専門誌だけあって、B5判十六ページながら、内容はコクのあるエッセンスぞろい。ILO総会報告討論会、第二一回日本母親大会など諸行事や、国際婦人年記念講演(大羽綾子氏)の要約など、短いながらも要を得た紹介。また富山県下のトルコ風呂営業の許可申請をめぐる一文は、観光化をめぐる地方の状況を反映していて示唆に富む。(B5十六ページ、一八〇円、送料十二円 婦選会館発行)

* 「婦人新報」 九月号

純潔・禁酒・世界の平和の大目標をかかげて日本で最初に生まれた女性の社会運動団体、矯風会の機関誌。明治二十年誕生、九〇〇号記念号であり、「平和の推進」から「抵抗」に至るまで」の座談

会、「禁酒運動から酒害防止活動へ」の対談、児玉勝子氏の「機関誌雑感」など、女性史の側面を語ってとくに興味深い。

(A5二七ページ、一二〇円、送料十二円 矯風会発行)

* 「飛火」 九号 ビル特集号

大阪の若いリブグループ「飛火」の機関誌。ビルを女性の福音と思っていた女たちが、次第にビルの害に気づき、「性」そのものを考えようとしている。(B5二八ページ、ガリ版一〇〇円)

* 「北海道女性史研究」 第八号

北の風土の中で無言のうちにうもれた女たちの軌跡をたどろうとする貴重な記録誌。遊里の女、屯田兵村の妻、大正期の婦人労働者・アイヌの女など、どれも胸に迫る。

(A5五六ページ、三〇〇円、送料五五円 北海道女性史研究会発行)

* 「女性の問題に関する公開質問状への回答全文」

国際婦人年に際し、男女平等の基本的

諸問題を、政府、中央官庁、地方自治体、政党、組合、企業、教育、宗教などの各界に送ったアンケートの回答全文。タデマエ論がほとんどだがホンネもチラチラ。とにかく女の問題は理解されていない現実が明らかにされた。しかし、「回答なし」続出の中で答えた人々は、それでもマジメ派かも。(B5一〇四ページ、タイプ印刷、四〇〇円。国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会発行)

* "JAPANESE WOMEN SPEAKOUT"

国際婦人年世界会議に向けて日本のジャーナリスト、市民運動関係者などがまとめた日本の女の告発文書。「日本における性差別」「たたかう女たち」「重層的差別にある女たち」で、反戦・反公害運動や、沖縄・部落問題にもふれ、「アジアの女たちとの連帯へ向けて」呼びかけている。政府や国連に対抗し、国際的にも自己主張しようとする姿勢がすばらしい。(B5 一七九ページ、一、〇〇〇円、アジア太平洋資料センター発行) (*印は「あこら」で取次販売中)

新聞切抜帖

一九七五年

五月二一日

一九七五年

九月一〇日

法・裁判

ILO総会で保護論争

六月四―二五日、ジュネーブで開催の第六〇回ILO総会では議題の一つに「機会と待遇の平等」を取り上げて婦

人労働者への保護法例を修正・追加・廃止するための措置」を討論。(読売6・21)

家事は夫婦平等に

ILO総会は、六月二六日婦人労働者の地位向上を目ざす宣言案と、勧告一二三号を新時代に即応するものにした決議案および婦人労働者に対する機会及び待遇の均等を促進するための決議案を採択、「保護より平等」の姿勢を強く打ち出した。(6・26朝日)

遅れていた日本

ILO総会で労働者代表の九割、政府代表も三分の二が女性。かつてない女性色にぬりつぶされた中でリーダーシップをとったのは北欧四国。日本だけが保護拡大にこたわったようだが社会保障が未発達達の日本の後進性を感じたと日本代表たち。(7・9朝日)

二児ハワイへ養子

実子特例法制定運動中の菊田医師がハワイ日系米人と養子二組をまとめた。離婚や別居中の実母の子として届け、家裁で縁組手続きの後移民として渡り、ハワイで実子の手続き。米国では実母との関係は断絶(関係戸籍は米家裁で封印保管)でき、養親の資格審査が厳格なので安心、と菊田氏。

(6・27―28朝日・信毎)

八か月未満中絶は殺人

中絶は優生保護法で胎児が母体外では生きられない時期内に規定、厚生省は二八年、目やすを八か月未満とした。ところが医学の進歩で六か月でも生存ケースが増加、七か月の生存率が六〇%を超える現在、放置すれば合法的殺人を認めるに等しいとして、実子

制定推進委が関係機関に公開質問状を向けた。

(7・16信毎)

母親は育児に不可欠

長男の養育で争う別居中の夫婦に、大阪地裁黒川正昭裁判長は、「子の肉體、精神的成長に母親による養育が不可欠」と引渡しを判決。しかし法廷には父親と三才の長男は出廷せず裁判所は強制力がないためむなし判決。

(7・29信毎)

国会・行政

婦人問題で政府追求

国際婦人年をめぐる問題が五日の参院外務委員会では初めて取上げられた。田中寿美子議員が「政府は婦人の地位向上にどのように取り組んでいるのか」と約一時間半ただし

たが、宮沢外相は事務当局の「答弁用カンニングペーパー」を見ながらしどろもどろ。

午後は、労働省主催の国際婦人年国内連絡会議が、婦人団体、労働組合の代表、報道関係者などを集めて、大手町農協ビルで開かれたがここでも火の手。(6・6毎日)

集中審議で追求

六月十三日、衆院社労委で国際婦人年にちなみ婦人問題を集中審議。公務員採用で差別がある、世界行動計画案に熱意がない、トルコぶろを取締まれなど婦人議員が超党派で攻撃。(6・13—14各紙)

婦人の地位向上決議

衆院は十七日午後各党共同提案の「国際婦人年に当たり婦人の社会的地位の向上を図る決議案」を全会一致で決議、差別撤廃の姿勢を示した。超

党派婦人懇談会(世話人栗山ひで、田中寿美子氏)は、この決議を「婦人憲章」としたと発表。(6・17—18各紙)

市川さんら首相に訴え

国連NGO国内婦人委員会の市川房枝委員長ら代表は、国会内で三木首相に国際婦人年に際し同委員会が決議した次の決議文を手渡した。

①国際会議に婦人代表を②婦人の働く権利保障のためILO条約一〇三号などの早期批准③公職への婦人参加④婦人の教授、校長増加⑤売春、トルコ追放。(6・17読売)

ILO二〇二号をめぐって

六月十一日の衆院外務委で四人の婦人参考人が婦人に関する社会保障問題はほとんど解決されていないと批准に反対または消極的意見を展開。(6・12朝日)

衆院外務委は、十三日、未批准婦人関係ILO条約をすみやかに批准するよう努力する五党共同提案を採択。

(6・14各紙)

・ILO総会で採択されて二三年もたつて政府がようやく「批准できる」と提出したが女性に関する社会保障の最低基準さえ満たしていない現状で、参院では審議未了になった。他に産前産後十二週有給の一〇三号条約、雇用における差別待遇禁止の一一号条約など未批准のまま。

(7・7朝日)

育児休業法案滑り込み成立

七月三日未明、参院本会議で。休暇中は無給、対象は一才未満の子を持つ女教員、看護婦、保母の希望者に限られるが、日教組大会の要求が十二年で成就。しかし休業する先生の代替要員が臨時の身分、

教員以外の事務職員が取残されたこと、さらに育児は女の固定觀念助長など、不安や批判もある。(7・3、15朝日)

婦人問題で推進会議新設

植木総務長官は、同長官の私的諮問機関「婦人に関する諸問題懇談会(座長・福武直東大教授)」を発展的解消し、「婦人問題企画推進会議」新設を決定。国際婦人年にあたり政府が婦人問題に積極的に取組む。(7・15各紙)

婦人行政三本柱で

メキシコ会議で採択の「世界行動計画」実行の三本柱として政府は①局長または次官クラスの関係省庁連絡会議②各界民間人による婦人問題企画推進会議③総理府内の婦人対策機構の構想を植木総務長官が明らかにした。

(7・30朝日)

婦人担当省庁設置など要望

女性議員全員で作っている超党派の婦人議員懇談会の市川房枝議員ら代表七議員は、国際婦人年世界会議で採決された世界行動計画を進めるため、植木総務長官を訪問。婦人問題企画推進会議、婦人対策本部、婦人問題のみを所管する国務大臣（婦人）、婦人対策などのための独立の行政機関（省庁）の各設置を要求する「要望書」を手渡した。（8・19毎日）

婦人の地位向上 推進本部発足へ

国際婦人年に当り、三木首相は政府としても婦人問題に取り組む体制をつくる約束をしたが、九月中にも総理府に推進本部設置を閣議決定する方針。本部長は首相、労働、厚生、文部などの事務次官で構

成し、首相の諮問機関として新たに婦人問題企画推進会議（仮称）を設け、婦人運動家や有識者の意見聴取などを行なう。（8・28朝日）

会議

はたらく婦人の中央集会

二五日、東京豊島区の文京高校で開催。参加者二千人。今年の全体テーマ「保護と平等をめぐって」三五の分科会で討議。（5・26各紙）

保護か平等か——男と同じ

仕事をしたい女に保護のおしつけは困るが、いま保護をはずせば健康にむり。労働条件を高めるとともに、男子の家事分担を、と梶谷女性講師。企業は保護廃止を狙うが、欲しいのは若く安い短期労働。利用される一部のエリート女

性の平等論の一般化より、労務管理の一八〇度転換を、と榎井講師。保護には賃金ドレイでないと先駆的意味あり、男も女をまねて休息を、と星野講師。（5・29読売）

全国婦人のつどい

約千人の女子組合員が参加。男女賃金格差が大きなテーマで、「女子の賃金は男子の半分以上」「ペアの配分を署名運動で妥結」などの声。（5・19読売）

国際婦人年記念

シンポジウム

国連NGO国内婦人委員会主催の「現代における日本の婦人問題を考える」シンポジウムが、約六百人参加、六月七日東京YWCAで。

「総理府の女性調査のひどさを引用、女性の甘えが差別を助長している。家庭内で父母

がはたして平等か、から考えてと竹中はる子さん。マスコミに現われる性差別をもっと告発せよ。男性の家事が「手伝い」意識ではどうにも。夫婦は別産制がよい。母性をハندیとする米国より、大切な社会機能として男性も含め、社会で担おうとするスウェーデン式の考えがよい。もっと婦人議員を送り、もっと公職につき、政治運動に参加意識を。トルコ、テレビ、週刊誌の性の商品化増加を警告せよ、など意見続出。（6・9—12各紙）

国際婦人年県大会

松本市の市民会館でも国際婦人年記念県大会が開かれた。「男を追い抜け、追い越せでなく、女の立場に甘えず、男性の技術に追いつく努力をしただけ」と語るのは時計技術の世界的コンクール受賞の

中山さん（諏訪精工舎勤務）。

「婦人団体三〇年の歩み」をそれぞれ運動の足どりを追いつた当時の状況を証言。

（7・5信毎）

国際婦人シンポジウム

「今日の世界における婦人の役割」をテーマに、英・独・ガーナ・マレーシアなど十四か国の女性を招いて、八月一日、東京で話し合い。YWCAが同会創立七〇年と国際婦人年を記念して催したもの。

（8・3読売）

「母と女教師の会」中央集会

八月九、十の両日東京で開かれ、千五百人が参加、中教審路線の危険性を討議した。選別教育は子どもばかりか教師をも上級、下級とわけ、そうなれば女教師の大半は「下級先生」になってしまう。女教師や母親自身が性差別をし

て互いの足を引っ張り合う面もあるなど。（8・12読売）

第二回母親大会

母親運動二〇年、被爆三〇年、そして国際婦人年と、幾つかの節目が重なり、八月十七・十八日の二日間「男女の平等」を主眼に、四七の分科会や、七つのテーマをかけた問題別集會に分かれて熱心に意見を交換し合った。（8・19—20読売・毎日・朝日）

全国保育団体合同研究集会

このほど長野・湯田中温泉で開かれた第七回のこの集會の「産休明け保育」分科会では、ゼロ才児を保育所に託して働く父母と保母との間の、子どもに対する考えの違いや生活、労働観の違いが問題の深さを物語った。参加者はこの困難をのり越えるための申合せをした。（8・22毎日）

婦人科学者会議

日本科学者会議主催の婦人研究者問題全国シンポジウムが、大阪のなにわ会館で開かれた。研究者をめざす女性はいふたのに、就職先がない。やっとみつけた非常勤の口は給料が安く、身分が不安定、という実態が明らかにされた。（8・24朝日）

PTA研全国大会

全国PTA問題研究会第四回全国大会が二三、二四の両日、東京で。五百人参加。「本音を出し合おう 父母と教師」「PTA改革のきのう・きょう・あす」「教育運動のすすめ方」というタイトルの三つの分科会で、報告、討論が行なわれた。（8・27信毎）

活動

「駆け込み寺」の充実を、

「行動を起こす女たちの会」は、東京都民生局に離婚や夫の蒸発、暴力、死亡などで困っている母子のための制度の充実を申し入れた。（6・2朝日）

何を売るかも主婦が決める

姫路市消費者協会では消費者参加の商品選びと価格決定が量販店との間で進められている。（6・6朝日）

生活防衛する主婦グループ

東京・杉並にある東都生活協同組合は二年前にできた。ユニークな産直で供給量を年々着実に殖やしている。加工食品の添加物や農産物の農薬には厳しいチェックをし、新鮮と安全さで主婦の好評を得

ている。(6・10読売)

松本「自然農法野菜の会」

「疑わしい食品は食べたくない」という主婦らの集まり。農薬や化学肥料を使わない野菜の仕入れから始まって、子どもたちを守るためにもっと幅広い食品公害追放運動を起している。(6・11信毎)

無公害を考える主婦たち

長野県下の幾つかの生活研究グループは無公害の粉石けんを使う運動を進めている。長野市の北中・七瀬中町両生活学校、松本地方の物価研究グループ「はしどい」、小諸市の「石けんのための連絡会」等がそれである。業者も県内の注文だけでフル操業。

(6・20信毎)

清掃登山の南米遠征

新潟県山のゴミ会議の五

人。隊長以外は二〇代の女性ばかり。二五日ペルーに出発、六、七千メートル級の山からも、持ち込んだゴミはきちんと持ち帰ることができるのを実証しようという。これまでも清掃登山は八回やっている。(6・21朝日)

清掃登山隊、ワスカランに

「山のゴミは持ち帰ろう」運動の新潟県山のゴミ会議のメンバーの四人の女性隊がアンドスの最高峰ワスカラン(六、七六八メートル)に登頂成功、この際二人が五百メートル転落したがケガ一つなかった。

(8・18朝日)

女のグループ全国で約八〇

国際婦人年を記念して「婦人コーナー」をつくった三省堂書店が、全国の「女のグループ」を調べたら約八〇、そのうち東京都内が約五〇、そ

れぞれ機関紙、ニュースなど発行。(6・21毎日)

「母親パワー」町を動かす

長野県埴科坂城町では町立四保育園の保育料三〇%アップを町議会に提案。町内の反対委員会の運動にもかかわらず可決されたが、町理事者は母親たちの訴えに応え二五%アップにとどめる方針。

(6・21信毎)

「おいらんど中」に反対

イタリアのベネチアで開かれるレガッタ祭に日本の伝統芸術として「おいらんど中」を披露しようとする浅草観光連盟に「売春問題」とりくむ会(市川房枝さんら)が抗議。近く反対のアピールをイタリアの婦人団体に送る予定。しかし地元は着々準備を進めている。

(6・25朝日)

「私の声」南信地区のつどい

去る二〇日下諏訪町で。出席者三〇余名。テーマは「私たちの台所作戦」。この地方は精密企業の密集地で不況の影響をじかに受けているがこの不況を契機にムダを整理し、価値観を問い直すとうとの討論が行なわれた。

(6・26信毎)

亡命に協力した日本女性

チリの女性政治犯の家族に励ましの、政府には釈放要求の、ベルギー政府には亡命要請の手紙を送り、救援の国際キャンペーンを行なった日本女性グループ「アムネスティ・インターナショナル日本支部」に感謝の手紙が。

(7・4毎日)

青空野菜市

塩尻市連合婦人会はこのほ

ど理事会を開き昨年に引き続き今年も市民会館前で青空野菜市を開くことを決めた。種類や量を昨年の一・五―二倍に、値段は市価の三割安。

(7・23信毎)

「グループ若芽」の夢実る

身障者のための共同作業所建設をめざし、体の不自由な子をかかえてワカメの行商を続けたグループの三年越しの願いが実り八月十一日ごろ着工の予定。完成は十一月。障害者が地域の一員として暮せる拠点にしなければと母親たち。

(7・31朝日)

サッカーン緩和へ反対

発ガン性の疑いでアメリカでは使用中止のサッカーンの使用緩和が厚生大臣の諮問機関、食品衛生調査会で決まったが、主婦連・日本消費者連盟など、主婦パワーを中心と

する民間団体は独自の調査で不安を抱き、追放集会を持つ。

(6・23朝日)

サッカーン使用中中止に

サッカーン追放連絡会は、「今後もサッカーンの使用を続ける」といつていた食品メーカー八社から「使用中中止」の回答をとった。サッカーン使用の要望の強かったつけ物業界も、極力使用しないよう申し合わせた。(8・1毎日)

「植物人間」家族救済へ

脳傷害のため意識不明になったままの「植物人間」が交通事故の増加などからふえている。長野市の一主婦が、同じ悩みをもつ者同士手を取り合って社会保障の拡充をめざそうと呼びかけ、多くの反響があったが、行政の反応は冷たい。宮城県では二年前から県単位の補助金を出している

のに。(7・27、8・2信毎)

婦人の力で核兵器廃絶を

日本婦人団体連合会(檜田ふき会長)の主催で日米の女性七〇人がこのほど東京に集まり「核・廃絶をめざす婦人集会」を開いた。アメリカ側の出席者は男性二人をまじえた十八人の反戦平和活動家。日本側は原爆体験者が核兵器廃絶を訴えた。(8・2朝日)

教科書の男女差別追求

女の問題を考えるグループ「あごら」の東海グループ主婦一〇人は、教科書の男女差別を点検。現実肯定的記述がめだち、自立した母親像がない。女性が教科書をつくらなくてとは提案。(9・2朝日)

福岡、女性と職業研究会でも国語・社会・家庭・英語・道徳を共同研究。「一家の柱」として父は外で働き、母は主

婦専業。働く者の半数以上が女子なのに」と女性が参加した教科書を採用する運動を提案。

(8・17朝日)

「わたちの会」合宿

「国際婦人年をきっかけとして行動を起こすわたちの会」(会員五百人)が二六日から三日間、茨城県の鹿島ハイツで討論合宿を行なった。普通の主婦を中心に学生、教師など。鹿島を選んだのは企業公害と闘う市民運動の中から独自の考えをもつ女性がいると思ひ、その人たちと連帯したかったからと。(8・30朝日)

婦人消防隊が訓練を披露

墨田区本所三丁目の町会に婦人消防隊が誕生、防災の日訓練ぶりを披露した。隊結成の動機は配布された三角バケツを物置などで眠らせないため。六〇人が参加して消火

コンクールも行った。

(9・2朝日)

『こだま』誌七〇号にノ

読売新聞婦人欄の「赤でんわ」投稿グループ「こだまの会」が生まれて十九年、年四回発行の会誌『こだま』が七〇号に達し、よろこびもひとしお。
(9・2読売)

戦争体験記を出版

戦時中女学生や小学生だった国分寺市の主婦たちの歴史研究グループが自分たちの歴史として「戦争体験記」をまとめた。応召・学生生活・学徒出陣・疎開・戦死・空襲・買出し・のみ、しらみ退治・耐乏生活など。

(8・6朝日)

戦いの中の青春をつづる

終戦の年に日本女子大を卒業した同期生が、戦時体験記

録「戦いの中の青春」(三四〇ページ、非売品)をまとめた。

女子大生グループの戦時記録は珍しく、疎開・空襲・学徒動員・恋人の出陣……などを回想文や日記でつづってある。
(8・13朝日)

地婦連が「母たちの昭和史」

消費者運動で成果をあげている地婦連が、国際婦人年の記念事業として「母たちの昭和史」をつづることになり原稿を広く一般から募集中。ねらいは、それぞれの生活体験を綴り合わせて文集を作り、昭和の五〇年を語りたいというもの。
(8・20朝日)

労働

看護婦さんが「自前保育所」

県が病院内に保育所を作っ

てくれないなら、保育所の自主運営をします——静岡の看護婦さんが「女のたたかい」を始め病院内の医師公舎を保育室に占拠。(5・29朝日)

休憩所暮らし三か月

給料はもらえても、仕事がない——不況のあおりを受けた青梅市の化学工場では、職場をなくした女子従業員がもう三か月、休憩所暮らし。毎朝正門前で「仕事をよこせ」「人権侵害だ」と書いたビラを配り、会社の「不当」を訴え続けている。
(6・6朝日)

健康をむしろまれる保母

保育行政の貧しさと、働く母親の福祉がなおざりにされているなかでそのしわ寄せを一身にうけている保母の健康破壊が急速に増加。最大原因は保母の絶対的不足にある。

六〇年代を通じて急激に幅を広げた女の職種は、単純・繰返し の過重労働と職業病を伴う仕事でもあった。

(6・12読売)

母乳運動

今進められている「母乳運動」には、人工栄養が子ども の精神や健康に悪影響を及ぼすといった意見がみられるが、これは当の母親を無視した画一的な押しつけ。すべての母親が安心して母乳を与えられるような家庭・労働条件、公害のない環境等、母親をとりまく状況を改善するのが「母乳運動」の方向ではないか。女同士の話し合いを。
(毛利子来 6・15毎日)

現代の「ノラ」たち

大阪府下の二市の婦人グループが五年がかりで「家庭婦人白書・新しい家庭婦人像を

求めて」をまとめあげた。

典型的な結婚・出産というコースをたどり育児から手が離れたとき、自立への意識が芽生える。自立への第一歩である就職も保育所不足、低賃金、家族の反対で妨げられる。

(6・19毎日)

生理休暇

生理休暇が労基法に保障されて以来二八年、その間労使間の紛争が絶えない。

現在生休を設けている事業所が八割を越え、そのうち五割以上が有給であるが、実際生休を請求する婦人労働者は二割にすぎない。これは生休をたてに労力を安く買いたたこうとする使用者、職場環境を無視した生休無用論等、生休を正当な権利と認めない現実を示している。

(6・22信毎)

定年

長崎県平戸農協は女子職員の定年を一〇年延長し男子と同じ五八才とした。これは先ごろ定年を迎えた女子職員の「定年を男女差別するのは憲法違反」とする訴えが認められたもの。全国各地の農協や企業への影響は必至。労働省の四八年度の調査では約二割の事業所で定年男女差別が。

(6・27朝日)

女子の定年延長決まる

口頭で定年通知をうけた女子職員、「定年を男女差別するのは憲法違反」と仮処分を申請。これに答えて平戸農協(長崎)は男子と同じ五八才に延長することを決定。

(6・27毎日)

保母さんは過重労働

八王子労働基準監督署はこ

のほど八王子市に対し「市立保育園の保母の労働時間などに労基法違反の事実がある」として是正勧告書を出した。国の基準をたてにとる市当局と人員増を要求する市職組が対立。

(6・28朝日)

看護婦も人間

三人で七九人看護、食事中にも呼出し。戦場のような職場。しかも医療ビラミッドの底辺で誇りもない。全日本看護学生自治体連合会は「ロボット看護婦でなく人間性ある看護婦教育を」など五つの要求を掲げて厚生省に団交中。

(6・18—7・5信毎)

長谷川労相に要望

三人の子どもと年寄りをかかえた未亡人と、能力を社会に生かせない主婦が労相と対談、育児施設の充実や寡婦雇用の促進を要望。また学校や

職場での男女差別に対する見解を問うたところ、寡婦雇用については現行の奨励金を伸ばして行く、男女差別については、母性の重要性を強調、夫と妻の協力は人情で解決と答弁。

(7・18朝日)

働く女性の張り合い

働く現場の女性はどこに生きがいを見いだしているか。

三人の女性の現場体験。

小学校教員は日々の実践の中で教え子をわからせることに情熱を注ぎ、育児の忙しさの中でも研究会に出席。

食堂経営者は多くの人と知り合う機会に恵まれたこと、

「安くてうまいもの」を作ることが生きがいだが、闘病を通して知った社会参加の喜びも貴重という。

人間関係の確立が仕事の中心をなすホームヘルパーは、服装に対する偏見、仲間同士

の話し合いのむずかしさ、家事への評価の低さを乗越え、「お年寄りに真の幸せ」という一点を見つめることに責任と誇りを持つ。

(7・27—29信毎)

女子の大卒採用中止

三菱商事は五一年度の大学卒女子の採用を中止。「ビジネス・ウーマン」としての自覚不足が在職年数二—三年で非効率というのが理由。三井物産も短大卒重視に切換え。(8・23毎日、8・29朝日)

調査・報告

休日 夫婦の争点

休日について東京・大阪の既婚男性二一人女性二六二人対象のアンケート。妻Ⅱ外出に付き合せて。子どもと遊んで。家事に協力してーがべ

スト3。夫Ⅱ拘束しないで。

ゆっくり寝かせて。休日も家事をちゃんとーが上位。お互いの言い分が平行線。さてお宅は？ (6・4読売)

主婦の一日

NHK国民生活時間調査によると、主婦の半数は朝六時から始まって夜十時半に終る一日だ。電気製品の普及で家事労働は軽くなったが「省時間化」はまだ。

原因は生活の高度化に伴う家庭雑事の増加。コマ切れの余暇はテレビで埋める傾向。(6・15毎日)

家族計画世論調査

四半世紀続けられて来た毎日新聞社の家族計画調査は十三回目。若い母ほど「少数」を望み完べきに近い計画出産。戦後日本の人口革命の第二の転換期として人口減少への兆

候を浮彫りに。

(6・26毎日)

子殺しの可能性

宇都宮大のアンケートによると、子殺しの可能性は父親の方が高い。幾つかの想定で父は一六%、母は一〇%が子を殺す。ことに父親は失業したときに生きがいを失い他に心の支えになるものがないという結果がでた。(7・5信毎)

女性の寿命七六・三才

昨年の平均寿命の伸びは男女とも四六年に次いで大きく男(七一・一六才)はスウェーデンに次ぎ二位？ 女はスウェーデン、ノルウェーに次ぎ米・仏・蘭と三位争い。一方、四七年まで広がる一方だった男女差は四八年から縮小に転じた。(7・13朝日)

建前論の男女平等

「国際婦人年をきっかけに行動を起こす女たちの会」が、三木首相はじめ各県を代表する男性一二五人を対象に行なった公開アンケートが公表された。「家事育児は、女性だけの仕事だと思いませんか」等二十数項目の回答率三七・六%。回答内容はおおむね建前論に終始。(7・17毎日)

家庭のあり方の理想とは

老後のための長野県民会議の討議で、同居を望む年寄りは一八五%。しかし現実にはトランプが絶えない。家族関係のもつれからホーム入りする人もある。誰もが年寄りに我慢を強いるが、今の老人の幸せは明日の自分の老後に結びつくはず。(7・23信毎)

親思い？

住友信託銀行の独身OL調査によると、自分の親との同居、東京一〇%、大阪二八%、相手の親との同居、東京六%、大阪二一%で、大阪のほうが親しい? (8・4毎日)

あなたにとって家庭とは

板橋区の婦人団体「婦人の集い実行委員会」が国際婦人年にちなみ区内七四〇人の同性の意識調査を始める。「家庭とはどういうところか。」「夫に何を期待するか」など。(8・14毎日)

婦人議員三〇年の全調査

昭和二十一年四月一〇日、敗戦後の総選挙。四五人の女性が生候補、三九人が当選。いま十三人が死亡、現役はいない。(8・14毎日)

根強い「女は家庭に」

都内千人の女性とその配偶

者六五〇人を対象にした東京都の調査で「妻が外に出ると家庭にうるおいがなくなる、家にいたほうがよい」は女で二五%、男で四九%、これが女性の社会参加の大きなネックになっていることがはっきりした。(8・15朝日)

差別

45才以上の女性に退職勧告

福井県のある町。財政難対策として四五才以上の女子職員八名へ「退職勧奨のご案内」を送付。通達後半月の期限つきで返答を迫る町長に対し、自治労県本部は地裁に訴える方針。また県地方課は「期限つきは好ましくない」と町当局へ注意。(5・29読売)

豊山の女人禁制

七、八世紀ごろ役行者が開

いたという山岳宗教の霊場、四国の石鎚山は、七月一日の山開き、二日の大祭とも女人禁制。エベレスト登頂の時代というのに。(7・2朝日)

「子ども産まぬ」が採用条件

二四日から京都で開催の「反原発全国集会」で、中国電力島根原子力発電所が定期点検の臨時工採用に「子どもを産む意思がない」ことを確認させているとショッキングな報告。二号機建設はもとより、運転中の一号機も停止させなければと一同。(8・26毎日)

風潮

都会の奥さんはインスタント

日本栄養・食糧学会での女子栄養大、足立助教授の報告によると、純農村から都会まで都市化の段階に応じて食生

活を現地調査した結果では、都市ほど料理に使われる材料の種類が少なく、食事内容が粗末。(5・24朝日)

「特価」オンナ酒場

女性店員へサービスのため三越本店でオープン。名づけて「レディースサロン・ルージュ」。ツケはきかずトラは一匹も出ていないとか。(6・10毎日)

夕飯材料の出前

工場・企業向けの食品会社が考え出した新商売。安上りで献立を考えずにすむと二〇代から三五才くらいの主婦に受けている。しかし、人間にとって重要な食事が、お仕着せでは……との批判も。(6・21朝日)

婦人服の新傾向

今春からファッションの担

教育

数年前東京で始まった母親、保母、教師たちが子どもの読書につき勉強する「学校」が、今や全国各地に広がっている。

(7・13信毎)

みのり多い「旅教育」

六才、五才の娘二人と世界の秘境を訪ね歩く夫妻がいる。「旅に出ると親と子がふれあい、夫と妻は助け合う」と。

(8・6朝日)

女子学生

戦後の学校スト第一号の上野高女、新学長就任拒否をした日本女子大、東大女子学生第一号など、女子学生三〇年の歩みをたどりつつ女子の大学進学率三二・四％の意味をシリーズで追求中。

(8・9より連載、毎日)

北大女子学生

今年の北大入学者のうち女

導される女子中高生が今年になって千人、目立ってふえており、警察庁は全国の警察本部に対策を指示。

(7・10朝日)

女性週刊誌が結婚入門書

現在四誌で週二百万部売れる。男性との交際法、有名な女性の私生活、身の上相談。未婚女性の愛と幸福の価値観を養っている。

(7・16朝日)

女高生の「中絶カンパ」

「級友が妊娠、親友が中絶費用カンパを呼びかけているが応じないと非難されるし」との紙上相談に対する反響の四割は女高生。ほとんどが「ありがちなこと」と認めた上で、賛否両論。多数は自分で責任をとれ、ほかに友情論、アドバイス、中には共犯の男性に友人集団で攻撃を、というものもある。

(8・6読売)

い手が従来のヤング層からヤングミセスや職場の女性にシフト。三、四、五月の売れ行きは昨年の三一五割増。職業をもつ人がふえ、家庭にはいつでも積極的に街頭に進出し、おしゃれを楽しみ、欲求不満を解消するとみられる。

(6・26朝日)

機能性を売り物に

日本に「上陸」する海外有名デザイナーに米のレンタ氏

「家庭にじっとしていない、職場だけでなく広く社会参加する、活動的な女性」を念頭にデザイン、十八才以上の、若さを失わない心の持ち主のためにとのことだが、ワンピース九万円前後では氏の想定ははずれそう。(6・30朝日)

乱れた「性」千人を補導

売春・乱交などで警察に補

子は一割を越え、二三七人。すさまじい進出ぶりだが女子学生の評判は余りよくない。

男子学生、教授の側にも問題はあがあるが、「大学に来て一番よかったのは結婚の相手をみつけたこと」という人もいる。

(8・23朝日)

健康

家庭婦人の七割が自覚症状

都衛生局が都内二〇一六四

才の女性三千人を対象とした調査では、家庭婦人の七割が異状を訴え、うち医療を受けているのは二割。半数近くは何も処置をしていない。定期検診の機会があるのは全数の四分の一、検診をよいと思う人は三分の一、実際の利用者はさらにその三分の一。この結果から都は検診の質の向上や規模の拡大を図る構え。

(6・19朝日)

ペットで奇形児が――

ペットを飼っていると奇形児が生まれるという不安が妊婦の間に広まっている。信州大産婦人科の話では、一般論としては関連があるが、その因果関係は不明確で、ふつうでも奇形の発生率は二・五％。ペット飼育即奇形児出生というのはどうか。ただ妊娠初期の人は直接動物に触れぬ方がよい、と。

(6・19信毎)

合成洗剤毒性裏づけ

合成洗剤の毒性をめぐって学界や消費者団体とメーカー側が対立しているが、都衛生研究所の毒性検査でマウスの受胎率がわずか二八・六％という結果がでて、毒性間違いないと結論、今後人体影響などについて研究を進める。

(6・22信毎)

植物タンパク静かなブーム

食糧危機、捕鯨禁止等で、従来肥料や飼料に回わされていた脱脂大豆や小麦グルテンが見直され出した。低脂肪高蛋白の自然食品で、価格は肉の三分の一とあって将来のタンパク資源不足を救う武器と、世界中で注目されている。

(6・23信毎)

リジン使用で学者らは反論

学校給食用小麦へのリジン添加をめぐり安全論争が起きているが、文部省や国立衛生試験所の検査では問題なしとの結論。だが高橋昶正氏らは少しでも発ガン物質は排除すべきだと主張。長野県でも近く結論を出す。

(6・21・28信毎)

「四社とも問題ない」

リジンの安全性について国

立衛生試験所食品添加物は二七日「問題はない」と発表。

(6・28信毎)

気になる更年期障害

更年期障害は女性の二〇―四〇％の人に起きる。ピークは五〇才前後。アメリカでは更年期の性について盛んに研究されているが日本はまだまだ。ひどい障害は医師の指示が必要だが、精神的な強さも障害をのり切るのに大切な。

(6・28信毎)

三角筋短縮症北海道で多発

大腿四頭筋短縮症の他に、新しい注射被害として三角筋短縮症が報告された。北海道岩見沢地区では一九〇人の患者が発見されている。「大腿四頭筋短縮症の子どもを守る会」はすべての注射による被害を救済することを申し合せた。

(6・30信毎)

種痘で脳症に

秋田市で種痘を受けた一年七か月の男の赤ちゃんが、九日後に接種が原因とみられる脳症を起こし、治療を受けている。予防接種による事故は昭和四五年をピークに減少しているが、毒性の弱いワクチンの開発や接種の方法を改めて検討する必要があると指摘されている。

(7・2信毎)

ウレタンも発ガン性の疑い

これまで塩化ビニール、チクロが発ガン性ありと使用禁止になったが、ビラビタールを成分にした鎮痛剤に溶解補助剤として使われているウレタンも発ガン性の疑いがある。と大阪大で研究結果がでたので中央薬事審議会で調査を急いでいる。ウレタン使用の鎮痛剤は現在一〇品目流通している。

(7・24信毎)

合成洗剤、災害認定闘争へ

自治労は第十八回学校集会を三一日から開くが、その重要議案の一つに給食調理員の「手荒れ被害」を取上げる。大阪では、重症の皮膚障害にかかった三三人が公務災害の認定を受けたが、他はまだ。合成洗剤から石けんに切りかえる運動も活発化しているがこれにも難点がある。

(7・30毎日)

クロマイ訴訟

クロマイの乱用により再生不良性貧血で八才の娘を亡くした杉並区の両親ら家族が国と製薬会社、医師を相手どり慰謝料、損害賠償請求を訴えた。これは、サリドマイド、キノホルムなどに次ぐ六番目の薬害訴訟になり、薬害日本の姿をまざまざとみせつけている。

(8・1毎日)

女子医大生の無料検診

東京女子医大の無医地区研究会(顧問・石井妙子教授)の学生二〇人は静岡県小山町で二日から四日間、六人の先生と無料検診を行なった。四八年から、継続して保健衛生レベルの向上に取組んでいるが、いそがしい母親に放置された子どもの虫歯、大人には高血圧が多いという。

(8・13毎日)

農家主婦の貧血検査

長野県あづみ農協では一八日から、主婦を中心に貧血検査を開始。婦人部の貧血追放運動で、食生活への注意のよびかけなどが効を奏してきているが、農繁期でむりが重なりと再発することもあると、今年も各地区を巡回する。

(8・21信毎)

ビルの服用は用心して

ビルを飲む女性は毎日十分な栄養をとっていないと悪性貧血を起こし、使用後妊娠したときは胎児の脳の發育に障害を与える恐れがあるとアメリカのダーフアン・A・ルー博士が警告。原因は葉酸の欠乏だが、日本ではまだ研究が進んでいない。野菜を多くするとよい。

(8・21毎日)

消費

苦情の筆頭は食料品問題

日本消費者協会が四九年度消費者苦情相談の結果をまとめた。トップは食料品(二六・四%)でAF2、虫害、カップめん、苦情が目立つ。次いで家庭用品、家庭用機器、衣料品、医薬・化粧品、化粧品、個人や集団のセールスなどの

悪質化の傾向に、特殊販売法立法化が必要。

(5・29読売)

安くならない？牛肉

牛肉の自給率は七〇%、だが、昨年の大暴落で農家の苦境を理由に輸入禁止。国会で「畜産物価安定法」が改正され、畜産振興事業団が手持ち輸入牛肉を放出、豚肉と同じ制度で価格安定をはかる。店頭では輸出価格の三倍。生産者手取り四五%、あとは流通費用だが。(6・23信毎)

消費問題なんでも相談室

通産省は七月一日から本省と全国九局に相談室を設け、大企業に対する苦情から一般消費生活に関する苦情、相談、意見を受け、行政に反映させる。受付は平日十時―三時半。必要に応じ照会、行政指導も行なう方針で気軽に利用をと

いつている。(6・28信毎)

売たく安値攻勢は迷惑

長野県クリーニング同業組合は、近く長野市のA店を「不当販売」として公取委に提訴。A店はコート類、ガウンなどの一部を除き一律一五〇円で人気。「不当販売」とは、他をつぶすため採算度外視のこと。当店は適正な利潤を得ている」とA店は反論。

(7・15信毎)

こわい米価便乗値上げ

米価引上げの影響は数字以上がつね。家計上の米代は四九年で二・六%。今年十九%上ると四人世帯で月七〇〇円弱。経企庁の数字だと物価指数へのはね返り〇・七〇七%。カレライス約四円、どんぶりもの五一六円が必要値上げ幅だが、低所得層、福祉施設の嘆きは大きい。

(7・23信毎)

出来秋を前に主婦の不安

九月一日の米価値上げは十九%。酒、タバコ、郵便、水道、バス、私鉄、国鉄、NHK、値上げ申請目白押し。政府に望みたいのは、便乗値上げ抑制の広告よりも、買い置きのすすめや保存法、標準米の調理法ではないか。

(8・25朝日社説)

合理精神で高物価に対抗

北海道消費者協会がこのほど催した「百円料理講習会」は、米価の値上げ、豚肉の高値続きなど、頭の痛い主婦たちで大入り満員の盛況。

百円料理のコツは、材料をムダにしないこと、季節のものを使うことなど。

(8・29朝日北海道)

便乗監視を

主婦連など消費者団体は、政府の監視体制とは別に独自の監視運動を繰りひろげる。「不況で、業者も安易な値上げはできない」という考えもあるが、主婦連は、たとえ大幅値上げはしなくても、量を減らしたり、質を落すなどの実質値上げは考えられると指摘。

(8・31朝日)

人

政令都市初の女性議長

第四六代京都市会議長加藤つるさん(66)(自民)。議員六期目。女性に何ができる―と悪口をいわれながら今は京都市の内情に最もくわしい一人。だが市会の現状は複雑。真価を問われるのはこれから。お寺の主婦の役もこなすスーパーウーマン。

(6・3毎日)

世代懇談会の十代代表

高橋千里さん(18) 母娘とも
ガールスカウトの団員。その
一員として個人の考えを率直
に話そうと思う由。群馬県下
の短大一年生、化粧、気がな
い。高校の先生は努力型、強
い責任感、奉仕精神豊かとい
う。高校では弓道部員、一六
四センチと大柄。

(6・5朝日)

エベレストに初登頂

田部井淳子さん。「女性とし
てスピードと体力は男にかな
わないと思ったが、執着心と
粘り強さが利点だった。貧乏
部隊で困ったが、登頂はこれ
からの人生の大きな励みにな
るだろう」(6・11読売)

手造りネクタイで再起

飯田市の主婦、伊藤雪子さ
ん(45)。骨腫瘍のため左足を

切断、沈みがちな毎日だった
のを、家族の励しで手作りネ
クタイの講師の資格をとり、
このほど念願の講習会を開い
た。「病気を忘れ、多くの人に
喜ばれるようがんばります」
と。(6・16信毎)

「南ベトナムにコメを」

清水谷子さん(42)。南ベト
ナム孤児救援市民センターの
代表者。日本にベトナム戦争
の責任がないとはいえない
と、八月十五日までに五千万
円を目標。夜学に通いベトナム
語を習って、自分の目で支
援している孤児院を見て回わ
る。本職は建築業。十一人の
社員を持つ。独身。

(6・21朝日)

女性の根性 太平洋で証明

小林則子さん(28)。沖縄海
洋博が主催する単独太平洋横
断ヨットレースに参加申込み

した。日本からは男性四人の
出場が決っているが、女性が
一人で一万二千キロのレース
に参加することは「国際婦人
年にふさわしい」と声援を送
られている。(6・21朝日)

詩作五〇年の詩画展を開く

永瀬清子さん(69)。岡山県
に住む、女流詩人の最長老、
荻窪のシミズ画廊で「永瀬清
子の来た道・展」話がへたで
詩で表わすはかなかった。詩
を書くには地を這う虫の心が
大切という。性格は開放的、骨
っばさもある。近ごろの人の
詩は、人の知らぬことばを使
って、心はどこに?と思わせ
られるとのこと。(6・29朝日)

幸せな女性は美しい

ヘアの魔術師といわれ、世
界的に有名な女性の美容を担
当したマリア・カリタさんが
弟子の招待で来日した。カリ

タさんからみた日本女性、「全
体に西洋的になった。流行を
追いつぎすぎる」。おしゃれの基
本は「シンプル」それと心の美
が大切、年をとったら倍のお
しゃれを、と。(6・29朝日)

トラックかあちゃん奮戦

上原ケサヨさん(35)。運送
業の夫を助け、十一トン半、
全長十一メートルの大型トラ
ックを運転し、週二度関西と
新潟方面へ往復。家では横に
なるひまもなく家事万端をや
り、PTAの役員もつとめる
人一倍のガンバリ屋。「私が
働けるのは母がいてくれるか
ら」。それにしてもたくましい
ヤマトナデシコである。

(6・30信毎)

林野庁担当区主任をめざす

遠藤栄子さん(23)。青森宮
林局の東北林木育種場の紅一
点。この一月に主任試験を受

けて合格、目下最年少の研修生。夢は自然休養林の保護育成。樋口営林局長も「男性に刺激を与え、女性側にも自信をもたせるケース」と国際婦人年に寄せ成長を見守っている。

(7・2毎日)

東南ア留學生の戦時の姉

三二人の留學生を生活指導し「お姉さん」と慕われた上遠野寛子さん(57)。六月末マニラに招かれて「教え子」と再会。マレーシアに向かう。

(7・6朝日)

沢松組ウィンブルドン優勝

全英オープンテニス選手権最終日、沢松和子は日系三世アン・キョムラと組んで女子ダブル스에優勝。

(7・7各紙)

ブラジルで日本語学校

堀内和子さん(41)。十一年

前、四人の子育てをしながら血と汗で学園を。いま生徒数七〇人、「うまくいってるほう」。

(7・8朝日)

「ベルサイユのばら」の作者

池田理代子さん(27)。ペルばら旋風で三百万部売れた由。原作者はすらっとした美女。歴史を入念に調べてストーリーをからませる。尊敬するのはマルクスとベートーベン。ドストエフスキーも深く読んだ。東京教育大中退、学生運動もした。映画化、テレビ化等さわつくが、この才女流されはしまい。

(7・9朝日)

初めて女性が労基局長に

赤松良子さん。日本で初の女性労働基準局長に。国際婦人年のご祝儀と疑われるほど戦後三〇年一人も女性はいなかった。今までと異なり部下

はほとんど男。家族とは別居で單身山梨へ赴任。「労働省は女性の人材が揃っているので私のやり方が後輩に及ぼす影響は大きい」と責任を感じている。

(7・15朝日)

日本の心を唄う八三才

柳兼子さん。六〇年にわたる歌手生活が続け最近「現代日本歌曲選集」のLPを。「皆さんはいいかげんな年になると歌うことをやめますが、経験を積めばそれだけ技術も練れてまいります。ある時に開眼したというより、いつしか変わって」と。

(7・22朝日)

病に負けず描いた二〇点

長野市の重度心身障害者施設の寮生、寺島翠子さん(51)は二年前から卵の殻のモザイク画にとり組み、このほど、二〇点を完成させ展覧会を開

く。

(7・24信毎)

合成洗剤追放運動を決める

芳賀得代さん(61)。全国漁協婦人部連絡協議会会長。私たちに海以外に生活の場はない、その海を殺して行くのは合成洗剤。全国の主婦と手を結び無公害洗剤をメーカーに造らせるのが目的。二七で結婚以来、漁家の主婦の地位向上に目を向けて来た。「頼りにされる相手になるのが生きがい」。

(7・25毎日)

山本有三の蔵書寄贈

「路傍の石」などで知られる故山本有三氏未亡人はなさん(77)は熱海の中銀ライフケアに転居することになり、蔵書一万三、〇六五冊を都に寄付。貴重な文献が多く、現在日比谷図書館の書庫で整理が進められている。来年五月開館の都立江東図書館に収蔵さ

れる。(8・1毎日)

身障者競技で金メダル

中川りつ子さん(22)。国際ストークマンデビル競技大会で金メダル獲得。幼時の小児マヒで両足が不自由だが、快活、笑顔が絶えない。優勝種目はスラローム。一昨年の千葉国体見学でこの競技に魅せられ、以来勤務のあと二時間の猛練習。人に手を借りるのはいやと、松葉づえで乗鞍にものぼった。(8・2毎日)

二人の女剣士

矢野かなえ二段(大分県立野津高校三年)。女子剣道団体に初優勝チームの主将。剣道を始めた動機は「両親にすすめられて中学生のとき」。

姉川葉子初段(福岡・明善高校二年)。「男っぽいことがしたくて小学校四年から」。

(8・5朝日)

子どもの遊びと歌を記録

絹田幸恵さん(44)。一〇年前足立区立伊興小に赴任以来この地区の歌と遊びを同僚と記録し、農村から都市化してすたれて行くものを三二ページの本にまとめた。区教委でもこれを機会に昔からの遊びや歌を残す方法を検討したいと。(8・8毎日)

私は女性コック長

島静代さん(32)。コック、板前といえば男という観念をくつがえす女性もボツボツ。島さんは渋谷でフランス料理店を開き、コック長、店主として経営責任をもっている。女子栄養短大を出てからフランスでプロとしてみっちり勉強して来た。やりたい気さえあれば女性も十分進出できるという。(8・8朝日)

NHK経営委員に

春野鶴子さん(60)。女性で四人目。主婦連の副会長でもある。NHKも国民大衆のもの、自分たちの立場とは矛盾しないと思って引き受けた由。(8・15毎日)

父の死に報いを

戦時中、フィリピンで日本軍に協力したためスパイとして殺された日本人を父に持つ混血児が、スパイの娘として白眼視され生活苦にあえいでいる。椿タツ子さん(46)がそれ。大使館に問い合わせたが軍属としての証拠がなければ恩給もでない。支援の人々も「日比友好は政府レベルだけ」と嘆いている。(8・16朝日)

愛の手運動

岩崎美枝予さん(35)は家庭養護促進協会に勤め、そこ

に「小さな命を守る愛の手相談室」を設けた。これまで四百人近い子どもの里親をさがしたり親もとに帰したりした。「子どもの命の重さについて話し合い、耐えられない重荷を助けるのが目的」と。(8・18毎日)

いけ花でブラジルの勳章

大野典子さん(52)。「お花は一つ」の主張から国際いけ花協会を創設して二〇年、ブラジルに支部ができて十五年、日本女性で初めて「ブラジル版文化勳章」を授与された。雙葉学園に在学中、礼拝堂の花に胸うたれてお花を始めた。(8・19毎日)

炭鉱事故の損害賠償を請求

福元サカエさん(52)。戦後二番目の炭鉱災害、山野炭鉱爆発から一〇年。遺族たちはやっと損害賠償を求める民事

訴訟を起こす、その遺族会会長。余りに少ない会社の弔慰金に遺族が結束して立ち上った。問題は山積するが地元革新団体、住民グループともしっかり手を結んでいる。

(8・22朝日)

「余生をさらに婦人運動に」

全国地域婦人団体連絡協議会会長、山高しげりさん(77)の五〇年の歩みをつづった随筆「山鶯」の出版記念と喜寿のお祝いをかねた会がこのほどホテル・オークラで開かれた。「さらに婦人運動にささげたい」と相変らず元氣。

(8・23朝日)

「男」をテーマに創作

安藤千代子さん。上田市の主婦グループのリーダー。このほど、そのグループが「女の翼」と題して「男について」詩・小説・評論を書いた。安

藤さんは「吉行淳之介における男について」という評論。

(8・26信毎)

「労力銀行」を創設

水島照子さん(55)。大阪の女学校を出てロスアンゼルス洋裁学校で二年間学ぶ。労力銀行は二五年前に受賞した構想。労力は愛の通貨、利息は友情。いま全国に六〇支部、会員は七百人余。三人の子とも手を離れ、母親役は定年、これからは銀行にすべてを、と。

(8・27毎日)

資料の整理にあげくれ

縫田暉子さん。東京都民生局長を辞任以来、資料整理のあけくれ。NHKのニュース解説にも参加、婦人会館の国際部の仕事をボランティアで手伝っている。(8・29毎日)

「ハウス55計画」

松田妙子さん(46)。日本の住宅が一般庶民にとって高すぎ、しかも設備の悪いことに

気づき、「日本ホームズ」を設立、奮闘したが、このほど住宅評論家に転身、すぐ通産・建設両省に「ハウス55計画」

——これまでの半分近いコストで家を大量生産する——を打ち出させた。弁・行動力・酒・タバコ、皆男以上、美人スーパ

ーウィマン。(8・29毎日)

水俣病患者とカナダインディアンを結ぶ

アイリーン・M・スミスさん(25)。写真家の夫ユージン・スミスさんと「水俣写真集」

を出版、世界中に新しい水俣病が起こり得ることを目で知らせようと、カナダ奥地の水俣病様のインディアンを連れて水俣を再訪、日本の患者も今月中にカナダへ行く。

(9・5朝日)

賞

田中絹代さん ベルリン映画祭最優秀女優賞。「サンダカン八番娼館・望郷」で。

(7・9信毎)

林京子さん 芥川賞。「祭り」で。

(7・18朝日・毎日)

神保まつえさん(47)

デンマークで開かれたアンデルセン没後百年記念の第一回童話映画祭でゴールデン・マトメイド賞を獲得。人形アニメ映画「マッヂ売りの少女」で。

(8・21朝日)

樋口田鶴さん(67)

保健文化章で個人表彰。三〇年間の鳥取県米子保健所長としての功績で。

(7・25朝日)

死去

中込ちゑさん(昭和女子大

名誉教授)、八月二日老衰のため。八九才。昭和三年渡米して洋裁縫学を学び、のち被服構成学の理論をあみ出した。

(8・3毎日)

柴田道子さん(児童文学者、本名横田道子)、八月十四日、気管支ぜんそくのため。四一才、「谷間の底から」で児童文学者として認められ、部落解放運動についても精力的に執筆。

(8・16毎日)

意見

調停委員を公選に

調停委員が男の肩を持つ話が絶えない。公選にし、候補者に女性観・男性観の公開質問をしたい。

(吉武輝子 5・26朝日)

子どもたちの未来

最近、胎児の奇型が急上昇。

しかも小児ガンや難病の増加が目立つ。

環境汚染、食品汚染、農薬汚染の中で体の汚染がそのまま子どもに出るといふ宿命を負っている女性、子どもに食物を与えているのも学校給食に気を配っているのも女性である。私たちが気づかないで、私たちが声をあげないで、つたいだれが心配する!

(青木やよひ 6・2毎日)

解放された女

昔に比べ多くの面で女が解放されているが、それは集団的現象にすぎず、個々の女は本当に解放されていない。解放とはモラルを無視することではなく、内なるモラルを自ら律すること。その意味でも解放とは個人の問題である。

(高橋たか子 6・9朝日)

民間含め行動計画の実行を

日本から二五人もの大型代表团が行くというのに官僚は「国連が一九七五年を国際婦人年と決定し」と熱意も主体性もない。国連から受売りの上意下達はやめてほしい。

主体はどこまでも各国の婦人自身であり、大衆であるはず。

(田中寿美子 6・13朝日)

気の抜けたビール?

国際婦人年世界会議は、万遍なく男女平等の問題を論じつくしたかに、一見みえる。

ところが、女性の社会的地位向上には、いつでも政治的なからみあいが必要とす。婦人問題を政治抜きで取扱うと、気の抜けたビールになる。世界会議も、もっと政治と結びつけた話し合いをしたほうが、すっきりとテーマを打ち出せたような気がする。

(志賀信夫 6・24毎日)

国際公用語

せっかくの国際婦人会議の活動も、言語のハンディキャップで、さえなかったとか。何語であれ、よその民族固有の言語を国際舞台での討論に使いこなすのは困難。言語的ハンディキャップに悩む日本こそ、エスペラントを国際公用語にするよう、率先して主張すべきだ。

(栗栖経 7・23毎日)

差別のない世界

国際婦人年世界会議やトリビュンで吹き荒れた第三世界旋風。——今、私たちに求められているのは、人はすべて、皮膚の色、人種の違い、性別を問わず、人間としての尊厳と値打ちにおいて平等であるという思想、態度と同一化することである。

「ドリトル先生」シリーズが、

各国出版社の販売促進のリストから徐々にはずされる動きがある。

(藤枝藩子 8・5毎日)

各党首脳は答えた

国際婦人年。各政党首脳から保育所整備、昇進、昇格、昇給などの男女差別、中高年雇用の促進など、ものわかりのよい発言、意欲的な姿勢がcaえてきた。各党の話はきれいごとすぎるようだ。単なる口さきだけのサービスに終わらせないようガンバラなくては。

(影山裕子 6・25、26朝日)

女の手仕事

戦後、電気製品の普及で女の手仕事は極端に減った。手を使うより頭を使うほうが高級という風潮だが、手仕事には物との間に言葉がある。女の手仕事と同様に、男の良い

職人も減ってしまった。手が働くことは頭だけを先行させぬこと、この辺で手仕事を考え直すことは女だけの問題だろうか。

(石垣りん 6・16朝日)

女はほんとうに

強くなったか

家事・育児に対する男性の協力体制も社会的配慮もない。四〇才になると、賃金は男性の半分。中高年女性の再就職はパートや雑役など。職場における女性の地位もかくのごとし。経済力のない女には、離婚の自由も皆無。国際婦人年を機会にとくと考えよう。

(青木やよひ 6・16毎日)

欲しい女性労組

経費節約の妙策と、団地の主婦のパート目当てに弱電メーカーがつくったミニ工場も

不況のあおりで次々閉鎖、多くの主婦が突然解雇された。その不当を労組に訴えたが、女性労働者に関しては経営者と意見が一致、全くとりあってくれなかった。超企業派女性労組をつくらねばという意見を、私も断固支持する。

(吉武輝子 6・16朝日)

分業から共業へ

女は家事、男は生計の維持と分業が長く続いたが、近ごろ職場で働く女性がふえて来た。しかし家事は依然として女の仕事だ。今は子どもの数も少なく出産・保育もほんの一時期のこと。性別分業の歴史を変え共業という形にすれば、また新しい男らしさ女らしさが生れてくるのではないか。(神田導子 6・30朝日)

おんなのむかし

万葉時代、男は女のところ

へ通うだけ。母親が子どものめんどうをすべてみた。中世は女性の暗黒時代のようなが乳母(めのと)など政治的に重要な働きをしている。戦国末まで財産も夫婦別々だ。日本女性のイメージが変わったのは徳川期以後、儒教の影響だが、それでも仔細に見れば結構自由に生きていた。考えなければならぬのはそれが現在まで続いていることだ。

(永井路子 6・30・7・1朝日)

選挙二法に私は反対した

公職選挙法と政治資金規正法の改正案が可決されたが、私は両案とも青票を投じた。公選法は党利をはかり、資金法は寄付奨励、共に改悪だ。次の総選挙にどの党、どの候補者に投票するか今から調査し、政治献金している企業や団体には抗議行動を、と国民

に要望したい。

(市川房枝 7・6朝日)

黙ってついて来い”

「黙っておれについて来い」

と生命力あふれる女性を家に閉じこめてしまう男性、本当に大丈夫なのか。妻がいままでも魅力的な召使いであり続け、夫が頼もしく威厳を保ち続け得るか。離婚問題で家裁を訪れる夫たちは、妻の自由と自立の能力を奪っておきながら、妻の一生を保証できる者はほとんどない。

(中島通子 7・7朝日)

子どもをあずける

専業主婦の間でも子どもをあずけることは日常的になったが、親は便利さだけを求めその場しのぎに女から女に肩代わりしてもらうだけ。親のエゴでなく子ども自身のための保育機関を考えるべきだ。

子どもの安全や幸福を母親一人の責任にゆだねて来た過去を、実践的に批判する時に今は来ている。(国立市公民館職員 伊藤雅子 7・25朝日)

無認可の子どもたちに光を

無認可保育所のおもちやのカンパ袋がまわってきた。

保育所の絶対数の不足をカバーするためのものだが、語句は奇異に感ずる。育っていきつつある子どもたちに必要なものを無認可だからと備えないでいいのか。保母さんも社会責任で優遇しなくては。

(赤座憲久 7・29毎日)

お前とあなた

結婚したら「お前」とは絶対に呼ばせないという女性が多いが、「お前」とは昔は尊称だった。妻は「あなた」と夫を呼ぶが、子どもに「あんた」などといわれれば見下げられ

たと思う。男女共学で服装や髪型は中性化するが言葉は男性化。次の世代は妻が夫に「おい、お前」というかもしれない。(高橋博 8・2朝日)

ガンバレ若いお母さん

不満はなくても、病気や疲れでまいったときは、十分な育児ができなくなる。家事や育児には亭主の協力が必要。

それも五分五分の分担でなければ意味がない。精神的な疲れも、打ち明け話のできる相手が必要。特に、核家族化傾向の昨今の若いお母さんには……。

(毛利子来 8・7毎日)

新女権論

男は意地の発想——そして頑固じじい。女は怨みの発想——そして意地悪ババアか鬼ババアか幽霊である。

女の甘えは攻撃だ。頑固じ

じいを駄目おやじ化する。男と女の習性を観察して、女は、がっちりと権力を確保する。新しい女権。(加藤登記子 8・16朝日)

日本に住んでみて

狭い家を有効利用しているが男性は家事を手伝わず、子どもは自立心がない。

(オーストラリア人)

男も子どもも甘ったれ。ネパールでは早婚だがちゃんと独立している。(ネパール人) 酒やタバコをのむのが男らしいと考えられている。テレビを何台持っけていても基本的な生活が整っていないては無意味。

(アメリカ人)

夫の仕事と家庭が分離され夫婦が一緒に行動することが少ないのに驚いた。母親だけに教育がまかせられているのもおかしい。(レバノン人) 両親が子守りを頼んで外出

すると非難される。母親はいつまでも子どもにベッタリ。

(ドイツ人)

(6・17—23信毎)

投書

父親も育児に参加を

幼児にとって、集団保育も家庭生活も大切だが、これが女たちの手だけでなされている現状は変えなければならぬ。核家族化した現在では父親も育児の一端を担わなくてはならないし、社会・父・母が一緒になって育児にとり組んではじめて理想的な環境ができと思う。

(主婦39才 6・11朝日)

夫婦なんて何よ

教育の中では自由と平等について学んだが、結婚八年、気づいてみるとタ馬か飯炊き

ばあさんのような自分。子どもも夫もすべてを捨てて一人自由に生きようかと思う。男たちよ、もっと平等という言葉を、女房の心を考えてほしい。

(主婦34才 6・12信毎)

「実子特例法」では真の解決にならぬ

菊田医師の「実子特例法は必要」に反論。「血縁の子と戸籍を含めた一切の縁を絶ちたい」親の願望をかなえる薬として法律をつくるより、こういう親の少なくなる方向にもっていくことが本当の福祉国家だと思う。

(勤務医57才 6・12朝日)

雨にぬれた力ギツ子……

急に激しい雨がふり出した午後、団地の集会所に一年生位のずぶぬれの男の子が雨やどりしていた。カサに入れよ

うとしたが入らない。明らかに力ギツ子。どんな理由で母親が働いているかは知らないが、常に被害者になるのは最弱者である子どもだということを感じた。

(主婦34才 6・27朝日)

*

二七日付の意見に反論、力ギツ子の母を責める前に、団地の連帯のなさに悲しさと憤りを感じるべき。働く母を敵視しないで、子どもは社会の子として育てていこう。

(主婦42才 6・29朝日)

一人で歩くときの「女」の顔

主人に子どもをあずけ久しぶりに外出。いつもは妻と母の顔で歩いているが、一人の女としての顔を忘れてしまった顔が赤らむ思い。男性にはどんな顔があるのか、子どもと一緒に歩かなくなった時、安心して歩ける「女」の顔を

捜さなければと思った。

(主婦 6・30朝日)

保育園が静寂か

坪百万円もの高級住宅地に保育園ができるのを住民が反対。彼らは働く両親の立場になって考えたか。地域エゴを不愉快に思う。(編集者33才)

地元の者として、せっかくの静寂に騒音は耐えられない。適地は他に十分あるのに。「社会要請」として強行する構えの区は、英知をもって冷静に判断してほしい。

(団体役員73才 7・3朝日)

*

保育園建設に反対できる幸せのほんの一部分を働く子持ち婦人のために分けてあげて。

(主婦28才 7・8朝日)

社会参加の前に

今年は国際婦人年。これに

ちなんで「婦人よ家を捨て社会に出よ」といわんばかり。女が皆家事をべつ視して社会へ参加しようというのとは問題。家事、育児に誇りをもち、それを良い方向にもつていくことが女の社会参加の第一歩と思う。

(30才 7・7信毎)

反論

女性解放を訴える人が育児家事をべつ視しているとは思えない。女が自分を高めるために活動できる場がほしい。行動する人たちに感謝。

(主婦32才)

女性の地位が上ろうとすると私的なことを噂して足を引っぱるのは女性。運動する人を尊敬、感謝。(会社員)

中ピ連への評価をもう一度考えて

中ピ連に対する批判を耳に

するが、中ピ連の行動は、男の身勝手さを突破する糸口でその行動に拍手を送りたい。不当な抑圧に甘んじ、喜んでシッポを振る女性が多すぎるのが残念だ。

(無職36才 7・5朝日)

共感できぬ「中ピ連」

彼女らの行動は男女の本質的相違に目をつぶっている。

男女にはそれぞれの役割がある。暴君や女を食いものにするのはほんの一部の男で大部分の男は女性に一目置いているのだからもっと地道に先輩の歩んだ道を発展させては。

(工員45才 7・16朝日)

主婦の内職になぜ酷税

内職とパートタイムでは税法上の扱いが全く異なり、パートの制限額の半分の額で控除が認められなくなる。せめて給与所得並みの控除を認め

るべきだ。

(会社員49才 7・7朝日)

控除受けられる

毎年十二月末日までに申告すれば自宅の一部を作業場として控除が受けられ、主婦の内職程度なら所得税はゼロになるのでは。

(会社員42才 7・12朝日)

男性に協力し尽したい

国際婦人年の意味は、女性が権利を主張するだけでなく男性との協力を誓うことにもあると思う。戦後女性は権利主張のため男性に対抗して来た一方、義務を忘れている。能力、体力の差を考え、権力を求めるより、昔からの男性に尽くす伝統を守るべき。

(高校生17才 7・11信毎)

「男性に尽くす」に反論

男性に比べ能力に差がある

とは女性の歴史を知らぬ言い方。日本の女性が男性に尽くす伝統をこわすというのが、これが良い伝統だろうか。若い女性としては驚きだ。男性の意識の変革こそ女性運動の本質だと思う。

(主婦67才 7・16信毎)

男性に頼る生き方でよいか

「男性に協力し尽くしたい」という意見に反論。その考えの根底は男性に頼るということだ。これからの課題は、男女平等の思想の上になす女性が目覚めること。封建的思想から脱皮し男女同権をしっかりと見つけてほしい。

(高校生17才 7・23信毎)

もろくなったのか母性愛

母子心中が社会面をにぎわしている。戦時中、夫の生死不明の中で幼児を抱えた母親たちは心中など決してしなか

った。その母たちに育てられた現世代の女性が、夫も生きていてなお母子心中するという。人の心の結びつきの薄さをなげかずにはられない。

(主婦52才 7・11朝日)

福祉園の隣りがわが家

近くの住民が建設に反対する身障者施設や保育園、その両方を隣と向かいにもつが、そこで働く人々に頭が下がる。幼児の声も昼の一人居に変化をつけてくれるし、親の身になって考えたらとても反対運動などできるものではない。(主婦51才 7・12朝日)

「狂育」に思う

勉強時間が少なくなるからトイレに長くいるなという母親。体育の時間に骨折した子は、勉強ばかりで骨がもろくなったという。勉強の遅れを案じて娘を殺し自殺した母

親。教育とは何かを忘れた「狂育」のむなしさに気づかねばならぬ。(7・23信毎)

女同士で能力交換センター

幼児がいるために看護婦の職を離れたが手を貸す人さえあればその能力を役立てたい。一方幼児の世話をしたい人もいるかも知れない。互いに能力を交換し合つて女でも何かできるようなセンターを設立したらと夢をえがいている。(主婦 7・26朝日)

公務員の60才定年を提案

世界的不況から地方財政はますます苦しくなる。四五才以上の女子の勧奨退職を行なっている地方もあるが公務員の定年は是非必要だ。私は男子六〇才、女子四五才を提案したい。反論もあろうが、強力に断行する為政者がほしい。(会社員36才 7・29毎日)

納得できぬ女子四五才定年

「公務員の六〇才定年を提案」に反論。女子四五才といえは育児期を脱して一番脂ののり切った時。四五才定年が決まればさまざまな面で女性に不利が生ずると思う。

(主婦43才 8・7毎日)

PTAの上下関係

PとTは本来対等に教育について考えるべきだが実際には教師はいつも親に対してでも先生の立場をとろうとする。役員も教育には口を出すべきでないというが、納得のいかぬものには意見を出すべきだ。民主主義の原理を教師はPTAの場でとりあげてほしい。(38才 8・10信毎)

女性の地位と育児の問題は

最近母親が自分の生きがいのためと外へ出て働くケース

が多いが、そのために保育所に預けられる子どもはどうなのだろうか。パートで得るお金と子どもの人格形成にける時間とどちらが重いか考えたい。「カギツ子」の心：「狼」や「牙」を出さない自信はありや？

(主婦28才 8・10毎日)

働く母は失格か

一〇日付の意見は解しかねる。母親も父親同様働く権利がある。集団生活の子が母親がつききりの子に劣ることはなく集団の長所もある。育児に専念するのも外で働くのも女性自身の選択に任すべきでありどちらかが他方を非難するのは思い上りと考える。(無職39才 8・17毎日)

*

幼児期は母が見守りたい

十七日付「働く母は失格か」の意見はもっともだが、子ど

もは母親が家をあけることを望まないし私の経験でも母親は特に幼児期は家にいる方がよいと思う。自分の生きがいのために子どもに不自由や寂しい思いをさせるのは疑問だ。

(主婦55才 8・27毎日)

事件

犯罪の表に女あり

近年、女性の詐欺横領など知能犯の大型化が目立ち、最近で二二件、被害額は十八億五、四二〇万円、さらに共犯事件では九件、十三億四五二万円。

(7・22毎日)

〔横領〕

女子行員、二億円詐取

足利銀行栃木支店貸付係が二年にわたり二億一千万円。

男に貢ぐために。(7・22各紙)
男は国際警察員と自称、住所氏名を教えず交際、犯行発覚前に女を消すことも考えていた模様。(7・24朝日)

*

取調べが進むにつれ、犯人はむしろ被害者であるような気がしてきた。大体女性はいつも「結婚」のエサに弱い。近ごろでは高校などで性教育をしているところも多いが、大半は生理的知識にとどまっている。いちばん教えなければならぬのは、本能的な欲望にふり回されず、相手の人間としての価値を見抜く知恵であるような気がする。

(7・30朝日「今日の問題」)

女係長、二千万円横領

名古屋の印刷組合庶務係長(46)。十七年間まじめに勤めた末、今年になって突然犯行を開始。(8・1信毎)

横領発覚して投身

会社経理事務員(26)は一月から七月までに二九〇万円を横領、問いただされてその場で睡眠薬五〇錠をのみ入院後、遺言をのこし七階より投身。(8・4毎日)

〔子捨て、子殺し〕

殺した子を袋で持ち運ぶ

二四才の母、五か月の長男をボストンバッグに入れて持ち歩き、睡眠薬を飲んで自首。

(6・10朝日)

殺して流しの下に

産んだばかりの児を。二四才、三児の母、生活苦から。

(6・21朝日)

赤ちゃん三人次々に

二八才の元ホステス、「独身では世間体が悪い」と。生後

すぐ殺害、隠していた。(7・18朝日)

13階から投げて自殺

二一才の誕生日に三か月の長男を。そして自分も後追い。(8・6朝日)

四人を置き去り

松本市内で夫に家出された主婦(26)が、五才を頭に生後二四日の赤ちゃんまで四人の子を、夫の相手の女の実家に置き去りに。(8・9信毎)

乳児をなぐり殺す

育児に疲れた母親(29)。生後四〇日の長女が泣くので平手で顔をなぐり、脳出血で死亡。(8・20朝日)

二児殺し自殺図る

団地の母親(27)。二才と一〇か月の二児を絞め殺し、

自分も包丁で自殺を図った。
次女の発育不良など苦にし日
頃からイライラ。

(8・21信毎)

〔母子心中〕

夫とその家族殺傷後に

四〇才の妻、夫とその両親
を殺傷して鉄道自殺、茨城で。

(6・10朝日)

中一の次女を殺して

四一才の母も重体。離婚話
を苦にして。(6・14朝日)

妻妾同居を苦し

二六才の内妻、四才、二才
の二児と鉄道自殺。静岡で。

(6・14毎日)

東京では母子三人水死

二六才の妻、二才、一才を
道連れに。(6・15信毎)

栃木で母子三人

小五、小三の男子と三三才
の会社員の妻。(7・2毎日)

日立海岸でも母子三人

六才、三才の子と三七才の
主婦。(7・3朝日)

東京で母子三人

三六才の妻、七才、二才を
道連れに。(7・12朝日)

高松では子ども三人死亡

小六と小二の双生児はガス

中毒。三六才の母は重体。夫
婦仲を苦し。(7・16毎日)

二児をしばる

四一才の母と三才の長男。

五才の長女はしばられながら
も脱出。(8・6朝日)

赤ちゃん投げ捨て母も投身

生後三か月の幼児をマンシ
ョンの十三階から投げたあと
母親(21)も飛び降りた。子

どもをどう育てていいかわか
らないと書き遺して。

(8・8毎日)

〔教育ママ?〕

娘の学校ざらい苦に

小六の娘と電車に飛び込み
心中、(会社員妻33才)。遺書
に「学校ざらいは私の責任」。

(6・24信毎)

学業の遅れを心配して

名門女子校中一の娘を殺し
後を追って母(39)も自殺。
交通事故で三か月入院するの
を悲観して。(7・11各紙)

*

気丈な母の死です。自殺は
自分への他殺といえます。チ
リ紙を飲む、というつらい作
業をするなんて強いエネルギー
いなければできません。教
育ママであったとしても、教
育ママと殺人の可能性は直結

しません。(町田欣一氏論評)
(7・25朝日)

夫婦仲を悲観

PTA役員で活躍、音楽、

習字など娘の学習にも熱心だ
った教員の妻(36)。五才の次
女を殺し、自分も農薬を。

(7・14朝日)

〔重荷〕

住宅ローン苦に

三三才の妻が夫と長男を殺
人未遂。(6・13毎日)

寝たきり老母とガス心中

五年にわたる看病疲れの娘
(28)が養母(63)と共に。

(6・28朝日)

〔暴発〕

夫とその両親を殺傷して

四〇才の妻が鉄道自殺。茨

城で。(6・10朝日)

同せい中の情夫を刺す

二才のウエイトレス。情夫は給料を本妻に送り、女の所得で生活していた。(6・14信毎)

自宅に放火

夫婦仲の悪さを苦にした妻(37)。長野で。(6・29信毎)

夫をバットで殺す

夫婦げんかの翌朝、東京で三才の妻。(8・5朝日)

幼児が包丁で赤ちゃん殺し

生後間もない赤ちゃんが、近所の幼児らに包丁で足を切られたり、頭を殴られたりで死亡。腹には犬のクサリが、首には七夕の飾りが巻きつけられていた。鹿児島で。(8・20信毎)

〔乱暴〕

東女大大学院生教授を告訴

送別会後、教授二人にマンションに連れ込まれ……と告訴。(6・27各紙)

二教授を書類送検

東村山署は二教授を書類送検したと発表。(7・3各紙)

病氣治すと女性に乱暴

横浜の新興宗教の布教師四人が治療を名目に二六才の女性に乱暴。(7・2各紙)

〔遭難〕

老婦人、奇跡の生還

ワラビ採りの老女(66)、山の水を飲んだ以外、一週間何も食わずに……。ワラビが入ったカゴを大事に持って、元気で発見された。山口で。(6・15毎日)

女性の遭難続出

長野県下の山岳地帯で死傷すでに十三人。今夏はエベレスト登頂の影響か、四割が女性登山者だが、他人に頼りがち、肉体的に無理がきかないといった指摘もきかれる。(7・30信毎)

〔悪意〕

保険金目当てに夫を殺害

一億円の保険をかけて愛人と協力、夫を殺害した妻(33)の犯行が発覚。(6・16各紙)

主婦から六千万円詐欺

「ガンで入院しているおばあちゃんの治療費を……」とPTA仲間ほかからだまし取り、お手伝いさんつきのアパートで豪勢な生活。四八才の女。(8・10毎日)

メキシコ集会

〔序曲〕

お祭りに強い反発

一般市民の関心も盛り上らず肝心のメキシコ女性は「貧しさからの解放が先」と反発の声も強い。(6・16朝日)

遅れがちな準備

三百年前の尼僧院を改装したプレスセンターはペンキも乾かずタイプが箱入りのまま山積み。開会式会場も入口にハシゴをかけて修復中。それでも十三日からポスターが現われた。(6・16毎日)

世界会議の序曲はじまる

世界会議に先立って十六日から三日間行なわれるアメリカ科学振興協会主催の「婦人と開発に関するセミナー」の

開会式が十五日夜六時早くもオープン。五〇か国、九九人の専門家・ボランティアが出席、日本からも二人参加。男性による開発が女性に与えるマイナス面を「食糧生産」「教育・伝達」「健康・栄養・家族計画」「消費組合と婦人の組織化」「人口の都市流入と雇用」の五部門にわけて討論する。開会式のエチエベリア大統領夫人は「女性が開発や社会改革に参加できるような処方せんが使えなければ…」と力をこめて演説。

(6・17毎日・朝日)

ジャーナリスト・エン
カウンターも

十六日午前十時から開始。

セネガル議会の女性副議長、「ミズ」のグローリア・スタインム編集長など女六人男四人のパネラーを迎え、「マスコミ」と男女平等」などにつき、

世界の報道関係者がディスプレイション。(6・17朝日)

予備会議で早くも政治色

開幕前日行なわれた予備本会議(非公開)でベトナムと中東の政治問題が登場。出席者の七割が女性だったが男性代表の発言が続ぎ、エクスアドルの女性代表が反発したほど。

(6・20朝日)

〔開会式〕

大物レディ勢ぞろい

予定より遅れ、十九日午前十一時開幕。

歴史的行事とあって各国が自慢の大物女性を送りこみ、十三か国のトップレディが次々と壇上に。

(6・20朝日)

世界の女性指導者が豪華な顔を見せ、男性を制するふんいき。真の男女平等は富の公

平な分配と平和強化を通じてのみ達成できるとの圧倒的な空気の中で開幕。

(6・20読売)

エチエベリア大統領は「女性の解放は人類の解放を意味するものであり、世界の政治経済秩序の根本的変革なしには達成し得ない」と強調。ワルトハイム国連事務総長とシビラ事務局長も第三世界寄りの立場を明らかにした。

(6・20毎日)

回教国もベールをぬいで

強い差別が残るオーマンやアラブ首長国連邦からも、ベールをぬいで女性たちが参加。

(6・20読売)

インディオ婦人らデモ

開会式の途中、メード・掃除婦など低賃金の人々一〇〇人ほどが貧しい者も女性であることを忘れてほしくないと

押しかけ、代表一〇人が入場を許されおとなしく引上げた。

(6・20読売)

デモ隊の実体は二〇人のメキシコ農民女性。「よくいらつしやいました」と歓迎ブラカードを掲げ、私たちも参加させてというメキシコ的な情熱の発露。婦人警官がお引取り願った。

(6・20毎日)

議場に赤ん坊の声

道路に立ち見の人があふれるほど、六千人の九割が女性。子連れもあちこちに。会場内外でも「メキシコ女性解放運動」グループが「婦人年ナンセンス」のビラを手渡し、ただ働き家事を告発。婦人会議は「各国が政治目的のために女性を利用しようとしている」と訴えた。

(6・20朝日)

〔討議〕

いよいよ本格討議

二日目の二〇日は、午前一〇時三〇分から、本会議と第一、第二委員会の三つに分かれて本格的な討議に入り、国際婦人年の目標、現行政策とプログラム、世界行動計画その他のを討論する。

(6・21読売)

藤田代表発言

総会の一般討論で国際婦人年の意義を強調、世界行動計画の支持を表明したあと、日本女性の賃金格差、就職の機會の不平等、職業と家庭の両立問題などを説明、十年後に男女平等にどれだけ進歩があったか、国際的な評価をする機會を設けてほしいと提案。

(6・21朝日)

荒れる婦人会議

二三日の深夜総会では再び中ソ論争。また二四日はイスラエルのラビン首相夫人の演説にアラブ各国が抗議の退場など荒れ模様。(6・25朝日)

宣言案三つともえ

世界行動計画をあきたらないとする第三世界急進派が宣言案づくりを急ぎ、一方、米英も独自の対抗案を。ソ連も第三世界に対する指導権獲得をねらって自らの宣言案を途上国に提示し始めた。

(6・25朝日)

修正案、宣言案の乱発

今会議の焦点、世界行動計画は、二五日から第一委員会で実質討議に入り、二五日夕修正案提出を締切ったが、五〇数か国から三〇件を越す案が出され、宣言案も七七か国と米英ソなどから出され、二五日から発足した作業部会の

議事進行は進まず、深夜作業を続行してもまとまる見通しは立ちにくい。(6・26毎日)

南北ベトナム代表援助要請

二五日夜十一時、ベトナム代表(レ・チ・スエンベトナム婦人連合副議長)が国連関係国際会議で初の演説、解放に果たした婦人の役割を訴え国際的援助を要請。

(6・27朝日)

「行動計画」原則的に合意

「世界行動計画」は二七日午後再開された第一委員会で原則的に合意、本会議で採択を待つのみとなった。

(6・28毎日)

対決、二つの宣言案

難航の宣言案は一本化できないまま二八日夕二つの案が提出された。閉会式ぎりぎりまで一本化の裏交渉が続けら

れるが、微妙な情勢。

(6・30毎日)

第一委「行動計画」を採択

三〇日午前十一時からの第一委員会では行動計画を採択、第三世界の主張がほとんど全面的に認められた。

(7・1毎日)

先進国ウーマンリブが主張している中絶の自由や性の解放は取入れられなかったが、出産・育児の問題は女性が決定制権を持つ、男性の家事協力、雇用面での差別撤廃、政治への参加促進、未婚の母の擁護、教科書再点検などは加わった。

この計画は強制力のない勧告だが、達成状況を報告するモニタリングは二年ごとに行なわれ、国際的な相互監視の目にさらされる。

(7・1朝日)

第三世界宣言案採択

七月一日、西側と第三世界の対立する宣言案が妥協決裂のまま第一委員会にかけられ強行採決により、第三世界案が賛成八九、反対一、棄権一四で採択。テーマは婦人問題からさらに遠ざかり政治対決一色に塗りつぶされた。

(7・2朝日)

合意なきまま宣言採択

最終日(二日)は宣言と決議を採択、午後早く終る予定だったが、またも修正案が続出、緊急動議でようやく反対三ながらも採択された。

(7・3朝日)

「日本政府代表」

代表に藤田たきさん

世界会議日本政府代表に元津田塾大学長藤田たき(78)

さんが内定。(5・22読売)

団員はお役人ばかり

二〇人の日本政府代表団は藤田さんのほかは全員政府職員になる見込み。在野代表を加えないのかと婦人団体はおかんむり。「民間人を加えないのなら、民間婦人会議にも予算を補助すべき」と高田ユリさん。(5・30毎日)

日本は学ぶ立場

日本では女の地位が低い。むしろ途上国から学ぶ立場と藤田さん。(6・11朝日)

代表団メキシコ着

十六日午後六時半メキシコ着。「先進国と第三世界が争わないよう同宿の中国代表団とも協力していきたい」と記者会見。(6・18毎日)

藤田代表行動計画案を支持

二〇日午後六時、藤田代表は十五分間英語で日本の状況を説明、行動計画案を支持した。(6・21毎日)

職場の不平等も訴え

各国代表の演説が延びたため藤田代表の演説は三時間近く遅れ、午前中超満員だった会場はガラあき。だれた反応だったが日本女性のエベレスト征服のくだりでは拍手が起った。(6・21朝日)

*

高齢のうえ事故以来立通しということがなかった同代表途中でとちったがわるびれずエベレスト征服の快挙を日本婦人の進出ぶりにたとえて紹介、満場のかつさいを浴びた。(6・22中日)

きれいなこと過ぎる

藤田演説に対し「公害や核兵器問題をアピールしなかつた」と第三世界代表たちから不満の声も。(6・22各紙)

三木メッセージを朗読

二四日午後七時一〇分、藤田代表は二〇番目の発言国として演壇に立ち三木首相のメッセージを読みあげた。(6・25毎日)

らいてうの言葉も引用

藤田代表はその冒頭に「元始、女性は大陽であった」を引用、事前のテキストにないハプニングに日本人記者団を驚かせた。(6・27信毎)

藤田さんら帰る

日本政府代表団五人は四日午後六時四五分羽田着。「すぐに政治的発言となり改めて婦人問題の複雑さを感じた。今後世界の平和や経済問題などにも女性が積極的に参加しなくてはと痛感」と藤田代表。

森山局長ら残りの八人はアメリカで開かれる日米婦人問題専門会議に出席、十七日帰国。
(7・5毎日)

〔民間集会〕トリビューン

ムード派から告発派まで

トリビューン目ざし日本からも女性グループが続々くり込む。

世界の女の実態について正しい情報を集めたいという「あごら」グループ、世界の婦人と交流を求める「行動の会」、ボランティア活動の視察かたがた会議のふんいきにもふれたという「婦人少年協会」、リブ活動を志す「リブ新宿センター」など趣旨はさまざま。
(6・18中日)

日本からも二百人参加

民間集会「国際婦人年トリビューン」の開会式は十九日

午後五時半から。二千人収容の会場を埋めつくしたのは大部分が白人女性たち。日本からも二百人近く参加。会議の感想は「さあ、わからないわ」の和服女性もいたが、「行動の会」「あごら」など女性解放運動の人々の中には「開発をすれば女性が解放されると思うのは誤り。日本の高度経済成長は女性の犠牲においてだと訴えたい」と意気込む人も。
(6・20朝日)

お役人の白書にあきあき

二〇日、日本の井上繁子淑徳大講師が「戦後の婦人の地位の向上」に重点を置いて発言したが官庁の白書のように冷静そのもの。このため質疑に移ると米国でリブ活動をしている日本女性が立上り挑戦的な発言。日本女性同士の対決に会場は騒然。さらに「あごら」という女性解放グルー

プがたどたどしい英語で訴えると、割れるような拍手。

(6・22朝日)
興奮のあまりふるえ声。何を言っているのかわからなかった。
(6・22毎日)

三千人が中絶論議

トリビューンは世界各国の女性代表約三千人がつめかけ熱気に包まれている。二三日は中絶の自由と必要性について米・仏・エクアドル・コンゴの代表が演説、続いて活発な中絶論争が展開された。
(6・24毎日)

熱気ムンムン

どの会場をのぞいても通路まで満員、何が飛び出すかわからない面白さにひかれて五千人を超える女性が連日押しかけ、女の解放を求める熱気ではちきれんばかり。

(6・26朝日)

国連本会議に修正案を

私たちの声が反映されないと不満が強かった民間参加者らは、二五日、ベティ・フリーダンの音頭取りで結集、行動計画草案に対する独自の修正案提出を決めた。
(6・27信毎)

第三世界、米型修正案反対

二七日午後、修正案をめざすベティ・フリーダンとNOWの自主集会に中南米の女性たちが反発、演壇を占拠して宣言を読み上げようとしたがマイクの電源が切られ、大混乱。
(6・28毎日)

海外

〔中国〕

離婚訴訟を大衆討論

法廷は妻の職場の会議室。

女性裁判長は、夫妻の言い分を聞き、夫の男尊女卑思想の誤りを指摘、夫および妻の職場代表の意見をよく聞いた上で和解を申し渡す。弁護士なしで社会的責任を問う方法。

(8・29朝日)

〔南ベトナム〕

第一線に立つ解放女性

解放前下積みの労働に耐えていた女性が、男女平等を尊重する臨時革命政府の下では、下は兵士クラスや政治工作員から、上は最高級の政府幹部に至るまで重要な職務についている。式典の壇上にはアオザイ姿の幹部女性が並ぶ。

(5・21毎日)

〔スリランカ〕

まず持参金廃止から

古くからの慣習であった結婚持参金制度を廃止すべきだとの答申が、政府の諮問委員会(ほとんど女性)から出された。

(8・29信毎)

〔オーストラリア〕

別居一年で離婚成立

新「家族法」が下院を通過九月一日から実施される。従来は宗教的背景もあって離婚がきびしく、三年以上の別居に加え、姦通・残虐行為等、十四の理由の一つが完全に証明されることが必要で、成立までに平均四―五年、十二―二十四万円の法廷費用を要していた。

(5・24朝日)

苦しい主婦の地位

ビカビカの床、純白のシーツなどに代表される伝統的な家の目標は以前よりいっそう基準がきびしく、主婦は家族

の無料レストラン兼タクシー兼ホステス……。しかも別れた夫から生涯生活費を受取る権利は、新離婚法で解消。

(グリーンブ・ゆうこ6・23―24毎日)

〔イラン〕

先頭に立つ王妃

政府が考案中の一種の離婚保険「慰謝料基金」の設立にも大賛成というファラ王妃。一九五九年二一歳で王妃になって以来、婦人の権利拡大に積極的発言を。(6・23朝日)

〔イスラエル〕

キブツに見る男女平等

この国独特の集団農場で、大臣、国会議員でもキブツ滞在中は料理運び、サラ洗いをする。性は非常に解放的だが、男女交際も対等、公開が原則

で、被害、加害という図式は成立しない。(5・21朝日)

〔スウェーデン〕

女性の手切り男性がスト

女子労働者は大黒柱でないことを理由に、女性の手切りを始めた。これに抗議して、男子労働者がストに突入。全国からカンパが寄せられ、中央組織の労働組合連合と雇用者連合が仲裁に。

(9・2朝日)

解放されている女

女だてらには過去の話、性別による職業区別や男女の役割を決める偏見を除く努力が国家的にすすめられている。(ヤンソン由美子 6・30―7・1毎日)

〔デンマーク〕

女性より安月給とスト

コペンハーゲンのカールスベリー・ビール会社では、男子労働者が女子労働者並みの賃金をよこせ、と賃上げストに突入。女子労働者九〇人の解雇を受けたことによって、女子の賃上げが認められ、男性より高い賃金を支払われることになったもの。女子と同じような改正をうけ入れない限り、賃上げはむずかしい、と調停委員会。(9・2朝日)

「イギリス」

愛の誓いも平等に

英国教会は結婚式の礼拝の一部を改定。指輪交換の際、花ムコが「花嫁に与える」くだりは削除、「妻が夫に従う」るなど一六六二年以来の改定を七六年七月から実施す

る。(6・6朝日)

まだ強い性差別

女の平均賃金は男の半分、高等教育を受けるのは男二二%、女八%、女の教師は一%。有名クラブの出入り時間は限定されており、部屋によっては「女人禁制」のドアも。

(6・23朝日)

女の「悲しい酒」

女性のアル中患者が激増。

男女のアル中比率六対一が三対一にまで接近。しかも女性のアル中はコッソリ隠れて飲むタイプが急増しているため、実際の男女比は一对一かもしれない——英精神医学研究所発表。(7・26朝日)

「フランス」

意気高く「売春婦スト」

「世界でもっとも歴史の古

い職業を公認せよ」と、約二〇〇人の売春婦がリヨンの教会に座り込んだ。南仏カンヌやニース、パリ、マルセーユなどでも同情ストが行なわれた。全フランス女性解放運動やフランス同性愛主義運動などの組織をはじめ、欧州各地の行動派からも激励の電報が。(6・9朝日)

母性保護廃止に反論

男性と平等の権利を与える性差別禁止法審議会は、女性が平等を主張するなら有利な点と同時に不利なことも受け入れるべきとの見地から工場法の中の女性の特権廃止を決定。政府はこれに反対で保護規定と性差別禁止法に盛り込む方針。(6・25朝日)

まだ低い女性の地位

十年間でサラリーウーマンは一二〇万から八〇〇万に急

増、全職業人口の四〇%を占めるが三〇%は男性より低賃金。サイフは家父長がにぎり、妻が銀行口座を持つことに四一%が反対。

(後藤操 6・9・10毎日)

女性だけで女性向TV番組

十年選手のジャーナリストやテレビディレクターらのグループが担当、「時事問題を男性とは異なった視点から取上げた番組」を目指している。これにこたえ国営放送は女性ニュースキャスターの起用も検討中とか。(5・29朝日)

「イタリア」

催眠術で避妊

カトリックではオギノ式以外の避妊は禁止だが催眠術で月経周期を変えるのは戒律に触れぬとあって、目下実験中。

(6・30朝日)

〔東ドイツ〕

離婚激増

一九七四年の離婚数は前年の八%増と急増。しかも離婚申請者の三分の二は妻。離婚理由のトップは不貞ないし性的不満の三二%。政府はセックス・カウンセラーの利用を呼びかけている。

(8・13信毎)

〔チエコスロバキア〕

託児所不足

労働力の不足から、人口増加につとめ、出生率が増加したものの、それに追いつかない託児所施設。ピンチヒッターとして、大きな家を改造して、少数の子どもの面倒をみる「ミニ託児所」が登場。その可否をめぐって賛否両論。

(8・25朝日)

“カギっ子”対策

両親とも働いている家庭の多いため、「児童館」制度があり、学校が終わったあとの子どもの面倒(宿題・遊び相手)をみてくれる。この制度について投書を求めたところ、莫大な量の投書があり、改めて、親の関心度の高さを浮彫り。

(7・28朝日)

〔ソ連〕

国際婦人年に関連する恩赦

五月十六日の布告で①五年以下の刑を受けた女②未成年の子をもつ女、妊婦、五五歳以上の女、身体障害の女などが残りの刑期半減に。

(5・25朝日)

家庭内ではまだ…

女が経済的に自立しているゆえに世界一高い離婚率、自

身の幸せを求めて出生率は低下。しかし買物を手伝う夫は多くても炊事・洗たくまではしない人が多い。

(石島ユタカ6・16―17毎日)

〔カナダ〕

妻の財産権保護が問題

結婚中に蓄積された財産は離婚するとすべて夫の所有となる。夫の同意なしに妻が労働組に加入できない例もある。

(マックギル大教授、史子・中川・スミス)(9・1―2毎日)

〔アメリカ〕

空手や柔道で自衛

女が社会的に第二の性の役割しかもてないのは心理的な恐怖が原因と、空手や柔道を習う女性が急増。

(5・22朝日)

乱費された女性の地位基金

バンク・オブ・アメリカで昨年用意した三五〇万ドルが男女平等に関係ないフランス料理学校、アフリカ狩猟旅行などに充てられていたため、連邦地裁からきつい通告を受けた。同基金は同銀行婦人従業員が性差別待遇を不満とした訴訟に対して会社側が支払ったもの。

(5・29朝日)

多様化する女の子の未来像

ニューヨーク市内の小学五年生に未来像を調査したところ、男子は従来通りだが、女子は主婦志望は一人だけで、医師八人、芸術家二人、科学者三人、弁護士一人と多様化。結婚しないと答えたのは男子より女子が多かった。

(7・26朝日)

自己主張教える講座流行

「自己主張は女らしくない」と教育されたため、自分の感情をうまく表現できずに悩んでいる女性が多い。何を欲し何を欲しないかをちゃんと話せるように教育する「女性のための主張講座」がニューヨークほか全国各地で人気。

(7・16朝日)

苦情相談で大成果

SFCA (サンフランシスコ・コンシューマー・アクション) は一九七一年教会の片すみに机一つで誕生、不良商品の苦情相談で五万件、五五万ドルの利益を守る大成果をあげ今は会員二千人、年間予算三千万円。(8・3毎日)

カトリックにも「リブの波」

七五〇人のカトリック系修道女の全米大会が、サンフランシスコで開催。司教と対等の権利を、女性の法王選出、

などのほか、着たいものを着ようなどの「女」を前面に出した訴えも。(8・11信毎)

「メキシコ」

武装のウーマンパワー

五月二四日、メキシコ市の南約百キロのテミスコで五〇〇人以上の女性グループが、ピストル、刀、棒などで武装、町公会堂を占拠、町政の腐敗に抗議。(5・26朝日)

今も差別社会

五才になれば子守り、十五才で結婚、平均一〇人の子を産み、育つのは二、三人、平均寿命三七歳のメキシコ農村女性。文明を生み出すための血と汗の労働を数世紀にわたって提供した第三世界に日本はあまりに無理解ではないか。(黒沼ヨリ子 6・3毎日)

婦人年を告発

「国際婦人年は、今の男性社会が安全に続くよう政府がつくりだした興行である」と告発する解放グループも。

(6・17毎日)

働く女の現実とは？

子どもをベッドにしばらくつけて働きに出たり睡眠薬をのませて職場のトイレに隠すため事故死があとをたたない。

(7・28毎日)

「アルゼンチン」

女性の実状は

男性の五、六歩あとを歩かされ少し頭角を出すとい〇倍もソソをする男尊女卑の国。大統領・弁護士・医師・建築家・事業家・管理職公務員など、どの南米諸国よりも社会的に重要な地位を占めているが。(岡本弘子 9・8—9毎日)

切抜コピーサービス いたします

「あごら」掲載の切抜きの新聞コピーを、ご希望の方にお頒ちします。

一件 六十円(会 員)

一件 八十円(非会 員)

「掲載号数」「項目名」

「掲載月日」「掲載紙」を

明記、料金と返送料実費を同封のうえ、左記へ。

〒160 東京都新宿区

新宿1の9の6

「あごら」新聞切抜係

(料金は切手でも可)。

切抜運動に「ご参加を」

女性の情報収集運動の一つとして参加の方、購読紙名をハガキに書いてお申込みください。地方紙を特に歓迎。申込み・問い合わせは前記「あごら」切抜係へ。



地道に「女」を

考えるグループ誕生

職場や家庭での婦人差別など、身近な問題から考えようと「あごら北海道」がスタート。地道に少しでも多くの女性たちとともに考えていきたいと、姿勢はあくまで控え目。

(7・9報知北海道版)

男性社会から

脱却するために

札幌にもあすの女を考える広場「あごら」ができた。まだ二回目だが、機関紙「あごら」を中心とした読書会とディスカッションは活発。人の上にあぐらをかいた女性解放でなく、一人一人の意識高揚が必要。手がけられるところから、息長く研修しあうとい

う。(7・28北海道教育新報)

「女性の解放」めざして

「あごら北海道」の発起人の山口里子さん。「女性解放運動は経済的自立をめざすための保育所設置運動と、教科書問題―教育を変えていこうということに行きつく。そのためには、知識に終わらせず、力にして行動につなげていかなければ……」と語る。

(8・19北海道新聞)

教科書の中の性差別

女性問題を考える雑誌「あごら」が十一号で「女と教育」の特集を組み、会員による教科書チェックを載せている。

(8・26信濃毎日新聞)

教科書に見る男女差別

「外で働くお父さんは大黒柱、おかあさんは洗たく、料理に専念する人」。そんなイメージを、子どもの頭に植えつけている教科書を考え直さなければ、男女差別の壁は破

れない、とグループ「あごら東海」の会員たちが、小中学校の道徳、社会、家庭科の教科書を点検、機関誌「あごら」十一号の「女と教育」特集にその結果をまとめている。

「婦人問題をとりあげようとするなら、新しい教科書を女性の手で作る必要がある」というのが点検した主婦たちの実感。(9・2朝日中部版)

TBSテレビ

モーニングジャンボ

九月二二日、アメリカで出版され話題を呼んでいる「女が生きのこるカタログ」を地でいっている、「あごら」を紹介。雑誌、読書室などの写真も瞬間的に映されたが、あごらの趣旨が適確に伝わらなかったのが残念。

「女のグループ連絡会」

が発足

メキシコの国際婦人年世界会議に出席した「あごら」や

「国際婦人年をきっかけに行動を起す女たちの会」などの有志が国内の女性グループの横の連絡不足を反省、情報交流をはかろうと呼びかけた。

準備会で、草の根グループが顔を合わせ、会の必要性や方向づけをめぐり意見をたたかわせた結果、政府主催の「国際婦人年記念日本婦人問題会議」にむけ、意志表示をすることですタートをきることになった。

会はグループ参加をたてまえとする所から、女のグループ連絡会(略称グル連)と決まり、①女性グループ間の情報交流をはかる。②随時、テーマ別に有機的なつながりを持ち、相互に役に立ちあう、を目的に多くの草の根グループの参加を呼びかけている。

(10・10婦人民主新聞)

☆国際婦人年世界会議関係は新聞切抜帖に。

感想

主婦の立場から

「あごら」を拝見すると、いつも家庭の主婦を軽く見ておられるように感じ心外です。家事、育児に専念することと社会に出ることは同じぐらいの重味のあることではないでしょうか。収入につながらないからでしょうか、犬や猫にでも出来ることだからというわけでしょうか、蔑視されているようです。困ったことに私は全然束縛感がないのです。リブの方々には、私のような考え方が諸悪の根源と映るのでしょうか。女性を幸福にするために解放すべきだというなら、幸福とはいったい何でしょう。幸福に対する価値感などは人によってそれぞれ違うものです。私は他人

様から概念的な幸福を支給していただくのは、あまりありがたくありません。女性、女性と自ら言い立てるより、人間として生きること努力したい。そして暮しの中から男性女性の区別を認め合い、お互いを尊重し合いたいと思うのですが。

(河村知恵)

たより

男性の協力

七月五日、世界婦人会議の報告を中心にした吉武輝子講演討論集會に夫と共に出席したところ、そこでは女たちが安心して参加できるように、別室で男たちによる託児が行なわれたのです。そんな実行力を持つ小さなグループがあるなんて嬉しいではありませんか。また、集會において女たちの熱心な話し合いの最中に

一人の男が無理解な発言を始め、他の男たちからナンセンスのヤジが飛んでも続けました。そこで同性として奮起した夫が発言に立ち上がったトタン、会場いっぱい真剣な女たちの視線ですっかり上がって、シドロモドロになるという一場面がありました。その間女たちは静かに聞いたり拍手を送ったりする優しさや余裕を見せたのです。ほんの三、四〇年前には、人前で話す機会がなかった女たちが、いざ集會を持ってみるとモタモタしてしまい、男たちからさんざん嘲笑されたけれど、今ではこんなに堂々と話し合いが出来るようになったのだと、帰り道、夫と話したものでした。

七月十九日には、女の問題に関する樋口恵子講演會（新聞社主催）がありました。カップルで来た人がとても多

いのです。珍しさもあるにしても、ともかく男を誘って来れたのは嬉しいことで、いつまでもと願わずにいられますでした。

もう一つ。「あごら北海道」が会場を借りている北海道クリスチャン・センターの事務の男性たちが、「あごらのためなら」と大変親切にして下さることも添えておきました。

「ウーマンリブはきらわれる」「どうせわかってもらえない」と決めつけて、初めからあきらめてしまう人が多いようですが、女が主体的に生きようとするとき、心ある男性は決して敵ではありません。私の夫も、今でこそ「頼もしい同志」ですが、もし私が途中であきらめていたら、何の疑問もなく「寛大な主人」になりにきっていたことでしょう。

それに女の私自身、遅い目

覚めだったことを思えば「永遠に失望しない」勇気が湧いてきます。

コンクリートの厚い壁ぐらいにへこたれず、図太く、大らかに手をつないでいこうではありませんか。「山の動く日、来る」です!!

(山口里子)

男性から

吉武さんの「男が家事をする」本意とは多少ずれるかも知れませんが、全く同感と
思う箇所がありました。炊事、洗濯、掃除etcボクがやると、ワイフがやったより数段劣るわけです。

このことは、その人間の生き方が体にしみ込む年頃、戦場で死ぬ——まさに当時は戦場で闘うではなく、戦場で死

ぬ——訓練ばかり受けていたからと思ひ込むでしょうがないのですが、家事への劣等感から、亭主としての無意味なイバリ方をするときがあるようです、ボクには。

(遠藤洋三)

差別

来春受験の次女、成績も良く、四年制大学希望ですが、父親は短大を出てなるべく早く実務についたほうがよいという意見。さらに、いっそ大学には行かず高卒で大企業に勤めるようにと言い出しました。夏休み、娘は一日四時間のアルバイト、同年齢の従兄は朝七時から夜までゼミ通い。うらやましいと言ってます。めったやたら、必死に勉強の男の子も問題ですが、女

の子はいつかはお嫁に行くのだから……という考えも問題。国際婦人年に考えなければならぬことの一つでもあるようです。

(小野田栄子)

あぐら東京

●体当たりで参加したメキシコ集会の状況をとにかく伝えようと、八月例会は旅の報告会を。参加者六四名。発表は真浦・犀川・宮下・長沢・青木・斎藤の各氏ほか。話に熱が入り、午後一時から八時まで時間を過ごしました。

●この旅に参加し、日本の女の連帯の欠如を痛感した人々が「女のグループ連絡会」をよびかけ、九月発足。どのグループも敬遠する仮連絡先を「あぐら」が引受けざるを得ない破目になり、従前にもまず

超多忙。ネをあげていますが十一月の集会和デモを成功させようと張切っています。

●九月例会は十一号合評会。発行後時間がたちすぎ気がぬけた合評になったのは残念でしたが、提案などを単なる記事に終わらせず、それに続く行動に発展させようという力強い発言もありました。(佐)

あぐら東海

満一年を迎える

早いものでこの十月で「あぐら東海」は満一才を迎えます。生まれたては西も東も分からず、ダベッてばかりいましたが、今年三月より会員の中からいるな分野の専門家に講師になっていただき、一定のテーマを学習できるよ

うになりました。

六月例会

六月二二日、柏木一枝さんを講師にして「食品公害」を学習しました。

薬学を専攻して東大研究所に勤め、医師に対する薬の売込みの汚さを痛感し、食品添加物も同様の方法で食品加工業者に売り込まれることを知り、食品添加物の研究に進んだ方です。

日本で使用を許可されている食品添加物は三三六種、日本人は一日平均六〇種、一〇〜二〇グラムを食べさせられていること、その分類や化学作用、人体に与える害、添加物の使用理由、添加物による環境汚染等々、驚くべきうんちくを傾けて話されました。ちょうど有吉佐和子の「複合汚染」の出たところで、活発な質疑、討論が続けられました。断片的知識しか持ち合わせな

い私たちも、改めてその恐ろしさを知るとともに、社会問題としての問題の深さを感じました。中でも食品を清潔に取り扱うことにより、使用必要説に理由を与えないことなどは大切だと思いました。一般の人々に訴える方法など、まだまだ皆さんの問題を残しながら閉会となりました。

七月例会

七月二九日は弁護士会の員、佐藤典子さんによる「女性の財産権について」でした。

佐藤さんは大学卒業後すぐに結婚、子どもができてから勉強して司法試験に合格、弁護士になられた方です。女だから女のことばかりやる、ということに抵抗を感じて、六〇年安保のころは学生や労組の人たちの弁護を引受けていたが進歩的な男性でも女性にについては保守的であるのに驚き、このごろつくづく女性問

題を考えるようになったという事です。

戦後新憲法ができ、民法が改正され、男女の法的な平等が確立され、「妻の無能力」などは削除された。現民法は経済面では夫婦別産制で、個人の権利を認めている点、戦前よりよいが、妻に収入のない家庭では、女性に不利になる。世間の実態は古い慣習が

支配していて、法律通りにはいきにくい、などが指摘されました。税法の面では、贈与税が年六〇万円までは妻に控除されること、住宅購入資金、遺言や遺留分のこと、夫婦間の契約、財産分与や相続のことなど話されました。会員からは妻の相続が三分の一では不合理ではないかとか、相続放棄のこと、税法への質問などが出され、時間不足を惜しみながら散会しました。

十一号の反響

「あごら東海」の受け持った社会科と道徳教科書の男女差別の点検が予想以上に反響を呼び、朝日新聞で紹介されたり、毎日新聞に反論が出たり、先生方のグループから提携を申し入れられたりで、私たちはやりがいがあったと喜んでいきます。

「あごら」も中日新聞で紹介されたのを初め、東海テレビでの放映、各新聞の催し欄の掲載などで、会員も百十名に増えました。(浅野美和子)

あごら北海道

東京から札幌に来てもう四年。街は東京と大差ない札幌でも、女性解放のために連帯がほしいと思うとき、新聞等でさまざまな活動が伝えられる東京との距離と、地方の後進性・孤独をしみじみ感じてしまうというのが正直なところ

資料集

資料1

世界行動計画

一九七五年七月一日 国際婦人年世界会議において採択

序 章

1 国連憲章を署名するにあたり、国際連合の諸国民は、戦争の惨害から将来の世代を救い、基本的人権、人間の尊厳および価値、男女および大小各国の同権についての信念をあらためて確認し、一層大きな自由の中で社会的進歩と生活水準の向上とを促進すること等を特に約束した。

2* 最近数十年間の最も偉大で重要な業績は、多数の民族および国民が外国による植民地支配から解放され、自由な諸民族の共同体に加わることができたことである。

過去三十年間、経済活動のあらゆる分野で、技術的進歩が達成され、すべての人々の福祉を増進するための大きな可能性をもたらした。しかしながら、外国による植民的支配、外国による占領、人種差別、アパルトヘイトおよびあらゆる種類の新植民地主義の残滓は、依然として開発途上国および関係するすべての人民の完全なる解放と進歩にとり最大の障害の一つとなっている。科学進歩の恩恵は、国際社会のすべて

の構成員に公平に分配されていない。世界人口の七〇%を占める開発途上国は、世界の収入の三〇%を受けているにすぎない。現在の経済秩序の下では国際社会の統一のとれた、かつ、均衡のとれた発展を達成することは不可能であることが実証されてきた。したがって、総会決議三二〇一(XXIX)に基づき新しい国際秩序を確立することが必要である。

3 国連憲章発効以来、上記の基本的原則および目的を強化し、細かく規定し、実施するための条約、勧告その他の文書が採択されてきた。(注)そのうちいくつかのものはいかなる種類の差別もなく、すべての人に人権と基本的自由を擁護し促進することを目的としている。

また、他のものは、経済社会の進歩発展の促進、あらゆる種類の外国による支配、従属、新植民地主義を撤廃し、男女同権を促進するという、さらに絞った目的を掲げている。

これらの国際文書は、国際社会が、諸国民の発展における格差および人種、性別その他のいかなる理由に基づくものであれ、すべての形態の差別がもたらす悲劇についての認識をますます高めつつあること、また平和、衡平ならびに正義の

中で進歩発展を促進しようとの明らかな意志を有していることを反映している。

4 これらの文書を通じ、国際社会は、一国の全面的な発展および世界の福祉、平和のためには、婦人が男性と同様にあらゆる分野に最大限に参加することが必要であることを宣明し、すべての人は、差別なく社会的経済的進歩の成果を享受する権利を有し、同時に、かかる進歩に貢献するべきであることを宣言している。

国際社会は、性別に基づく差別を、基本的に不正なもの、人間の尊厳に対する罪、および人権の侵害であるとして非難している。国際社会は、一九七〇年代の国際開発戦略の確固たる目標の一つとして、開発努力全体への婦人の全面的な参加をあげている。

5 これらの厳粛な宣誓と、特に、国連婦人の地位委員会および関連専門機関の行なってきた業績にもかかわらず、これら諸原則の具体化は遅れており、また不均等である。これら多数の文書の作成および実施にあたり遭遇する困難は、各国間、地域間等の著しい相違がもたらす複雑さによるものである。

6* 歴史は、婦人が、男性とともに人々の物質的、精神的進歩の促進および社会の進歩的な刷新の過程に果す積極的な役割を实践してきた。われわれの世代においては、婦人の役割は、強力な社会変革の勢力として、ますます抬頭していくであろう。

7 政治・経済・社会・文化構造ならびに発展の程度および、婦人のおかれた社会的地位によって、婦人の地位は、国および地域により、著しい相違がある。しかし、基本的な共通点

が婦人を団結させ、法律上、経済上、社会上、政治上、文化上、存在する男女の地位の相違と闘わしめている。

8 国際経済関係を支配している不均等な発展の結果、人類の四分の三は緊急かつ切迫した社会・経済問題に直面している。これらの問題のしわ寄せをより大きく受けるのは、その中の婦人であり、開発過程における婦人の状況と役割を向上するためにとられる新たな措置は、新経済秩序の建設という全世界的な計画の不可欠の一部を成さなければならない。

9 多くの国では、婦人が農業労働力の大きな部分を占めている。このような事情と、婦人が農業生産、食品の加工、流通の分野で果す重要な役割にかんがみ、婦人は、大きな経済的力となっている。にもかかわらず、農村労働者が技術的設備をもたず、教育、訓練の機会を与えられていないことを考慮に入れるならば、多くの国において農村婦人は二重に不利な立場におかれているといえよう。

10* 工業化は、婦人に職を与え、開発過程への婦人の参加の主要な手段の一つとなるが、生産の技術的構造は一般的に男性および男性の必要に合わせたものであるため、婦人労働者は多くの点で不利をこうむっている。したがって、工業およびサービス業における婦人労働者の状況に特別の注意が払われなければならない。婦人労働者は、現在の経済危機、失業の増加、インフレーション、大量の貧困、教育上や医療のための財源の不足の影響、都市化その他の人口移動による、予見せざる、かつ好ましくない副作用を苦痛をもって感得している。

11* 科学技術の進歩は、多くの国において、婦人の状況にプラスとマイナスの両面の影響をもたらした。政治的、経済的、社会的要因は、これらの進歩がもたらす望まじからざる影響を克服するにあたり重要である。

12 過去数十年間、多くの国で婦人運動および何百万人の婦人が他の進歩的勢力とともに、国内面、国際面でこれらの問題に対する世論を喚起してきた。

13* しかしながら、世論は、外国支配下にある地域の多数の婦人、特にアバルト・ヘイトの下にあって、日々王政の恐怖を経験し、人間の最も基本的な権利を回復するため、たゆまず闘っている婦人を看過している場合が多い。

14 婦人が、多くの国で、経済社会活動の政策決定段階、政治行政への参加に際し、日々未だに当面している諸問題の現実と、世界成人人口の約五〇%の潜在力が十分活用されていないという損失が、国連をして一九七五年を国際婦人年と宣言させ、全体的な開発努力への婦人の全面的な参加を確保し、男女の平等な権利、機会および責任に基づく国際協力ならびに世界平和の強化へ婦人を広く参加せしめるための一層強力な活動を呼びかけるに至らしめたのである。国際婦人年の目的は、婦人が其の意味で、また完全な意味で、経済的、社会的、政治的生活に参加するような社会の概念を定め、社会がそのように発展していくための戦略を作り出すことである。

15 本計画は、婦人の地位に関し、すでに採択された国際文書および諸計画の実施を強化し、これらをより時代に即した形に拡充し位置づけることを意図している。

本計画は、国際婦人年の諸目標達成のため、低開発および婦人を男性より低い地位におとしめている社会・経済構造上の問題を解決するための国内的国際的行動を促すことを主たる目的としている。

16 男女平等の達成とは、両性がその才能と能力を、自己の充足と社会全体のために発展させる平等な権利、機会、責任をもつべきことを意味する。そのため、家庭ならびに社会の中で両性に伝統的に割当てられてきた機能および役割を再検討することが肝要である。男女の伝統的な役割を変える必要性を認識しなければならぬ。婦人をあらゆる社会活動に同等に参加させるためには、家事の負担を軽減するような社会に組織されたサービスが設立・維持され、特に子供のためのそれが提供されなければならない。家庭と子供について、男女の共同責任が受け入れられるためには、主に教育を通じ、社会通念を変えるためのあらゆる努力が、払われるべきである。

17 政府は、男女平等を促進するため、法の下での男女平等、教育と訓練の機会均等を目的とした設備の供与、報酬および適切な社会保障を含む雇用条件の平等を確保すべきである。政府は男女が婚姻上の地位と無関係に平等な条件の下に雇用される権利、ならびに経済活動のすべての分野に進出しうるような措置を承認し、実施すべきである。すべての人が無料の初等普通教育を受け、さらに中等普通義務教育、雇用条件の平等および母性保護を受ける機会につき定める法の実施を促進するような状況をつくり出す責任がある。

18*

政府は、多くの国の、特に恵まれない層の婦人たちに負担のかかっている苛酷な労働条件と、不合理な重労働の負担を改善するため努力すべきである。政府は婦人の境遇を改善し、男性と同等に婦人を開発に全面的に参加せしめるために必要な保健サービスや、栄養その他の社会的サービスを利用しやすくすることを保証すべきである。

19*

個人および夫婦は、子供の数および出産間隔を、自由にかつ責任をもって決定し、そのための情報と手段をもつ権利を有する。この権利を行使することは、両性の真の平等の達成にとり基本的であり、これを達成することなくしては、婦人が他の諸改革の恩恵を受けようとする試みにおいて不利をこうむることとなる。

20*

保育所および他の育児施設は、子供が家庭において受けるしつけや世話を補うものである。同時にこれら施設は、男女平等促進の重要な鍵である。政府は、したがって、このような施設をまず第一に次のような子供に対し与えるよう、取計らう責任を有する。親の一方または双方が雇用されている場合、自営および特に農村婦人に関しては農業に携わっている場合、訓練または教育を受けつつある場合、または就職や訓練、教育を受けようと希望している場合。

21

開発の主たる目的は、個人および社会の福祉に継続的な改善をもたらし、すべての人に恩恵を及ぼすことに鑑み、開発は、それ自体として望ましい目標とみなされるだけでなく、男女平等を促進し、平和を維持するための最も重要な手段ともみなされるべきである。

22

開発への婦人の参加は、婦人の活動が社会、経済、文化生活のすべての場面を包含するよう拡大されることを必要ならしめるであろう。婦人に必要な技術訓練を与えることにより、その貢献を一層生産的ならしめ、そしてすべての計画の方針決定・企画および実施への婦人の参加の拡大を確保することが必要である。また全面的な参加とは、婦人が発展の恩恵の正当な分け前を受け、もって、すべての部門の人々への一層公平な所得配分を確保することを促進することである。

23*

すべての人々に対する人権を推進し擁護することは、万人がその達成を目標としている国連憲章の基本的諸原則の一つである。全世界における人権の擁護と男女の完全な平等の確保にとって不可欠の要素は、平和、正義、万人の平等およびあらゆる紛争の原因の除去を基盤とする持続的な国際協力である。真の国際協力は国連憲章に基づき完全に平等な権利、天然資源に対する主権およびその利用の権利を含む民族の独立と主権の尊重、内政不干渉、領土保全を防御する諸国民の権利、武力による領土の取得またはかかる試みの不容認、互恵、武力行使または武力による威嚇の回避、諸国家の経済権利義務憲章（注二）の基本的目的を成すところの新しく公正な世界経済秩序の推進および維持に立脚しなければならぬ。国際協力および平和は、個人の尊厳、人格の尊重、個人の自立と団結、民族解放、政治的経済的独立、植民地主義、新植民地主義、ファシズムおよび他の類似のイデオロギー、外国による支配、アパルトヘイト、人種差別主義およびあらゆる種類の差別の撤廃を必要とする。この目的のため、本計

画は、平和の促進および維持を目的とするあらゆる努力に婦人が全面的に参加することとを要請する。真の平和は、新しい国際秩序を確立する責任を婦人が男性と分かちあわぬ限り達成され得ない。

24 本計画の目的は、婦人が現実、あるいは潜在的にもっている独特のかつ多元的な貢献が、現存の開発行動計画ならびによりよき世界経済の均衡の概念の中で見失われないことを確保するにある。

国内および国際的行動に係わる勧告は、あらゆる分野、特に婦人が特別不利な立場にある分野において必要な変革を促進することを目的として提案されている。

25* 一個の人間としての婦人の人格の全的な発展は、婦人が母親として勤労者としてまた市民として開発過程に参加することと直接関連している。婦人の人格の調和のとれた発達にとって等しく有意義で最良の条件を与えるために、婦人のもつこれら種々の役割の調整を促進するような政策が開発されるべきであり、このことは男性の発展にとっても等しく意味を有することである。

第一章 国内行動

26 本計画は、国際婦人年の目的を達成するため継続的な長期努力の一環として、一九七五年―八五年の十年間にわたる国内行動に指針を与えるものである。これらの勧告は、すべてを網羅しているものではなく、婦人の境遇および生活の質を

取扱った他の既存の国際文書および国連組織の諸決議とあわせて検討されるべきである。これらは十年間に優先的に行動を要する主要分野を述べたものにすぎない。

27 本計画中の国内行動に係わる勧告は、第一義的に各国政府、そしてすべての公的機関、民間の機関、婦人団体、青年団体、使用者、労働組合、マスコミ、非政府機関、政党、およびその他のグループに向けられたものである。

28 婦人の地位は、社会、文化および地域により大きい格差があり、おのずから必要とするものも、問題点も異なってくる。したがって個々の国は、独自の国内戦略を策定し、本計画の中から自身の目標および優先順位を決定すべきである。今日の変動する社会条件の下にあっては、評価分析のための実効的な機構が設立されるべきであり、目標は、特に第二次国連開発の十年のための国際戦略(注三)および世界人口行動計画(注四)に掲げられたものと関連づけられるべきである。

29* 婦人に完全な平等を実現し、いかなる種類の差別もなしに、自由にあらゆる形態の開発に参加し、教育および雇用の機会を得られるような社会的経済的構造の変化が促進されるべきである。

30* 政府のあらゆるレベルにおいて、これらの目標および優先事項を実施するために適切な行動をとるとの明確な意向表明がなされるべきである。平等および婦人の社会参加という理念に対する政府の側の約束は、搾取の危険のない制度を確保するよう社会内の基本的な諸関係を変えようというより広い意味こそ十分に効果的たりうる。

31 婦人が参加すべき国内の戦略および開発計画の策定整備に

際しては、婦人の利益と必要を十分に考慮しつつ、目標および優先順位がうちたてられることを確保し、かつ、婦人の状況を改善し、その開発過程への貢献を増大するように十分な配慮をしつつ、諸方策が決定されるべきである。婦人はあらゆるレベルの政策決定段階に平等に参加すべきである。適切な行政機構および制度が存在しない場合は、これらを設けるべきである。

32 本計画を実施するための国内計画と戦略は、婦人の必要とするものや問題が、境遇や年齢により異なるという点に配慮すべきである。しかし政府は、婦人が最も不利をこうむっている地域、殊に農村ならびに都市におけるそのような地域の婦人の境遇の改善に特別の注意を払うべきである。

33³² 本計画の実施に際しては、社会構成員全体の利益を考えた総合計画を基礎とすべきであるが、特に差別的通念の結果として特殊な地位におかれている婦人のためには特別な措置が必要であらう。

34 政府内に十分な職員と予算をもった国内委員会、婦人局あるいはその他の機関の如き各省庁の所轄分野にとらわれない多部門的機構を設置することは、婦人に対する機会均等の実現および自国内の諸活動への婦人の全面的な参加を促進する上で効果のある過渡的措置となりえよう。これらの機構には、公共の分野での政策決定や実施に責任を有する社会のあらゆるグループを代表する男女が参加すべきである。関係各省庁および部局（特に、教育、健康、労働、司法、通信、情

報、文化、産業、貿易、農業、農村開発、社会福祉、財政、企画部門）および適切な民間ならびに公共の機関の代表がこれに参加すべきである。

35 これらの機構は、あらゆる分野とあらゆるレベルにおける婦人の実情を調査し、必要とされる立法政策と計画について優先順位を定めて勧告を行なうべきである。本計画の国内計画の枠内での実施状況を評価するために、国内で達成された進歩を調査評価する追跡計画を、継続的に実施すべきである。

36 これらの機構は、また、地域レベルあるいは国際レベルで行なわれる類似的諸活動および非政府団体による諸活動や婦人自らの発案になる諸自助計画の調整に協力すべきである。

37 性により差別を行なわないこと男女の権利と責任の平等の原則を、憲法と法で保証することが肝要である。したがって、これらの法律に掲げられた原則が広く受入れられ、これらに対する態度の変化が奨励されるべきである。このような法を制定し、施行することが、それ自体社会ならびに個人の姿勢と価値観に影響を与え、これを変える重要な手段となるよう確保することも大切である。

38 政府は、婦人の地位に関する国内法を、人権の原則および国際的に認められた基準に照らし再検討すべきである。国内法を必要に応じて制定し、現状に即したものとし、関連国際文書に合致させるべきである。そのような法を施行する場合、特に本計画第二章で取扱われている各分野につき十分な配慮を行なうべきである。関連の国際条約を批准していない政府、

またはそれら条約の諸規定を十分に実施していない政府は、これらを実行するための処置を執るべきである。関連の国際文書に掲げられている権利以上の権利を婦人に保証する国内法を有している国があることに留意すべきである。

39 適切な機関に、国内法令の近代化、改正、時代遅れの国内法令の廃止について責任をもたせ、恒常的検討を行ない、それらの条項が差別なく適用されることの確保を図るべきである。例えば、法律委員会、人権委員会、市民権連合、提訴委員会、法制諮問委員会、苦情受理事務所等がこれに該当しよう。政府はこれらの機関が効果的にその機能を發揮しうよう全面的な支持を与えるべきである。非政府団体もまた、関連法規が十分であり、現状に即しており、かつ差別なく適用されることを確保する上で重要な役割を果しうる。

40 婦人に自らのもつ権利を知らしめ、婦人に他のあらゆる種類の援助を与えるために、適切な措置が執られるべきである。このため、マスメディアが公共教育計画を通じて広範な協力を提供しうようその認識を高めるべきである。非政府団体も婦人に関し類似した役割を果すよう奨励されるべきである。この意味において、最も切実な問題を抱えている農村婦人に対し特別の注意が払われるべきである。

41 開発に婦人が参加する機会を拡げ、婦人に対する差別を撤廃するためには、政府機構およびその他の機関を通じ、社会全体が各種の措置および行動をとることが必要である。

42 ここに掲げた措置の中には、最小の経費で実行しうるものもあるとはいえ、本計画の実施には一部の重点の再検討と政

府の支出形態の変更を必要としよう。政府は十分な資金の割当を確保するため、政府にとって承認しうるかつ政府の目標に合致したあらゆる援助資金の調達の可能性を探索すべきである。

43 特定の計画を実施するにあたり資金の不足している政府を援助するための特別の措置も考慮されるべきである。多国間、二国間援助はこの目的のために不可欠であるが、これに加え経済社会理事会決議一八五一(JV)に基づき設置された国際婦人年基金を、最終的な処分について将来考慮することとして上記の諸政府を援助するため暫定的に延長すべきである。国連および専門機関により開発途上国を援助する目的で特別の財政的責任を付与されている諸国の婦人は、特に開発途上国の婦人の地位向上にふりむけられた政府援助と関連して設定された諸目標の実施のために貢献するよう要請される。

44 本計画の目的の中には、国によつてはすでに実施済みであるが、他の国においては段階的に達成するはかないものもある。さらにある種の措置は、その性質上他の措置よりも実施に長い期間を要する。したがって各国政府は、本計画実施のために短期、中期、長期の目標および目的を設定するよう要請される。

45* 国連事務局は、本世界行動計画に基づき、この計画を婦人の地位委員会の継続的な監督と総会の総括的な監督の下に実施することを目的とし、いくつかの最も重要な目的を含んだ独自の二か年計画を策定すべきである。

46* 一九七五年から八〇年までの当初五年間に、下記諸項の達

成を最低限の目標とすべきである。

(イ) 婦人、特に農村婦人の読み書き能力および市民教育を大幅に伸長すること。

(ロ) 工業および農業部門の男女に基礎的な技能に関する技術的、職業的な訓練を共学の形で拡張すること。

(ハ) あらゆるレベルの教育の機会均等、初等学校教育の義務化、中途退学の防止措置、を図ること。

(ニ) 婦人の雇用機会の増大、失業の減少、雇用契約・条件における差別を撤廃するための努力の強化。

(ホ) 農村および都市において基礎設備のサービスを確立し、増強すること。

(ヘ) 男性と同等な選挙権および被選挙権、雇用の機会と報酬を含めた雇用条件の平等、および平等な法的能力およびその行使における平等に関する法の制定。

(ト) 地方、全国および国際レベルにおける政策決定に婦人の参加を奨励すること。

(チ) 保健教育・サービス、衛生、栄養、家庭教育、家族計画、その他の福祉サービスに対する総合的な措置に対する大きな配慮。

(リ) 結婚、市民権、商業活動等に関する市民的、社会的、政治的権利の行使における平等に対する配慮。

(ス) 食糧の自家生産、販売、伝統的には無報酬のボランティア活動等、家庭における婦人の勤労の経済的価値の認識。

(ル) 家庭でも社会でも婦人が一個人としての人格を認められるよう、学校および学校外教育ならびに生涯教育を通じ男

女の再評価を指向せしめる。

(イ) 労働者団体、教育、経済、職業機関内における婦人の団体を暫定措置として奨励すること。

(ロ) 特に農村に住む婦人、都市の貧民等の婦人の重い労働負担を軽減するのを助け、もって地域社会、国内、国際問題への婦人の全面的な参加を促進するため、近代的な農業技術、零細工業、就学前児童の保育施設、時間および労力節約の設備の開発。

(ハ) 婦人に平等の機会と国家活動への全面的な参加の達成を促進するため、政府内に各省庁の所轄分野にとらわれない多部門的機構を設置すること。

47* これら最小限の目標は、地域行動計画においてより具体的に敷衍されるべきである。

48* 十か年世界行動計画の諸目標のすべてのレベルにおける達成のために、また婦人の福祉ならびに婦人の地位向上のための情報普及を目的とした機関、計画の設定、運営について、特にボランティア専門家の効果的な活用により、非政府団体や婦人団体が積極的に参加すること。

第二章 国内行動のための特定分野

49 この章は、国内行動として主要な分野を特にとり上げている。しかし、各々の分野は密接に関連し合っているものでそれぞれ別個に取扱われるべきでなく、提案されているガイドラインは総合的な戦略および計画の枠組の中で実施されるべき

である。

A 国際協力および国際平和の強化

50 国際協力および平和の維持と強化のためには、国家間および国内の平等の建前に基づき、すべての人の人権を促進擁護することが不可欠の条件である。より多くの婦人が、国際協力の促進、国家間の友好関係の増進、国際平和および軍縮の強化、植民地主義・新植民地主義・外国による支配と制圧・アパルトヘイト・人種差別に対する闘争に参加するよう、国内および国際組織における個人としてのまたはグループによる平和活動を評価し奨励すべきである。

51 国連の非難の対象となり、かつその原則に反して、政治上あるいはイデオロギー上の理由をもって、個人またはグループに精神的、肉体的迫害を与えるような行動を含む、重大な人権侵害撤廃のため、世界中の婦人はその団結を宣明すべきである。

52 政府間あるいは非政府間の機関で国際安全保障と平和の強化、国家間の友好関係の発展および活発な協力の推進をその目的とするものの努力は支持されるべきであり、婦人はこれらの機関の活動に積極的に参加するよう大いに奨励されるべきである。

53 国連は、国際平和の日を指定し、毎年この日を各国においてまた国際的に祝賀すべきである。関心ある個人およびグループは、この目的のため、会合・セミナーを企画し、これは、新聞その他の報道機関により広く報道されるべきである。婦人はこれらの目的に全面的な支持を与えたとともに、国際協

力・諸国間の友好関係の発展および国際平和の強化への障害を克服する方法を男性と同等に追求すべきである。しかし、平和は一日の祝賀で済まされる問題ではなく、たゆまぬ監視を必要とする問題であることが強調されなければならない。

54 国家の主権と国際法の原則を尊重しつつ、国家間の情報および意見の自由な交流を促進すべきである。——共通問題を研究するため、各国の婦人の交流を奨励すべきである。教育・文化・科学その他の交換計画の発展と、諸国民の間の相互理解、なかならず、青年の間の相互理解を促進し、国家間の友好関係と活発な協力を発展せしめるような新しい手法を開拓すべきである。これらの目的のため、マスコミを十分活用すべきである。

55 男女は、自らの子供たちにすべての国と民族に対する相互尊重と理解、人種の平等、両性の平等、民族自決権および国際協力、世界平和および安全保障を維持することを希求することの尊さを鼓吹するよう奨励されるべきである。

56 上記の問題が討議されるすべての国際フォーラム、特に国連安全保障理事会、軍縮および国際平和に関するすべての会議、その他の地域レベルの機関等の会合に、婦人は、男子と同等に自国を代表して参加する機会をもつべきである。

B 政治参加

57 婦人が数の上では人口の半分を占めているにもかかわらず、ほとんどの国において政府の各種部門の指導的立場にある者の割合は小さい。したがって、婦人は政策決定に参加しておらず、開発のための計画立案には婦人の意見および必要

は看過されることが多い。婦人の大多数が開発計画の策定に参加していないため、計画のもつ影響に気づかぬことが多く、また計画の実施およびその目的とする諸改革を支持する熱意にも欠けがちである。婦人の多くは、また、政治生活に効果的に参加するための教育、訓練、市民意識および自信を欠いている。

58 本計画の主要目標は、法律および実体の両面で、婦人が男子と平等に、投票し、全国、地方および地域社会のレベルで、公職および政治的活動に参加する権利と機会を確保することであり、また婦人に市民としての責任を自覚させ、社会ならびに婦人に直接影響をもたらすような問題を認識させることである。

59 政治的生活への参加とは、有権者、院外運動家、被選挙人、労働組合運動家および司法を含むあらゆる政府の部門の公務員としての参加を意味する。

60 婦人が男性と同等に、投票する権利、選挙される権利、すべての公職に就き、公務を行なう権利をもつことが法律で保証されていない場合は、これを一九七八年までに制定するようあらゆる努力を払うべきである。

61 公職に就くため、特定の資格が要求される場合は、これら要件は両性に対し等しく適用し、特定の職務を行なうに必要な専門的知識に関するもののみに限られるべきである。

62 政府は、一九七五年―八五年の十年間に、あらゆる段階における選挙および任命による公職、公務に就く婦人の数を増すための、目標、戦略および予定表を設定すべきである。

63 これらの目標を達成するためには、特に下記の措置が必要であろう。

(イ) 婦人の平等な政治的参加に関する公けの政策を明らかにし、広範な広報を行なうこと。

(ロ) 公職に婦人の平等な参加を達成するため、政府は特別の指示を出し、公務に就いている婦人の数および各々の分野における職務のレベルにつき定期報告をまとめること。

(ハ) 採用、指名および昇進に際し、男子人口との対比において婦人の経済的・社会的・政治的能力のレベルを設定するための研究を行なうこと。

(ニ) 両性の衡平な代表比率が達成されるまで、特に要職への婦人の採用、任命、昇進に役立つような特別の活動を行なうこと。

64 政党、圧力団体等を含み政治問題および公的な問題への積極的な参加が必要であることを婦人有権者に啓発するような特別活動やキャンペーンが展開されるべきである。

65 一般人全体に対し、政治の各過程において婦人の役割が不可欠なことから、一層広範な婦人の政治参加および指導力を促進する必要を啓発するための教育および情報普及活動も行なわれるべきである。

66 農村・地域社会・青少年育成計画および政治活動に婦人と女子青年の参加の増大を奨励し、これらの計画における婦人の指導力を培うような訓練への参加を奨励するため特別な運動が行なわれるべきである。

C 教育および訓練

67 教育および訓練を受けることは、多くの国際文書により認められている基本的人権であるのみならず、各種の社会経済グループ間および両性間のギャップを埋めるための社会進歩にとって決定的重要性をもつ要素でもある。多くの国において

婦女子の立場は著しく不利である。これは一個人として当初から将来の社会的地位にとって深刻なハンディキャップとなつていだけでなく、開発計画に果す婦女子の貢献および開発過程そのものの有効性にとって、著しい障害となつてい

68 文盲と教育および基礎的技能訓練の欠如は、未開発、低生産性、保健福祉の貧困という悪循環の原因の一つをなしている。大多数の国で女子の文盲率は男子よりも高く、農村の文盲率が都市部よりも一般に高い。

69 大半の国において女子の就学率は教育のすべての段階において男子よりも著しく低い。女子は男子よりも早く中途退学する傾向がある。教育が有料となつている場合、両親は選択をせまられると男子を女子よりも優先させる。教育の性格および内容ならびに選択の範囲に関して差別のある場合が多い。女子の選択する学科は社会における男女の役割についての伝統的な態度や観念に支配されている。

70 婦人が無学で教育や訓練上の差別を受けている限り、社会全体の生活の質を向上するために極めて必要とされる改革への刺激が失われるであらう。なぜならば、ほとんどの社会において子の人格形成期における教育の責任は母親にかかつているのであるから。

71 政府は、国の必要に応じ、生涯教育の観点から学校および学校外教育のすべての水準の教育、訓練の機会を両性に平等に与えるべきである。

72 とるべき措置は、すでにある国際基準、特にユネスコによる一九六〇年の教育における差別待遇の防止に関する条約および勧告、ならびに一九七四年の技術教育および職業教育に関する改正勧告に適合させるべきである。

73 教育、訓練および雇用戦略は人口動態の見通しに基づきかつこれと調整されるべきである。教育の内容および構成はその地域社会に独自の文化と、科学技術の発展による進歩を考慮し、その地域社会の現在および将来の必要に応え得るものとするべきである。また、教育は個人が積極的な市民生活および家庭生活に十分対処し、責任ある親となるための準備として役立つべきものである。

74 文盲根絶の目標期限を定め、十六歳から二五歳までの婦女子に対する計画を優先するべきである。

75 読み書き能力は、人々の日常生活にとり直接の利益と価値をもつ修学活動の不可欠の一部として促進されるべきである。文盲克服のため、政府の努力と並行して協同組合、民間団体および企業等すべての社会的機関を十分に利用すべきである。

76 休暇中または兵役期間に、読み書き、算術、栄養および食物保存法を教えるための、特に青年によるボランティアを組織することも一案である。そのようなボランティアには必要な技術的知識を備えた男女両性を含むべきである。このボラ

ンティアはまた、地方住民を教師として訓練することにより、使えるボランティアの力を強化拡張できるであらう。

77 農村地域の婦女子に対しては、経済、社会の開発に全面的にかつ生産的に参加することを可能にし、技術進歩の恩恵に浴し、日常生活の労苦を減ずるような総合的、または特別の訓練計画を開発しなければならない。そのような計画には、近代農法、機具の利用、協同組合、企業能力、商業、流通、畜産、漁業ならびに保健、栄養、家族計画、教育についての訓練を含むべきである。

78 男女に対し差別なく、無料の義務教育を、可能な限り速やかに、効果的に実施するべきである。教科書、給食、交通、その他必需品を可能な限り無料で供与するためにあらゆる努力が払われるべきである。

79 就学年齢の女子に多い中途退学を防止し、婦人が読み書きの学習および基礎的訓練に参加できるよう、安い費用の託児制度を設け、また就学または訓練の間、束縛的な家事から婦女子を解放するようなその他の措置を執るべきである。

80 学校で学んだことを保持させるため、また、婦人の家庭、職業生活における活動を助けるため、パートタイムの教育継続計画を実施すべきである。

81 教育および訓練の計画、カリキュラム、水準は男女について同一のものとしなければならない。両性を対象とする教科課程には、一般科目のほか、工業・農業技術、政治・経済、社会の時事問題、親としての責任、家庭生活、栄養および保健を含むべきである。

82 教科書その他の教材を再検討し、必要な場合には、社会における積極的な参加者としての婦人像を反映するようこれらを改訂すべきである。必要に応じ、教育方法を国の必要に適應させ、かつ差別的態度の変革を促進することが確保されるよう改訂すべきである。

83 教育および訓練上の差別的慣行の内容を明らかにし、教育の平等を確保するために調査研究活動を推進すべきである。新しい教育技術、特に視聴覚教育を奨励すべきである。

84 男女共学と、男女合同の研修訓練を積極的に奨励し、新しい職業と変遷する役割について、両性を啓発するため特別の指導を行なうべきである。

85 広範に分化した既存および新規のあらゆる種類の職業訓練計画を両性に平等に開放し、もって、青年男女に高度の技術が必要とする職業をも含む広い職業選択の可能性を与え、かつ国の必要と、就職の機会を調和させるべきである。男女は、奨学金、研究費を受ける機会を平等にもつべきである。特に家庭における責任のために比較的長期にわたり職業を離れたのち職業活動に復帰することを希望する婦人に対しては特別な援助措置を講ずべきである。各種の技術および学問の分野における教育訓練を行ない、自立的な生活態度を奨励するため多目的研修センターを設置することも考えられる。

86 青年男女は、職業指導計画を通じ、根強い定型的な男女別の職業という観点からでなく、自らのもつ真の適性と能力に応じ職業を選択するよう奨励されるべきである。また、彼らに開放されている雇用機会を十分に利用するために必要な教

育および訓練についても知識を与えられるべきである。
87 一般社会人、両親、教師、カウンセラーその他に対し、少女にしっかりと基礎教育と、十分な職業訓練および、より高度の教育訓練を受ける広範な機会を与えることの必要性を認識させるため、広報上のあるいは学校内外の教育上の計画に着手するべきである。その際、教育の手段、社会の態度を変えざる手段としてマスコミを最大限に活用すべきである。

D 雇用および関連の経済活動

88 本計画は、労働の権利、同一労働同一賃金、労働条件および昇進における平等の権利を認めているすでに承認されている国際的基準に従って、婦人労働者に対する機会と待遇の平等および労働力への婦人の参加を達成せんとするものである。

89 資料によれば、婦人は、世界の経済活動人口の三分の一以上を占め、就労年齢（十五歳から六四歳）の婦人のうち、約四六％が労働力に組込まれている。このうち六五％が開発途上国、三五％がより開発の進んだ地域の婦人である。これらの資料は、現在公式統計にあらわれてこない婦人の多くの経済活動（第三章参照）とあわせると、婦人は国の経済と開発に大きな貢献をなしているにもかかわらず、これが十分に認識されていないことを示している。さらに、婦人労働者の大半が集中している職種は男子のそれと異なる。圧倒的多数の婦人が低水準の技能、責任、報酬の限られた職種に集中している。婦人は、賃金、昇進、労働条件、雇用慣行において差別を経験している場合が多い。さらに文化的制約と、家庭に

おける責任も婦人の雇用の機会をせめていている。就職の機会が著しく限定されており、失業が広範囲に存在する場合には、差別をしない政策がとられているところでも、婦人が収入を得る仕事につくうる機会は、実際には一層少なくなる。

90 政府は、婦人労働者に対する機会と待遇の平等、同一労働、同一賃金の権利を保証することを明示的な目標とした政策および行動計画を策定すべきである。このような政策および計画は、国連および国際労働機関（ILO）の作成した基準に合ったものとすべきである。性または婚姻上の地位を理由とする差別を撤廃する原則を定めた法律、諸原則を実施するための指針、提訴手続き、ならびに実施のための効果的な目標、機構等をこれらの政策や行動計画に盛り込むべきである。

91 使用者、労働者、社会一般の男女に、婚姻上の地位にかかわらずなく婦人を雇用する積極的な姿勢を培い、男女別の労働分担の考えに基づく障害をなくすため、特別の努力を払うべきである。

92 婦人に収入のある仕事を与え、失業および潜在失業の問題に対処するため、各種の経済活動を創出し、特に農村地域において、自営、自助活動を奨励し支援するような特別の措置をとるべきである。既存の自助活動は婦人の参加を通じて、これを奨励、強化すべきである。

93 政府は、地域社会の開発および経営能力養成のための訓練計画のような自助活動への新しい基盤を探索すべきである。これらは両性に対し平等に開放されなければならない。

94 婦人の経済活動の範囲を広げるため、協同組合および小規

模工業を政府の支持援助の下に、開発奨励することも考えられる。すでに協同組合が存在している場合は、これに対する婦人の積極的な参加を勧奨すべきである。特に婦人が主要な役割を果している食糧生産、流通、住宅、栄養、保健の分野で新たな協同組合、事情に応じ婦人協同組合を組織すべきである。協同組合は、保育の面でも、最も適切かつ、現実的な措置たりうるものであり、かつ雇用の機会を提供することにもなる。

95 このような計画を効果的に実施するためには、協同組合活動および経営能力の十分な訓練養成、改良された機器を調達するに必要な資金入手の可能性と当初資本、流通面での援助、農村における十分な社会サービスおよび娯楽施設、農村地域における都市の分散発展、ならびに保育施設、交通および水の便利な供給路等、基礎的な下部構造面の整備が不可欠である。

96 国の総合農村開発の策定にあたって、農村婦人の参加を増すよう特別の努力が必要である。農村開発政策および計画は産業の多角化、輸入代替ならびに農業、林業、水産業、畜産業、農産加工業その他の不可欠な関連構成要素とともに雇用機会の創出を配慮すべきである。

97 熟練労働および技能を要する作業に従事する資格を有する婦人の数の大幅な増加を達成するための特定の目標期限を設定すべきである。

98 商・工・貿易業の管理および政策決定部門の婦人の数を増加するためにも特別の努力が必要である。

99 昇進のため男女が平等の資格をもちうるよう、技能訓練、

研修所内および職場内での訓練は、婦人に対し、男子と同一の方法および同一の条件で開放されるべきである。

100 政府、使用者、労働組合は、一九五二年のILOの母性保護に関する改正条約および勧告にうたわれた原則の線にそい、産前の業務に復帰することを保証した産休を含む母性保護および育児時間に対する権利をすべての婦人労働者に対し確保すべきである。母性保護に関する規定は男女の不平等な待遇とみなされるべきではない。

101 家庭と職場における責任の調和を図るためには多角的な方法が必要であることに特に留意すべきである。労働時間の総体的短縮、時差勤務、フレックスタイム制度、男女双方に対するパートタイム制度、子どもの世話を授けるための保育施設や育児休業、共同炊事施設、その他各種の家事軽減設備等がこれに該当しよう。政府および労働組合は、パートタイム労働者の経済的、社会的権利が十分に保護されることを確保すべきである。

102 婦人のみを対象とする保護立法は、科学的、技術的な見地から再検討を加え、必要に応じ改訂、廃棄、またはすべての労働者にその適用を拡大すべきである。

103 婦人の労働条件の改善に重要な役割を果す最低賃金制度は、家内工業および家事使用人に対しても適用実施すべきである。

104 婦人、特に少女について労働搾取が存在する場合、これを撤廃するため特別の措置がとられるべきである。

105 一国の社会保障制度上の婦人に対する差別的待遇は、最大

可能な限り廃止すべきである。婦人労働者は男子と同等にこれら制度の適用を全面的に受けるべきである。

106 政府は、雇用における婦人の地位を飛躍的に向上させるため、特に使用者および労働者の組織による総合的な努力を奨励促進し、経済生活および社会全体における婦人労働者の地位に関係のあるすべての民間団体とも協力すべきである。

107 労働組合は、指導部を含むあらゆるレベルの組合活動への婦人の参加を増加させるための政策をとるべきである。また、婦人労働者に対し、就業および訓練における機会均等および指導者養成訓練を推進するよう特別計画をつくるべきである。労働組合は、婦人労働者の問題に特に留意しつつ、労働者の直面する問題に対する新たな建設的なアプローチの開発に指導的役割を果たすべきである。

E 健康および栄養

108 人はすべて健康に対し否定しえぬ権利を有するが、多くの国、特に農村においては、事実上婦人は、この権利を男性と同等に享受するのを妨げられている。保健要員や施設が著しく不足している社会では、この状況がより顕著であり、婦人の生産性が損なわれるため、家庭、社会および開発にとり大きな損失をもたらしている。婦人はまた妊娠、出産、授乳の期間、特別の配慮を必要としている。

109 個人の健全な身体的、精神的発達にとり十分な栄養が基本的な重要性をもっており、婦人は食糧の生産、加工、消費等を通して、この分野で重要な役割を果たしている。食糧不足に際し、婦人は、家族のために自己を犠牲にし、あるいは社会

が婦人に対し男性より低い価値しか認めないため、婦人は男性よりも甚しい栄養不足を経験する場合が多い。

110 開発活動への婦人の全面的な参加、家庭生活の強化および生活の質の全般的な向上にとり、健康、栄養その他の社会サービスにより受けやすくなることが肝要である。これらのサービスが十分効果を上げるためには、農村地域優先の総合開発計画中に、組み入れられる必要がある。

111 政府は、特に農村における公共の社会保健計画に対し十分な投資を確保すべきである。

112 地域社会が自らの保健上の必要性を認識し、各種の社会経済的状况に応じた保健サービスの供与に関する決定に参加し、その地域社会の全成員が容易に利用しうる基礎的な保健サービスを発達させるため、総合的で簡便な地域社会保健サービスを整備すべきである。

婦人、特に農村の婦人自らが、十分な訓練計画を通じ、自らの属する地域社会に保健サービスを提供することを奨励すべきである。婦人がこのようなサービスを男性と同等に利用することを確保する措置がとられるべきである。巡回病院および医療団はすべての地域社会を定期的に訪問すべきである。

113 総合的保健サービスの枠内で、政府は下記の措置を通じて、婦人に特有な健康上の必要に特別の注意を払うべきである。

産前、産後および出産時のサービス、出産年齢期間中の産婦人科および家族計画に関するサービス

幼児、就学前の児童および学童を対象とした性による差別のない総合的、継続的な保健サービス

思春期前および思春期の少女、出産年齢をすぎた婦人に対する特別の保護

ならびに婦人特有の健康問題についての研究

有資格の医療要員および医療補助員の利用により基礎的な保健サービスを強化すべきである。

114 幼児、児童、母親の死亡率を低下させるための計画を栄養改善、衛生、母親および子供の健康管理、母親教育を通じて策定すべきである。

115 既存の保健施設を婦人が利用することを阻んでいる偏見、タブー、迷信を克服するため、啓蒙活動を発展させるべきである。医療設備の存在を都市貧民および農村の婦人に知らせるため特別な努力を払うべきである。

116 保健教育およびサービスの大規模な計画の一環として、農村および都市の近隣社会内での保健教育、母性および子供の保護についての研修コースを設けることも考えられ、これに婦人の積極的な参加を勧奨すべきである。これらの研修は情報メディアおよび存在するすべての社会的伝達網を通じ広報すべきである。研修には、利用できる医療施設およびその利用方法に関する情報をも含めるべきである。医師はできるだけ多くのこれら研修の参加者に対し、定期的な健康診断を行なうべきである。

117 婦人は、保健サービスの受益者としてだけでなく、供与者としても重要であるので、婦人に十分な情報を与え、保健計画および政策決定過程にあらゆるレベルおよび分野で積極的に参加せしめるような措置をとるべきである。地域社会が

行なう健康管理および医療サービス改善活動に婦人を積極的に参加せしめるよう努力すべきである。また婦人に医療補助要員としての訓練を受け、健康管理組合および自助計画を組織することを奨励すべきである。村落レベルでは集落に基礎的な保健サービスを提供する保健要員として村民を訓練するための人材確保および研修を行なうべきである。

118 婦人は、保健業務に就くためのすべての研修制度、課程に参加し、最高レベルに至るまでこれを継続する権利を男子と平等にもつべきである。伝統、宗教または文化上の理由をもって、特定の保健業務に婦人が就くことを排除している慣行はこれを廃止すべきである。

119 家族の健康状態を改善し、主として婦女子にかかっている水運搬の負担を軽減するため、利用に便利な安全な水の供給（井戸、ダム、貯水池、水道等）、排水その他の衛生設備を供与すべきである。

120 国の食糧・栄養政策において、政府は、国民の中の最も弱い層（思春期の少女、妊産婦、授乳期の母親および幼児など）がミルク、乳製品および特別の高栄養食品等の特定の食品を摂取しうるよう優先度を付すべきである。母乳および離乳期における良い食物習慣を奨励すべきである。栄養失調の危険にさらされている母親および子供に対しては、補充的な食糧計画を導入すべきである。栄養欠陥は、基本食品または他の普及食品の強化もしくは欠如している栄養物の直接配給により防止すべきである。

121 地方村落レベルにおける食品加工、保存、貯蔵の技術、設

備を改良し、かつ農村婦人に利用可能とすべきである。この活動に刺激を与えるため、食料の製造、品質改良および流通を目的とする協同組合を組織し、適切な場合は、消費者を教育するキャンペーンを組織すべきである。

122 農村ならびに都市の菜園の利用、またよりよい機具、種子、肥料の提供により、婦人が適当な種類の食糧の生産に、より能率的に貢献しうるような機会を創出すべきである。

123 以前には、受け入れられなかった栄養価の高い食品を日常の食生活にとり入れる上で最も効果的な方法を研究するため、情報メディアを通じ栄養教育運動を展開すべきである。これらの運動は、婦人に、一層栄養価の高い食品を購入し、食料の浪費を防ぐように一家の収入を最も経済的に使用する方法についても教えるべきである。効果的な栄養計画についての情報を交換するため、セミナー、個人的な交流、出版等を計画すべきである。

F 近代社会における家庭

124 家庭は、その経済的社会的文化的機能において変化しつつあるが、家族各員の尊厳、平等、安全を確保し、個人としてまた社会的存在としての子供の均衡のとれた成長に資する条件を与えるものであるべきである。

125 全体的な開発過程において、婦人の役割は、男子と同様に、社会および国の経済に対する貢献とともに家庭への貢献という観点から考える必要がある。家庭においての親、配偶者、家事担当者としての役割に高い地位を与えることは、男女の個人の尊厳を高めることにはかならない。家事活動は、家庭

生活にとって必要であるにもかかわらず、一般的に低い経済的地位しか認められて来なかった。しかし、すべての社会は、家族共同体を維持し、子供を生み教育するという家庭の基本的機能を果たすことを願うならば、これらの家事活動に一層高い価値を付与すべきである。

126 家庭はまた、社会的、政治的、文化的変化の重要な手でもある。婦人が平等の権利、機会および責任を享有し、男性と同等に開発過程に貢献すべきならば、家庭内で伝統的に夫婦のそれぞれに割当てられてきた役割を状況の変化に応じ、絶えず再検討、再評価することが必要であろう。

127 核家族、大家族、同棲、片親家族等、あらゆる形態の家庭において、婦人の権利は適切な法律および政策により保護されるべきである。

128 婚姻に関する法は国際基準に合致したものとすべきである。特に、男女が自由に配偶者を選択し、両性の自由にして完全な合意によってのみ婚姻関係に入る同等の権利を有することを確保すべきである。法により結婚の最低年齢を定め、かつその最低年齢は男女、特に女子が結婚前に教育を完了し、潜在能力を開発しうるよう十分な教育期間が与えられるものとすべきである。結婚の公式登録を義務づけるべきである。

129 これらの権利を侵害するすべての制度および習慣、特に児童婚および寡婦継承を廃止すべきである。

130 男女が（婚姻中に取得したものも含め）財産を取得、管理、享受、処分、継承する権利を含め、自らの個人の権利および財産権に関する完全な法的能力を享有し、行使しうるような

立法上のあるいはその他の措置がとられるべきである。制約がある場合は、両性に平等に適用されるべきである。婚姻中における平等な権利と責任の原則とは、両性が、家庭と職場の責任を調和させることの重要性を考慮しつつ、家庭において積極的な役割を果たし、家庭および子供に関する事項の決定権を共有すべきことを意味する。婚姻の解消にあたつて、この原則は、婚姻の解消の手續きと事由の範囲とを緩やかにし、夫婦双方に平等に適用すべきことを意味する。婚姻中に取得した財産は衡平に分割すべきである。社会保障および年金が家事労働をもカバーするよう適切な措置をとるべきである。子の監護に関する決定は、子の利益が最も良く確保されるよう配慮して下すべきである。

121 家庭内の紛争の解決を助けるため可能な限り十分な家庭相談サービスを設け、法律その他の関連事項に造詣の深い、婦人を含む職員から成る家庭裁判所の設置を考慮すべきである。

132 青年男女が結婚生活における責任、および親としての責任を十分に担えるようにするために、性心理面での発達を含め、人間関係、結婚、家庭生活、保健等の教育計画を学校の適当な教育段階における教科および学校外教育の計画に組入れるべきである。これらの計画は、家庭および社会における相互尊重と権利および責任の共有の理念に基づいたものとすべきである。個々の社会における育児の習慣は、性に基づく優劣という考え方を助長しかつ固定するような慣行を廃止することを目的に検討されるべきである。

133 片親家庭の増加にかんがみ、これに対しては可能な限り援

助および恩典を追加しなければならない。未婚の母は親としての完全な地位を認められるべきであり、非嫡出子は嫡出子と同じ権利と義務をもつべきである。結婚しているといないにかかわらず、出産前後の母親に対し特別の養護施設や宿泊所を設置すべきである。

134 社会保障制度には、家族構成員の経済的安定を強化するため、最大可能な限り、児童手当および家族手当を含むべきである。家族手当、児童手当、母親報奨金等の措置が家庭および社会における婦人の地位に与える影響につき、文化圏別の包括的な研究を行なうことも考えられる。

G 人口

135 社会、経済、人口要因は密接に関連し合っており、一方の変化は常に他の変化をもたらす。婦人の地位は、これら諸要素の決定要因であるとともにその結果でもある。婦人の地位は開発過程および出生率、死亡率、人口移動（国際的、国内的およびそれに付随した都市化に伴う移動）等の人口動態の様々な構成要素と不可分に結びついている。

136 婦人の地位、特に教育収入のある仕事に従事しているか否か、雇用の性格、家庭内の地位は、すべて家族の規模に影響を与える要素である。逆に、子の数と出産間隔を婦人が自由に責任をもって決定する権利およびその権利を行使するための知識と方法を利用しうることは、婦人が教育および雇用の機会を活用し、責任ある市民として地域社会の生活に全面的に参加しうるか否かに決定的な影響をもつ。

137 上記の権利の行使および国の諸活動のあらゆる局面への婦

人の全面的参加は、結婚年齢、第一子出産年齢、出産間隔、出産終了年齢および出産した子供の総数等、人口学上の重要な諸変数と密接に関連し合っている。

138 ひんばんな妊娠、若齢または高齢の妊娠、近接しすぎた妊娠間隔、出産前、中、後における不十分な看護等による出産に伴う危険および非合法な妊娠中絶は、出産に関係した死亡率、疾病率を高める結果となる。胎児や乳幼児の死亡率が高いところでは、これを低下させるというそれ自体望ましい目標が、平均的な婦人の妊娠回数を減らし、小家族が理想とされる場合においては社会がそれを受け入れるための必要条件ともなりうる。生まれた子供が成人するまで生きのびることが現実期待しうる状況となれば妊娠回数の減少は一層達成しやすくなるであろう。

139 世界には、都市化に伴って主として青年男子が移動する地域もあれば、青年女子が農村から都市への移動の流れの主体を構成する地域もある。このような状況は、部分的には都市または農村における婦人の就職の機会の相違を部分的に反映しているが、またこれは、文化によって婦人の様々な役割の受け入れ方に差異があることにも関連している。都市への人口移動において男女のいずれが中心となるかは婦人の社会的地位如何によっても左右されるが、このような選好的な人口移動の結果、都市および農村のいずれにおいても男女構成比の不均衡を生じている。このような人口の構成比の不均衡は、個人および家族の幸福、都市および農村における安定居住にとり有害である。世界の女子人口の半分強が現在開発途上国

の農村地域に住んでいる。これら地域の地方農村地域社会に特有な人口動態的、経済的および社会的問題にかんがみ、特別な開発努力が必要である。

140 本計画は、世界人口行動計画の諸勧告、特に婦人の地位に関連した勧告を支持する。

141 総合的な開発の枠内で人口政策および計画を策定・実施するにあたり、政府は、婦人の境遇を改善するための措置、特に教育と雇用の機会、労働条件、結婚最低年齢を適切な高さに設定し、実施することに関連した措置に、特別の注意を払うよう要請される。

142 各国は、自国の人口政策を決定する主権を有するが、個人および夫婦は、制度化された組織を通じ、自らの子の数と出産間隔を自由にかつ責任をもって決定し、また不妊を克服するための情報および手段を利用する可能性を持つべきである。家族計画の知識・手段およびサービスの普及を妨げるすべての法的、社会的、財政的障害を除去すべきである。不妊症、低妊娠症、先天性の出産欠陥の原因についての知識を高め、これらを減らすためあらゆる努力をしなければならない。

143 家族計画の成功には、男女相互の理解と協力が必要であるから、家族計画のプログラムを男女双方に同等に知らせ、かつその双方の協力を得る努力を行なうべきである。この政策により、婦人が子の数と出産間隔を決定する権利を男性と同等に行使することが可能になろう。これらの目標を達成するためには、効果的であり、かつ相異なったそれぞれの社会に通用している文化的価値とあい入れるような受胎・出産調節

の手段を開発することが必要である。家族計画は、保健、栄養、その他の家庭生活の質を向上させるための措置に組み込まれこれらと調整されるべきである。

144 政府は、開発過程の一環として死亡率、疾病率にかかわる状況改善のため統一的な活動を組織的に行ない、婦人の健康に特に影響を与える危険を減ずるため特別の注意を払わなければならない。

145 婦人の地位を向上し、婦人を社会経済開発に全面的に貢献させるための政策および計画には、人口移動およびそれが婦人の家庭と職業生活に与える影響を考慮に入れなければならない。

146 都市化の様々な態様の原因と結果については、特に婦人の多様な必要を満たすため適切な社会政策を打出すにあたり必要な情報が得られるよう、慎重な検討を行なうべきである。

147 適切な産業および雇用の機会を創出することを含む農村の開発計画は、都市部への人口移動とそれに伴う諸問題を減らすような形で着手または拡張されるべきである。伝統的に都市よりも農村において高い文盲・死亡・出産率を低下させる手段として、教育および保健施設の農村への分散も推進すべきである。これらの措置をとることにより、農村婦人は、国民生活の主たる潮流に接触する機会を多く得、国の進歩と繁栄に貢献する機会をもつことになる。

H 住居および関連施設

148 大半の婦人は依然として男性よりも住宅内および住宅周辺で時間を過ごすことが多い。したがって、住宅およびその関連

付帯設備、ならびに近隣環境を整備することは、婦人の日常生活に直接的な改善をもたらす。健康や快適といった配慮に加え、上手に設計され、適切な設備をもった住宅、関連付帯設備および近隣環境は、単調さや、日常の骨の折れる仕事から解放し、他の趣味や活動に従事することを容易にし、婦人の生活を人間の尊厳が要求するものに近づける結果となる。

149 都市・住宅開発および人間居住の計画設計に際しては、婦人の意見と必要が配慮されることを保証するような立法上の措置およびその他の措置がとられるべきである。

150 住宅の設計には、家族全体、特に婦人および子供の必要を考慮に入れるべきである。次のものの使用を奨励すべきである。

- (i) 維持に手数のかからない建築材料
- (ii) 安全な設備および付属品
- (iii) 労働を省力化する内部仕上げと快適かつ衛生的な外観
- (iv) 移動、保管、代替に便利な家具
- (v) 現実的かつ適切と思われる場合には婦人が、読書、裁縫、織物、(場所によっては、社会連帯を増すための共同空間がこれに該当する)等の活動を行なうための場所

151 近隣社会との関連で住宅を考える場合には、特に、婦人が明らかに必要としているもの、水、食糧、燃料、その他の必需品を得るための労力、および往復の距離を減じるようなものもろの便宜、設備、近辺の施設を含む設計を行なうべきである。

152 近隣社会網の設計に際しては、地区センターを婦女子が利

用しやすいよう配慮すべきである。

153 婦人が使用しうる新しい設備の使用法および住宅所有および管理にかかわる種々の面について、研修、指導講座を設けるべきである。

1 他の社会問題

154 急激な近代化と工業化がもたらす社会問題にあらかじめ対処し後刻必要となる救済措置を軽減するうえで、社会サービスの果す役割は重要である。特に開発過程の初期の段階では通常婦人の方が男性よりも社会問題の影響を受ける。

155 したがって政府は、非政府団体のなしうる貢献に留意し、人的・技術的資源を、すべての社会集団の利益となるよう動員するための有用な手段として、社会サービスの開発を奨励すべきである。

156 農村から、あるいは海外から移住した婦人および都会のラムおよび新開入植地に住む婦人労働者とその家族の必要を満たすため特別の努力が払われるべきである。訓練、職業相談、保育施設、資金援助、および必要な場合には、語学研修、その他の援助を供与すべきである。

157 高齢婦人は、男性に比し少ない保護と援助しか受けられない場合が多いので、これら婦人の必要を満たすため、特別の注意が払われるべきである。これらの婦人の大半は、五〇歳以上の年齢層に属し、その多くは極めて貧しく特別の保護を必要としている。

158 犯罪の防止および犯罪者の処遇の分野では、世界各地で増加しつつある女性の犯罪および、未成年犯罪者、常習犯罪者

を含む女性犯罪者の更生に特別の注意を払うべきである。この分野の研究には、女性犯罪と、急激な社会変革によりもたらされる他の社会問題との関係についての研究を含むべきである。

159 婦人、特に少女の売春および不正人身売買と闘うための立法上その他の措置がとられるべきである。このような慣行を防ぎ、犠牲者の更生をはかるため、国際機関および非政府団体との協力のもとに試験的計画を含む特別計画を実施すべきである。

160 人身売買および売春禁止に関する国連条約（一九四九）をいまだ批准せずまたはこれに加入していない国の政府は、かかる批准・加盟を行なうべきである。

第三章 研究、資料収集および分析

161 政策立案、進捗の評価および社会経済上の考え方における基本的な変化を実現する上において、十分な資料および知識が必要であるので、本計画は婦人の境遇のすべての側面に關する国家・地域・国際レベルでの研究活動、資料収集および分析に高い優先度を与えている。

162 現在、婦人の経済的貢献を評価する上で主要な障害となっているのは主として、開発過程に影響を与え、またそれによって影響をうける婦人の地位を測定するための資料および指標の不足ないし不備である。

163 多くの婦人は、家事にのみ従事しており、また、家事は、

どこでも経済活動とはみなされないため、国の統計上経済活動人口から自動的に除外されている。また、婦人は経済活動を行なっていないものとされ、それゆえ婦人の状況について行届いた調査が行なわれていないため、誤って単に家事従事者として分類されている婦人の数も多い。このことは、特に家事活動に加え、自営手工業その他の家内工業または自給農業における無給の家族労働者でもある婦人についていえる。さらに失業統計は、経済活動人口を構成すると認められていない婦人（例えば家事従事者または主婦として分類されている婦人）を除外しているため実情を正確に反映していない場合が多い。

しかし、これらの婦人は、実際には職業を求め、あるいは雇用の対象となりうる場合もある。

164 先入観により歪められている他の例は、婦人は男性がいな
いときにのみ世帯主または家長になりうると想定されている
場合の、世帯主または家長に関する資料である。そのため、
実際に婦人が世帯主でありながら、統計上誤って男性が世帯
主となっている場合が多い。

165 国の統計作成における上記の、あるいはその他の相違はま
た、各国間の資料の比較を非常に困難にしている。例えば、
市場外部門では、経済活動と非経済活動の区別は、不明確な
場合が多く、用いられている基準も恣意的で国ごとに違っ
ている場合が多い。

166 国および国際的レベルの統計計画の一環として、特に婦人
の地位および必要に留意した、科学的かつ信頼性のある資料

基準と適切な経済社会指標を早急に確立すべきである。
167 個人の特性（例、農村・都市居住の別、年齢、同棲をも含
む婚姻上の地位、読み書き能力、教育、所得、技術水準、近
代および伝統的な経済活動への参加）、および世帯、家族
構成等に関する統計調査はすべて性別に報告、分析されるべ
きである。

168 上記資料の収集にあたっては、下記事項測定のため特別の
努力が払われるべきである。

(i) 国民生活のすべての部門における地方ならびに国家の企
画および政策立案への婦人の参加

(ii) 食糧生産（換金作物および自給農業）、水および燃料供
給、流通および輸送における婦人の活動の程度

(iii) 家事、家庭内の雑務、手工芸その他家内経済活動の経済
的社会的貢献

(iv) 婦人の物品および、諸サービスの利用者としての活動が
国民経済に与える影響

(v) 経済活動および家事に費す時間とレジャーに費す時間
について男女の対比

(vi) 生活の質（例、職業に対する満足度、所得状況、家族的
特性、余暇利用）

169 国連は上記勧告を踏まえ、資料収集、図表作成、分析の基
準を拡大すべきである。各国の統計当局も、国連および専門
機関の設定した基準を採用すべきである。

170 国連は、関連の専門機関、国連社会開発研究所、地域委員
会ほかの機関との協力の下に、一九八〇年以前のなるべく早

い時機に婦人の地位の分析に関連する社会・経済指標の集積を進めるべきである。

171 本計画は、諸種の文化にまたがる研究、特に開発過程への婦人の貢献を阻害している差別的慣習、実行、態度および通念の原因や変革のメカニズムの研究に高い優先度を与えている。

172 特定の国や地域の問題を対象とする研究は、その国や地域の状況を熟知している適切な男女によって行なわれるべきである。

173 情報や研究の結果の広範な交換を推進すべきであり、国連大学、国連訓練調査研修所、国連社会開発研究所、国連社会防衛研究所等を含む既存の各国および各地域の研究機関ならびに大学を最大限活用すべきである。規則的な情報と知識の交換を促進するため、国連との協力の下に、このような研究所および大学のネットワークを確立すべきである。

第四章 マス・メディア

174 婦人の地位向上にとつての主な障害は、社会における婦人の役割に対して社会一般が示す態度やその役割の評価に存している。マス・メディアは、社会変革の推進者として大きな潜在力を持ち、偏見および定型観念の除去、社会における婦人の新しいかつ拡大しつつある役割についての認識の強化、対等な担い手としての発展過程への婦人の参加の促進に大きな影響を与えうる。

175 現在、マス・メディアは、婦人についての旧来の観念を助長する傾向を示し、しばしば婦人の品位を下げ屈辱をもたらすような婦人像を描き出しており、かつ変化しつつある両性の役割を反映していない。また、異国の文化を異なる社会におしつけることにより有害な影響を持ちうる。

176 マス・メディアとはラジオ、テレビ、映画、印刷物（新聞、定期刊行物、漫画、戯画）、広告、集会、その他類似の集りだけでなく、多くの国において農村地域に浸透するために重要な演劇、物語、歌、人形劇等の伝統的な娯楽をも含むものと解釈されるべきである。

177 政府機関および非政府団体は、メディアの描き出している婦人像を把握し、また情報伝達者、娯楽、教育および広告の提供者としてのマスコミの多面的な役割の善悪様々な影響を把握するための、国内的、地域的、国際的研究を奨励支持すべきである。

178 政府機関および非政府団体は、各国における婦人の現状、特に男女の変遷する役割につき情報を得られるような措置をとるべきである。

179 メディアの管理運営者は、男女の変遷する役割と、家族、地域社会、社会全体にかかわる重要事項について男女が共に真剣な関心を持っている事柄について社会一般の意識を高めるよう努力すべきである。また男女についてよりダイナミックなイメージを描き出し、婦人の役割の多様性ならびに社会に対する婦人の現実の貢献、および潜在的な貢献を考慮に入れるよう要請されるべきである。

180 また、マス・メディアの管理運営者は、農村や少数集団の

婦人を含み、古今を通じてあらゆる身分・職業の婦人の役割と業績を描き出すべきである。また、婦人に自信と同性への信頼ならびに自らの人間としての価値と重要性の自覚を涵養せしめるよう努力すべきである。

181 一層多くの婦人が編集者、コラムニスト、記者、プロデューサーその他として、メディアの管理・企画部門に任命されるべきであり、またメディアの内部において描き出された婦人像についての批判的論評を奨励するべきである。

第五章 国際的および地域的行動

A 世界的行動

182 国連は、一九七五―八五年にわたる十年間を、婦人と開発のための国連の十年と宣言することにより、この期間を通じ、国内的、国際的な活動が継続的に行なわれることを確保すべきである。

183 上述の十年および本行動計画は、国際社会が婦人の状況改善のための諸措置に重要性および優先性を与えることにつき、明確な意図表明を行なうことを呼びかけるものであり、この趣旨は、これをもって、社会進歩と開発の諸目標の達成の手段とし、かつ、それ自体を一つの目的とすることにある。本計画は、国連組織内のすべての機関が個別および共同の行動を行なう、計画に含まれる諸勧告を実施することを期待するが、これらの機関には、地域委員会、国連児童基金（ユ

ニセフ）、国連開発計画（UNDP）、国連人口活動基金（UNFPA）、国連工業開発機構（UNIDO）、国連貿易開発会議（UNCTAD）、国連訓練研究研究所（UNITAR）、ならびに諸専門機関をはじめとする関係国連機構および機関を含むものである。これら諸機関の活動は既存の機構、殊に、経済社会理事会および行政調整委員会を通じ、適切に調整されるべきである。各機関は婦人の地位の向上ならびに、開発に対する婦人の寄与の強化のために自らがとった措置を評価し、かつ本計画実施のために必要とされる措置を具体的に定めるべきである。

184 国際機関および地域的政府間機関で国連組織に属さぬものも、本計画を実施し、上述の提案にいう十年間に、国際婦人年の諸目標を達成するための計画を策定するように要請される。

185 国際的非政府団体およびその国内傘下団体も、共同で、また個別に、各々の活動分野において、上記の十年間に、本計画の諸勧告の実施のために行動すべきである。

186 本計画は、第二次国連開発の十年のための国際開発戦略、婦人の進歩のための統一的国際行動計画、人種差別撤廃闘争十年計画、世界人口行動計画、世界食糧会議の諸勧告、ならびに一九七四年にアジア太平洋経済社会委員会（ESCAP）およびアフリカ経済委員会（ECA）の両地域のために採択された開発への婦人の参加のための地域行動計画（注五）等をはじめとする本計画と類似の、もしくは関連する諸目標をうち出している他の諸計画、諸戦略を支持する。

婦人は、国内的レベルにおけると同様、国際的レベルにおける政策立案にも全面的に参加すべきである。各国政府は、すべての国際機関、会議および委員会への上席代表中に婦人が衡平に参加することを確保すべきであるが、これらの国際機関、会議、委員会には、政治的および法律的問題、経済および社会開発、軍縮、計画立案・行財政、科学技術、環境および人口などを取扱うものを含むべきである。諸国際機関の事務局は、その雇用政策中において婦人に対して差別をもたずす恐れのある規定や慣行を撤廃することによって模範を示すべきである。これら諸機関はまた、第二次国連開発の十年終了のときまでに、男女の職員数の衡平なバランスが達成されることを確保する必要なすべての措置をとり、かつ、この目的達成のために、目標、戦略、ならびに実施予定計画を作成すべきである。この男女職員数のバランスは、すべての実質的重要性のある分野、および実施計画が起案され実行される現場の部署のすべてに適用されるべきである。

諸国際機関は、その現存計画ならびに新規の諸計画との関連における本計画のものと影響を検討し、本計画の実施のために必要とされうる行・財政措置の改訂に関し、それぞれの政策決定機構に適宜勧告を行なうべきである。

国際的行動は、既存の諸計画を支援し、かつ次の主要分野においてその範囲を拡張すべきである。

- (i) 研究、資料の収集および分析（第三章参照）
- (ii) 技術協力、訓練、ならびに国連組織内の諸機関による国内および地域活動との調整を含む諮問サービス

(i) 国際基準の改善および継続的な検討

(ii) 非政府機関その他の団体等に対する情報の普及ならびに

(iii) これらとの情報の交換および連絡

(iv) 本計画の目的および目標の達成の進捗状況のモニタリングを含む再検討および評価

(v) 国連組織内のすべての機関ならびに本計画に言及されている国内および地域機構との全般的調整を含む執行・管理機能

1 技術協力の運営活動

190 国連開発計画、国連人口活動基金、国連環境計画、世界銀行および国際通貨基金（IMF）を含む国連専門機関、地域委員会、政府諮問機関、二国間援助機関および財団、ならびに国際ないし地域開発銀行その他国際金融機関等は、その達成目標、資金および対象地域や、対象層等の面において高度に専門化されたプロジェクトを通じて活動を行なっている。

援助機関の世界的な体系の大きさおよび種類の多さにかんがみれば、数多くの地域において、ひとつが何が必要とされているかが理解され、かつそれが国連組織を通じて伝播されれば、遅滞なく行動を開始することが可能である。

したがって、意識的かつ大規模な努力によって、各国政府ならびに国際社会が、婦人にその状況改善に必要な技能、訓練、機会を与え、開発努力全体に全面的かつ効果的に参加することを可能ならしめる諸プロジェクトおよび活動に、高い優先度と関心をふりむけることを確保すべきである。

各国政府および国際社会を支援するための現地調査が行な

われ、本計画の諸目標実現のための開発プロジェクトに必要な各地域における基礎データが確立されるべきである。

193 すべての既存の計画およびプロジェクトは、その活動分野を婦人を含むうに拡張するという観点から、再吟味されるべきである。同時に、婦人を含むような新規の、かつ斬新なプロジェクトも策定されるべきである。

194 次の諸分野は、特に重要である。

(i) 「総合農村開発」婦人に食糧の生産者、加工者および販売者としての役割を与えることに特別の注意が与えられるべきであり、その際婦女子の訓練の必要が強調されるべきである。殊に訓練が必要とされるのは、近代的な農法、マーケティング、購買・販売技術、および基礎的会計と経営法、衛生ならびに栄養の基礎知識、手工業ならびに協同組合の諸分野である。

(ii) 「保健、生殖、成長ならびに発達」家族保健および児童保健、家族計画、栄養ならびに保健教育を含む。

(iii) 「婦人が経済的役割を果たすことができるようにするための雇用機会創出に関連するすべての段階およびすべての分野における教育ならびに訓練」

(iv) 「青年関係プロジェクト」ただし女子青年の参加に十分に重点をおくことを確保するよう確認の要あり。

(v) 「開発計画ならびに政策の策定、殊に中級ならびに上級のポストにおける参加のために婦人を育成することを狙いとする行政」

195 UNDPの地域代表は、駐在国の政府を助けて国別計画の

枠内にかかる援助要請を作成するにあたり、主要な役割を果たすべきである。諸専門機関によって特別コンサルタントあるいはタスクフォースの形で供与される助言活動もまたプロジェクト要請の策定にあたっての協力となりうる。特別な支援を必要とするかも知れぬ重要分野を示唆するために、定期的な再検討に着手すべきである。各プロジェクトは、婦人の地位の向上面での影響と成果を測るため、絶えず、再検討ならびに再評価をうけるべきである。

196 婦人は、国連その他の国際機関の主宰により行なわれるUNDPの国別および地域計画、地域間ならびに全世界的プロジェクトの策定および実施に全面的に参画すべきである。各国政府は、公けの政策策定および管理に責任ある国家計画機関その他の機関に、開発における婦人の参加問題に関して特に適格な人々を含むことの重要性を念頭におくべきである。

2 国際基準の策定ならびに実施

197 国際条約、宣言、および正式勧告の作成、ならびにこれらの実施に関する報告制度、その他の手続を整備していくことは、国際計画の重要な要素であり、継続されるべきである。

198 婦人に対する差別撤廃に関する条約をその実施に関する効果的な手続とともに準備し、採択することに高い優先度が与えられるべきである。

199 然るべき機関により既存の国際文書の効果の実施に関する検討、および定期的な再検討により、現代世界の変動する諸条件に照らし、かつその採択以来集積された経験に照らし、これら文書が十分なものであるかどうかを見究めるべきであ

る。

200 婦人にとつての新しい関心分野における新しい基準の整備の必要性は、本計画の実施との関連において絶えず再検討されるべきである。かかる新しい基準の必要性を見究めるために適当な調査研究が行なわれるべきである。

三 情報ならびに経験の交換

201 国際レベルにおける情報と経験の交換は、進歩を促し、婦人に対する差別的撤廃ならびにその国民生活のすべての分野における婦人の一層広範な参加を助長するための諸措置の採用を奨励する効果的な方法である。異なる政治、経済および社会組織ならびに文化を有し、また異なる開発の過程にある諸国が、問題や困難や成果に関する共通の知識と共同で開発した解決方法から、利益を得てきた。

202 効率的な国際機構を設立し、または婦人の地位委員会の如き既存の機関を利用して世界のすべての地域の婦人にその国内的あるいは地域的な諸問題に関して相互理解を深め、あらゆる形の差別や圧迫の撤廃のための闘いについて互いに助けあう機会が与えられるべきである。

203 国連技術協力計画の下で開催されるものを含み、会合やセミナーは、地域的ならびに国際的経験と情報の交換の実現に最も有用であったが、これらはさらに継続されるべきである。

204 国際共同社会によって支援された教育並ならに情報普及計画を整備拡大し、既存の国際基準、本計画の達成目標、各々本計画の関連の章の下で企画されている研究の成果ならびに

データをすべての部門の人々に知らしめるべきである。

205 世界の特定の国々における婦人の境遇を記述する資料も準備され、広く配布されるべきである。かかる資料は年報または年鑑の形で発行されるべきであり、最新の必要な事実を含まなければならない。婦人の地位を向上し、また婦人を開発過程に参加せしめるに際し有用であることが証明された手段や技術に関しても資料を作成し、広く広報すべきである。

206 諸国際機関は、政府機関であると非政府団体であると問わず婦人およびその関連事項に関する情報を頒布する努力を強化すべきである。かかる努力は、婦人の境遇、その変遷する役割ならびに開発努力への政策策定やその実施を通じての参加に関する定期的刊行物の出版、情報メディアや補助手段の利用、あるいは婦人に関するニュースレター、パンフレット、図表等々の資料を広く配布することによって行ないうる。

B 地域活動

207 アフリカ、アジア太平洋、欧州、ラテン・アメリカおよび西アジアにおける地域委員会は、本計画に対する関心を増大せしめ、各国政府および非政府団体に各々の地域において本計画の目的の達成のための効果的戦略の作成および実施に必要な技術的な支援と情報面での支援を供与すべきである。これら地域委員会は、もし、これまでにまだ行なわれていないのであれば、この目的のためにしかるべき機構を設立すべきである。このような機構は、地域内諸国からの専門家から成り、当該地域の委員会の諸活動に勧告を与えるための地域常設委員会を含むうるが、その対象となる諸活動とは、当該地

域における政府やその他の機関の開発における婦人の参加を
めざす諸活動とかかわりのあるものを指す。

常設委員会の機能は次のようなものを含みうる。

(i) 婦人の境遇およびその進歩を助け、あるいは進歩を制約
している諸要素の正しい理解に必要とされる情報を特定す
るために国別の研究に着手し、あるいは国内機関を援助す
ること。

(ii) データその他の情報の収集のための調査の企画および実
施を援助すること。

(iii) 地域内の統計機関および国際的努力と共同して婦人の境
遇に関する報告の手法ならびに本計画の達成目標に向かっ
ての進捗状況を測るための指標の開発を指導すること。

(iv) いろいろなレベルの婦人の進歩のための諸計画の調整と
相互支援を促進する情報交換ならびに地域内各国の経験を
分かちあうための、取次ぎの役割を果たすこと。

208 地域委員会の構成国は、技術的、財政的援助を要請するに
際し、UNDP 地域事務所と協議しつつ、婦人の機会強化の
ための諸プロジェクトに与えられる優先度を高め、かつこれ
らプロジェクトが全体的総合開発計画に占める重要性の認識
を増大するように努力するべきである。

209 地域委員会は、政府ならびに非政府団体に対し、国家の開発
における婦人の役割の強化のために必要な行動を選定し、政
策戦略ならびに計画を立案し、また、かかる計画のための技術
および財政援助要請の作成につき協力すべきである。また、
地域委員会は、域内の研修訓練機関がその教課内容の中に、

開発における婦人の参加に関連する題目を包含するよう奨励
し、訓練計画、なかんずく婦人の指導的役割に対する能力を
強化し、本計画中に示唆されている諸活動のための計画を作
成し実施する中核を育成することをその当初の目的とした訓
練計画の創設を援助すべきである。

210 地域委員会はまた、利用しうる人材を駆使して域内各国間
の技術協力を推進すべきである。例えば、訓練を受けた婦人
は自発的にまたは特別チームの一員として他の国の婦人たち
に短期間の協力を与えることができる。域内の現地事務所に
は特別顧問を配置し、域内の現地業務体制の強化を図り、上
述の機能や目的を一層効果的に実施すべきである。これら地
域委員会は、また、婦人の進歩のための計画を賄うために既
存の多国間および二国間援助財源からの資金拠出の増加を図
ることもでき、また、国内レベルまたは地方レベルにおける
回転基金の創設を含む新しい財源を確保することもできるは
ずである。

211 本計画の実施にあたり上述の地域委員会およびその他の地
域事務所を有する国連機関は、既存の国連その他の地域セン
ターで本計画の目的に関連する活動分野、例えば開発計画の
作成、読み書き能力、社会福祉、社会防衛、雇用、保健およ
び栄養、社会開発等の分野における研究訓練センター等の計
画を調整するよう格段の努力を払うべきである。

212 アフリカ開発銀行、アジア開発銀行および米州開発銀行の
ごとき地域開発銀行、ならびに中米経済統合銀行および東ア
フリカ開発銀行のごとき、準地域銀行および二国間資金機関

は、婦人の開発努力への参加および平等の達成を含むようなプロジェクトに対する開発援助に高い優先度を与えるように要請されるべきである。かかる援助は、自助努力を含む斬新な国家計画および地方計画への国家的支持の強化に役立つであろう。

第六章 再検討および評価

213 本計画の諸目標達成における進捗状況の総合的ならびに徹底的な再検討と評価が、国連組織により、定期的に行なわれるべきである。かかる再検討ならびに評価は第二次国連開発の十年のための国際開発戦略のもとにおける進捗状況の再検討および評価の手續の一環を成すべきであり、今後、設定される新規のいかなる国際開発戦略とも緊密に調整されるべきである。

214 国連総会はすでにその一九七四年十二月十日の決議三二七六(XXXIX)において、国際婦人年世界会議の諸決議中、関連ある勧告を一九七五年の第七回特別総会および第三十回総会において審議することを定めている。本計画はまた一九七六年春の第六十回国連経済社会理事会において審議されるべきである。国連事務総長は、一九七八年に各国政府と協同し、かつ国連組織の現存の機構および財政を考慮しつつ二か年ごとに行なう再検討の第一回に対するしかるべき準備を行なうよう要請されるべきである。経済社会理事会は、このような組織的評価の結果を必要に応じ、本計画の目的および勧

告に適切に修正を加える目的をもって、検討すべきである。

215 婦人にかかわりがあり、本計画に関係のある趨勢ならびに、政策に関するモニタリングは、国連の特別活動として継続的に実施されるべきである。これらの活動は、国連組織のしかるべき機関によって一九七八年を第一回として二年ごとに再検討されるべきである。このモニタリングは間隔が短かいので必然的に選択的ならざるを得ず、主として新しい趨勢および政策に焦点を絞ることになろう。

216 本行動計画はまた、地域委員会、国連開発計画(UNDP)、国連児童基金(ユニセフ)、国連工業開発機関(UNIDO)、関連専門機関およびその他の政府間機関、非政府団体により、今回の世界会議後の各々の会期において審議されるべきである。本計画に関するこれら諸機関の討議および決定は、経済社会理事会およびその関連機能委員会や諮問機関(婦人の地位委員会、社会開発委員会、人口委員会、統計委員会、開発計画委員会、および再検討評価委員会)に、それぞれの一九七六年および一九七七年の会期に提出されるべきである。本計画実施に関する活動計画がこれらのすべての機関の会期の議題に、少なくとも二年ごとに含まれるべきである。

217 地域レベルにおいては、地域委員会が婦人の開発努力のすべての面における一層大規模かつ効果的な参加に向かっての進捗状況をモニターする責任を引受けるべきである。かかるモニタリングは第二次国連開発の十年に対する国際開発戦略の再検討ならびに評価の枠内で実施されるべきである。地域委員会は、その経済社会理事会に対する各々の地域におけ

る社会経済情勢に関する報告において、開発における婦人の参加に関する情報をも提供すべきである。地域委員会はまた適当な間隔をおいて（例えば二年ごと）、この行動計画の目的達成に向かっての進捗状況を審議すべきである。地域委員会は、域内政府が、その会期その他の関連会議に対する代表団に婦人が平等な参加の機会を与えられることを、奨励すべきである。

218 国内レベルにおいては各国政府は、各々、本計画の達成目標の成就への進捗状況を定期的に再検討し評価するように、また必要に応じ他の既存の報告制度（例えば第二次国連開発の十年に対する国際開発戦略、世界人口行動計画、世界食糧会議の勧告、婦人に対する差別撤廃宣言の実施および婦人の進歩に関する統一的国際行動計画等の報告制度）に折り込んで経済社会理事会に本計画の実施ぶりにつき報告するよう奨励されるべきである。

219 各国政府は各々の開発計画との関連において、本計画の持つ意味合いを評価し、その実施のために必要な財政的ならびに行政的措置をとるべきである。

注一 関連国際文書参照。

二 国際婦人年世界会議において、何人かの代表は国家経済権利義務憲章への言及は、第二九回総会において各代表が本憲章に關し述べた立場の変更を意味するものではないとの意見を表明した。

三、一九七〇年十月二十四日総会決議二六二六（XXV）。

四 一九七四年国連世界人口会議報告書参照。

（国連出版物 №E75 XIII 3）

五 地域行動計画については、国連文書（E/CONF.66/BP.2.3）参照。

関連国際文書

A 国連文書

1 一般文書

- ・ 国連憲章
- ・ 世界人權宣言（一九四八）
- ・ 経済的、社会的および文化的權利に関する國際規約（一九六六）
- ・ 市民的および政治的權利に関する國際規約および選択議定書（一九六六）
- ・ 人身売買および他人の売春からの搾取の禁止に関する条約（一九四九）
- ・ 奴隸制度、奴隸取引ならびに奴隸制度に類似する制度および慣行の廃止に関する補足条約（一九五六）
- ・ あらゆる形態の人種差別撤廃に関する國際条約（一九六五）
- ・ 社会の開発と進歩に関する宣言（一九六九）
- ・ 第二次国連開発の十年のための國際開發戰略（一九七〇）
- ・ 世界人口行動計画（一九七四）
- ・ 新國際經濟秩序樹立に関する行動計画（一九七四）

・ 国家経済権利義務憲章（一九七四）

二 特に婦人の地位に関連した文書

- ・ 婦人の参政権に関する条約（一九五二）
- ・ 既婚婦人の国籍に関する条約（一九五七）
- ・ 婚姻の同意、最低年齢および登録に関する条約および勧告（一九六二および一九六五）
- ・ 婦人に対する差別撤廃宣言（一九六七）
- ・ 婦人の進歩のための統一的国際行動計画（一九七〇）

B 専門機関文書

一 ILO

- ・ すべての種類の鉱山の坑内作業における女子の使用に関する条約（№45, 1935）
- ・ 工業に使用される婦人の夜業に関する条約（№89, 1948）
- ・ 同一価値の労働についての男女労働者に対する同一報酬に関する条約（№100, 1951）および勧告（№90, 1951）
- ・ 母性保護に関する条約（№103, 1950；改正）および勧告（№05, 1952）
- ・ 社会保障の最低基準に関する条約（№102, 1952）
- ・ 雇用および職業についての差別待遇に関する条約（№102, 1958）および勧告（№111, 1958）
- ・ 職業訓練に関する勧告（№117, 1962）
- ・ 雇用政策に関する条約（№122, 1964）と勧告（№122, 1964）
- ・ 家庭責任をもつ婦人の雇用に関する勧告（№123, 1965）

二 ユネスコ

- ・ 教育上の差別待遇反対に関する条約（1960）
- ・ 教育上の差別待遇反対に関する条約の加盟国の間に生ずる紛争の解決のための調停、あつせん委員会の設立議定書（1962）

（注、行動計画およびメキシコ宣言の訳文は、外務省国際連合局の訳文を基本としたが、日本語としてあまりにも難解な部分は、原文に照らし、一部修正した。）

注 * 印は追加項目（*）印は修正項目

〈追加項目〉

序章 2、6、10、11、13、18、19、20、25

第一章 29、45、47、48

〈部分修正項目〉

序章 23

第一章 30、33、46

資料2

婦人の平等と開発と平和への婦人の寄与に関する 一九七五年のメキシコ宣言(全文)

国際婦人年世界会議は

世界人口の半数を構成する婦人の問題は、社会全体の問題であり、婦人の現在の経済的、政治的、社会的状況を変化させることは、婦人の必要を真に充足することを妨げている構造および態度を変化させる努力の一環とならなければならないことを自覚し、

国際憲章の諸原則に立脚した国際協力を、世界の諸問題を解決し、衡平と正義に基づいた国際社会を建設するために発展させ強化させるべきであることを認識し、

国際連合諸国の人民は、国連憲章に署名するにあたり、「戦争の惨害から将来の世代を救い、基本的人權と人間の尊厳および価値と男女ならびに大小各国の同権とに関する信念をあらためて確認し、一層大きな自由の中で社会的進歩と生活水準の向上とを促進すること」を特に公約したことを想起し、

国際連合の創設以来、世界人權宣言、植民地およびその人民に対する独立の付与に関する宣言、第二次国連開発の十年の国際戦略、ならびに諸国家の経済権利義務憲章に立脚した新国際経済秩序の確立のための宣言と行動計画を主要なものとする極めて重要な文書が採択されたことに留意し、

国際連合の婦人に対する差別撤廃宣言が、「婦人に対する差

別は人間の尊厳ならびに家庭および社会の福祉に反し、婦人が国の政治的、社会的、経済的、および文化的生活に、男子と同等に参加することを妨げ、また、国家および人類の寄与に役立つ婦人の能力の完全な開発に対する障害である」としていることを考慮し、

国際連合総会が一九七五年を国際婦人年と指定し、この婦人年は、男女間の平等を促進し、全体的な開発努力への婦人の参加を確保し、世界平和強化への婦人の寄与を増加するためより強化された行動に捧げられるべきであることを想起し、

さらに、経済社会理事会が決議一八四九(IV)において国際婦人年計画を採択し、総会が決議三二七五(XXIX)において同計画の完全な実施を要求したことを想起し、

婦人が人類の歴史において、なかななく、民族解放、国際平和の強化、帝国主義、新植民地主義、外国による占領、シオニズム、異民族による支配およびアパルトヘイト撤廃のための闘争において果している役割を考慮し、

婦人があらゆるレベルの政策決定により大きく平等に参加することが、開発の速度と平和の維持を促進するのに決定的に寄与するであろうことを強調し、

また、すべての国の男女が平等の権利と義務を持つべきであ

り、男女がこの権利義務を獲得しこれを行使するために必要な条件を作り出すことはすべての国家の課題であることを強調し、

全世界の婦人が、相互の間にいかなる相違が存在しようとも、不平等な取扱ひを受けあるいは受けて来たという苦痛に満ちた経験を分かち合っており、かつこの現象に対する婦人の自覚が増大するにつれて、婦人は、植民地主義、新植民地主義、シオニズム、人種差別、およびアパルトヘイトのもとで行なわれているようなあらゆる形態の抑圧に対する闘争の自然な同盟者となり、その際、今日の世界の経済的社会的変革のための巨大な革命的潜在力を形成することを認識し、

社会の社会的経済的構造の変化というのは、必要な前提条件の一つではあっても、それ自体で長期にわたり不利をこうむって来た人々の地位を直ちに改善することは保証し得ず、したがって、婦人が国家生活および国際生活に完全に、直ちにかつ早期に参加することにつき、緊急な考慮が払われるべきであることを認識し、

低開発状態は、婦人に対し、急速に撤廃すべき搾取という二重の負担を課し、かつこの目的のために各国の開発政策を完全を実施するに際して現在の国際経済関係の不均衡な制度が重大な障害となっていることを強調し、

出産という婦人の役割が不平等と差別の原因となるべきではなく、また育児には、婦人、男性および社会全体が責任を分かち合う必要があることを自覚し、

婦人の地位を向上せしめることと、婦人が国の発展に男性と

同様に積極的に参加する機会を持ち世界平和達成に寄与するのを可能にするような、より効果的な方法と戦略を見出すことの緊急性を認識し、

婦人が国際平和の促進、達成および維持において重要な役割を果たさなければならず、かつ婦人が、この目的のために存在する各国の組織および国際的な組織への完全な参加を通じて行なう平和への努力を鼓舞することが必要であることを確信し、国際婦人年世界会議で採択された世界行動計画の実施が、その中で、平等、発展、平和の達成のための重要な寄与となるべき各国のおよび地域的、国際的行動を促進することが必要であることを考慮し、

以下の諸原則を宣明することを決定する。

一、男女の平等とは、人間としての男女の尊厳および価値の平等ならびに男女の権利、機会および責任の平等を意味する。
二、婦人が男性と平等の地位を享受するに至る道程でのすべての障害を撤廃し、もって婦人が国の開発に完全に参加し、かつ国際平和の確保と維持に参加することを確実にしなければならない。

三、婦人が社会に統合され、子供が十分な保護を受けるのに必要な施設を創設することは国の責任である。

四、各国の非政府機関は、婦人が機会を活用するよう支援し、婦人の権利に関する教育と情報を増進し、自国の政府と協力することによって、婦人の地位向上に寄与すべきである。

五、男女は、家庭および社会において平等な権利と責任を有する。男女間の平等は、社会の基本単位であり人間関係涵養の

場である家庭において保証するべきである。男性は、家庭の健全な発展のために、家庭生活に、より積極的、創造的かつ責任ある態度をもつて参加し、もつて婦人が社会の諸活動に より多く参加することを可能にし、両性の家庭と職業の可能性を効果的に連繫すべきである。

六、婦人には、男子同様、自らの知的能力を最大限に開発するための機会が必要である。したがって、各国の政策と計画は、婦人に対しあらゆるレベルの教育および訓練をうける可能性を完全かつ平等に与えるべきであり、かつ、このような計画と政策は、婦人を自己充足のための婦人の必要と国の発展の必要性とに合致した新しい役割に、意識的に指向せしめるものとすべきである。

七、婦人の労働する権利、同一価値労働に対し同一賃金を受ける権利、職業上の昇進についての平等の条件と機会を持つ権利、および完全かつ満足すべき経済活動への婦人の他のすべての権利を、あらためて強く確認する。これらの諸原則が効果的に実施されるための再評価が、世界の経済関係再構成の必要性にかんがみ、現在緊急に必要となっている。この再構成は、婦人に対し、国の経済的、社会的、政治的および文化的生活の潮流に統合されるためのより大きな可能性を提供するものである。

八、すべてのコミュニケーションおよび情報手段ならびにすべての文化メディアは、今日なお婦人の発展を妨げている態度上のならびに文化上の諸原因の除去を援け、また、婦人が変化し拡大しつつある役割を果すことの価値を社会に対し肯定

的に投影することについての責任を高い優先度をもって認めるべきである。

九、婦人が政治分野での政策決定レベルその他のレベルで、自国および世界の諸問題に積極的に参加することは、婦人が平等の権利を完全に行使し、さらに発展するための、そして国の福祉のための前提条件であり、したがって、婦人が自国および国際社会の政治生活に参加しうるために必要な資金を使用しうるようにすべきである。

十、権利の平等はこれに対応した責任を伴う。したがって、可能な機会を完全に活用し、家庭、国、人類に対する自らの義務を遂行することは婦人の義務である。

十一、身体上の一体性とその人間生活における正当な位置づけに対する尊敬を教えることは、社会教育の主要な目標の一つであるべきである。人間の肉体は、男女の如何を問わず、不可侵であり、肉体に対する尊敬は、人間の尊厳と自由の基本的要素である。

十二、すべての夫婦と個人は、子供を持つか否か、および子供の数と出生間隔を自由に決定し、そのための情報と教育および手段を入手する権利を持つ。

十三、人間の尊厳に対する尊敬は、すべての婦人が婚姻するか否かを自由に決定する権利を包含する。

十四、不平等の問題は、世界の圧倒的大多數の婦人に影響する問題として、低開発の問題と密接に関連しており、低開発は不適切な国内構造の結果としてのみならず、極めて不公正な世界経済体制の結果としても存在する。

十五、いかなる国といえども、完全かつ十分な開発のためには、婦人が男性同様すべての分野に最大限に参加することを必要とする。世界人口の約半数の潜在力が十分に活用されないことは、社会経済開発にとっての重大な障害である。

十六、開発の最終目的は、すべての人間により高い質の生活を達成することであり、このことは、経済その他の物質的な資源の開発に留まらず、人間の肉体的、道徳的、知的および文化的成長をも意味する。

十七、婦人は全体的な開発への努力に参加し寄与する権利を有しているのであるから、国は婦人を開発に参加せしめるために、それに必要な経済社会政策の変更を実施しなければならぬ。

十八、国際的経済関係の現在の状態は、開発の促進と、全人類、なかんずく婦人の関心事である飢餓、幼児死亡、失業、文盲、無知および後進性の撲滅を目的とした開発途上国の生活水準向上のために、すべての人的、物的潜在力をより効果的に活用する際の重大な障害となっている。したがって、社会経済体制の如何を問わずすべての国家の間の平和共存の原則に基づいた衡平、主権平等、相互依存、共通の利益および協力、ならびにすべての国、なかんずく開発途上国の経済的社会的進歩の国際社会全体による促進、および国際社会を構成する国家の進歩に立脚した、かつ諸国家の経済権利義務憲章を基本的要素とする、新国際経済秩序を緊急に確立し実施することが重要である。

十九、すべての国の自国の天然資源、富およびあらゆる経済活

動に対する完全かつ恒久的な主権と、その主権の表現としての国有化に対する不可譲の権利は、経済的社会的開発過程の基本的な前提条件である。

二十、経済的社会的目標の達成は、婦人の権利の実現にとり極めて重要ではあっても、婦人に対するあらゆる形態の差別撤廃のための特別な措置がとられない限り、それ自体のみで、婦人を男性と平等な基盤の上で開発に完全に参加せしめる結果とはならない。したがって、すべての職業分野における婦人の参加と地位の向上を促進し、平等な教育の機会と家事労働を容易にする如き施設を供与する開発モデルを作成し実施することが重要である。

二十一、世界の広大な地域における農業部分の近代化は、なかんずく農村地域の何百万という婦人が開発に参加する機会を創造するだけに、進歩のために不可欠な要素である。各国政府、国際連合、国連専門機関、その他の権能ある地域的、国際的機関は、農村婦人の能力を最大限に活用し、その自立を助長するための諸計画を支援すべきである。

二十二、婦人の完全かつ平等な社会参加に必要な経済的、社会的、法的条件およびそのための態度が存在していた場合でも、開発への婦人の参加促進を目標とした努力や措置は、全体的な社会経済成長の一環とならない限り、成功裏に実施し得ないことを強調しなければならない。種々の経済的、社会的、政治的、文化的部門への婦人の完全な参加は、人民の動的な進歩および開発の重要な指標である。個人の人権は、全体の発展の枠内でしか実現され得ない。

二十三、この宣言のかかげる目標は、国家間の関係が、国家の

主権平等、民族の自決、武力による領土の獲得またはかかる企図の拒否、および領土獲得を承認することの禁止、領土保全と領土防衛権、他国に対する内政不干渉等の諸原則によつて、人間相互の關係が男女の權利平等という至高の原則によつて支配されると同様に支配されている世界においてのみ実現される。

二十四、國際協力と平和は、民族の解放と獨立、植民地主義と新植民地主義、外国による占領、シオニズム、アパルトヘイト、あらゆる形態の人種差別の撤廃、および人民の尊嚴と自決權の承認を必要とする。

二十五、婦人は生活のあらゆる分野、家庭、共同社会、国家および社会における平和の増進に重要な役割を有している。婦人はかかる存在として、平和増進に資するあらゆるレベルの政策決定過程に男性と平等に参加しなければならない。

二十六、植民地主義、新植民地主義、帝國主義、外国による支配と占領、シオニズム、アパルトヘイト、人種差別、武力による領土の獲得およびかかる領土獲得の承認は、男女および児童に測り知れぬ苦しみを及ぼすものであり、男女は協力してこれらを撤廃しなければならない。

二十七、國際連合の糾弾する人権侵害に対し抗議するすべての国の婦人の連帯は支持されなければならない。収監、拷問、虐殺、集団処罰、住居の破壊、強制立退、恣意的な移動制限を含む、男女および児童に対するあらゆる形態の抑圧および非人道的取扱いは、人道に対する罪であり、世界人権宣言そ

の他の國際文書違反とみなされる。

二十八、全世界の婦人は、強姦、売春、暴行、精神的虐待、未成年結婚、強制結婚、商業行為としての結婚等の、婦女子に対する人権侵害の撤廃のために団結すべきである。

二十九、平和は、婦人が男性とともに、第三国または多国籍企業による公然または隠然たるいかなるタイプの内政干渉をも拒絶することを要求する。平和はまた、婦人が男性とともに、いかなるタイプの政治的經濟的壓力、威圧にもさらされることなく、自らの經濟的、社会的、政治的体制を確立する国家の主權の尊重を促進することを要求する。

三十、婦人は男性とともに、核軍縮を手始めとして、実効ある國際管理のもとでの、現実的な一般全面軍縮を促進すべきである。眞の軍縮が実現するまで、世界中の男女は、警戒心を捨てず、國際平和の達成維持のために全力を尽さなければならない。

ゆえに、

國際婦人年世界會議は、

一、平等、發展、平和という國際婦人年の目標に対する信念を確認し、

二、これらの目標達成を公約することを宣明し、

三、各国政府、國際連合の全機関、地域的國際的政府間機関および國際社会全体に対し、婦人、男性、児童が尊嚴、自由、正義、繁榮のもとに生活しうる公正な社会の建設のために献身するよう強く要請する。

資料3 国際婦人年世界会議において

採択された諸決議（一九七五年七月）

国連発行 国際婦人年世界会議資料より要約

決議	決議要約	提案国 票決結果 日本
<p>第一委員会決議</p> <p>1 アフリカにおける婦人の進歩のための研究及び訓練</p> <p>2 世界行動計画の諸目標達成を目的とする諸計画に関する国際協力</p> <p>3 南アフリカ、ナミビア及び南ローデシアにおける婦人の地位</p>	<p>アフリカの大多数の婦人が置かれている不安定な境遇を考慮し、パンアフリカ婦人機構の婦人訓練センターの発展を援助する。</p> <p>婦人が発展に寄与できるよう、各国に要請。この計画の指揮を可能な限り婦人にゆだねる。</p> <p>アパルトヘイトは人間性に対する犯罪であり、集団殺人的な犯罪であって、その主たる犠牲者は婦人であること、及びその根源は全人類の関心事項であることを認識し、南アフリカ、ナミビア、南ローデシアの少数支配非難、アパルトヘイト撲滅、人種差別、植民地支配反対の闘争を支持する。</p>	<p>マリ他アフリカ四か国 全会一致 ○</p> <p>マダガスカル、モーリタニア、セネガル 全会一致 ○</p> <p>アフリカ諸国 全会一致 ○</p>

4 世界行動計画実施
における国連組織
の役割

5 婦人と健康

6 第七回特別総会及
び国連のその他諸
機関の会議への婦
人の参加

第二委員会決議

1 婦女子搾取の防止

2 国連及び専門機関
の雇用における婦
人の状況

世界行動計画の実施のため、十分な人員（特に婦人）、資金を配分
するよう各国、各機関に勧告する。

社会的・政治的・経済的生活への婦人の全面的な参加は、多くの
婦人が良好な健康を享受できないことにより制約されているこ
と、医療要員の不足・迷信・偏見・禁忌があることなどを認識し、
婦人の健康の確保、これを阻害するような政治・経済・社会的要
因から保護し、母子保健を助長する。

婦人に対する差別撤廃宣言（一九六七）に留意し、国際会議への
婦人の参加が限定されていることに着目、各国政府に対し、第七
回国連特別総会、国内における政策決定段階への婦人の参加を確
保するよう、また政府代表には男女双方を加えるよう要請する。

売春は婦人の尊厳に対する最も悲痛な侮辱の一つであること、現
実に多くの国で存在していることを認識し、売春・人身売買等の
婦女子に対する搾取を精力的に排除し、更生をはかるよう各国に
勧告する。

婦人が国連に就職し、そこで働き、昇進し、昇進の恩恵を受ける
条件は、男子の場合と比し、決して国連憲章が要請しているよう
には衡平ではないとの周知の事実を確認するような資料（一九七
三刊）が収録されていることに留意し、加盟国間の国連職員配分
の偏りを是正、婦人の雇用促進を国連・専門機関及び諸機関に勧

フィンランド、
スウェーデン、
スーダン
76—13—6 ○

オーストラリア
97—0—6 ○

コンゴ、他
85—0—13 ○

タイ
全会一致 ○

米、ウルグアイ、
ドミニカ、日本
全会一致 ○

3 母親及び児童の健康の保護

告する。

都市化が急激に進行し、特に開発途上国において著しい都市化が、家族の健康、特に母親の健康に大きな影響を与えることを考慮し、流入人口が健康に有害な標準以下の住宅事情の下に生活している事実を認識し、農村から都市部への人口流出率を低下させる努力を払わねばならないことを考慮する。また、無資格者による頻繁な非合法妊娠中絶が母親の健康に深刻な問題となっていることを認識し、開発途上国の農村地域においては一般に母親及び児童の死亡率そのものが都市部よりも高いことを銘記し、さらに世界の最も緊急な問題の一つは、栄養不良及び栄養欠損であることに留意し、都市・農村の母親・児童に対する十分な保健活動を各国に勧告する。

4 婦人に対する助成的援助

低収入婦人を保護するため婦人を対象とした金融機関の設立を奨励するよう関係国に勧告する。

5 人口及び開発への婦人の参加

婦人と開発に関する政策の基盤とすべき人口に立脚した研究の必要を強調し、人口動態が家庭及び社会における婦人の役割に与える影響、都市化の過程が、婦人の役割、生活条件、開発への参加の機会に与える影響、教育水準、婚姻上の地位同棲、家庭外における婦人の経済活動、出産の形態及びこれらに関係する文化的、生物学的、その他の要因との間の相互関係、出産と母親の疾病率、死亡率、乳児、幼児の死亡率との間の相互関係等の調査研究を経済的に勧告し、国内計画の実施を要請する。

アルゼンチン、
メキシコ、イ
ド、イラン、他
全会一致 ○

ガーナ、ジャマ
イカ
全会一致 ○

キューバ、メキ
シコ、ドミニカ、
ヴェネズエラ、
他
全会一致 ○

6 開発への婦人の参加のための特別資金

7 老人、身体障害者を含む婦人に対する社会保障及び家族保障

8 開発過程への婦人の参加に関する政策策定のための研究

9 家族計画及び婦人の開発への全面的参加

10 一般国民の参加

11 家庭

国連総会に一九七五―八五年を「婦人と開発の一〇年」と宣言することを勧告、各国政府に一九八〇年までに行動計画を実施するため、あらゆる努力を払うよう要請、必要な資金援助を行なう。

多くの国で婦人は社会福祉の社会保障の恩恵に関して不利な立場に置かれていることを考慮し、各国政府に対し、妊娠婦、老齢婦人、ハンディキャップを背負った婦人の福祉政策の充実を要請する。

開発研究の中での婦人の活動に十分な関心が払われなかった事実を認識し、国連事務総長に対し、開発への婦人の参加に関する政策を整備する準備として、開発における婦人の境遇についての情報を収集・整備することを要請する。

開発への婦人の参加の過程において、婦人に対し、子供の数と出産間隔を自ら決定しうるような情報及び手段を与える必要性を認識し、各国政府、国連諸機関、専門機関に対し、婦人問題との関連で世界人口行動計画の実施を要請し、各国政府には家族計画のための教育、母性及び児童保健サービスを要請する。

各国に婦人の地位向上のため、婦人自らの自発的活動を後援することを要請する。

家庭は社会の根源的かつ基本的な核であり、社会的諸関係の最初

アフガニスタン 全会一致
ドミニカ、フィリピン、英、他 ○

ブルガリア、パナマ、ベルー、他 △

他 ○

オランダ 全会一致 ○

英、米、スウェーデン、エジプト、ガーナ ○

キューバ、ドミニカ、メキシコ、他 ○

他 ○

パナマ 84―0―16 ○

12 政治及び社会参加

の教場となっていることを銘記し、男女は共に不可欠であり、團結して人間生活を可能にすることに留意し、各国政府に対し家庭を形成すること等を要請する。

公正な各国社会の建設、基本的な民族の諸権利及び民族自決権のための闘争、侵略戦争に対する闘争、新国際経済秩序の確立及び平和、安全保障ならびに軍縮の強化における婦人の役割の重要性が増加しつつあることを認識し、各国及び国際的な経済・社会・政治変革の担い手としての婦人の参加は根本的に重要であることを確信し、かつこのような婦人の参加を認めることは、国際社会が恩恵として与える譲歩ではなく、当然なされるべき正義の行為であることを宣言し、各国政府に対し、婦人の政治社会活動への参加を容易ならしめるよう呼びかけ、適切な場合にはそのための国内委員会を設立することを要請する。

13 婦人及び通信の媒体

マス・メディアが多くの場合、婦人について型にはまった屈辱的かつ非道徳的なイメージを提示し強化する傾向があることを認識し、ある種のメディアが婦人の性のシンボル及び経済的利益追求の手段として屈辱的に搾取していることを非難する。各国政府及び各機関に対し、国内マス・メディアをして婦人の尊厳あるポジティブなイメージを投影するよう勧奨すること等を要請する。

14 政治的、経済的、社会的及び文化的発展過程への婦人

世界人口の半数以上が婦人である以上、男女がすべての活動分野に全面的かつ平等に参加することは各国の政治的、経済的、社会的発展に不可分であること、また新国際経済秩序と国内の構造変

ベル、他

全会一致

○

ドミニカ、ベル

全会一致

○

キューバ、チェコ、ユーゴ、ベル、他

90-6-13

△

の男性と同等なパートナーとしての参加

15 農村地域の婦人の条件

革とが、婦人の男性と同等のパートナーとしての政治、経済、社会、文化面への参加を促進することを認識し、差別的慣行は人間の尊厳に対する脅威であり、婦人にとって、思想の自由、市民的、政治的権利の享受、人格と能力の陶冶、選択の自由を放棄することとは不可能であることを考慮し、子供の養育、教育、援助、保護についての親の責任を両親に平等に負わしめることの重要性を念頭に置き、すべての国に対し、婦人がより良い、より公正な世界の建設に男性と平等の基盤に立って参加しうるよう国家間の新しい関係を設立し、先進国と開発途上国間の格差とを速やかに克服すること、婦人の権利の完全な平等を保証するような法を制定、または法改正を行ない、婦人を何らかの形で差別し、政治的・経済的・社会的・文化的発展過程への婦人の参加を制限するすべての法規を撤廃するよう要請し、婦人がすべての職業分野に男性と平等に参加し、すべての役職につく平等の可能性をもち、同一価値の労働に対し同一の報酬を受け、教育と訓練の機会を平等にもつことを確保し、家事を男女にとって容易にするための社会サービスの諸部門を拡充発展させるような社会経済の進歩を奨励する。

開発途上地域の農村婦人が食糧生産に大きな役割を果たしていることを考慮し、婦人はいたるところで、家庭で消費される食糧の調達と調理について、また家族生活のあらゆる局面において中心的な役割を果たしているにもかかわらず、現在まで多くの国でこの役割が十分に認められていないことを自覚し、各国政府に地方開発及び地方婦人に恩恵をもたらすような措置を要請する。

コロンビア、メキシコ、インド、キューバ

56-0-8

○

16 婦人と発展

極端な貧困が基本的人權の障害となっていること、婦人の中で最も人權を奪われている人々でも、すべての人間と同様の尊厳と尊敬を受ける權利を有していることを認識し、すべての男女に対し忍び難い貧困の桎梏の下にあえぐ婦人及びその家族に対し何よりも関心を持つよう強く要請するなど、婦人に対し、貧しい者、恵まれない者の救済に協力するよう要請する。

17 国際標準職業分類の改正及び拡張

婦人の役割と社会的経済的寄与に関する情報が必要としていることを念頭におき、ILO及び国連の関連諸機関に対し、婦人労働等に関する統計基準の再検討、整備、各国のセンサスへの協力を要望する。

18 教育及び訓練

福祉ひいては人類の生存自体に対する挑戦が強まりつつあるのに対し、各種の社会、経済集団間の格差を減少し、婦人に対する偏見を解消するためには、教育の拡充が不可欠であること、また、教育の利益は、性、年令、人種、宗教、種族のいかんにかかわらず、すべての人間の權利として平等に与えられるべきであることを確信し、さらに、婦人に教育の機会均等が与えられない限り、婦人が社会における自らの役割について自由な選択を行ない、これを行使することはできないことを認識し、教育、訓練の分野における婦女子の機会均等や、すべての教材から性に関する偏見を排除すること等を要請する。

19 男女の平等及び婦人に対する差別の

婦人に対する差別は、婦人のもつ巨大な潜在力を社会のために全面的に活用することを阻害し、人間の尊厳及び人權尊重の原則と

法王庁

80—3—13

△

ニュージーランド

全会一致

○

インドネシア、他

全会一致

○

英、ニュージーランド、ブルガ

全会一致

○

撤廃

50 婦人の地位向上の

ための国際訓練調

査研究所

21 開発への婦人の参

加のための措置

22 世界平和及び国際

協力促進への婦人

の参加

23 国際平和と安全の

強化及び植民地主

義、人種主義、人

種差別ならびに外

国による支配に対

相容れないものであることに留意し、各国政府に対し、国連、ILO、UNESCOその他の国連機関により作成されてきた婦人に対する差別撤廃関連諸条約の批准を要請する。

国連の下に婦人の地位向上のための訓練研究機関を設立することを勧告する。

国連の諸機関に対し、婦人の開発への参加を促進するよう要請する。

国連総会が、一九七二年十二月十八日の決議三〇一〇(XIV)(H)において、国際平和と協力の発展への婦人の寄与を拡充することの重要性を認めていることを想起し、各国政府に対し、婦人が職業外交官になるための学業を修めるよう奨励し、採用、昇進の障害を排除すること、婦人が国際公務員または、国際機関、地域機関に就職し昇進する機会を一層多く与えること等を要請する。

各国政府、政府間機関、非政府機関、婦人組織、婦人グループに対し、平和を強化し、あらゆる形態の植民地主義を完全かつ決定的に撤廃し、アパルトヘイト、人種主義、外国による支配と侵略を終らせるための努力を強化するよう要請する、他。

リア、他

イラン、米、ジ 全会一致 ○

チャマイカ、エジ

プト、メキシコ、

他

米、ニュージー 全会一致 ○

ランド、オース

トリア、他

フィリピン 全会一致 ○

東ドイツ 75—2—22 △

する闘争への婦人の参加

24 パナマ領「運河地帯」の問題

植民地的状況、人種主義、人種差別、外国による支配と占領が存在し続けることは国際平和に対する脅威であり、全世界において婦人が男性とともにこれらを撤廃するために闘っていることを考慮し、新運河条約に関する米国とパナマとの間の交渉は同地域に對する主権を有する当局の同意によらない支配と占領を撤廃しなければならぬとの見解を表明する、他。

25 国際会議への参加を通じて婦人の世界平和への寄与

国連総会の代表団中婦人の割合は一〇%以下であることに留意し、各国政府に対し代表団中の婦人の数を大幅に増やすよう努力することを勧告する、他。

26 パレスチナ及びアラブの婦人

何百万の人間が植民地主義の桎梏の下に苦しんでいるときに人間の平等について語ることの空しさを再確認し、世界のすべての婦人に対し、パレスチナの婦人と人民に対し、連帯と支援を宣明するよう訴える他、民族解放運動に對する支持を要請する。

27 ベトナム国民に對する援助

ベトナムの婦人が民族解放のために闘い、全世界の民族解放と婦人の解放の動きに寄与した役割を評価し、既存の国際機関の基金を通じてのベトナム人民援助を要請する。

28 チリにおける婦人の状況

婦人収監者が屈辱的な状況の下に置かれていることを留意し、チリにおける抑留者の即刻解放他を要請する。

アルゼンチ、他 58—0—33 △

米、他 全会一致 ○

アラブ、アフリ 66—3—35 △

カ

アラブ、アフリ 94—0—6 ○

カ

アルジェリア、他 全会一致 ○

(注) 日本の欄の記号は決議に對する日本の態度で、○は賛成、△は棄権。

資料4

婦人労働者の機会および待遇の均等を促進する

ための行動計画（第六〇回ILO総会決議）

国際労働機関の総会は、

婦人労働者の機会および待遇の均等を促進するにあたって、障害がまだ存在していることに目を向け、国家、地域、国際レベルで、これらの障害を克服するために、また、雇用、職業、職業訓練、生活と仕事の条件に関し、いかなる差別も受けることなく、婦人が男子との完全な平等を享受することができるようにするために、継続的な努力がなされねばならないことを考慮し、婦人労働者の機会および待遇の均等に関する宣言を採択し、この婦人労働者の機会および待遇の均等に関する宣言に述べられた諸原則の適用を確実なものにするために、次の行動計画を採択する。

基本方針

婦人労働者の機会および待遇の均等の確立を目的としたいかなる行為も、すべて人間（男および女）は、働くという否定し難い権利をもつという基本原理に基づいて決定されねばならない。

I 国内活動

1 一般政策

加盟国は、教育、訓練、雇用および職業に関する婦人労働者の機会および待遇の均等を促進するため、また、これらの活動を企画し、鼓舞し、評価するため、およびすべてのレベルで機会と待

遇の均等に関する政策を適用し、強化するための中心として、婦人の参加を含む三者構成機関を設立するため、国家的開発計画の枠組の中で、特別の活動を行なうことを約束すべきである。

2 労働力への婦人の参加

働く権利と自由な雇用及び職業の選択を保障し、特に各国の状況に適応した措置を含め、同等の立場で、かつ、職業生活で差別を受けることなく、労働力への婦人の統合をすすめるための措置が講じられるべきである。

(a) 男性、女性両方にとって、完全雇用を保障するために、経済的、社会的開発政策をすすめること。性による労働の区別または配偶関係や年齢による特別の領域における伝統的な雇用の障害を打ち破ることによって、婦人に、すべての雇用の機会を開放すること。

(b) 性による区別でなく、個人の素質、能力および興味を考慮に入れた助言、訓練および雇用の政策をすすめること。

(c) 婦人の、より高い技能水準や職業組織の中での、より責任ある地位への移動のための実質的な機会を奨励し、創り出すこと。

(d) すべての地域開発計画および活動の中で、男女双方に対して雇用機会を平等に与えるために、婦人の労働力率および労働力への参加の性格に関する内在的な地域差を分析し、積極

的な措置を講ずること。

(e) すべての国家的な経済および社会の開発計画および活動において、労働生活への婦人の統合に関し、常に適切な注意を払うこと。

(f) しばしば、差別と排除の犠牲となり、社会的危険におちいる移民の婦人のように特別な困難に遭遇する特殊な範囲の婦人労働者に関し、常に適切な注意を払うこと。

(g) 過剰人員あるいは解雇の場合、すべての労働者に同じ基準を適用すること。

(h) 婦人の雇用に関する、労使双方およびその団体、婦人自身および社会全体の考え方を、より好ましく、かつ積極的なものにすることを含め配偶関係や年齢のいかにかわりなく、(雇用の最低年齢に関する条約および勧告の規定を考慮に入れつつ)婦人の雇用に対する考え方の変化を促進すること。

(i) 労働力および国家開発への十分な参加を促進するため、農村地域の婦人労働者に十分な注意を払うこと。

3 職業指導および訓練

一九七五年の人的資源開発に関する勧告で述べられた次のような原則に一致させるため、職業指導および訓練に関して、少女および婦人の機会の均等が促進されなければならない。

VII 職業訓練および雇用における

機会の均等促進

54 (1) 少女および婦人の雇用および社会全体における機会均等を促進する措置がとられるべきである。

54 (2) これらの措置は婦人の雇用状況を改善するため政府によ

ってとられる他の経済的、社会的および文化的措置の一環を構成すべきであり、可能な限り、次のものを含むべきである。

(a) 一般大衆、特に両親、教師、職業指導および職業訓練職員、雇用その他社会的施設の職員、使用者ならびに労働者に対し、婦人および男子が社会および経済において均等な役割を果たすよう奨励することおよび男性と女性の家庭および職業生活における仕事に関する伝統的な傾向を変えることの必要性について教育すること。

(b) 少女および婦人に対し、少年および男子に対すると同様の範囲の教育、職業訓練および雇用機会を提供し、それらの方に対し、そのような機会を十分に利用するように奨励すること。また、そうするために必要な条件を創り出すこと。

(c) 国際労働条約および勧告の規定に従い、すべての教育体系および伝統的に少年および男子にのみ確保されてきた職業を含むすべてのタイプの職業のための訓練への少女および婦人の機会均等を促進すること。

(d) 少女および婦人の個々の発展、より高い技能水準での雇用と責任あるポストへの昇進を保証するための向上訓練を促進すること。少年および男子と同じ教育および職業訓練の資格を有する少女および婦人に対して、作業経験を拡大して行く機会を、少年および男子と同等に与えるよう使用者に奨励すること。

(e) 家庭責任を有する少女および婦人に通常の職業訓練への機会を与えるため、様々な年齢の子供のために、できる限り通園保育所および他の諸施設を提供し、同時に、例えば、

パートタイム形式や通信方式によって、再訓練方式あるいはマスメディアを用いたプログラムによる職業訓練計画という特別な措置を講ずること。

(f) 初めて雇用に就くことを希望し、または比較的長期間の不就業を経て、再び雇用に就くことを希望している高年齢婦人のための特別の職業訓練計画を提供すること。

55 この勧告の54(2)の(e)、(f)に述べられている職業訓練計画は、同じような問題をもつ男性にも適用されるべきである。

56 職業訓練と雇用における男女の機会均等を促進するための措置を実施する中で、一九六四年の雇用政策条約、勧告に注意を払うべきである。

4 雇用および職業に関する機会および待遇の均等の促進

次のようなすべての必要な措置が講じられるべきである。

(a) 一九五一年の同一報酬条約(第一〇〇号)および一九五八年の差別待遇(雇用および職業)条約(第一一一号)その他のILOの性差別に関連するすべての条約を批准すること。

労働者および使用者の団体は、労働条約その他の協定の方法により、これらの文書の規定が十分に実現されることを助けないければならない。

(b) 社会活動および経済活動のすべての分野において、また、技術や責任のすべての水準において、婦人に対するすべての形の差別を排除すること。

(c) 社会活動および経済活動のすべての分野において、権限あ

る職に婦人が就くことや在職訓練を受けることを保証すること。

(d) 特に政府の活動を通じて婦人労働者の機会の均等に関する立法と、公的管理の下にある機関の設立を含め、婦人の機会均等を促進すること。そして、すべての分野、特に公的支配に属する全部門で無差別の原則を厳格に適用すること。

(e) 婦人—特に既婚婦人および家庭責任を持つ婦人—の雇用に對して、マスメディアや学校を通して行なう教育および奨励活動によって、もっと好意的な社会的風潮をつくり出すこと。

(f) 婦人が働く権利は、経済状況やその他諸々の条件に左右されるものではなく、それゆえ、家庭に対する社会的措置は差別なく、いつでも適用され、婦人が経済生活に参加することは、何ら支障をきたすものではないということを保障すること。

5 社会保障

社会保障制度の中で婦人に対するすべての差別的取扱い—特に手当の支給に関して—を排除するための措置、および社会保障の資格に関して家庭の長および独身者の地位に関する再検討の措置が講じられるべきである。

6 保護法の再検討

今日の科学的知識と技術の進歩に照らして、婦人に関するすべての保護法を再検討し、あるいは、これらの法制を国内の状況に應じて修正、補完、男女すべての労働者への適用拡大、現状維持または撤廃するなどの措置がとられるべきである。

これらの措置は、生活水準の改善を目指すためのものである。

7 母性保護の権利

すべての必要な措置が採用されるべきである。

(a) 科学的知識および技術の進歩にてらして、母性保護の範囲の拡大と水準の向上を行なうこと。これらの費用は、社会保障またはその他の公的基金により、あるいは団体協約の手段によりまかなわれるべきだと理解されている。

(b) すべての夫婦と個人が、その子供の数と出産の間隔を自由に、責任をもって決定する基本的権利を實行するために必要な情報、教育および手段に近づくことを保障すること。

(c) 労働者が雇用と、十分に守られているその雇用から生じているすべての権利とを放棄することなく、出産休暇のあと、適当な期間、休暇をとれるようにすること。

8 社会的下部組織の充実

(1) 婦人が家庭の外で差別を受けることなく労働する権利を十分効果的な形で實行するため、一九六五年の雇用（家庭責任を有する婦人）勸告（第二二三号）で規定されている方針に沿った措置が講じられるべきである。

(a) 労働生活を可能な限り、労働者の必要に応じたものに改めること。

(b) 労働者のすべての年齢の子供、および他の扶養家族の必要に応じたサービスと施設を、出身地の如何にかかわらずなく、その子供から引き離されないという、移民の母親の必要を特に考慮して、開発すること。

(c) 家庭と労働者の責任を調和的に果たすことに便宜を与えるため、すべての労働者（男および女）に、情報、援助、地域サービス、社会的援助を与えること。

(d) 家庭内の雑用の減少

(2) 育児を含む家庭内の仕事を家族の構成員の中でもっと公平に配分することを奨励するために、必要でかつ適当な教育的、奨励的な措置が講じられるべきである。

(3) 家庭の仕事と労働との調和的達成に便宜を与え、婦人労働者の機会および待遇の実質的均等を促進するために、国内の諸条件が許す場合はすべての労働者のフレックスタイム制および日々の労働時間の短縮の問題に特別な注意が払われるべきである。

9 婦人労働者の機会および待遇の均等を促進するための行政的整備

必要かつ適当な措置が講じられるべきである。すなわち、

(a) 婦人の経済的、社会的な面での機会および待遇の均等を促進することを目的とする活動を管理するための婦人労働者の地位に関する国家的な三者構成の委員会を設立すること。

(b) 婦人労働者の地位に関する国家的委員会の事務局としても機能しうる中央機関あるいは適当な行政機構を設立すること。このような機関または機構は、婦人労働者の機会および待遇の均等に関する調査、統計、計画、および活動を推進し、調整するとともに、婦人の職業生活への準備および労働力への統合に関連する知識および情報を広め、さらに使用者およ

び労働者の団体と組織的に協議する機能を果たすべきである。

10 国内的、地域的および国際的機関への婦人

の効果的参加

(1) すべての国家的意志決定機関、政府委員会、諮問委員会、評議会、会議およびすべての適当な国、地域および自治体の機関への婦人の効果的な参加が保障されるべきである。

(2) ILO総会およびILO地域会議またはILOおよび他の政府間の機関が主催する国内的、地域的および国際的会合に間の男子と同じ基盤により、かつ同じ基準で、婦人が代表者として考慮され、指名されることを保障するための措置が講じられるべきである。

11 一般的措置

婦人労働者の機会および待遇の完全な均等を確保するために次のような措置が講じられるべきである。

(a) 教育、訓練、雇用および職業に関して、すべての労働者の機会および待遇の均等を達成すること。

(b) まだ根強く残っている仕事、家庭および社会における男女の役割分担に関する伝統的な態度を変えること。

II ILOの活動

1 地域活動

婦人労働者の機会および待遇の均等を促進する観点から、地域レベルでのILOの活動を強化するために、特に次のような措置がとられ、または考慮されるべきである。

(a) 婦人労働者の機会および待遇の均等の問題を、地域諮問委員会および地域会議の将来の会期での議題とすること。

(b) 経済的、社会的および文化的的生活における婦人の進歩および婦人労働者の機会および待遇の均等の促進のための地域的、国家的活動計画を創始する、婦人労働者の地位に関する地域委員会の可能性を研究することおよびこれらの計画が効果的に実施されることおよびILOが婦人にとって重大な問題に関して国連の他の機関や民間の組織（特に使用者および労働者の団体）と地域レベルで密接に協力することを可能にするためにILOの地域下部機構を強化すること。

(c) 様々な文化的、経済的様式の中での婦人の雇用に対する圧迫と、これらを緩和し、または除去するために可能な手段について、他の団体との協力のもとに徹底的な研究をすすめること。

(d) 様々な地域で、ILO自身で、または世界雇用計画または技術協力によって国連の他の機関との協力の下に行なわれるILOの活動が、開発に対する婦人の有効な参加を促進することを確保すること。これらの活動が婦人に対する差別を永久化し、維持し、あるいは強化することのないようにし、また、国際労働基準、特に第一〇〇号、第一〇三号および第一一一号条約を実施するための注意がなされるべきである。

2 国際的活動

(1) 次のことを可能にするために必要な措置が講じられるべきである。

(a) 必要であれば婦人の雇用に関係のあるILOの諸基準、特に第一〇〇号条約、第一一一号条約およびすべての保護的文書を含む関係文書について、それらの規定がその採択以後に得られた経験にてらし、依然として適当なものであるかどうかを判断し、科学、技術の知識によってそれらを常に現状に即したものとするために適宜再検討し修正すること。

(b) 現行の基準の及ばない領域の、性に基づく差別に関する新しい基準と、実際上あるいは法律上の平等の積極的促進のための措置を開発すること。

(2) 婦人の雇用および条件に及ぼす技術進歩の影響に関する諸問題および家庭の世話、家族計画その他の社会的条件に関連する諸問題を含む婦人に特別に関係のある諸問題に関する調査活動に着手し強化するための処置がとられるべきである。発展途上国の農村地域に関しては、婦人の雇用や生活の条件に直接関係のある貧困や文盲、技術の欠除の問題および家族の世話、家族計画その他の社会的条件の問題に関する調査活動が着手されるべきである。

(3) 産業別労働委員会および類似の機関は、もっと多くの婦人の専門家を活用するとともに、当該産業における婦人の地位および問題をもっと考慮し、また特に婦人労働者の多い経済

分野からもっと多くの婦人代表者を参加させることを促進するよう要請されるべきである。

(4) 「第二次開発の十年」の終りおよび「第三次の十年」の始めにおいて、変化する社会における婦人の役割と地位について再検討するために、たとえば婦人労働者の機会および待遇の、より大きな実質的均等に向つての進歩の度合いを評価し、この目的のためのより以上の活動を計画するための、一九八〇年の総会での討議などの措置が講じられるべきである。

(5) ILO事務局自身が自らの組織において婦人に対する差別を除去し、すべてのポストで婦人が同等の機会が得られるような実例を示すための措置を講じるべきである。さらに、ILO事務局の各部局は、働く婦人の問題をもっと綿密に調査し、婦人の機会と待遇の均等を促進し、雇用、訓練、労使関係、労働法制、および労働行政、社会保障および関連する問題を含めて、ILOの扱うすべての側面およびすべての分野で、婦人労働者の必要としていることに対して、当然の注意を払う責任を負うべきである。ILOはまた上に述べた分野およびその他の分野で、婦人労働者の機会および待遇の均等を促進するために、現在の三者構成機構を再構成し、活用すべきである。

(c) ILOは、他の機関および関係諸国の専門家との連携の下に、婦人労働者の地位について検討し、経済および社会生活に対する婦人の貢献の総計を評価するため、先進国と発展途上国両方の女子および男子に関する統計その他のデータを集集し、分析するべきである。

資料 5 第七五国会 衆議院社会労働委員会 (一九七五年六月十三日)

厚生関係および労働関係の基本施設に関する件

(国際婦人年に際して婦人に関する諸問題について)

質問者 (質問順)

高橋 千寿 (自由民主党) 国家公務員採用試験、

週休二日制、家庭省の設置

金子 みつ (日本社会党) 世界行動計画と政府の

態度

田中美智子 (日本共産党・革新共同) 国際婦人年

の具体的政策、トルコ風呂、学童保育、保育所

栗田みどり (日本共産党・革新共同) 女子銀行員

の労働条件、賃金差別、職業病

岡本 富夫 (公明党) 審議会の女性委員、パート

タイマー、母子家庭、妻の年金権

和田 耕作 (民主社会党) パートタイマー。保育所

土井たか子 (日本社会党) 国際婦人年と政府の姿

勢、行動計画の国内行政具体案、保育所問題

●採用差別・余暇利用・家庭省設置

高橋千寿 国家公務員の最近の男女採用

人員の推移はどうなっているか。

小野武郎 (人事院任用局長) 上中初

各級合計で年間一万一〇〇〇人前後の採

用、女性はや二割で、一般職国家公務員

の男女比率と同じ数字になっている。

高橋 今年度の「国家公務員採用試験の

概要」では、応募資格が男子のみの職が

ほとんどで男女差別があると思うが。

小野 人事院は任命権者たる各官庁側の

受験資格設定にもとづき試験している。

高橋 政府はたびたび男女平等を明言し

ているが、女性には試験の機会すら与えられず窓口で排除されるのは、明らかな男女差別と思うが。

森山真弓 (労働省婦人少年局長) 国家

公務員の採用試験は国家公務員法、人事

院規則その他で男女差別がない建てま

と理解しているが、ご指摘の事実がある

とすれば労働省としては男女平等の見地

から問題があると考ええる。

高橋 今年度は応募資格を男子に限って

いる職種でも、女性に可能な仕事がある

と思うので来年度からでも窓口を開けて

ほしい。それから六月十一日の日経新聞

は「なお格差に泣く女子公務員」の見出

しで、女性の管理職が少ない、昇給昇格

が男は特急、女は鈍行で、質の高い仕事を

させず単純労働ばかりと指摘している。

いろいろと答弁されたが、男女差別は厳

存すると言わざるをえない。来年度から

はぜひ受験の窓口を女性に開くことを大

臣に確約して頂きたいが。

長谷川 労働 日本は働く女性は今一、

二〇〇万、その地位を高める機会をいろ

いろな場所につくるのが婦人年に対する

努めと思ひ努力してゆきたい。

高橋 大臣答弁の通り、来年度からの窓

口開放を再度要望する。次に週休二日制と余暇利用について。(以下略)

森山 婦人少年局の所管として働く婦人の家および勤労青少年ホームなどを、地方に対して補助金を出し、できるだけ多く増設するよう努力し、余暇の有効な活用が可能な施策を講じている。(以下略)

高橋 家庭生活関係の政府機関は総理府と文部・厚生・農村・通産・労働・建設の各省だが、国際婦人年を期し家庭省、家庭局、家庭生活総合研究所などを設置してはしいが。

長谷川労働 労働省は、労働者の家族問題の観点で婦人少年局が担当してきた。労働省に家庭局を設置するのは是非は別として、家庭問題を社会全体で考えるのは大事だから、よく研究したい。

高橋 ベルギー、オランダ、スウェーデン、ノルウェー、カナダ、西ドイツ、ルワンダなどでは家庭省が仕事をこなっている。他の関係とも話し合いの上、早急に実現の方向に運ぶように願う。

長谷川労働 皆さんのお話しを機に、家庭の大事なことを議論に出し、慎重に対処するようにしてゆきたいと思う。

高橋 先日社会労働委員会でも東北新幹線のトンネル工事現場を視察したが、女であることを理由にトンネル内に入れなかった。企業側は認めたが、現場労働者が拒否した。このように女性への偏見は根強い。解消のため政府の方々がみずから範をたれることを強くお願いする。

長谷川労働 女性だからトンネルに入れないのは、私にはどういう習慣なのか分らないが、女の地位の向上、平等に働くことには前向きな姿勢で取りくみたい。

●世界行動計画と政府の態度

金子みつ 世界婦人会議で議論予定の世界行動計画案の内容が、最近まで明示されなかった理由を聞きたい。

村上和夫 (外務省国連局参事官) 世界婦人会議関係の各省連絡協議会に国連からの資料到着が五月の半ばと遅れた。

金子 国連に責任を負わせているが、仮に五月到着としても、六月になって情報が流れたのはおかしい。行動計画の四四項「婦人は人口の半分を占めているにもかかわらず、ほとんどの国において政府の各種部門で指導的立場にある者の割合は小さい。従って婦人は政策決定に参加

しておらず、開発のための計画立案には婦人の意見及び必要は見すこざれることが多い」との勧告、日本政府はどのように受けとめ、具体的に進めるつもりか。

村上 世界婦人会議での行動計画の扱いを勘案、関係省庁と十分協議し、会議の趣旨にできるだけ沿う方向で対応する。

金子 つかみどころがなく理解しにくい、勧告どおりの実態が日本にあると思う。日本政府代表はこの問題をどういう考え方で討議するつもりか聞きたい。

村上 行動計画の考え方と現実のギャップに十分注意を払いながら、できるだけ行動計画に沿って今後前向きに検討してゆくというのが一般的考え方だ。

金子 外務省では婦人関係の国際条約、草案を作成中なので検討を進めるつもりと聞いたが、内容・目的などを聞きたい。

村上 世界婦人会議にどのような条約案が出てくるかわからないので、各国代表の具体的提案をみて対応してゆくのが日本政府代表団の考え方である。

金子 大変積極的で自主性も方針もないと思う。世界婦人会議に日本からの提案事項は何もないと先般説明を受けたが、

「何もないのではなく、できないのではなく。いかに。関連の婦人の地位委員会が女性差別撤廃宣言や国際婦人年をきめた。日本政府の婦人代表も何回か派遣されたが、形式的なおつき合ひの出席だったとも思える。婦人べつ視、差別のため婦人問題を真剣に考えなかった結果と考えるが、世界婦人会議に実情報告だけ、あるいは計画に賛成するだけで提案なしの実態を政府としてどう考えるか。」

村上 行動計画案作成の討議に日本政府代表が参画、日本の積極的意見が盛り込まれている。一〇年後にこの成果を評価、検討し、この一〇年の計画の具体的な措置ぶりを検討すべきことを会議で積極的に発言したい。

金子 行動計画案に日本の意見が積極的に入っているとの点には確証がなく、素直に納得できない。せめて日本経済の高度成長政策のひずみの婦人へのしわ寄せの実態を卒直に報告して、各国に失敗の警告として貢献することは考えないか。

村上 世界婦人会議は政治的宣伝の場ではなく、日本の実態を卒直に政府代表演説や資料で示し、各国の実情からも学ぶ

べき点は謙虚に学びたい。

金子 三木首相が日刊新聞の広告に出したアピールで婦人の地位向上への努力を表明したが、具体的には何なのか。雇用での採用・定年制・昇格昇給や年金など数限りない女性差別があるが。

久保田真苗（労働省婦人課長） 世界行動計画案が採択されたら、具体的計画を検討してゆきたい。婦人労働の差別については就業における男女平等に関する研究会を昨年から実施、ここで諸問題を逐次検討し、その結果を施策に反映させてい。

金子 首相のアピールに「日本婦人の声をこの国際会議に大きく反映していただきたい」とあるが、世界に誇れる実態がないのに何を期待するのか。

村上 日本の実情を卒直に各国代表に伝え、外国からも学ぶ態度のもとに国民の世論、考え方を各省協議会が吸収、対処方針を作成した。

金子 積極的に日本が提案・進行させようとの姿勢がないことは残念だ。総理府に設置予定の委員会で行動計画を真剣に討議する意見はあるのか。

宮川知雄（総理大臣官房参事官） 婦人行政は雇用は労働、母性保護は厚生、農村婦人の生活改善が農林、社会教育は文部、各省のタテ割り行政で現状に対応不能の面もあるので、両三年来総理府に各省連絡会議を設置したが、それ以外にも新しい時代に対処する方向を考えたい。

金子 各省連絡会ではなく、行動計画検討用の組織のことだ。大統領直轄の委員会を設置のアメリカや提案提出予定のイランなど各国の動きをみると、日本が婦人問題の後進国たることを痛感する。国際婦人年を契機に婦人問題を積極的にとり上げ、推進すること、前述の委員会の件とを強く要望する。（以下略）

●婦人年の具体的政策

田中美智子 日本の国際婦人年予算は、二、二〇〇万円で分譲アパート一戸分の金額にすぎない。六億円、八億円の予算を組んだ国、大統領や首相に直属の特別委員会を設置、男女差別撤廃の具体的方法を検討中の国々もある。イギリスでは五年前から男女同一賃金法案を作成、今年末を完全実施の終着点にした。日本は少額予算のリップサービスだが、産休の

大幅延長、出産給付のILO最低基準への引上げ、男女同一賃金法などの具体的計画について労相、厚相はいかが。

長谷川労相 国際婦人年予算は行事予算。各省の婦人関係予算を入れると各国に劣らぬと思うが、この機会に問題を改めて見直さなければと思う。労働省では労働基準法研究会等が研究中で、育児休業奨励金や寡婦等雇用奨励金を始めた。

田中厚相 ILO条約では出産費用の自己負担ゼロで日本の現状と乖離がある。当面は現金給付額を実勢に近づけたい。

田中 労基法研究は常に必要で、事新しい努力と言えない。育児休業の補助金は労働者に実解なしと理解する。労相答弁は具体的政策なしと受取る。

厚相答弁は多少前進的、来年度必ず実現を望む。高額医療対策の実施で、出産費は医療費中最大の個人負担となった。

一九七二年国連総会の国際婦人年決議以来、各国は準備を開始。日本は今年一月一日の発足を目前の七四年末に八省庁の婦人関係の課が各省連絡協議会をつくただけ。協議会の責任者はだれか。

森山 窓口、まとめ役は外務省。労働省

も一員として参加している。

田中 では責任者は外務省か。

森山 外務省ということになる。

田中 この連絡協議会の仕事や連絡は非常に不明確で、国会の超党派婦人議員懇談会が世界婦人会議への提案、提出資料を質問しても不得要領。八省庁からばらばらに八人が出席、五分間ぐらいずつ話すだけ。外務省が世話役に見えるので責任者かと思うと、あくまで窓口という。国内の婦人問題を総理府や労働省、厚生省が、対外的窓口は外務省でなく、全部外務省はおかしい。しかも連絡協議会では国内での政策方針は出てこない。婦人少年局長の責任と役割りは何か。

森山 関係各省連絡会議のメンバーは各省課長なので、私は直接出席していない。

田中 責任者のない連絡協議会という接触の実感が当たっていたのは嘆かわしい。世界へのPRはするが国の中で責任者がいないという政府の姿勢がはっきりした。行動計画の実施はどうするのか。外国に学んでからと外務省の大鷹氏は発言したが、二〇六項目の行動計画は世界全体を対象にしているから、日本に当て

はまらぬ面もあるが、当てはまるものも多い。今後一〇年間にいかに婦人の差別をなくし、婦人が社会の発展と平和に貢献する行動計画作成の意思はあるのか。

森山 行動計画案は大体そのまゝの線でまとまるだろうし、基本的に賛成なので日本の国情に即したものを作りたいが、具体的には未定。

田中 この行動計画はその国の政府の最低限の姿勢を示すものだが、それさえも未決定なことが非常にはっきりわかった。森山局長は具体的にやりたいと思うが、やれるかどうかかわからないということだ。婦人問題に関係の深い労相と厚相にお願いしたい。国民の立場からは政府は一つだから、各省庁が責任転嫁せず、労・厚両大臣は閣議に提案して行動計画と最高責任者を決定してほしい。それではじめて婦人の未来に少しずつだが展望が出てくる。首相のリップサービスだけで行動計画もないなら、欲求不満が蓄積して混乱を招く。両相の決意を聞きたい。長谷川労相 行動計画で、日本に合うもの、足りないものを集約しつつやりた

田中厚相 行動計画への日本政府の対応の詰めは不十分と反省している。政府部内に責任あるまとめ役をつくる方向でまとめよう努力したと考える。

●トルコ風呂対策

田中 言葉だけでなく、必ず実行して実のあるものにしてほしい。

売春防止法成立以来、公娼制度は一応消滅したが、トルコ風呂の売春は公然化されている。一九七三（昭和四八）年九月二六日付官報の「トルコ風呂営業の実態と対策」には、四九年度で約一、一七六軒のトルコ風呂があり、もぐりも入れると約二万人のトルコ嬢の月収が平均一〇〇万円で売春による収入である等々の事実が出ている。政府はどんな手を打つつもりか。トルコ経営者には暴力団も多しトルコ嬢にも暴力団のヒモ付きが多いと言われるが、厚相は実態を承知か。

田中厚相 予算委員会でも質問を受けたが、政府の取り組み方が不足と思う。トルコ風呂発生以前に制定の公衆浴場法では取締り不可能で、風俗営業法的規制が必要。関係省庁と精力的に協議する。

田中 売春対策審議会で四八年、四九年

と「関係機関の相互協議で法令の改正をすべき」との対総理府決議、要望が出た。総理府の対応姿勢は。

加山文男（総理大臣官房参事官） 一九七

四年七月四日の売春対策審議会では営業を許可しない方向で検討せよとの要望が出た審議会の世話役としては、法的問題、要検討事項の指摘等の連絡調整の段階を終り決意の段階と考える。

田中 実行時期はいつごろの予定か。

田中厚相 営業を許可しない、取消すことが法的に可能ならばしたいが、既存の許可の取扱い、衛生立法の公衆浴場法の運用等を法制的に掘り下げたい。

田中 二三の婦人団体で「売春問題と取り組む会」を一九七三年一月に結成、思想、信条を越えた婦人の要求だから、厚生省、総理府ともに当たってほしい。

●学童保育・保育所

田中 昨年厚相が国会で学童保育予算を三、五〇〇万円組んだが、大蔵省が切った。学童保育の請願は七二国会で採択され、紹介議員は自民を初め五党にわたる超党派だ。今国会にも請願が出た。来年度予算の予定を厚相、労相に聞きたい。

田中厚相 社会的ニードからも実現したい。予算要求を部内で精細に検討中。

長谷川芳相 学童保育は厚生省専管だが育児支援の予算は積極的に検討したい。

田中 大蔵省の方針はどうか。

梅沢節男（大蔵省主計官） 五〇年度予算編成の際は、国庫補助事業としては問題があるため厚生省とも協議し見送った。五一年度予算は所管省がこれから検討に入る時期で、大蔵省としてどう処置するか答えられる段階ではない。

田中 総理府の「婦人に関する諸問題の総合調査報告」でも、早急に学童保育事業に着手の要を指摘。大蔵省が厚生省、労働省の予算要求を切らないよう望む。最後に、保育所整備五か年計画が今年度で終るが五一年度以降の計画はあるか。

上村一（厚生省児童家庭局長） 計画は順調だが、需要の多い施設なので引き続き増設に努める。計画自体はまだだ。

田中 計画を早急につけてほしい。計画は順調というが、一九六七（五四二年）の要保護児童実態調査の小さい数字を基礎のためと思う。七二（五四七）年の要保護児童は二四二万人といわれるが、厚生省

は六七年以後未調査だ。やる予定は。
上村 働く婦人は非常に増加しているから、調査したい。

田中 ぜひ調査してほしい。前出の総理府の調査報告で、共働き家庭の主婦に「女性が職業を持つための条件で未整備のものは何か」との問いに対し、保育所の不備・不足四七・三％、給与の差別約三〇％の二項目の回答が飛び抜けて多い。働く婦人が特に苦しんでいる賃金差別と保育所不足の問題を、今後の行動計画の中にぜひ入れるよう要望する。

●労働条件・賃金差別・職業病

栗田みどり 銀行の女子行員の労働条件について。銀行資本は高度成長したが、行員数はあまりふえず男女とも労働条件は過酷。特に底辺の女子行員は母体保護面と男女同一労働同一賃金の権利面ともに問題が山積。まず法定時間外労働、いわゆる違法超過勤務がこの二年間に千葉興業銀行・横浜銀行・富士銀行山梨吉田支店など三一件が表面化しているが氷山の一角、この実態をどう考えるか。

東村金之助（労働省労働基準局長） その地方の企業の一リーダー格たる銀行に

そうした違反があるのは問題なので、労働者の申告、あるいは申告を待たず一斉に監督を実施等々の方法で法違反の絶滅を期している。さらに監督指導を強める。

栗田 具体例として駿河銀行の沼津、浜松、厚木、相模原、藤沢、小田原の支店の件はどう指導したか。

東村 細かい部分は不明だが、女子に一日二時間以上の時間外労働の労働基準法六一条違反を確認、是正を勧告、銀行からは正措置講じたとの報告を受けた。

時間外労働の労使協定のない件は、臨検、監督、是正勧告を行ない、即時に是正の返事があった。いずれ一斉監督で実態を確認したい。

栗田 是正回答後も違反の実態がある。

勧告後の指導が手ぬるいのでは。違反の申告をしても、労働基準監督署は予算の制約で夜間調査不能というが。

東村 夜間残業の違反にはその時間帯の監督が効果的だが、通常の時間帯でも労働組合や賃金台帳もあるので可能。だが夜間の監督が適切な場合は駿河銀行でも夜間監督をした。予算の件は努力したい。

栗田 五月二九日駿河銀行組合の申告に

静岡労基局藤沢課長は、予算の制約で臨検は昼間と応じた。

東村 夜間臨検不可欠ではないが、必要の場合もあり、予算面は努力したい。

栗田 臨検申請拒否は、基準局と銀行の結託ともみえるが。

長谷川芳相 書類ではよく臨検しており

結託不在と思うが、予算面は勉強したい。

栗田 勧告が出ても違法超過勤務は是正されぬのを反省すべきだ。女子の二時間以上超過禁止の理由は母性保護だが、違法超過勤務の対策を聞きたい。

森山 労基法の問題で労働基準局の管轄だが、婦人少年局も婦人の立場から違法超過解消を指導したい。

栗田 全国の銀行に差別賃金がある。静岡銀行で昨年四月一日に男女職能給の賃金差別が改正された経過はどうか。

東村 一九六八年三月導入の職能給の運営に男女差別があり、労働省が是正を要請、昨年実施と聞く。

栗田 名は職能給でも、性別を理由の昇格差別は男女差別賃金とみなすのか。

東村 一般論では、女を理由に係長にしないのは労基法三条関係だが、三条には

性差別はない。法違反でなく、好ましくない問題となる。昇格が賃金に直結の場合は男女同一賃金問題に結びつく。

栗田 静岡銀行の職務給表では、男女の昇格に明差があり、賃金は基本給プラス職務給で、昇格が賃金に直結。行政指導で昨年四月付の是正、二年週及で差額支給したが、男女無差別の賃金体系で支払うべきと思うが。

東村 昇給額の男女差は労基法四条違反、是正は過去にさかのぼるべきと思う。差別なき賃金体系が前提で、男女同一賃金違反の実績は、過去週及で是正が必要。栗田 静銀は一応是正の形だが、男女差別が残存（具体例を提示）。

東村 賃金体系全体は未把握だが、女性差別の存在は問題、検討したい。

栗田 さきの具体例は女子行員全体にあてはまる。実際の仕事内容は大差なく、小店舗では特にとの観点での行政指導だが、男女差が発生した。調査してほしい。調整金額の明細がないのもおかしい。

東村 男女差別の労基法違反は正の週及時点と形は難問もあるが検討したい。調整金の明細書の法的強制は不可能だが、

望ましいので事情を聞いてみたい。

栗田 法的根拠はないが、道義的には必要、常識的にやるべきとの答えと解釈してよいか。是正はしても支給額をなるべく抑え、賃金支出を減らそうとの銀行の態度をどう考えるか。

長谷川 労相 銀行はいま収益がよいので労基法抵触は嚴重に監査、是正を命令。明細の件は行員側も強く主張すべきだ。

栗田 大蔵省はどう考えるか。

宮本 保孝（大蔵省銀行課長） 大蔵省は労働問題に介入不能で中立的立場だが、違法が事実とすれば、労働法規も含め嚴重に注意・監督したい。

栗田 先の具体例は全員にあてはまる。

全員の調査・報告をほしい。静岡銀行は支店次長代理（男）の役付時間外手当の労働基準監督署支払い勧告と簡易裁判所支払い命令を受けたが、九月までの猶子を請求、義務的賃金支出の削減方針が暴露、これをどう見るか。

東村 労基法上の労働者の残業の割増し賃金の支払い勧告は当然。

栗田 静岡の労働基準局はなまぬるいの、しっかり指導してほしい。

女子行員に頸腕症候群患者が多発、静

銀は全国銀行中最多。三、三六三名中七〇名、内二二名は業務上の疾病の認定を受けた。その上女子の二四・一％が筋肉に異常だが、労働省の実態把握と見解は。

東村 新しい職業性疾病の頸腕症候群が銀行以外でも発症、二一名の業務上疾病の認定の事実を知っている。

栗田 非常にゆゆしい事態と考えるか。

東村 重度、軽度あり一概に言えぬが、一銀行で多発は問題で、他職場にもあるので、労働衛生行政の重点問題と考える。

栗田 真に重点として対処できるよう、さらに実情を公表する。患者の桜井さんの「自己意見書」では、徴候発生後二〇時ごろまでの違法超勤はしばしば、治療目的の欠勤を銀行側が一喝、故意に忙しい支店へ配転、自宅持ち帰り作業が深夜三時に及び、はしが持てなくなった。

治療なしでは手の機能は絶望的との診断で通院治療を申し出たが、銀行は遅刻を認めず、特別に早期診療を受け、その上の多少の遅刻は超勤と相殺された。両親の再三の要請でやっと東大病院の診察の許可を受け、重症の診断だったが、銀行

はこのとき人事部長名の「一部特殊病者の願書に関する件」で患者たちの主張は職業病の名で企業補償を要求する特殊団体と同一の発想ときめつけた。

長谷川労相 個別的内情が不明なので、お話を承ったことにしてはしい。

栗田 私が話した範囲内ではどうか。

長谷川労相 労務管理が前向きでないと感じる。りっぱな労務管理が働く諸君の健康を守り、企業のためにもなると思う。

栗田 一九六四年四月に「会計機オペレーター」の管理」通達が出たが、銀行は職業病を否定、人事部長は女子行員各位殿として、自分たちで気をつける、節制し健康保持に留意すれば大丈夫と告げた。

東村 この種の新しい職業性疾病は早期の発見、治療が大切と思う。銀行の通達の性質は不明だが、可能な限り発生しないような条件の整備と早期発見・治療が基本的姿勢と考える。

栗田 労災認定者が賃下げされ、九名が是正を申告、七名だけ認定、二名は未是正。組合と「公傷病期間中の昇給及び勤続年数算定の不利益取扱いせず」の協定があるが、是正者も遡及は二年間だけだ。

東村 二名の未是正、遡及二年のみは労使間の協定の問題と思う。男女同一賃金などの問題とのかかわりでなく、その協定の精神に基づく運用が適当と思う。

栗田 誤解がある。二名は未是正、是正者も遡及期間二年のみの点だが。

東村 いずれにせよ労使間協定の適用の問題。時効の関係で二年になる。

栗田 たしかに協定には二年間との条項はない。それでも二年間になるのは問題。今年四月に患者と家族四〇名が銀行に面談を求め、拒否される事態で、労使間の話し合いは不成立だ。銀行資本の労務管理は婦人保護の立場からも問題だが。

森山 いまの具体例は大変参考になった。事実なら問題だ。銀行以外でも婦人は不利な条件をかぶる現実があり残念。法違反は労働基準局所管だが、婦人少年局も側面的に勤労婦人の福祉の啓発指導に努力すべきと考えた。

長谷川労相 銀行では労働時間中心の問題が多いのでそれを監督指導し、法違反は厳正な措置を講じたい。

栗田 国際婦人年で婦人問題の集中審議が実現したが、婦人年終了後も婦人労働

問題、婦人問題一般に注目し、婦人の犠牲や不当な差別を排除してゆきたい。労働省・厚生省の徹底的指導を要請する。

●審議会への女性の参加

岡本富夫 公明党は婦人議員がいないので代わって質問する。国際婦人年を契機に婦人の地位向上への政府の決意は。

長谷川労相 日本は女性人口の方が多く、勤労婦人は一、二〇〇万人とも聞く。国際婦人年のことは婦人参政権三〇年でもあり婦人問題の回顧と将来の基礎構築とが有意義との姿勢で対処してゆきたい。

田中厚相 国際婦人年の三テーゼの着実な実施は当然だが、基本的には男女の平等と女性独特の肉体的または生活上の問題にきめ細かく配慮、具体的施策を充実強化する方向で進むべきだ。婦人年は非常によい機会と考える。

岡本 国家行政組織法第八条による審議会、協議会の性格、女性の参加状況を行政管理庁に聞きたい。

山本貞雄（行政管理局行政管理局管理官）審議会の人選は所管ではないが二四六の審議会中約三〇強に女性委員がいる。

岡本 労働省の審議会はどうか。

長谷川労相 労働本省の審議会一四、婦人参加は六。全審議会の委員総数二二三名、婦人は一五名、六・五％。労働省の場合、公益、使用者、労働側の三者構成で、推せん母体の意向もあり、女性はなかなか入らない。私の方は婦人委員の実現に特別の関心を持っている。

岡本 特別に関心ある労働省でも人員の六％とは。私の調査でも中央家内労働委員会一八名中二名、中央労働基準審議会二一名中一名、労働者災害補償保険審議会一八名中ゼロ、じん肺審議会一八名中ゼロ、中央最低賃金審議会二二名中ゼロ、勤労者財産形成審議会二〇名中ゼロ、失業対策事業賃金審議会五名中ゼロと少ない。女性の意見の行政への反映が非常に少ないと言える。きょうを契機に女性参加の方向に改めるべきだ。

長谷川労相 人数以外に適任者も大切。婦人少年問題審議会は二四名中九名が女性だ。前向きな姿勢を理解してほしい。岡本 婦人問題が主の婦人少年問題審議会でさえ半数以下、もつと考えるべきだ。

厚生省の審議会二四の委員総数七八名中女性は一三〇名で四・一％、人口問題

審議会も女性ゼロ、厚相は婦人の意見を聞かぬつもりか。

田中厚相 事実少ない。女性委員の比率を高めたい。適任者の推挙を願いたい。

岡本 適任者の推挙要請と逃げてはだめ。女性の意見を聞く気が大臣になければ担当局もやらない。もう一度はつきり答えてほしい。

田中 できるだけ女性委員をふやす。

岡本 (外資系航空会社と関連下請企業との問題は省略)

●パートタイマー

岡本 最近パートタイマーの女性が多いが、職場獲得や賃金についての考えは。

長谷川労相 不況のしわよせがまずパートタイマーに來ていることは憂慮。家計補助の主婦以外に母子家庭の場合もあり職業あつせんや再就職など具体的施策を考慮している。

遠藤(職業安定局長) パートタイマー

は多種多様だが全般的に求職増加が、求人減少の傾向で両者接近、求人がを求職上回る。不況のしわよせがないよう行政指導と職場確得に努力中。

岡本 パートタイマーの実情調査では夫

の残業手当減とローン支払い、母子家庭などの理由で働いているが、一日六時間月間二二日労働で、フルタイマーと大差ない。低賃金で昇給不明確、賞与・退職金なし、労働省の指導が必要と思うが。

長谷川労相 フルタイマー同様の場合は雇用保険等々の工夫による善処を研究。

岡本 生理・妊娠・出産の休暇、手当、賃金はフルタイマーに接近すべきこと、健康保険、厚生年金、失業保険の適用が少ないことへの対策は。

森山 フルタイマーに比し労働時間がやや短かいだけで、婦人労働者として全く同じ立場で、特に保護面では労働基準法の適用も全く同じだ。他の福祉政策も不利にならぬよう指導してゆきたい。

岡本 調査状況と対処方針を具体的に。

森山 パートタイマー発生期の昭和四〇年代初期、婦人労働の立場から何回か調査して、働く状況は他の婦人労働者と変わらぬことを把握、前述の政策をとった。岡本 雇用条件不安定で就業規則なしの企業が多いが。

東村 常時一〇人以上の労働者を使用する事業場は就業規則が必要。全体の四分

の一角がパートタイマー独自のものが、一般労働者用の準用もかなりある。就業規則届出の際、パートタイマーの労働条件を就業規則に明記させるよう指導中。

る。労働省では今年から母子家庭の寡婦の就職の場合、事業主に毎月九〇〇〇円づつ一年間支出、寡婦就職奨励措置をとっている。最初なので金額は少ないが、呼び水たることを期待。公明党提案は寡婦雇用率を法定しているが、一挙には無理だ。きめ細かい政策の継続が大事だ。

年金の半額と低額だから改善との答弁が当委員会ではたびたびあったというが。

東村 労働省調査では、独自の就業規則二五・五%、一般労働者の準用四五・二%、残り約二九・四%は不明確なので指導中。

岡本 一般企業では無理、官公庁や三公社五現業から推進するのは不可能ではないと思うが。

岡本 大蔵省に値切られずにやるとはつきり答弁してはどうか。

岡本 私の調査では安易な首切りがある。国際婦人年を契機に強力な施策を要求したい。

長谷川 身体障害者の雇用率の場合も困難に直面。法律があっても守られねば無意味。きめ細かいPRで社会連帯のムードを推進したいと考える。

岡本 妻の年金権保障は離婚で失なうが、結婚期間が長い場合は不合理、この改正は。

長谷川 労働省 大事なときなので、きめ細かい指導、助成を続けたい。

岡本 やはり法律によらねば無理。母子家庭の六三・五%は年間所得六〇万未満。適切な対策が必要だ。

曾根田 都夫(厚生省年金課長) 離婚の場合にはたしかに問題。被用者の妻の国民年金への任意加入の問題、各被用者年金共通問題でもあり早急な結論は困難だが、来年度の検討項目の一つと考え、十分検討したい。関連問題が多く、時間を要するが。

●母子家庭

岡本 母子家庭の実情については。

岡本 二〇代、三〇代の若い寡婦が多い。前向きな態度がほしいが。

森山 労働省調査は労災による寡婦が対象で、それ以外は把握していない。

長谷川 労働省 労災の母子家庭、交通事故によるものと把握が困難だが、期待に沿うよう勉強してゆきたい。

岡本 夫の収入や財産の八〇%は妻の内助の功との説もあり、離婚後も年金権はあると考える。特に夫の不貞による離婚

岡本 労働省では全部把握していない。公明党は「母子家庭の母等の雇用の促進に関する特別措置法案」を提案した。大臣の見解は。

長谷川 労働省 公明党の提案は見た。労災による母子家庭以外に厚生省関係のものあ

長谷川 労働省 公明党の提案は見た。労災による母子家庭以外に厚生省関係のものあ

岡本 厚生年金の遺族給付額が現行老令

岡本 夫の収入や財産の八〇%は妻の内助の功との説もあり、離婚後も年金権はあると考える。特に夫の不貞による離婚

でも年金権を失なうのは問題。検討中とすることなので終る。(以下略)

●不況と女性

和田耕作 不況で婦人労働は苦しい状況だが、政府の基本態度は。

長谷川労相 職安や労働機関を通じて企業側に頼み、雇用調整給付金も活用。パートタイマーにも雇用保険法も適用し親切な行政をしてゆく姿勢だ。

和田 歳入欠陥と聞くが、労働省や厚生省の計画への大蔵省の見解は。

梅沢節男(大蔵省主計官) 五〇年度の財政執行も厳しい様相で、五一年度の財政見通しを言える段階ではない。

和田 いかん財政が苦しくても、婦人の地位等を守るための施策は後退させない決意が一番大事と思うが。

長谷川労相 まず失業者を出さぬと同時に雇用保険法の雇用調整給付金や勤労婦人のホームやセンターの充実で、子の保育が可能な積極的姿勢をとる。パートタイマーも含めたきめ細かい職安行政を。

和田 パートタイマーは婦人労働中、大きな役割だ。労働状況中のウエイトは、遠藤政夫(労働省職業安定局長) 労働

力調査によると週三五時間以内の短時間雇用者は、四九年平均で全雇用者三六一〇万人中三〇六万、八・五%(四八年は七・九%)。

和田 化粧品下請工場の主婦パート六〇名が、最近十名になった実例がある。正確で大規模な実態調査が必要だ。

遠藤 三〇六万人中一八六万が女性だが雇用計画の一環として調査は必要。勸続年数は長いがパートタイマーなので真つ先に失業し、失業保険もない例については常用労働者に準ずる保護に努めたい。週三五時間以上の場合雇用保険法が適用される。

和田 現在の婦人少年室の人員は。

森山 婦人少年局の職員は本省六四人、地方一七八人、合計二四二人。

和田 婦人労働、パートタイマーの実態調査の担当部局は。

森山 労働力調査は総理府統計局、パートタイマーの特別問題調査は婦人少年局の職員及び調査員である。

和田 いまの法的保護水準が低成長下で維持できるか。

遠藤 失業パートタイマー中約四〇万が

家庭で無業化。その他製造業から三次産業への移動もある。高度成長時代と違う雇用計画が必要。

和田 婦人の地位向上には職業をもつことが必要だが、不景気で失業が予想される。婦人労働への労働省の基本姿勢が事務的処理にみえるが。

長谷川労相 世界行動計画をみると国ごとに特徴がある。日本が伸びた一因は日本の婦人の職場進出が大きい。バイタリティある婦人の進出を望む。

子の成長後の再就職の問題は、育児期間のライセンス取得や雇用保険による訓練の雰囲気助成などが大切と思う。

和田 国際婦人年で高揚強調すべき点は婦人の地位向上が主眼だが、高度成長期の職場が脅かされている現状、雇用保険が適用されても半年間。労相の強い決意表明が必要。年金や職場の性差別も大切だが、その前に婦人労働の実態調査が必要と思うが。

森山 必要と思う。無業化した婦人の家庭、職場、生活全体の小規模な実態調査に早急に着手の予定。

和田 今後の婦人の地位を守るため大規

模な調査により基礎材料作成の決意は。
長谷川 労働 将来の展望のため、おっしゃるようなものをしてみたい気持。

●保育所計画

和田 保育所の五か年計画が終るが、今後の長期的計画の決意は。

田中厚相 次の五か年計画による増設が必要と考え、検討中。

和田 事業所内保育所は問題がある。事業所に保育費用分担金を出させ、地域保育所の費用にすることは。

上村 よい意見だが複雑な事情が生じ困難。事業所内保育所への補助金支払や保母研修会への参加などは実施。

和田 事業所に地域保育所の費用を支出させると、婦人雇用が減ることもあるが、それは別の問題として対処し、実行すべきではないか。

上村 住居と事業所が同じ町の場合、事業所の地方税負担額が大きい場合などはいろいろ問題が生ずる。

和田 社会福祉のレベル維持が困難な事態、婦人労働者の福祉を後退させず前進させる決意が必要。婦人労働者の実態調査と保育所計画とを見直してほしい。

●国際婦人年と行動計画の具体策

土井 土井 政府の国際婦人年理解は。

田中厚相 単なる男女平等ではなく社会上の制約についてきめ細かい配慮ある平等を確立すべきと信じる。

土井 国際婦人年の関係各省庁連絡協議会の中心はどうか。

宮川 知雄 (総理大臣官房参事官) 外務省国連局を中心に労働省がサポート。

土井 統括は外務省か。

宮川 外務省国連局の肝いりで外務省の場所を使って会議。

土井 行動計画実行の具体的な中心は。

宮川 連絡会議の座長、議長は国連局の参事官。

土井 協議会の運営ではなく、行動計画具体化の政府レベルの中心は。

宮川 婦人関係の行政機関は各省にわたっているの、世界会議とは別に各省の婦人問題の担当者による連絡会議があるが、世界会議は特別に連絡会議を別に設け、国連局参事官を議長にした。行動計画実行の中心を従前の連絡会議ですますか、新しいものを必要とするか、至急考えてゆきたい。

土井 従前のものか、新しいものを作るかはこれからの問題というが、世界会議はこの十九日に始まる。

宮川 世界会議に臨むため世界行動計画案をもとに外務省、労働省を中心に各省で打ち合わせ中で未対処ではない。今後の国内の実施方法は至急検討したい。

土井 常に婦人の立場に立って考えていないことが非常によくわかる。国民の半数または半数以上は婦人だ。各国は、世界会議に民間人の立場の婦人問題取組みに苦心したが、日本政府の努力は。

田中 政府全体の取組みの甘さを自認。事務的対応で、国際婦人年の主要目的への根本的対応は未だしと思う。その反省のもとに行動計画への対応体制を十分検討、一元的受け皿を設けるべきだ。各省にわたって政策の前進は望めないことを本日委員会でも痛感。この委員会の一大収穫と認識する。

土井 四七年五月に婦人に関する諸問題会議を設置、報告書を出し「婦人関係行政調査機関の連絡調整の強化」の項で「わが国の行政組織は一般に縦割行政で横の連絡調整が不十分」と指摘されてきた。

今回の職業を主題の調査の過程でも縦割行政故に問題解決が遅れたのではないかと疑問にぶつかったことも多い。例えば児童保育についても厚、文、労三省の連携がなかなか進まないように思われた。女性の職業の問題の解決には省の壁を破る画期的施策の推進が必要。このため今回の調査で明らかにした問題の解決ないし提言の実施を促進し、新しい情勢に対応して行政に問題提起するための民間有識者によるフォローアップ機関設置の必要がある」とのべた。これが婦人問題懇談会の設置にいかにか生かされたか。

宮川 懇談会のメンバーで問題箇所は話題になっている。至急検討したい。

土井 今年ももう半分過ぎてしまった。外務省国連局社会課の文書「国内レベルでの活動計画」では、「内外婦人問題有識者による巡回講演」「記念コンテスト」「啓発活動ほか」とあるが感想は。

宮川 国際会議も盛大、国内の記念行事もあり、男性一般の啓発としても有意義。土井 それを聞き、一〇年計画に期待できないと実感。いろいろな婦人の中の実際の動きを吸い上げ、それを行政レベル

の中で生かす努力はどこにあるか。一方の宣伝とお祭りだ。

田中厚相 労働省の計画の論評は避けたいが、もつとしっかりした態度が政府全体に必要と思う。

宮川 わが国の婦人の立場はよくないと思うが、国際婦人年をきっかけの各省連携の行事、施策は、婦人の地位向上、男女平等に有意義と思う。

土井 行動計画の政府の青写真は。

宮川 懇談会の意向を聞き、早急に検討。土井 早急というが、いつごろか。

宮川 国際婦人年を契機に腰を据える。年が変わらぬうちに至急考える。

土井 その発言にがっかり。全国女性の注目を念頭に新規まき直しぐらいのつもりで取組んでほしい。さきほどの報告書で女性が特に望む施設、施策は何か。

宮川 記憶力悪く失念。いま読む。

土井 時間がないし、心もたないの言う。全国の一八才以上の女性中無作為抽出の二万人は保育所をもつとも熱望。四六年からの保育所五か年計画の進行は。上村 計画より若干テンポ速く進行中。

土井 数字の上はそうだが、婦人の期待

に十分こたえていると思うか。

田中厚相 計画立案後のニード増による今後の施策が必要と思う。

土井 新五か年計画は。

上村 五一年度からの計画はまだない。

新しいニードを実態調査したい。計画は別に保育所建設に努力したいと考える。

土井 自治体は超過負担にあえぎ、保育所不足は続くが、壁を破る道は。

田中厚相 超過負担以外に、政府部内の保育観も問題。外国では社会的労働のための保育要請と同じに、家庭婦人は家庭へ帰れとのレジデンシャルリズムとの二潮流がある。日本にもその議論がある。私は、日本は「家庭に帰れ」の状況でなく、保育の必要は増し、これに対応すべきと思う。この点のコンセンサスが一番の難点。

土井 コンセンサスも大事だが、予算の組方が非現実的。実際の建設費用とのギャップが、物価上昇とともに拡大。これを念頭に保育所問題に意欲的に取組んでほしい。大蔵省は補助金の中身を社会保障として一括して考えるはずだが、保育所問題への大蔵省の関心は。

田中厚相(財政当局退席のため代理答弁)

単価問題は相当改善し実勢に近づいたが基準面積が狭く、あるべき姿にする自治体の超過負担となる。門欄、塀など補助対象も同様。総予算の範囲内での調整は施策数減となるので、予算計上に財政当局の理解ある配慮を求める。

土井 国定の保育料については。

上村 親の負担能力に応じ、被保護世帯住民税非課税世帯は無料。高所得階層は保育単価相当額を徴収、五〇年度は地域差はあるが、四才以上児約一万五〇〇〇円、三才未満児約三万六〇〇〇円。

土井 共働きで三才未満児二名の場合、母の賃金の大半は保育料に消える。保育料を所得税の控除対象にできないか。

水野勝（大蔵省主税企画官） 共かせぎの苦勞は分かるが、同一収入世帯では二人で働く方が税負担は安い。各人に控除、累進税率適用のため。税控除対象は保育料以外に教育費にも要望があり、一般的控除、一般的課税最低限内の対処が税制として妥当と考え、四九年五〇年と扶養控除を中心に諸控除と給与所得控除を大幅に引き上げる改正をした。

土井 大蔵委員会でも再三再四討議され

たのは、やむにやまれぬ強力な要求と思う。控除対象にする余地はないか。

水野 個別的支出の控除認定は、豪雪地帯や高価地域などの問題もあり大変むずかしいので、なお検討してゆきたい。

土井 検討するばかりでなく、そうした問題を国内行動計画の中に組んで、思いきった施策を行政サイドで進めなければ何のための一〇年計画かと言いたい。大蔵省の答弁を議事録で見ると、むずかしいの一点ばり。もう少し押すと検討するの一点ばりで、具体的に何も出て来ず、がっかりする。婦人問題の施策はいままでいろいろな場面で、この繰り返しだった。一〇年計画を具体的行動として示せと言いたい。そのため真に行動できる組織づくりに取組み、「検討する」ではなく、真剣にこの問題を取りあげ、できないなら、なぜかを分けるようにはつきりさせ、できるなら、できる限りの努力をして具体的にやるところまで持ってゆかねば、何のための討議かと私は言いたい。今後一〇年間の国内行動の指針を明確にしてほしい。六月一九日からの国際会議の代表団は行政レベルの人選で、広く民間か

らの起用は考えられなかった。婦人議員は名は顧問団だが随行者で、傍聴権はあるが発言の機会なく、聞いて帰るだけだ。

世界行動計画一九項に「婦人の地位は社会、文化、地域により広い格差がありおのずから必要とするもの、問題点も異ってくる。従って個々の国は独自の国内戦略を策定し、本計画の中から目標と優先順位を決定すべきである」とあるが、日本として何を一番先になすべき問題と考えるか。何を優先的に取りあげたいか。

宮川 総理府の担当者としてはまず平等問題からと考えるが、国際会議後に政府代表や懇談会の意見を聞いて決める。

土井 もちろん民間人も大いに起用して平等の趣旨を具体的に徹底できる組織構成が考えられるのか確認したい。

宮川 懇談会も民間有識者で、当然民間有識者中心になる。

土井 政府任命の民間人の顔ぶれは一定。従来の任用方法を改め、広く人材を集める努力を要求したい。具体的には各党・民間団体・活動団体の推せんなど、方法はいろいろある。（サッカリン問題は省略）（参議院の討議は次号に掲載）

■ トリビューン資料 (リーフとパンフレット) 目録 2 ■

② Association Marocaine de Planification Familiale	アフリカの家族計画	リーフ
③ The IPPF and the World Population Conference 1974	国際家族計画連盟と1974年の人口会議	〃
④ Family Planning and the Status of Women IPPF Bibliography New Series No.26	家族計画と女性の地位に関する資料のリスト	パンフ
⑤ International Family Planning Digest	家族計画に関する国際情報	〃
⑥ Family Planning	社会福祉からみた家族計画のガイドブック	〃
⑦ IPPF news	家族計画	リーフ
⑧ ?Qué es la IPPF?	IPPFとは何か	〃
⑨ El Fondo Victor-Bostrom para la Federation internacional de paternidad planificada	家族計画と女子労働	パンフ
⑩ Danza y contradanza en Bucarest	人口問題	〃
⑪ Media Humanidad	家族計画	〃
⑫ Explosion Demografica Crisis Mundial	世界的人口危機の問題	〃
⑬ Recommendations of the Working Group of Health, Nutrition and Family Planning	健康, 栄養, 家族計画促進グループの勧告	〃
⑭ Fundacion para Estudios de la Poblacion A.C.	F.E.P.A.C (人口問題研究ピラ所) の	リーフ
⑮ Centros de Planification Familiar de Fepac en la Republica Mexicana	メキシコにおける人口分布図	パンフ
⑯ Early Atraumatic Termination of Pregnancy—A Medical Protocol	早期中絶の医学的説明	〃

IV 女性の健康について

① International Planned Parenthood Federation Medical Bulletin	IPPFの医学報告書	パンフ
② About the National Women's Health Coalition	婦人の健康管理センターに関してグループの紹介	リーフ
③ Feminist Women's Health Centers	フェミニスト健康管理センター	〃
④ Every You've always wanted to know about Chromosome Damage	遺伝子について (医学関係)	〃
⑤ A Bortion: Why religions organization in U.S. want to keep it legal	避妊を認める宗教	〃
⑥ Catholics for a Free Choice	カソリックの避妊同意説	〃
⑦ Catholics for a Free Choice (regards Contraception and pregnancy)	カソリックの避妊運動	〃
⑧ Introduction à la Contraception	避妊の方法	〃
⑨ La Femme Travailleuse en URSS	ソ連の女性労働者	パンフ
⑩ Chemical Use/Abuse and Female Reproductive System	女性の生殖器に対する薬品公害	〃
⑪ The Self Help Clinic	健康の自己管理方法	〃
⑫ Breast Self-Examination	乳ガンの自己診断法	〃
⑬ Pamphlet on Contraception, Abortion, Medical term's Glossary for Women	婦人科医学用語の解説	〃
⑭ Circle One—A Women's Beginning Guide to Self Health and Sexually	女性の健康自己管理方法	〃
⑮ National Women's Health Coalition	婦人科の医学用語	リーフ
⑯ The Right to Health—A Women's Manifesto	婦人科の医学用語と相談	〃

■ トリビューン資料（リーフとパンフレット） 目録 1 ■

I トリビューン			
原 題	内 容	備考	
① International Proclamation of the Women of the World XXI Century	21世紀世界婦人宣言	リーフ	
② TRIBUNA	トリビューンプログラム	パンフ	
③ Pautas para la Asignacion de Salas en el Centro Medico	トリビューン分科会	リーフ	
II 婦人運動			
① The W. E. A. L. Washington Report	女性平等運動連合（女性問題の相談及び援助'75年立法提案のすべてのリスト）	リーフ	
② Had Enough Feminist Rhetoric?	女性平等運動連合の説明	ク	
③ Open Letters to the Participants in the World Conference of the International Women's Year	国際会議参加者に対する宣言	パンフ	
④ The American Salesman	女性のための発言研究会のアピール	リーフ	
⑤ Breaking Barriers Through Speech	女性のための発言研究会の説明	ク	
⑥ Coalition of 100 Black Women	黒人女性運動	ク	
⑦ Marriage, Divorce and the Family	結婚, 離婚, 家族	機関紙	
⑧ "Prime Time" For the Liberation of Women in the Prime of Life.	アメリカ月刊誌ブライムタイム（フェミニスト）	月刊誌	
⑨ Liberating and Developing Women	経済発展における女性(論文)	パンフ	
⑩ Urban Living Group	都市生活と女性の関係	ク	
⑪ Identity:Female,First Multi-media Women's Studies Program	女性教育の展望のカリキュラム紹介	ク	
⑫ Identity; Female	女性教育の展望	ク	
⑬ Ting Ling Purged Feminist	丁玲の伝記	ク	
⑭ The Women's Movement in Modern Japan	日本における婦人運動	ク	
⑮ Boserup, Ester; Integration of women in development	婦人運動, 発展の集大成	パンフ	
⑯ Los Pueblos Vol.2, No.2, 1975	国際婦人年特集号	雑誌	
⑰ Report of Group V on Organizations Related to Women in Development	婦人運動の組織に関するレポート	パンフ	
⑱ A Resource for Women's Organizations	婦人組織運営の方法	リーフ	
⑲ La Contribution de l'Economic Familiale a l'Evolution de la Femme	婦人の向上に対する家庭経済の寄与	ク	
⑳ Education Workshop	女性の教育について	パンフ	
㉑ Servas	グループ紹介文	リーフ	
㉒ Women's History Library	女性史に関する資料目録	パンフ	
㉓ Onna Kaiho	おんな解放	ク	
㉔ Law, Population and the Status of Women	法律, 人口及び女性の地位	ク	
㉕ Año Internacional de la Mujer	国際婦人年の案内	ク	
III 家族計画, 人口問題			
① Motherhood is Optional or is it?	“ノン”子どもを産まない運動	リーフ	

■ トリビューン資料 (リーフとパンフレット) 目録 3 ■

V 宗教関係		
① Igualdad del Hombre y la Mujer	男女平等	リーフ
② Basic Facts of Baha'i Faith	バハイ教の説明	〃
③ L'egalité de l'homme et de la femme : Une réalité nouvelle	男女平等, 新しい現実, バハイ教	〃
④ The Baha'i International Community and the U.N.	バハイ国際委員会と国連	〃
⑤ The Muslim Community Center, Chicago Illinois	マズラム教	〃
⑥ Know the M.S.A.	イスラム教	〃
⑦ ISLAM	マズレム教の紹介	〃
VI その他		
① Servicio Nacional Femenino de Accion Social	社会活動に対する婦人の参加 (メキシコ国防省)	パンフ
② Equality and Development	平等と発展 (アメリカ代表団の視点)	〃
③ UNICEF's statement to the IWY's Conference	国際婦人会議へのユニセフからの発言	〃
④ The Next Step : The Implementation of Programs Integrating Women into National Development	経済発展における女性参加	〃
⑤ Documents and Information For the Defence of Human Rights	人権宣言の資料 (国際民主婦人連盟)	〃
⑥ People	人口問題雑誌について	〃
⑦ Breaking Barriers Through Speech	表現能力を開発するための研修会の報告	リーフ
⑧ Movimento de Promacao Humana de Brasil	ブラジルの人間解放運動	パンフ
⑨ A Model For : Aid from Developed Countries Non-Governmental Organizations to Developing Countries	先進国民間企業による発展途上国への援助計画	〃
⑩ Have a Heart—Political Prisoners in USSR	ソ連における政治犯	〃
⑪ Poster-Planned Parenthood	家族計画	リーフ
⑫ Cuba-75	キューバのリーフレット	〃
⑬ Ley de la Maternidad de la Trabajadora	働く妊産婦に関する法律	パンフ
⑭ Año Internacional de la Mujer	メキシコバイブル協会の婦人年のアピール	〃
⑮ Boletin de la FEPAC	メキシコの雑誌	雑誌
⑯ Cooperation Canada 18	国際婦人年特集カナダの一般雑誌	〃
⑰ La Femme Travailleuse en USSR	ソ連の婦人労働者	パンフ
⑱ La education social de los niños en la USSR	ソ連の幼児社会教育	〃
⑲ Alice doesn't, on National Women's Strike Day	ナウのリーフレット 1975年10月29日全国婦人ストライキデーのアピール	リーフ
⑳ Servas	セルヴァスの広告	〃
㉑ Edificando La Paz—SERVAS	世界平和	パンフ
●コピーまたはほん訳ご希望の方はお申し出ください。実費でお頒ちします。		
申込先 : 〒160 東京都新宿区新宿1-9-6<あごら><トリビューン資料係>		

【あごらの施設利用ご案内】

事務局 東京都新宿区新宿1丁目9番6号 平倉ビル2階 〒160 TEL354=3941

※読書室「あごら」

●場所 事務局に同じ 約25平方メートルの読書兼集会室です。いす40席あり。

TEL354=9014

●利用時間と使用料 月～金 午前9時半～午後6時開室（読書、原稿書き、待ち合せ、小集会にご利用ください）1人2時間まで100円（お茶つき）なお集会の場合は月～金、午後6時～10時 および土、日 午前10時～午後10時も利用できます。ただし予約制。土、日は特別料金（1人2時間まで200円）となります。

●複写機、映写機等も利用できます。

●貸ロッカーあり。月額1,000円

※創造銀行（BOC＝バンク・オブ・クリエイティビティ）創造力、労力、特技等を預託、利用希望者に貸しつけるシステムで、企画、調査、編集、校正、印刷等の実務のほか、「赤ちゃんをあやす」「やりくり上手」など、いろいろな能力が預託されています。

【編集後記】 不況を理由に、まず女のパートから首切りが始まり、女子の学卒は空前の就職難、母子心中など暗い報道は、あとを絶ちません。おしきせの国際婦人年でなく、私たち自身の国際婦人年を！ 私たち自身の問題を反映させなくては！！

国際婦人年のありかたをめぐって白熱する論議は、またも女の分断を生む危険も内包していますが、だからこそ、慎重に、賢明に、選択したい。"男なみ"ではなく、"人間らしく"を目指して、いまこそ私たちの知恵と力を結集しましょう。資料がその役に立つことを祈ります。（千）

あごら12号の編集と編集協力者（イラスト・新聞切抜等をふくむ）

浅野美和子 飯島恵子 大橋倫子 川上正子 北村美恵子 黒沢照代 後藤多見 斎藤 涼
坂井桂子 真田房枝 下田千枝子 隅谷しげ子 高橋ますみ 塚本和子 中村肇子
永松三恵子 根井はる 萩原洋子 氷上喜久子 日置久子 平岡ふき子 マウア、エリザベス
宮前澄子 村上啓子 榎山幸子 安江とも子 山岸汐子 山口里子 山崎美沙子 吉野由喜子
若林高子 若山玲子

〈あごら〉12号 1975年10月25日発行 本文 上質 A44.5kg 表紙 アートポスト菊判125kg

●発行所 BOC出版部〈あごら〉〒160 東京都新宿区新宿1-9-6 振替 東京 05264（あごら編集部）

●発行人 斎藤千代 ●印刷者 永井芳江

AGORAは、古代ギリシアの市民の「ひろば」。市民は、このAGORAでだれでも自由に語り合い、買物をし、そこから、民主主義が生れたといえます。

私たちの「あごら」は、小さな「せまば」にすぎず、まだ力弱い存在ですが、女の問題を中心に、考えあうよすがにしたいと思います。ご参加を、心からお待ちしています。

〔あごらの生いたち〕

働く女が、職種、賃金その他で受ける差別を解決したい… 家庭と職業の両立は困難だが、助けあう方法を考えよう… 家庭に潜在する女性の能力の社会参加の方法を考えよう……

「あごら」を生み出した母体BOCは、1964年、このような目的のために、ボランティア活動をすることをこころぎして生まれました。

以来10年、問題を解決する方法をさぐろうとするたびに、婦人問題の根の深さに直面、苦闘を重ねました。遅々とした歩みでしたが1972年、雑誌「あごら」を発刊、1973年、読書室「あごら」を開設、女の問題——ひいては人間の問題を考え続けていこうとしています。

息の長い活動が必要ですので、活動は任意、時間と体力のゆるす範囲で結構です。義務としては、会費納入の義務があるだけです。会の運営は、会員から選出された運営委員が行ないます。

現在、会員、誌友、計700名、名誉会員は、婦人問題の大先輩山川菊栄先生お一人のみです。

〔現在の主な活動〕 ●雑誌「あごら」の発行 ●月次例会(研究会)の開催 ●創造銀行(BOC)の運営 ●読書室「あごら」の運営 ●女性の前進に役立つ出版物、視聴覚材などの製作 ●ベビー・シッターのあっせん(準備中) ●再就職のあっせん(準備中)

〔参加者の組織〕

会員、誌友、賛助会員のかたちで参加できます。会員、誌友には、共に、雑誌「あごら」と連絡葉書「あごら通信」(月1回)をお送りします。

● 会員は、つぎの特典があります。

●雑誌「あごら」を毎号購読できる ●例会、総会に参加できる
●雑誌「あごら」の編集に参加できる ●読書室「あごら」を優先利用できる ●リゾート施設「中山文庫」を利用できる ●創造銀行の預託能力を会員価格で利用できる ●希望者は、創造銀行に、自分の能力を預託することができる。

(誌友は、雑誌「あごら」を毎号購読する方、賛助会員は、「あごら」を精神的、経済的に支援して下さる方です。)

会費＝年額 2,400円 誌友費＝年額 2,000円

賛助会費＝随時、金額の多少は問いません。